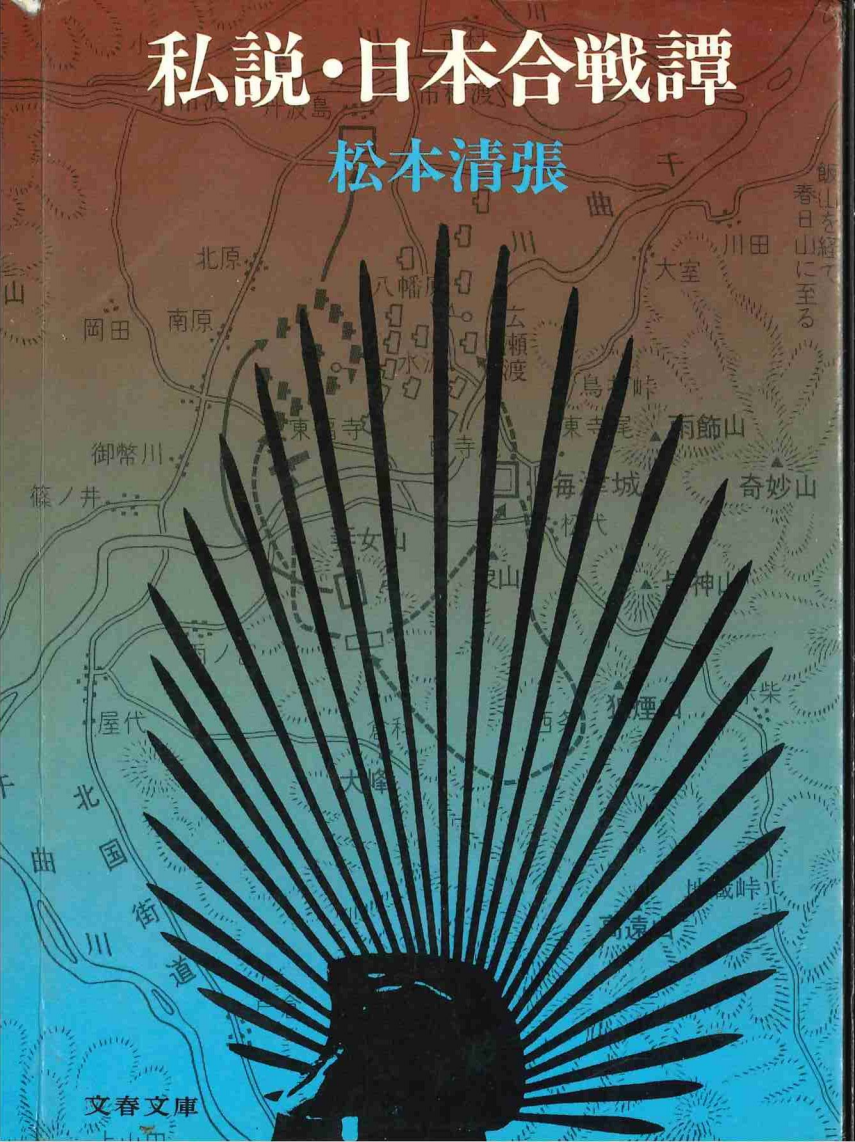
私説・日本合戦譚

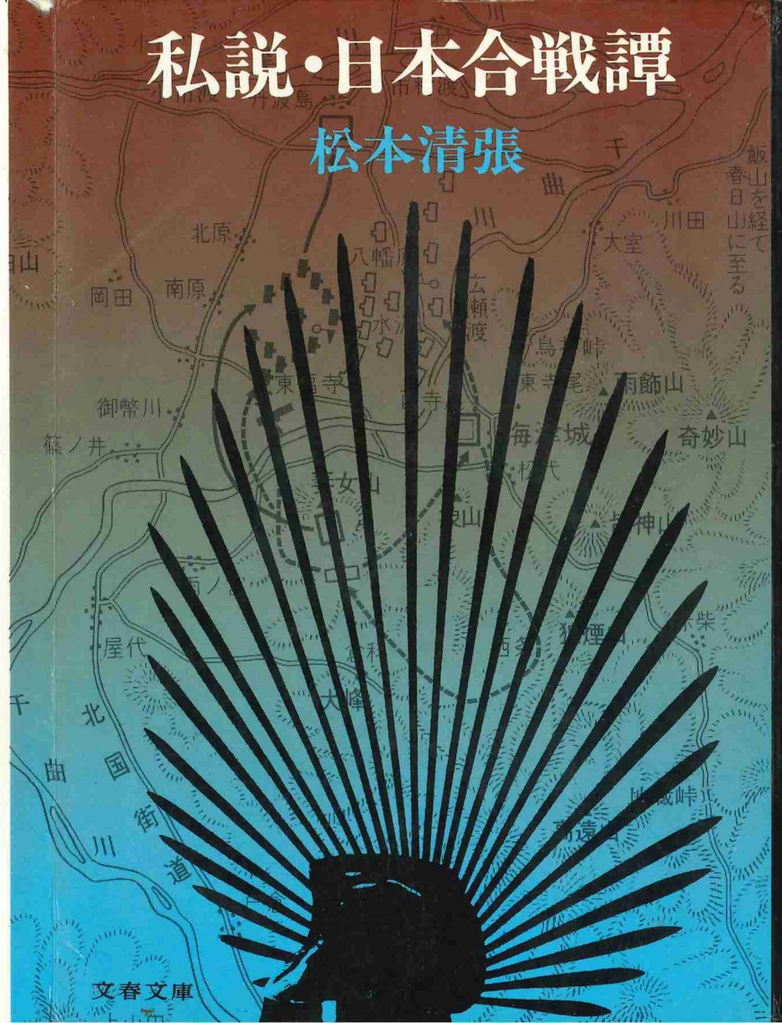
松本清張



文春文庫

私説・日本合戦譚

松本清張



文春文庫

私説・日本合戦譚
松本清張

ま 1 23

文春文庫

440

著者紹介

松本清張(まつもと・せいちょう)

1909(明治42)年12月、福岡県小倉市(現・北九州市)に生れる。53(昭和28)年「或る『小倉日記』伝」で第28回芥川賞を受賞。56年、それまで勤めていた朝日新聞社広告部を退職し、作家生活に入る。63年「日本の黒い霧」などの業績により日本ジャーナリスト会議賞受賞。70年菊池寛賞、90年朝日賞受賞。「点と線」「波の塔」「日本の黒い霧」「現代官僚論」「昭和史発掘」「古代史疑」「火の路」「霧の会議」「草の径」など多方面にわたる多くの著作があり、「松本清張全集」(I期38巻、II期18巻、文藝春秋)が刊行されている。92年8月死去。

9784167106232

1910193004404

悲惨をともなうが、しかし、戦争ほど面白いドラマはない。指揮官の駆引き、決断。将兵の立場と心理。それに加えて、運不運のハプニング。この本は、日本の国内戦争から「長篠合戦」「姉川の戦」「山崎の戦」「川中島の戦」「厳島の戦」「九州征伐」「島原の役」「関ヶ原の戦」「西南戦争」の9合戦を選んでそのドラマを解明した読物である。

ま 1 23

ISBN4-16-710623-X

C0193 P440E

定価440円(本体427円)

文春文庫

文春文庫　松本清張作品リスト

日本の黒い霧 上・下
強き蟻
波の塔 上・下
球形の荒野 上・下
彩霧
事故(別冊黒い画集1)
陸行水行(別冊黒い画集2)
花実のない森
火と汐
証明
不安な演奏
浮游昆虫
風の視線 上・下
高校殺人事件
弱気の虫
遠い接近

私説・日本合戦譚
告訴せず
風の息(全3巻)
火の路 上・下
昭和史発掘(全13巻)
高台の家
黒の回廊
虚線の下絵
梅雨と西洋風呂
危険な斜面
屈折回路
火神被殺
馬を売る女
白と黒の革命
空の城
絢爛たる流離

雑草群落 上・下
十万分の一の偶然
疑惑
史観宰相論
彩り河 上・下
形影(菊池寛と佐佐木茂索)
鬼火の町
幻華
霧の会議 上・下
西海道談綺(新装版) 1～4
暗い血の旋舞
詩城の旅びと

文春文庫

私説・日本合戦譚

松本清張

文藝春秋

私説・日本合戦譚　松本清張　文春文庫

文春文庫

私説・日本合戦譚

松本清張

文藝春秋

私説・日本合戦譚／目次

長篠合戦……七
姉川の戦……三九
山崎の戦……六八
川中島の戦……九六
厳島の戦……一二七
九州征伐……一五〇
島原の役……一七四
関ヶ原の戦……二〇八
西南戦争……二八七
菊池・池島「日本合戦譚」其他と
「私説・日本合戦譚」との間……三四三

私説・日本合戦譚

地図作製　高野橋康

長篠合戦

天正三年五月二十一日
（一五七五年七月九日）

1

天正三年五月、武田勝頼の一万五千の兵と、信長・家康の連合軍三万八千の兵とが三河設楽原で激突したのが、長篠の合戦である。

設楽原というのは、愛知県豊川の東北約十二キロの高原で、長篠から二キロ西に当る。正確には設楽原の合戦だが、徳川方の長篠籠城につづいて行われた戦闘だから、この名で呼ばれている。

徳川方が参加している戦争はすべて徳川幕府の記録本位で名がつけられている。その意味でも権力者の歴史である。

天正三年は一五七五年で、長篠の戦のあった年はシェクスピアが十一歳だった。昭和三十九年はシェクスピア生誕四百年だったから、即ち、この戦はざっと三百九十年前である。

信玄は長篠の戦の三年前、元亀三年西上の宿志を遂げるため、府中（甲府）から遠江に入り、三河、美濃を経て京都に赴くはずだった。そのときの兵数二万五千。

家康は浜松城にいたが、信玄が浜松の北方僅か四キロの地点三方原を通過すると知り、わが庭

を敵軍が踏むのに黙視はできぬと云って城を出、犀ヶ崖に陣し、武田勢の通過を待った。自衛権の発動である。

ただし、信玄来るといえば、諸将いずれもオジケをふるったから、家康も本気に戦うつもりはなかった。鼻さきを敵が通るのに城の中にすくんでいては今後の士気に関係するので、意地で出陣したにすぎない。

信玄はもとより家康など眼中になく、浜松城など問題にもしなかった。しかし、小癪にも家康が出て来たとなれば、小僧に一泡吹かせるくらいのことはしなければならぬ。このとき信玄五十二歳、家康三十一歳であった。

果せるかな、家康さんざんの敗北で、わずか旗本五騎で浜松城に逃げ帰った。夏目小左衛門が防ぎ死なかったら家康もどうなったか分らず、彼の生還は奇蹟といわれたくらいだ。

家康は城門を開いて篝火を焚かせ、奥に入って湯漬けを三椀までお替りして大鼾をかいて寝たというが、家康を偉くする後世の御用史家の創作にすぎぬ。家康が本気で信玄と戦う気だったら、全軍体当りで甲州勢に向かうはずだが、初めからなるべく損害を少くするように計算して出兵している。それでも、家康はこの敗戦によって多大な痛手をうけ、しばらくは意気銷沈、商売不振の中小企業のごとく吐息をついた。

信玄は家康を軽く蹴散らし、そのまま西に進んで徳川方の野田城を陥れた。が、陣中で病を発し、鳳来寺に上って祈願したが、兵を甲州に回す途中、信州の駒場というところで歿した。一説によると野田城を囲んだとき敵兵の鉄砲の狙撃により重傷を負ったというが、病死が本当であろう。

信玄のあとを継いだのが一子勝頼で、その母は信州の諏訪頼重の女である。つまり、敵将の女

を拉致して生ませた子供が勝頼だ。正確に云うと、勝頼は信玄の跡目ではなく、その子の信勝が家をついだ。勝頼は隠居だ。自分の実子が武田家の当主になったのだから勝頼も悪い気はしないが、信玄が生存中に自分を嗣子にしなかったのにはやはり不満が残っていたであろう。

とはいえ、信勝はまだ十四歳、勝頼は事実上の当主だ。

信玄は死ぬとき二つの遺言をした。一つは、自分の死んだことを三年間は秘密にすること。一つは、今後、勝頼は馬場、山県、甘利、内藤、土屋、原などという宿将の忠告をよく聞いて国内を治め、濫りに軍を起してはならぬ、と申渡した。つまり、信玄子飼いの幹部による集団指導制だ。勝頼は決して二代目のボンクラではなく、むしろ勇将だったが、信玄にしてみれば、おれとおまえとはケタが違う、おれの真似をするなよ、と教えたのだ。親心というよりも、武田家の社稷を大事にしたのである。

勝頼にしてみれば、これが面白くない。おれだって相当な力量はあるという自信がある。曾て上杉謙信が一万の兵を以って信州に出て長沼に火を放ったとき、勝頼は八百人の兵で防ぎ、謙信を感心させている。三方原でも勝頼の側面攻撃が徳川方の敗因に大きく作用した。しかし、前記の老臣どもは信玄の遺言を楯に取って、勝頼に、「ああしてはいけませぬ」「それは困ります」「信玄さまのときはこうなさいました」などといちいちケチをつけるから彼も頭にくる。

大体、二代目（信玄からいって二代目という意味。信玄の父信虎も相当な男だったが、信玄の代になって初めて他領を侵略した）というのは、とかく親父の盛名に頭を押えられ、自分の実力もすべて親の威光のせいのように云われてコンプレックスを持っている。そこに先代の遺した旧い番頭どもがちっとも云うことを聞かないから、彼らが煙たいだけでなく、憎くなる。昔も今も変りはない。一代で大企業を築いた社長のあととりが、親父が死ぬと、先代社長の遺した重役どもをどんどん

閑職につけたり、辞めさせたりして、自分の路線をひき直すのをみても分る。自分の云うことを聞く幹部を重用するのは当り前。勝頼の場合、それが長坂長閑（釣閑とも）や跡部大炊助勝資であった。

だが、いくら勝頼でも自分の実力を示さないことには、老番頭どもに大きな顔をするわけにはゆかない。そこで、手初めに信玄死後武田方から背いた奥三河の諸城を回復しようと考えたのだ。

前にもふれたように、信玄は上洛の野望を持ちながら途中で病歿した。臨終に当って山県を呼び、「明日は汝が旗を瀬田に立てよ」と云ったという。瀬田は京都の東入口だ。当時の武将は、京都に入り、勅を奉じることによって、天下に覇業をなし遂げようと考えていた。

別に天皇への忠誠を誓ったわけでもなく、また京都に入ったからといってすぐに天下に号令する地位に就けたわけでもない。しかし、足利将軍は弱体である。諸将は京に入って足利将軍を利用し、天皇を利用しようとしたのである。

信玄が死ぬ間際までのウワゴトは「甲陽軍鑑」に出ていることで、この本自体がアテにはできない。むしろ、信玄の狙いは、早くも京都に入って軟体動物のような将軍・足利義昭を利用し尽して捨てた織田信長を打ち倒すのが当面の目的だった。信玄が春に出兵したのは、宿敵上杉謙信が、雪に遮られて越後から背後を襲う心配がないのを狙ったからだと云われている。

さても、勝頼が信玄死後三年にして奥三河の攻略を思い立ったのは、ただ戦略的な目的だけでなく、彼にはそれだけの意地があり、鬱憤があった。

その理由というのはこうだ。三河と信州の境は山岳重畳たるところ。いま国鉄が豊橋から信州飯田に通じているが、その途中の静岡県境になっているあたりが奥三河で、ここには飯田街道が通じ、信州から東海道に出るにも、東海道から信州に入るにも唯一の交通路になっていた。

その要口を扼するように、野田、田峯、長篠、作手にそれぞれ豪族がいた。野田、田峯、長篠が菅沼、作手が奥平。これを「山家三方衆」という。山家とは山奥の部落というほどの意。「こらあたりは山家ゆえ、紅葉のあるに雪が降る」とは箱根霊験躄仇討の芝居で云う初花のセリフ。

このうち田峯と長篠の菅沼は、美濃の国守土岐氏の流れである。土岐は清和源氏の一流で、美濃の名門だ。それが斎藤道三に攻め亡ぼされて一族がばらばらになり、その内の二家が奥三河に居ついて田峯の菅沼、長篠の菅沼になったのだ。明智光秀も土岐一族の出。

作手の奥平だけは、その何代か前に上野国から流れこんだものらしい。しかし、とにかく、この地方は、この三方衆で内輪モメをしながらも平衡を保っていた。いわば弱小国グループだ。弱小国の常として、絶えず隣邦の強国に対しては鼻息を窺わざるをえない。今川の全盛時代には今川につき、武田の景気のいいときは武田につき、織田が興れば織田につき、徳川が強くなれば徳川に靡く。

意気地がないようだが、こうでもしなければ強国と強国の間に挟まった小国は忽ち亡ぼされてしまう。その代り、昆虫のような触角はすごく動く。

信玄が三河に出る前ごろから、田峯、作手とも徳川をはなれて武田についたが、ひとり、野田の菅沼だけは徳川方に残っていた。それで信玄は野田城を囲んだのだが、信玄が軍を戻して、やがてその死が伝えられると、今度は掌を返したように三方衆とも家康についたのだ。

2

山家三方衆は、勝頼についたところでいいことはないと判断した。勝頼は彼らに見限られたの

である。

なかでも作手の城主奥平貞能、その子貞昌はいち早く家康に帰順した。この次第は、ちょっと面白い。当時作手城の本丸には甲軍の宿将甘利晴吉がおり、奥平父子は外郭にいた。つまり、奥平は武田方の監督下にあったわけだ。

その少し前、長篠城主菅沼正定も武田方だったが、家康は信玄の死を聞くと、天正元年にこの城を攻め、菅沼は遁走した。武田方では、落城前にその後詰(応援)として武田左馬助信豊が甲州から出かけた。しかし、信豊は長篠の開城を聞いて諦め、黒瀬に対陣した。このとき作手の奥平父子が家康に気脈を通じているという風評を信豊は聞いたのだ。信豊は、川中島で戦死した信玄の弟、典厩信繁の子で、従って勝頼とは従兄弟である。典厩というのは左馬助の唐名。だから、信豊も典厩という。

その信豊が自分の陣中に奥平貞能を招いて、その実否を詰問した。

信豊の前に出た貞能は、顔色少しも変ぜず、それは敵のデマである、自分は武田方への忠誠いささかも変ることない、と云ってアハハと大いに笑った。貞能は、そこでワアワアと長話をし、湯漬けを所望してはまた長話をし、碁を囲んでは長話をし、湯殿から上がってはさらにまた話しこんだ。そんな彼の態度に武田方は騙され、貞能は疑われることなく、夜に入って作手に帰った。それから彼は徐ろに家康の陣へ逃げだしたのである。

つまり、貞能は無駄話をダラダラとつづけることで武田方を騙したわけで、訥弁の者に出来る芸当ではない。勝頼は、大いに憤って、甲府に人質としてとっていた貞昌の妻と貞能の末子を殺した。

勝頼は天正二年正月末に美濃に出陣し、信長方の明智城を落城せしめ、ついで五月に入って家

康方の高天神城を攻め落した。高天神とは、山の上に天神さまを祀ったので、その名がある。この城は家康方の小笠原与八郎が守っていたが、勝頼の猛攻に落城した。高天神城は曾て仁玄が攻めたが、抜けなかったことがある。小笠原は、もと今川方だった。

このとき家康は僅か十里の浜松城にあったが、後詰をしなかった。自力だけでは心もとなく、京都の信長の来援を待っていたのだ。

信長が佚信忠と岐阜を発ったのが六月十四日で、城将小笠原与八郎長忠が家康に援を乞うたのが五月十四日である。一説によると、五月十六日だったともいう。いずれにしても、信長の東下遅く、勝頼の猛攻早く、城は徳川、織田の来援が届かないうちに落城した。与八郎は、僅かに十里の浜松から家康が駆けつけてこないとは、姉川で大功をたてたおれを捨殺しにする気か、と大いに腹を立てた。

信長も浜名湖の今切の渡しまで来たとき高天神城の落城を聞き、むなしく岐阜に引返した。今切の渡しというのは、もと地つづきだったが、明応七年(一四九八)の地震によって浜名湖が切れ、海に通じたのである。今では東海道線が鉄橋で渡っている。

家康が単独で勝頼と戦えなかったのは、やはり三方原の敗戦が影響している。

こうして勝頼は明智城、高天神城を陥れ、意気揚々として古府中に帰った。高天神城は信玄でさえも落すことができなかったのだから、勝頼の得意思うべしである。どうだ、おれの腕前はと、老臣どもを尻目に嘲ったことであろう。その自信が長篠攻落に向かわせたのである。

もはや、老臣どもの云うことを聞くよりも、おれがじかにやったほうが手取早いと、凄じい鼻息であった。

勝頼は、天正三年四月中旬、大兵を率いて信濃から三河の足助に出て、そこから作手に移り、

野田へ押し寄せ、吉田方面を窺い、四月二十一日に長篠城を囲んだ。奥三河の山野は、初夏の空のもとに輝くばかりの新緑である。

そもそも長篠城たるや、東は大野川、西南は滝川が流れ、両川の合したところが城壁の突端となり、背後は大通寺山、医王寺山があり、東南は川を隔てて船着山一帯の連峰に対する。その連峰中に鳶巣山がある。

城郭は東西およそ三二七メートル、南北約二五四メートルである。

本丸は滝川に臨んで、岸の高さは約五〇メートル、広さ東西約七二メートル、南北約四五メートル、北は土塁で二の丸と区画し、そこに櫓を置く。

この断崖絶壁の中に城郭が築かれていたのだが、水の深さは普段は四、五尺くらいにすぎないが、雨が降ると、四方の渓流が悉くここに注ぐので、水深は丈余に達し、二つの川の合流するところは最も険阻で且つ激流である。これを渡合という。

城郭には本丸、二の丸、弾正曲輪、三の丸、野牛曲輪などがあって、防備堅固だ。城の地形は北のほうが高く、南方が低くなっている。

この城は元来今川方の菅沼元成という者が築いたもので、四代正定のとき武田氏に属したが、前記のように家康の攻略するところとなって、改めて奥平貞昌を主将として置いたのだ。

武田の攻撃は五月八日をもって開始されたが、総勢一万五千。このとき武田の配置は、城北の大通寺山に屯するのは武田信豊・馬場信房・織田昌行らの二千、同じく西北には一条信達・真田兄弟・土屋昌次らの二千五百。城の西滝川の左岸には内藤昌豊・小幡信定らの二千、城南篠場野には武田信廉・穴山梅雪・菅沼貞直らの千五百人。ほかに遊軍として山県昌景・高坂昌澄、後軍として甘利・小山田・跡部ら。鳶巣山その他の支塁には武田信実の千人をさし向け、勝頼自身は

本軍三千人を率いて医王寺山に陣した。

勝頼も、長篠を攻めれば必ず家康がくると読んでいる。しかし、信長が来るとは考えなかった。長篠城兵僅か五百に対し一万五千の兵数であるから、甲軍もこの城ひと揉みに落せると思っていたが、案に相違して、その天嶮の要害城は抜けない。城将奥平貞昌はよく防いだ。父の貞能は浜松の家康のもとにいた。奥平も必死となるわけで、前に武田方を欺いて離れたから、降伏してもとても助からぬと観念している。文字通り死を賭しての防戦だ。

甲軍の攻撃は八日から連日に亙って行われたが、城兵の抵抗で阻まれた。たとえば、滝川に舟を浮かべて渡合より城門に迫ろうとしても、城兵の出撃で退けられる。本丸の西側から地下道を掘って城に入ろうとしても、城兵も同じように地下道を穿って鉄砲で狙撃するといった調子だ。

余談だが、由来、甲州は信玄によって金山がしきりと開発され、金山衆と呼ばれた坑夫を多く使っている。彼らは困難な坑道を掘る技術には長けていた。このときも甲州の坑夫が動員され、地下道を掘ったと思われるが、貞昌もこれに応じて地下道を掘らせている。モグラ戦のようなものだ。奥平も前には武田方だったし、甲州領に近いので、その技術を知っていたのかもしれない。当時の合戦がようやく近世の特徴をみせる一挿話だ。

甲軍は城に挑んで悪戦苦闘したが、当然のことに攻めるほうの損害が大きくなった。そこで城外に柵を結い回し、川の中に大網を張って蟻も匍い出ぬようにし、城を遠巻きにした。つまり、兵糧攻めである。

こうなると、限りある食糧しか持たない城方は弱い。長篠城も兵糧余すところ四、五日くらいとなった。後詰を岡崎の家康に頼んだが、まだ、その返事もこない。

貞昌は、泳ぎの達者な親族の奥平勝吉に命じて、川を渡り、援軍の催促をさせようとしたが、

勝吉は、万一、自分が城を出たのちに落城したならば、恥辱この上ない、と云って辞退した。自分一個の名誉と、同僚五百の生命とをかけ代えにしようというわけだ。これを武士道の華というかもしれないが、戦争とはそんなものではない。

鳥居強右衛門志願して、川底を泳ぎ渡り、岡崎の家康に急報し、家康の援軍に先んじて城に戻る途中武田方に捕えられ、磔に処せられた話は有名すぎるので、省略。この強右衛門の磔の図を、家康の家来落合左平次という者が指物にしていたことも知られている。

家康は度々信長に救援を乞うた。彼は高天神城が勝頼に囲まれたときも浜松から出なかったくらいだから、今度も勝頼の大軍を前にして長篠救援に出られるわけはない。浜松にいた奥平貞昌の父貞能も家康の使いとして岐阜に向かっている。

信長は家中を集めて評定した。重臣の中では、必ずしも甲軍に勝つとは思っていなかった。稲葉一鉄などは、もし信玄が生きていたらどうするか、と云って信長に叱られたくらいだ。信玄の訃報は伝わっていたが、まだ、それが半信半疑に思われていたほど武田は怖れられたのである。

信長の家来毛利河内は、武田勢と戦っても勝算おぼつかないから御出馬御無用、と信長を諫めた。しかし、佐久間右衛門という者は、負けるに決まっているが、もし、今度御出馬がなければ、徳川方は武田に味方し、一緒になって当家を攻めるであろう、いま負けるも、将来負けるも同じだとすれば、この際、義を守って即刻出馬なさったほうがよいとすすめた。はじめから敗北主義である。

信長には、前年、浅井、朝倉を征伐するときに家康の加勢を得た義理がある。義を守れとはこのことをいうのだ。しかも、このたび家康の救いを断れば彼が武田と合体する危険があるとすれば、信長としても観念せざるをえない。すなわち、織田家の意見は万一の敗戦を覚悟で出陣と決

定した。

これでみても分る通り、勝頼の代になったとはいえ、武田の威名はなお信長すら怖れさせた。家康が単独で戦えないわけだ。

信長は五月十三日岐阜を出発した。長篠城の攻囲の警報が岐阜に届いたのが五月五日ごろと思われるから、ずいぶんと暇がかかっている。それだけ信長の決心が容易でなかったことが分る。

信長はその日のうちに熱田に着いて、翌朝熱田神宮に詣でて武運の擁護を祈っている。このとき内陣のほうに轡の音が聞えたので、信長は、「先年今川義元を討つときも、この宮に詣りし際、内陣で物の具の音がしたが、今また轡の音を聞く、この合戦勝利疑いなし」と将士に告げたという。

轡の音は、どうせ神官が信長の機嫌を取るために内陣に人を潜ませ、音を立てさせたトリックだろう。当時の神官は領主の機嫌を取ることでいっぱいだった。もし勝てば、いろいろな寄進がしてもらえるのだ。あるいは信長が神官に命じて小細工をし、甲州勢に恐怖を抱いている将士に対して、自信を持たせるよう心理的な工作をしたのかもしれない。

かくて信長は東海道をすすみ、設楽原の極楽寺山に本陣を据えた。

3

武田方では、まさか信長が出てくるとは思わなかったらしい。長篠城を気長に囲んで兵糧攻めにするつもりだった。ところが、信長岐阜より来るの報告がさかんに入り、すでに両旗の軍影を高原の彼方に望むようになった。

武田方では急遽今後の作戦を協議した。勝頼は、「信長・家康両軍とも設楽原の西に陣してい

るのは、勝機がわれにある証拠である、進んで決戦に出るべし、長篠城への抑えは鳶巣山以下の諸塁の兵で十分。われらは大挙して滝川を越え、信長・家康の兵を馬蹄にかけ討ち取ろうぞ」と云った。

このとき老臣の馬場、内藤、山県、小山田、原虎胤の宿将たちは、いずれも口を揃えて決戦に出るの不可を説いた。まず、彼我の兵力をみるに、われの一万五千に対し、敵は織田・徳川の両旗で三万八千と見積られている。衆寡敵せず、一まず信州に引取るがよろしい、もし敵があとから慕ってくるならば、信濃口の天嶮に要撃してこれを全滅させるまでだ、と主張した。

ところが、勝頼の愛臣跡部らは勝頼の意図を知って反対し、「武田家は、その遠祖新羅三郎より信玄に至る二十七代に亙って、未だ敵を見て逃げた例はない、勝頼に至って敵に背を見せなば、世人の物笑いになる」と云うた。このとき、長坂長閑も跡部に同調したように云われているが、長閑はよそに行っていて同席していない。長閑に対する後人の悪口である。

馬場美濃守らは、さらば、この際わがほうの武威を強いて揚げようなら、長篠城を強引に攻め落すほかはない、城中の鉄砲は五百にすぎぬ、その第一射撃が、悉くわがほうに当ったとしても死傷は五百人、さらに第二発以後の的中を考えても五百人、すなわち味方千人の損害を覚悟すれば、この城を陥れることはさほど難くはない、そのあとから撤兵しても武田の武威に瑕がつくことはないと論じた。

さらに馬場は述べる。

「もし、退却も恥と考えるなら、この城を取ったのち、勝頼とその一門が城に入る、われらは川を渡って敵と対峙し、ときどき小競合いに出て長陣に日を送る。そうなると、信長も江州や美濃など畿内の人数が多くて長期間に亙る対陣は不可能であるから、自ら退くほかはない、すなわち、

それだけでも武田の敗戦は免れるではないか」

つまり、敵の兵站線は伸び切っているので、長期戦となると、敵自身が不安を感じて退却するという論法だ。

これに対して決戦派の跡部らは、「信長は敵を目前に見ながらむなしく退却するような男ではない、もし彼らが決戦に出てきたらどうするか」と反問した。理窟である。

馬場は「その際はやむを得ない、死を決して戦うだけだ」と答えた。跡部らはあざ笑い、「同じ戦うなら、仕方なしに戦うよりも進んで戦ったほうが有利」と云い返した。

今や、武田の軍議は、決戦に出るか、持久戦とするか真二つに分れた。この上は勝頼の裁断によるほかはない。しかも勝頼は初めから決戦主義だ。彼は眦をあげて一同を見渡し、「御旗、楯無も照覧あれ、明日は一戦にて勝敗を決すべし」と宣言した。

御旗は八幡太郎義家の旗のことで、楯無とは源頼義が義光に与えた鎧で、ともに武田家の当主に受継がれる三種の神器みたいなものだ。古来、武田家ではこの宝器に誓うと、善悪は問わず、いかなることでもこれを翻すことのできない、絶対の慣例になっている。

こうなると、自重派の馬場、山県らは万事休すである。かくなる上はぜひに及ばず、われわれ共は御馬前で死に狂いをいたすべし、ご覧候え、といって、いずれも悲壮な面持で退出した。

一説によると、勝頼は、馬場があまり自重論ばかり吐くので、「幾歳になっても命は惜しいとみえるのう」と嘲笑したので、馬場は憤然として座を起ち、「いくら云ってもわからぬ。出陣、出陣」と一同に呼ばわったと伝えられている。

要するに、武田方は戦わずしてすでに内部分裂があったわけだ。これに対し信長方も家康方も、相手が必勝期しがたき大敵だと思って団結している。

家康も、勝頼が滝川の右岸に引込んでいては戦がしにくい。そこで、小栗某という者を使い、信長は来援せず、と勝頼に告げさせた。勝頼大いに欣び、滝川を越え、設楽原に二十四町ばかり踏み出して陣を張った。

「家康卿は敵大川を越え来って陣を据えたるを見給いて、酒井左衛門尉、本多豊後守、同じく平八郎に向かいて、内々謀しように勝頼をおびき出したるぞや、味方利を得んこと必定なり、とて手に取るように喜び給うこと限りなし。おのおの承って、げにさこそ候わめ、とぞ勇みける」（信長記）。家康主従が心を合わせていたことがよく分る。

信長の設楽原に引率してきた兵数は、約三万、これに家康の兵約八千余人を加えて陣を布いた。信長は四十二歳、一緒に連れてきた信忠は十九歳。

当時の信長は、上洛について利用するだけ利用した将軍義昭を放逐し、江北に浅井、朝倉を滅亡させて、まさに意気天を衝くの勢いだった。家康また三方原の戦で大打撃を蒙ったとはいえ、大敵信玄が死んで奥三河の失地回復の念に燃えている。

一方、勝頼は三十一歳の血気盛り。信玄は死んだとはいえ、その遺した宿将はいずれも健在。さきに織田方の明智城を陥れ、徳川方の高天神城を降している。彼の眼にも信長、家康何するものぞという気概がある。すでに、一旦、諫止した宿将たちも議決して斬死の覚悟だ。ここに設楽原の高原に両軍合わせて五万の激突は目前に迫った。

大体、両軍の兵力数からして勝頼の猪突は無謀である。甲軍は一万五千、織徳連合軍は三万以上だ。一対二の比である。家康が長篠城包囲の警報に接しても城を出なかったのは、信長の加勢がこないうちは、兵数の劣勢で単独では戦えないからだ。奇襲戦ならともかく、正攻法となると兵の数がモノを云う。三方原で敗れたのも、信玄の戦術もさることながら、兵力の劣弱からだ。

また信長も畿内を平定して慎重になっている。桶狭間で今川義元の大軍を破っているが、あれは奇蹟に近いほど奇襲が成功したので、今の信長はもっと正攻法をとっている。

兵数のうえでも勝敗が歴然としているのに、信長は岐阜出発に当って各兵に柵木一本、縄一把を携行させた。武田の戦術を十分に読んだ信長の対策で、これによって武田勢の前面に柵組みをしようというわけだ。

各兵に持たした柵木は、長さは分らないが、直径三寸余りになるらしい。相当な重量の木材を携行させたわけで、これを家康の陣地の前や、その北に当る滝川一益、羽柴秀吉、丹羽長秀の前にも組ませた。そして、約二キロ半の間にわたって二重、三重の空壕を掘って土堤を築き、五十間、三十間おきに虎口と称して出入口を設けた。

信長は、さらに一万人の銃手の中から優秀な者三千人を択んで鉄砲を携行させた。これを柵の内に三段に配置し、一段に千人ずつの銃手を置いた。一万人の銃手を持ち、三千人を選抜するとは贅沢で、いかに信長が鉄砲を買込み、射撃手を養成していたかが分る。鉄砲のことはあとに書く。

大体、武田の戦術というのは騎馬軍団である。騎兵が一団となって敵陣に突進する。敵が狼狽し、陣形が乱れたところへ、あとから槍隊が突入して突き崩すという戦法だ。菊池寛は、タンクを突入させ、そのあと歩兵が進撃するのに似ていると書いているが、云い得て妙である。ほとんど、この戦法で武田勢は向かうところ敵なしで打ち破ってきた。

信長は、味方の数が多くてもこれではたまらぬと思い、新兵器の鉄砲で対抗した。つまり、柵を組んで敵の騎馬の進撃を阻み、柵の前で馬が戸惑っているところを鉄砲で射竦めようというわけだ。

種子島はのちに大ぶん改良されたが、当時は弾丸ごめに手間がかかる。一ぺん射ったあと次の弾丸をこめる間に敵に踏みこまれるから、銃手を三段に構え、最初の一列が一斉射撃を終ると、次の二段目が前列に代って射撃する。それが終ると、三段目の銃隊が出て鉄砲を放つ、という方法を信長は案出した。

こうして三列の銃隊が代る代る弾丸をこめて射撃するので、間断がないわけである。長篠の戦が新兵器の勝利と旧戦法の敗北だといわれているのは、この理由からである。

武田のほうもこの鉄砲に関心がないわけではなかったが、信長ほどフルに利用することは考えつかなかった。やはりお家芸の騎馬戦術に信頼を置いていたのであろう。

この辺も中央に近い信長と、辺陬の山国に閉じ籠っている武田と、それぞれ立地的な条件の違いもある。「甲陽軍鑑」には、信玄が川中島の合戦で旭城に鉄砲五百挺入れたとあるが、あまりアテにはならない。

さて信長は斥候を放って甲軍の様子を窺わせると、いずれも武田勢の備えの堂々たるを報告してきた。これで織田方は怖気づいた。甲軍といえば先天的に恐怖心に駆られているので、ちょっと敵の備えが手強いといえば色を失うわけだ。

このとき家康の臣酒井忠次が軍議の席に進み出て、「敵兵はわれらの半分、味方の勝利疑いなし」と云った。信長は大いに喜び、「臆病者の目には白鷺も旗のように見えようぞ。おまえの見込みは百に一つも外れはあるまい」と賞めた。すると忠次はさらに諸将の前で膝を進め、信長にむかって、「設楽原で両軍お手合わせの前に、敵陣の後方に当る鳶巣山の塁を攻めたならば、味方の勝利は一段と早まると思います」と云った。

信長は聞きもあえず、「出過ぎた奴じゃ、こんな大戦闘にそんな小細工をしてどうするのだ」

と叱った。酒井は今まで賞められたのに急にケナされたので、スゴスゴと座を退った。

すると、信長は酒井忠次を呼び返し、こっそりと、「おい、悪く思うな。さっきみんなの前で叱ったが、実はわしもおまえの策略に賛成だ。ただ、あの場で同意すると、敵方に洩れるおそれがあるからな。それでわざと叱ったのだ。何ごとも計略。さあ、急いでこれから鳶巣山を攻めろ」と云ったので、忠次、大いに勇み立ったという。

この話は太田牛一の「信長記」に出ているが、織田方最高幹部の揃っている席で、本心を打ち明けると軍機が敵方に洩れるから黙っていたという信長の云い方はちとおかしい。話を面白くしたのではないか。

4

信長は鳶巣山方面に従卒五百と金森長近などを出し、家康また一族の松平家忠や本多広孝父子、奥平貞能、牧野、菅沼といった土地に詳しい者を従わせた。この兵数約三千。

彼らは麓に達すると鎧を脱ぎ、これを担って鳶巣山の断崖絶壁を登攀した。折から暗闇と大雨である。菅沼山に到って鎧をつけ、戦闘態勢を整えた。二十一日の夜明け、その兵は三隊に分れて襲撃したので敵兵は狼狽し、鳶巣山の守将武田信実は戦死した。酒井の奇襲プランが奏功したのである。

信長は酒井忠次らを鳶巣山に向かわしたのち、自ら茶臼山に馬を進めて、昨日のうちに作った柵の中に諸隊を配置した。別に敵を誘いこむ囮として佐久間信盛の一隊を柵外に出し、また右翼方面の柵の外には大久保忠世の一隊を置き、これに銃手三百人を付した。甲軍が出撃してくれば、側面から射撃しようというわけである。

かくて織徳勢は、鳶巣山の酒井忠次の一隊が狼煙をあげるのを今か今かと待ちうけた。

五月二十一日の爽かな夜が明けた。勝頼は不意に吶喊の声を長篠の方面で聞いた。鳶巣山には濛々として火煙があがっている。勝頼、さては敵兵うしろに回ったかと察したが、もはや、ここに至っては全軍進撃を展開するよりほかない。

勝頼は采配を馬上で一閃した。甲軍一万五千は一団にかたまってまっしぐらに設楽原を突き進んだ。先頭隊は馬場、山県、内藤、原などの宿将の率いる騎馬隊で、真黒になっての突撃だ。

その正面には柵が二キロ半にわたって結えられ、鉄砲が銃口を揃えていることには気がつかない。

甲軍の左翼には、山県昌景の一隊と、これに小笠原、跡部、甘利の二千余人とがいた。山県は柵のないところから信長と家康軍の側面に出ようと考えて進んだが、途中に深い小川があり、岸が高くて、すぐに渡ることができない。そこで引き返して、織田方からいえば右翼の柵外に配置してある大久保隊に突っかかった。

大久保隊では鉄砲を放って相当な効果をあげたが、柵の外にいるので騎馬隊の進出を遮ることができない。うかうかしているうちに山県勢は大久保隊のド真ン中に突入してきた。山県も甲軍名うての老勇将、大久保も徳川勢の中では選りすぐりの勇者だ。この激突は忽ち壮烈な修羅場を現出した。

つまり、戦闘は大久保隊よりはじまったわけで、大久保七郎右衛門忠世と弟次右衛門忠佐が自ら、この持場を買って出たのだ。「今度の戦は徳川方が本隊で、織田勢は加勢、万一、織田方から戦闘が開始されたら当家の恥辱、まず、自分たちが進んで足軽軍をはじめます」と云って柵外に進出したのである。

この乱戦の模様を大久保兄弟の末弟の彦左衛門忠教が「三河物語」にこう書いている。

敵味方が戦っていると、その中で金の上羽の蝶の羽と、浅黄の石持の指物をつけた武者の働きがひときわ目立った。敵かと見れば味方、味方かと見れば敵のようでもある。乱戦のなかなので、どっちか分らない。

信長が使いを家康のもとにやって問合わせると、家康は「いやいや、敵ではありません。われらが譜代の家来で、金の上羽の蝶の羽は大久保七郎右衛門と申し、石持の兄です。浅黄の石持は大久保次右衛門といい、蝶の羽の弟です」と答えた。使番が、急ぎ立帰ってこの由を報告すると、「信長聞召して、さても家康はよき者を持たれたり、われは彼らほどの者を持たぬぞ、この者どもはよき膏薬にてあり、敵にべったりとついて離れぬぞ、と仰せけり」と彦左衛門の筆にはある。

これは彦左衛門が自分の兄たちを殊さらに賞めて書いたわけではなく、事実、この通りであったと思われる。

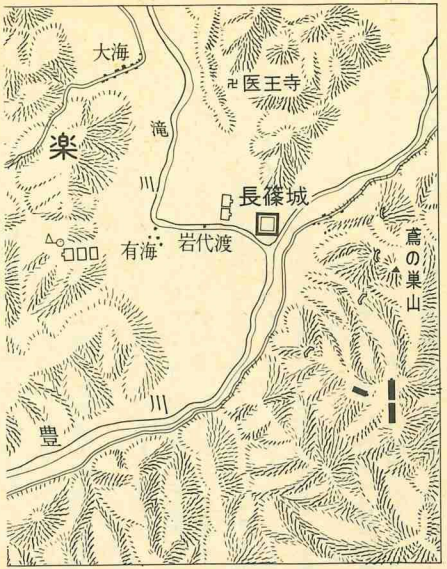
なお、この「三河物語」というのは、寛永になって彦左衛門が旗本に入れられ、むなしく小禄を食んでいるのにくらべ、さしたる武功もない同僚が万石以上の大名に取立てられている。その者の中には戦場でずいぶん卑怯な振舞をした者がいるのに、不合理なことだと、時代にとり残された彼が憤慨して書きつけたものだ。

余談だが、私は曾てこれから材料を取って短篇を書いたことがある。すると、或る批評家と女流作家が合評会で、これは松本が原稿料が安いのを嘆き、文壇を諷刺して書いたのであろうというメイ断を下した。文士のケチ根性以って知るべし。

講談では、大久保彦左衛門が、「それがし十六歳のみぎり、鳶巣山の初陣にて一番槍……」と云ったことになっているが、彦左衛門が鳶巣山に行ったという事実は以上を見ても不合理となる。

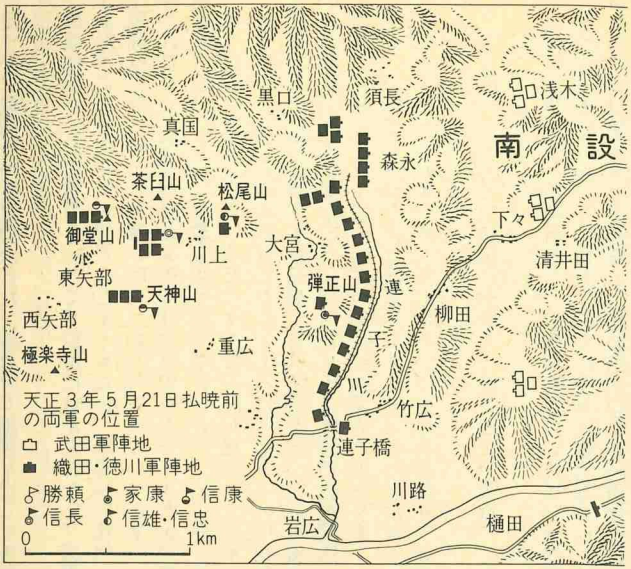
鳶巣山には前述のように大久保兄弟は行っていないのだ。もし、彦左衛門がこの長篠の戦に出陣していたとすれば、当然、大久保兄弟の下にいたはずだが、「三河物語」にはその記載がない。あるいは年が少すぎて、このときは従軍していなかったのかもしれぬ。

さても甲州勢の主力隊は木柵に向かってまっしぐらに進撃した。内藤、原、武田信廉の諸隊が木柵に迫ると、待ち構えていた織田勢の銃口は一斉に火を噴いた。



信長はあらかじめ令して、敵が目の前に迫るまで決して発砲してはならぬと厳命している。当時の射程距離は短かった。しかも、一発射ったらあとがつづかないから、十分に引き寄せて射たなければならない。しかも、銃手は木柵が目の前にあって、決して馬がこっちに入ってこないと分っているから、心理的にも落ちつくことができた。最初の一斉射撃は見事敵兵を薙ぎ倒した。

武田勢屈せず、二陣が木柵を馬の足蹴にかけて破らんと、押太鼓を打って疾駆してきた。



銃手はかねて掘った空壕の中に身を沈め、敵が近づくと身体を隠して発砲する。甲州勢の武田信廉の軍が半数以上の損害を出して退却したあとにつづいた小幡一党の赤武者は、馬が柵にひっかかってまごまごするところを射たれ、多数の死傷者を残して退いた。

赤武者というのは、赤い甲冑ずくめでいたからだと思われる。強い軍勢が威勢を見せるためにわざと目立つ色にしたもので、一種の示威色だ。なお、徳川家康の代になって井伊家の赤備(あかぞなえ)は有名だが、井伊家も元武田の家臣であるから、この甲州流の衣鉢を継いだわけだ。

小幡一党が大損害を受けて退くと、次の武田典厩信豊の一党が攻撃してきた。これは黒武者である。信長はこれに対しても一兵も柵外

に出さず、鉄砲ばかりを射たせた。信豊隊が損害を出して後退すると、次の馬場信房隊が押太鼓を鳴らして攻めてきた。

馬場信房、いかに勇将といっても鉄砲にはかなわない。「飛道具など卑怯だ」と云っても、相手が射ってくるのだから、どうしようもない。馬場隊、大損害ののち退却した。

戦闘は午前六時から午後二時まで約八時間つづいているから、大激戦である。その間、武田隊は入れ替り立ち替り信長と家康の陣に攻撃をかけてきたが、柵に遮られ、鉄砲に射ちこめられ、損害が次第にふくれ、兵数も少くなっていった。

この戦闘の模様をみていると、まるで人間が機械に立向かっているようだ。かかってもかかっても小鳥のように鉄砲の餌食になるところは、名うての甲州勢だけに惨憺たるものだ。この戦闘で甲軍の真田信綱兄弟、土屋昌継、甘利晴信などいずれも戦死した。

その前に、馬場信房は、前に記したように囮役の佐久間隊に打ちかかったが、佐久間は策略通り逃げて木柵近くまで退いた。馬場は佐久間隊の陣所を奪っただけで、そこに兵を留め、「自分には思う仔細があるから、しばらくここに留まることにする」と真田や土屋に告げ、「貴公たちは存分に手柄せられよ」と一服した。いくら佐久間隊が、オイデオイデをしてもどこ吹く風の小休止。

この一服は、実は馬場の胸に一物あったことで、彼は、この木柵に正面から立向かう愚を知っていたのである。

信長と家康は小高い陣所からこの形勢を見ていたが、大勢決したとなると、信長は雀躍した。佐々成政の進言もあって、信長、直ちに全軍に総攻撃の命を下した。今まで鉄砲隊に任せていた諸部隊は長槍をふるって勇躍し、柵の出入口から一斉にとび出して、潰走する甲州勢を追撃した。

すなわち、織田勢は正面から、徳川勢は左翼から一斉に進撃に移ったのである。このとき、信長は甲州勢よりも長い柄の槍を持たせたという。

こう書くと、いかにも武田勢が呆気ないようにみえるが、決してそうではない。右翼の土屋隊や穴山隊は、織田軍の佐久間信盛の柵を二重まで破っている。羽柴秀吉や明智光秀も柵の外に出て戦ったまではよいが、忽ち打破られて柵内に逃げこんだ。しかし、甘利、土屋、内藤、真田といったところがどんなに勇将でも、鉄砲には手も足も出ない。「やあやあ、遠からん者は音にも聞け、近くば寄って目にも見よ、われこそは六孫王経基が後裔、甲斐の国の住人……」などと大音声に名乗ったところで、弾丸が当れば、「やあやあ、われこそは……」と叫んだところで終りである。

まことに長篠の戦は従来の騎馬戦から歩兵戦に移った戦術の変更であり、個人プレイから集団戦闘への転換、長槍が鉄砲戦に変る画期的な転機だったといえよう。

5

さて、勝頼は状況の甚だ不利なるをみた。そこに山県昌景や、土屋、甘利、原といった宿将の戦死を聞いて、今はこれまでなりと、討死せんとしたが、周囲、しきりとこれを止めた。しかし、勝頼は諾かない。

穴山梅雪などは大いに腹を立てて、「日ごろわが儘で宿将どもの申すことも聞き入れられず、いま、このような体たらくとなった。この上まだ立退きをお聞きなさらぬとは、いかなる所存であるか」と刀に反を打たせたが、勝頼、それでも退却するとはいわない。

そのとき初鹿野伝右衛門が刀に反を打たせた梅雪の無礼を悪口した。梅雪は伝右衛門に「そん

なことより主君を退かせるため早々馬に乗せろ」と云う。伝右衛門も「梅雪さまの仰せはもっとも」と云って、勝頼を無理に馬に乗せたので、勝頼も仕方なくそれに従い、押太鼓で隊伍を整えて退いたと、「長篠合戦物語」という本に出ている。

しかし、実際は、そんな状態ではなく、勝頼は僅かな手兵に守られ、敵方の重囲の中で脱出を試みたのであった。穴山梅雪は勝頼よりも先に逃げた。

ついでながら、この穴山梅雪というのは、武田が駿河をとったとき、江尻の城主だったが、武田滅亡後、織田方につき、家康が泉州堺を見物に行ったときに同行した。本能寺の変を聞いた家康はあわてて間道を通り伊勢に逃れたが、途中で別れた梅雪は土寇の手にかかって殺されている。梅雪も長篠で戦死したほうがずっと死場所を得たわけだが、人間にはどんな場所に死が待っているか分らないものである。

さて、勝頼は立退こうとしたが、すでに敵方は甲州勢の後方にも回って、退却するのも容易ではなかった。それまで佐久間隊を追撃して途中で休止を取っていた馬場信房は、今こそ命を捨てるときなりと、人をもって勝頼に退去をすすめ、自らそのうしろを援護した。

馬場の手もとにも残兵僅か三、四千にすぎなかったが、勝頼の旗印が見えている間は、馬場も敵をあしらって、じりじり退っていたが、勝頼の影が近習数騎と共に美濃方面に見えなくなるのを見届けると、猿橋付近から馬首を西にめぐらし、引返して浜沢谷に踏み止まった。このとき、織田方の塙直政の隊が馬場めがけて打ちかかり、塙の従兵川井三十郎という者が信房に槍をつけた。馬場、これを見て皺面をにっと笑わせ、「われは源三位頼政の後裔馬場美濃守信房である。討取って手柄にせよ」と云い、自ら川井に首を授けた。六十二歳。

甲軍の中央隊にまだ残っていた内藤昌豊も勝頼が退いてゆくのを目送して、馬場に先んじて宮

脇付近で戦死した。

こうして甲軍の名だたる宿将連中は全部討死を遂げた。彼らは信玄麾下の勇将として信玄の手足となって働き、その武名は諸国にも轟き渡ったのであるが、総司令官にその人を得ず、遂に不本意ながら戦死をした。

宿将たちは初めから、信長と家康の連合軍に対して決戦を避けるようにすすめた非戦論者だ。それが勝頼の裁断によって決戦と決まるや、いずれも文字通り死を賭して戦ったのだから気の毒である。しかも、みんな鉄砲の弾丸で死んでいる。これで勝頼は事実上没落したのである。

その勝頼は暑さにへとへとに疲れ、僅か三、四人の従兵と共に小松瀬を渡り、黒瀬を過ぎ、信州口の武節という砦に入って休息し、それより田峯を通過して甲州に帰った。従う者僅か三騎だったというから、敗戦とはいえ惨憺たる帰還ぶりであった。

なお、勝頼の兵は、戦場から逃れるとき武田家相伝の旗を棄てて逃げた。これが例の風林火山の旗か、日の丸の旗かはよく分らない。

徳川方の本多忠勝の家来がこれを拾って高々と差し上げ、「甲州兵はそんなに命が惜しいのか、武田家相伝の旗を敵に分捕られても恥とは思わないのか」と呼ばわった。すると、勝頼の旗奉行が振返って、「棄てたのはみんな古い旗だ、こっちにはちゃんと新しい旗がある」と別な旗を示して逃げたというから、ものは云いようである。「その調子で、馬場、内藤、土屋、原の宿将も棄て殺しにしたのか」と徳川方も云い返した。敗戦となると、どんなに罵られても仕方がない。

「勝頼と名のる武田の甲斐なくて、戦に負けて信濃わるさよ」とは当時の狂歌である。

残余の甲軍は鳳来寺山方面に潰走したが、滝川に隔てられて橋を争い、谷に落ちる者無数だったという。一万五千の軍勢も、逃れて帰るもの三千にすぎなかった。武田軍の戦死者は一万余

（信長記）とあるが、実際はもう少し少かったらしい。しかし、前記のように甲軍は名だたる部隊長が全部戦死しているのに対し、徳川方では名のある者は松平伊忠（これただ）（鳶巣山攻撃参加）一人であった。

家康は鳳来寺山の麓まで敵を追撃したが、そこから馬を返した。信長は二十二日に陣払いをしたが、撤兵に際して奥平貞昌を召し出し、その戦功を賞め、盃を与えて、自分の名前の「信」の一字を与えた。それより奥平貞昌は信昌となる。事実、設楽原の大捷は長篠の籠城が大きくものを云っている。もし、織徳連合軍が戦場に到着しない前に長篠が落城していたら、信長も家康も、こう楽々とは勝てなかったであろう。あるいは戦局がどうなったかも分らないのだ。してみると、奥平貞昌の籠城ぶりは、長篠勝利の半分くらいの栄誉は担っている。

何度も云う通り、信長は桶狭間のときの彼とは違い、今度の戦いでは数の上で絶対優勢を持して向かった。慎重になったのは、部下が武田勢に心理的な恐怖心を抱いていたからでもあるが、すでに斎藤竜興を打ち倒し、浅井、朝倉を退治し、畿内に勢力を確立した信長は、どんなことがあってもここでは負けられなかったのである。いわば信長にとっては天下分け目の戦争だったわけだ。

それだけに喜びも大きく、戦いが済むと家康を呼び、御身はこれから駿河に手を着けられよ、われは信濃に入るべし、と分担を決めた。そのころ三河、遠江には、まだ武田に属する城砦（じょうさい）が残っていたし、駿河は今川の旧勢力下で、しかも、隣の相模には北条氏政がいる。北条氏も氏康まではよかったが、氏政の代になって急に勢力が落ちた（尤も、このときは北条方も織田と同盟していた）。勝頼の妻は、この氏政の妹であった。

信長は、そこから岐阜に凱旋したが、それから三年間は甲州に手を着けなかった。勝頼のジリ

貧を待っていたのである。無理をして長篠から甲州に討ち入らなかったのも、ここでよけいな兵力の消耗をするよりも、武田の自滅を待っていたのだ。信長にはまだ本願寺という大敵や、そのうしろで糸をひいている毛利が控えていたし、北陸には上杉謙信もいて、あまり深入りできなかった理由もある。

信長の予想に間違いはなかった。勝頼は甲州に帰ると、代々の居館（武田信玄は城を築かなかった。甲州の四囲の山が自然の要害になっていたのと、絶えず他国を侵略するので攻め込まれることがなかったのである）であった甲府を引払い、韮崎の近くに新しい城砦を構築した。これを新府という。

だが、新府城がまだ完成しないうちに西から織田信忠の軍勢の来襲をうけ、南からは家康の進撃によってそこに止まることができず、甲府も捨てて東にのがれた。

これは部将の小山田信茂の城が岩殿山にあったので、そこへ落ちのびようとしたのだ。岩殿山は大月の近くで、いま、中央線の車中から眺められる。小山田は人質として実母を勝頼のところに出していたが、勝頼を迎え入れる準備と称して、その母を受取り、先に岩殿山に戻った。

勝頼が小山田の言を信じて塩山（えんざん）付近までくると、ふいに山にかくれていた小山田の一隊から鉄砲を射ちかけられた。勝頼は小山田の裏切りと知ったが、僅かな手兵ではどうにも仕方がない。妻や、一子の信勝、近臣、女房などを連れて、天目山の麓の田野にのがれた。そこを織田方の一部隊長、滝川一益の手兵に囲まれた。このとき勝頼は妻に向かい、

「おんみは北条の女（むすめ）であるから、これより相模に落ちるがよい」

と云って、国境の山を指した。妻は、

「たとえ北条の女であっても、武田に嫁（か）したのであるから、死出のお供をしたい」

と云って、一子信勝と共に勝頼にしたがい自殺した。信勝十六歳、花も恥じらうような少年で

あったというから、丁度、芝居の「本朝廿四孝」（十種香）に出てくる白塗りの勝頼のような姿だったらしい。長坂長閑は、他の家来や女房と一緒に勝頼に殉じた。

勝頼を誤らせたのは跡部や長坂の佞臣（ねいしん）たちと云われているが、跡部はともかくとして、長坂は勝頼と最期を共にしている。長坂の悪口は、後世史家が馬場はじめ宿将たちに同情したあまりだろう。

長篠の戦ののち、家康は三河、遠江の間に働いて、武田に属した作手、田峯、武節、足助、二俣、乾、高天神、諏訪原、小山等の諸城を攻略した。

二年間かかってこれらを手中に収めたのだから、落ち目になったとはいえ、武田の支城でも相当な抵抗力だ。以後、武田の遺臣たちは家康の勢力下に入り、大名としては井伊直政をはじめ、旗本にも相当な数が入っている。家康の武力は、甲州の残党を包含して一段と強化されたのである。

しかし、これをもって直ちに甲州流の軍学が家康によって採用されたとは云いがたい。前にもふれたように、甲州の軍学なるものは、すでに銃砲の前に時代遅れとなっているのだ。

以上を瞥見して気づくのは、信長方よりも家康のほうに個人的な武功を現した者が多いことだ。大久保忠世兄弟を初め、本多忠勝なども相当な働きをしている。家康が幼くして今川や織田の人質となって流浪している間、家来どもは三河の一隅で留守をまもり、辛酸を嘗めて鍛錬した結果であろう。

ところが織田方では、これという家来の働きはない。明智光秀や羽柴秀吉も柵の中から出撃したが、手もなく甲軍に打ち破られて逃げこんでいる。余談だが、この乱戦中に柵の修繕を指揮して、柵の杭はこう打つもの、縄の結びはこういう具合に男結びとするものと、悠々と教えている男がいた。

山県昌景、これを見て、あいつは尋常の者でない、討ち取れ、と命じたが、この油断のならない男が秀吉だったと、「名将言行録」に出ているが、アテにならない。

6

馬場、山県、原などについて、よく引用されているのがこの「名将言行録」である。たとえばこんな話がある。

馬場信房は若い侍に何か後学のためになることを語ってくれと云われたとき、彼曰く、自分は若い頃より五箇条の心得を持っていたので、あまり不覚は取らなかった。その一つは、敵よりも味方が勇んで見える日は先を争って働く。味方が臆した日はひとりで進んで犬死してまでも敵を崩す機を作るか、でなかったら抜け駆けの咎めを負う。二つは、自分の尊敬する士にかねてから親しみ、その人を手本とし、その人に劣らないように働く。三つには、敵の兜の吹返しが俯き、指物が動かないときは強敵と知れ、逆に吹返しが空を向き、指物が動くときは弱敵と知り、これを択んで槍をつける。四つには、槍の穂先が上がったのは弱敵で、穂先が下がったのは強敵だと判断する。五つには、敵の勢が盛んなときは受けてこらえ、衰えをみては真一文字に突きかかる。これを聞く者、ことごとく感心したという。

次は、山県昌景の場合。或る人が昌景に、貴殿は何度も戦場に出られて、一度も不覚を取っていないが、その秘訣を教えてくれと云った。昌景曰く、二度も三度も戦いに勝った者は、いつもこんな調子だと思って自慢の心が先に立ち、工夫などをなおざりにし、油断してかかるので、思わぬ過ちを犯すものだ、自分は自慢の心なく、いつも初合戦だと思って戦う故に一度も不覚を取

ったことはないと初心を説いた。

しかし、馬場も山県も鉄砲はバカにしている。山県は、或る城を攻めたとき敵の銃口が上がって一つも味方には当らなかったと云い、馬場は、武芸四つのうち鉄砲はその最下等で、鉄砲を射つのは足軽大将より下のなすべき技なりと軽蔑している。

「名将言行録」は、菊池寛が愛読した。しかし、この本は明治になって或る人が編纂したもので、内容はあまり信用できない。しかし、武田の武将が揃って鉄砲を軽く見ていると書いてあるところなどは面白い。彼らが長篠の戦で負けたはずである。

長篠合戦は鉄砲の勝利だが、では、当時の鉄砲はどこで製造されていたか、また豊富な鉄砲を持っていた信長の供給源はどこだったかを書いてみる。

鉄砲がポルトガルの商船の遭難によって種子島に二挺渡ったのは有名だが、一方、ポルトガルの商人側では、日本群島発見で、商船を相次いで九州の海岸に押し寄せさせた。当時各地に割拠して戦闘していた諸大名は、これらの商船から鉄砲を争って買求めた。諸大名が切支丹に改宗したのも、その動機の半ばは、それによって武器を獲得し、貿易の便宜を得ようとしたものといえる。

しかし、それらの輸入品は、多くの場合日本商人の手を経ることなく、直接に諸大名、ことに切支丹大名に引渡され、すぐに戦争に使われたので、どれだけの数量に上っていたかははっきりとは分らない。

しかし、鉄砲は急速に普及し、九州方面では盛んに製造されるようになった。これは当時の鉄砲匠がポルトガル人から製造法を習って、その模製からはじめたと思われる。平戸や豊後などの切支丹大名の領地が、その製造地だったことはいうまでもない。

鉄砲の製造が近畿地方に移ったのはずいぶん早く、紀州根来で行われている。次いで当時の貿易港の泉州堺からも伝播普及したが、信長が用意した鉄砲は、近江国坂田郷の国友村の鍛冶職が造ったものである。

この地はもと京極氏の領地だったが、前から刀剣工や打物鍛冶が住んでいたらしい。

「国友鉄炮記」という本が伝えるところによれば、国友村には国友善兵衛ほか三人の鉄砲匠がいて、将軍義晴から鉄砲一挺を見本として貸与えられた。

彼らは昼夜肝胆を砕いて見本通りに造ってみたが、銃尾を塞ぐ螺旋の工夫がどうしてもつかなかった。当時の日本人には螺旋方式という工作観念がなかったのである。

ところが、彼らの内の或る者が小刀の刃尖の欠けたもので大根をくり抜くと、小刀の欠けた通りに道がついたので、この道理から螺旋の製造法のヒントを会得したという。

それから国友村の鉄砲製造がはじまったわけだが、当時はまだ家内工業的なもので大量生産には至らなかったが、国友の鉄砲を大規模な工業組織として飛躍的発展を遂げさせたのは織田信長だ。

これも「国友鉄炮記」の伝えるところによると、信長は国友鍛冶を見出し、鉄砲五百挺と弾丸を注文したとある。この大量注文によって国友鍛冶の組織に工業的な統制と分業とが生れ、この地の鉄砲製造量を飛躍させたのである。

もっとも、信長が最初に鉄砲五百挺を注文したことについては疑いをもつ史家もある。織田時代の国友鉄砲の製造状況は記録にも詳しくなく、この稿を書くに当って、編集部の人に現地に行ってもらったが、よく分らなかった。

だが、いずれにしても国友鍛冶は信長の直轄地として盛んに鉄砲を製造し、織田方の鉄砲供給

源となったと思われる。

初め、この地の鉄砲鍛冶を直接に統轄して、統制指導をしていたのは、近くの横山城を守って浅井に備えていた秀吉で、浅井滅亡ののち長浜城に秀吉が移ると、彼は国友村に特別行政を施いて鉄砲鍛冶工を保護している。この保護と同時に厳重な統制をおこなったのはいうまでもない（「坂田郡史」・洞富雄「種子島銃」）。国友村は、いま長浜市の中に入っている。

信長は、こうして戦争に必要な武器を領地内で大量に造らせ、いわば兵器廠を設置した。当時の大名は争って鉄砲を購入したが、信長ほど意欲的に兵器産業を起した者はほかに見当らない。信長のアイデアが天下統一の機を早めたともいえる。

これに反して、四辺山に囲まれた甲斐の武田では、中央からも離れ、半ば鎖国的であったし、鉄砲の入手の経路も遠かったわけである。それで甲軍では依然として信玄の騎兵隊戦闘を墨守していた。

長篠の戦は、騎兵隊が砲兵隊に負けたのである。近代戦術の勝利である。ここから歩兵戦術が発達する。

長篠の戦によって、諸大名も鉄砲の威力をまざまざと知らされ、旧来の戦術が一変した。弓矢や槍に備えていた防具の甲冑も、きらびやかな赤糸縅や紺糸縅といった源平式のものから、胴は鉄帽式、甲も胴丸、つまり、南蛮胴のような弾丸除けの実戦用と変ったのである。

長篠の戦は、日本戦史の上でいろいろな意味があったわけだ。

姉川の戦

元亀元年六月二十八日
（一五七〇年八月九日）

1

「桶狭間役ノ後十年ニシテ姉川役アリ。織田信長ハ徳川家康ト与ニ南軍ヲ成シ、浅井長政モ朝倉義景ノ将士ト与ニ北軍ヲ成シ、江越濃尾参遠等数州ノ兵相会シテ一地ニ対抗ス。亦著名ノ大戦ナリ」

と、旧参謀本部編「日本戦史」にはあって、姉川の戦は名の聞えた大戦だったのである。

桶狭間で大捷した信長は、尾張から上洛の意図いよいよ急なるものがあった。彼はさきに途中を阻む岐阜の斎藤竜興を破り、その居城稲葉山を開城させている。

斎藤道三の伜で癩を病んだ義竜は、実は道三が逐った旧主土岐頼芸の胤といわれ、義竜は父道三を実父の讐として討つのだが、この義竜の子が竜興である。信長は、稲葉山を岐阜城と改めて移った。竜興は、織田と仲の好くない越前の朝倉義景のもとに走った。

信長は、永禄八年、伊勢の北部と近江の東南を攻略し、九月には京都に入り、近畿を平定した。十一年十二月には近江の六角義賢（承禎）を逐い、十二年正月には三好の党が京に入るのを追出

している。

大体、織田家も朝倉家も、尾張、越前の守護斯波家に仕えていた身分だ。応仁の乱のとき斯波家が二つに分れ、朝倉家は宗家のほうにつき、謀をめぐらして越前の守護職を自分に譲らせた。一方、織田家は信長のときまで、形式だけはともかく斯波家の家来だった。したがって、朝倉家は織田家を一段下に見下し、優越感をもっている。

一方、浅井は、その祖先が、近江愛知川以北の六郡、すなわち総称して江北というが、その守護職京極家に仕えていた。

ところが、京極の実権を横取りした上阪景重が死んだのち、浅井亮政が乱を起して上阪にとって代り、小谷山（東浅井郡）に城を築いて、これに拠った。

亮政の子が久政だ。久政は京の公卿風を真似た享楽家だったので、浅井の兵力ようやく衰微した。家来たちがそれを憂えて久政の子の長政を擁立し、長政もその期待に応えて、永禄二年には六角承禎を撃退している。

この浅井亮政や長政が六角方と戦うたびに、越前の朝倉家では兵を出して浅井を助けていた。浅井も朝倉も、一は江北、一は越前、その南北の領土が接しているが、いわば友好国を形成していた。

大体、戦国時代には、こんなふうに隣同士が仲がいい型と、遠交近攻策を採る型とがある。遠交近攻策は、隣国に敵国を控えた場合、その敵国の背後にある国と親交を結び、挟撃の態勢で隣強国を牽制しようという策だ。

これに反し、隣国同士の友好は、いわば二つの国が一本になって周辺の共同の敵に当ろうとするわけで、浅井、朝倉の関係は、その典型だった。両家の間には攻守同盟みたいなものが出来て

いた。

織田信長が岐阜から京都に出ようとすれば、江北の浅井がどうしても障害になる。浅井の当主長政は、親の久政と違い、武勇にもすぐれ、膂力も勝っている少壮気鋭の領主だ。信長は、この浅井の武力を憚って、衝突するよりも和睦策を採った。そこで、信長は妹のお市を自分の娘分として長政に嫁がせ、親子の間柄になった。政略結婚だが、長政は二十五歳の偉丈夫。お市は絶世の美人。木下藤吉郎が彼女に横恋慕していたという説がある。

信長は浅井長政を見込んだ。久政が隠居して長政の代になってから、浅井は武力が格段に強化され、信長にとっては、敵に廻すと、面倒な存在だが、味方にすれば頼もしかったわけだ。

もっとも、浅井長政が信長と縁組するについては一つの条件を出した。浅井と越前の朝倉とは代々昵懇の間柄であるから、今後朝倉と事を構えてもらいたくないというのである。長政としては同盟国を攻撃しては困るというわけで、信長もそれは承知している。彼は越前には一切手を出さないという誓詞を長政に与えたくらいだ。ここで、織田と浅井の不可侵条約が成立した。

こうして信長は将軍足利義昭を擁して、永禄十一年七月二十八日に入洛の途中佐和山で長政と会っている。この佐和山は、浅井方の勇将である磯野丹波守員昌の居城だ。信長からは浅井家に数々の進物がある。それに対して長政は家重代の宝刀備前兼光の太刀を贈った。

これは一名「石割」と名づけられた名刀で、のちに浅井が滅亡したとき、重代の宝刀を与えたのは、その前兆であると諸人云い合った。敗けてしまえば、何でも凶兆になるし、うまく行けば、何でも瑞兆になる。批評というものは勝手なもので、現代の定見なき評論家も似たようなことを云う。

ところが、信長に依って京都に帰った義昭は、自分が足利将軍の威令を回復できると思ってい

たところ、実際の権力は信長にあり、自分は体のいい飾りもの、傀儡将軍であることを自覚した。信長は義昭のために御所を作ってくれたが、義昭からすれば体のいい座敷牢にも見えた。そこで、彼は陰謀をめぐらして、密かに信長退治の通牒を武田信玄、毛利輝元など各地の有力な武将に送ることになるのだが、その主力として択んだのが織田家と仲の悪い越前の朝倉である。

ここで足利義昭のことに少しばかり筆を費さなければなるまい。

足利将軍義輝には二人の弟があった。兄を覚慶といい、南都一乗院の門主だった。弟を周暠といって鹿苑寺の主だった。永禄八年五月、三好、松永の党が義輝を殺したとき、その末弟の周暠は夷川の町で殺された。

覚慶は一乗院に押込められて、三好、松永の番兵に監視されたが、このとき覚慶を助けたのが細川藤孝、すなわち歌人幽斎である。

もともと、藤孝は義輝に仕えていたのだが、足利将軍家を再興すべく、覚慶が幽閉されている一乗院の院内に家来を医者に仕立てて入らせた。そして、ほどなく覚慶の病気が癒った祝いと称し、番人どもに酒肴をすすめ、みなが大酒を呑んで酔った隙に覚慶の救出にかかった。藤孝の家来は覚慶を背に負うて、院の塀を乗り越えた。

覚慶を連れた藤孝の放浪がそれからはじまるのだが、彼は覚慶を還俗させて義秋と名乗らせた。藤孝は義秋を連れ、浅井長政に頼り、小谷の近くの寺を仮館として義秋を入れた。

ところが、三好の党が攻めてくるという噂が聞えたので、藤孝は義秋を連れて若狭の武田大膳大夫義統のもとに赴いた。義統は藤孝の妹婿に当る。江北小谷から若狭に行く途中、彼らに従うは僅か十騎ばかり。琵琶湖を渡るとき、秋月皎々として蘆荻と波影に映じた。義秋は、泪して一詩を賦した。

「江湖ニ落魄シ暗ニ愁ヲ結ブ　孤舟一夜思悠悠　天公マタ吾ガ生ヲ慰ムルヤ否ヤ　月白ク蘆花浅水ノ秋」

藤孝は、これに応えて「よるべなき身となりぬれば汐ならぬ　うみの面にもうきめ見るかな」と詠んだ。主従の艱難、想いみるべしである。

若狭に行くと、武田義統は懇ろに義秋と幽斎とを本城に入れてもてなした。しかし、若狭は国小さく、力弱く、とうてい頼みにはならぬ。こんなところに居てはいつ足利将軍家の回復が実現するか分らないので、ここで越前の朝倉義景を頼ることになった。

幽斎は、まず義景のもとに行き、義秋を迎える手筈を整えた。義秋が若狭を発して越前に赴くと、義景は居城一乗谷の近くに館を造って義秋を入れ、大いに待遇した。

義秋は、ここで将軍とも、公方とも称したのである。

義秋は檄を四方に飛ばしたので、まだ足利将軍の名に憧れて来る者およそ三千余人、義景の手兵を合わせると二万三千余騎となった。ところが、享楽に狎れた義景は腰が重く、何のかんのと云って京都に出陣するのを渋る。その愛子が病死したときなどは意気沮喪して取乱し、人とまともに話もできぬくらいであった。

藤孝は、これを見て落胆し、こんなことでは京の回復覚束なしと思い、もっと適当な人物はいないかと探しているうちに、美濃岐阜にいる織田信長の声望がようやく高くなるのに眼をつけた。

このとき朝倉義景に食客して藤孝と知合ったのが明智光秀である。光秀は、それまで放浪していたので諸国の地理や民情がよく分っている。彼は藤孝にすすめて、いま恃むに足るは織田信長だけであると云った。藤孝はその言に従い、美濃に行き、信長に義昭（十一年四月、義秋を改名）のことを依頼した。

この頃、光秀も義景に疎じられて信長に附いたばかりなので、大いに義昭のことを推薦した。信長は足利将軍の弟というので喜び、藤孝は義昭を伴い岐阜に行く。彼は立正寺という寺に招き入れられた。十一年七月である。藤孝と光秀とは親友となり、幽斎の子の忠興の妻に、光秀の女お玉をめあわせた。これがガラシア夫人。

信長は義昭を奉じて入京し、松永・三好一党の立てた十四代将軍義栄を阿波に逐い、義昭を十五代将軍に就けた。

さて、信長と義昭の悪因縁のほうも、ここからはじまるのだが、信長は足利将軍義昭の名で諸国に檄して、自分の地位を認めさせようとするし、義昭は信長に乗じられたようにみせかけ、実は彼を利用して、やがては反信長勢力を結集して信長を打倒し、名実共に自分が将軍になろうと考えるようになるのである。

大ぶん義昭のことが長くなったが、義昭が朝倉義景に信長退治の密書を出したのは、こういう次第だった。義景、また、大いに信長打倒の意欲に燃えた。

尚、以上のように書くと、細川藤孝はえらく忠義者にみえるが、実は、オポチュニストであったという正体はあとで暴露する。

2

朝倉義景には信長打倒の意欲はあったものの、すぐに積極的に起ち上がるという気概はなかった。それはもともと織田氏を下風に見ていたからで、信長の擡頭も何ほどのことがあろうと、たかをくくっていた。朝倉家は越前の守護職として、敏景以来、北陸に兵馬を養ってきた強国だ。この敏景は、家訓として次のようなことを遺していた。

一、朝倉家では宿老というものを定めてはいけない。登用は人材本位とすること。

一、代々の役柄といっても、その任でない人に奉行職を預けてはならない。

一、刀や脇差などに名作を好んではならない。その訳は、たとえ一万匹(値段)の太刀を持っていたとしても、百匹の槍百挺には及ばないからである。それで、一万匹を以て百匹の槍百挺を求め、百人に持たせたならば、それだけ武力が強化されることになる。

つまり、世襲制度や閥を廃して真の人材主義にし、虚飾を去って実利につくよう戒めたのである。

その他、布服、調度から、猿楽、馬、鷹に至るまで、細大洩らさず子孫のために訓示した。だから、その孫の教景のときなどは、十八歳から七十九歳の生涯十二度の合戦に、その武功を顕している。

この敏景から五代の嫡流が義景だ。義景は朝倉家の武備を恃み、いたずらに安逸に耽った。新興の織田勢力などを眼のあたりに見聞しても、信長などに何が出来るかと思っている。このへんは、老舗の大会社の社長が過去の実績にあぐらをかいて、退嬰主義による内部崩壊にも気づかず、新興勢力を軽蔑してフンゾリ返っているのと似ている。

朝倉が築いていた南の境界線の警備といえば、金ヶ崎と手筒山に砦だけだ。それは、前にも書いた通り、江北の浅井家とは攻守同盟を結んでいるので、精神的な気楽さもあったのだ。

信長が京都に覇を立てるには、この北陸にいる朝倉をどうしても退治しなければならない。

信長がこの決心をつけたのはかなり早くからだろうが、自分が面倒をみている義昭が打倒信長の檄を義景に出したと気づいてからは、いよいよ実行の臍を固めた。もっとも、それだからといって義昭を問責したわけではない。当分は知らぬ顔をして、内々で義昭の動きを監視していた。

信長は朝倉と手切れ（国交断絶）の口実をチャンとつくった。義景に京都に来て、新将軍義昭に挨拶せよ、との書面を送ったが、義景は京都に行けば、信長の下風につくことになるので、黙殺した。信長はこうくるだろうと計算に入れていたから、朝倉弾劾の理由ができた。

朝倉征伐の作戦を決定した信長は、家康を岡崎から京都に呼んでいる。信長自身も元亀元年二月二十五日岐阜を発して、二十六日江州の常楽寺に到った。ここで当分腰を据え、三月三日には相撲を興行し、五日になってやっと入洛した。

上方見物の名義で上洛した家康とは四月十四日に落合い、将軍居所普請落成の祝言として能の興行をおこなった。

このときは、飛騨国司姉小路中納言、伊勢国司北畠中将、三好義継、松永弾正、畠山、その他公卿の歴々も一堂に集って見物した。

義昭は将軍として信長に官位の昇格をすすめたが、彼はあっさり、まだ、その任でないと断っている。官位を欲しがるのはその頃の武将の習だったが、信長は、そんな空名はこれからの働きに邪魔になると考えていた。その官位をすすめたのが反信長策謀の張本人義昭だから、チャンチャラおかしかったわけだ。

信長は家康と朝倉征伐についての十分な作戦を練ったが、そんなことは顔に塵ほどにも出さず、ひたすら堺などの富豪から茶の名器を集めたり、能を舞ったりして平和状態をみせかけた。京都の民衆は久しぶりに泰平の瑞気に遭って喜んだと、記録にある。

信長は、いよいよ、その仮面を脱ぎ、四月二十日京都を発して、家康と共に敦賀表に出兵した。京は花散り、北陸道は雪解けの好シーズンである。

当時、織田の軍勢は華麗な軍装で、真先に立った信長は、朽葉色の大幟十本ばかりを立てさせ、

金地に金襴の包具足、白星の三枚兜、黄金づくりの太刀、利刀黒の駒に跨がり、旗本には一様の具足をつけた武者五百騎を配し、諸国の大名らを従えた有様に、北陸の軍民、鬼人の天降りかとも驚歎したという。

信長の馬印は黄絹に永楽銭をつけ、招には南無妙法蓮華経の刎ね題目を書きつけた。尚、永禄のころまでは馬印というものは無かったが、このころ（元亀元年）から旺んに用いられるようになっていた（武家物語）。

朝倉方の手筒山は即日に開城した。翌二十六日、織田、徳川勢は金ヶ崎に押寄せた。城将朝倉景恒は、昨日の手筒山の応援に勢いが挫けていたので、正面から防戦する気力がない。朝倉義景も途中までは応援に来たが、口実を設けて一乗谷に引返している。肝心の総大将がこれだから、一族の朝倉景鏡も応援を命じられたがこれも進まず、進退谷まった景恒は、その夜のうちに城を開けて府中に退却した。

こうして、二日のうちに難なく朝倉方の防衛線を突破した。信長は越前の境の木の芽峠を越えて、まさに義景の本拠一乗谷に攻撃をかけるばかりになった。

このとき、信長は江北の浅井長政が兵を起したとの急報に接したのである。

信長は初め、その報告を信じなかった。長政とは、妹お市を女分として与え、縁続きになっているほどの仲である。その浅井がどうして、おれの背後を突くような真似をするかと、報告の使者をかえって叱ったくらいだが、その後、警報が続々と到着するに及んで信長も、その真実なることを知り、愕然とした。

「信長記」によると、「浅井方謀叛」とあるが、浅井方からすれば、信長こそ条約違反だといいたいところだ。

前記のように、信長が浅井家と結んだとき浅井のほうでは、朝倉とは代々特別な仲だから、朝倉に対しては紛争を起してくれるなと条件を出し、信長は承知を確約した。

しかるに、その約束を反古にし、浅井には何の挨拶もなく朝倉を攻めたのは信義に違背した行動だ、というのである。殊に信長に怒ったのは長政の父久政で、あれほど固い約束を交したのに、それを黙って破り、朝倉を攻撃するとは、信長という男は、「親疎を知らぬ荒夷にて、豺狼の野心あり」というわけだ。こんな信用のおけない奴と手を握っても将来は当家も攻撃するに違いないから、この際、代々の朝倉家との信義にもとづいて信長を背後から討つべし、と主張した。

浅井のほうにも人はいた。たとえば、佐和山の磯野丹波守員昌などは、昔の信長と今の信長とは違う、以前はともあれ、現在の信長は畿内の覇者である、軽率なことをするはずがない、と云ったが、久政、諾かない。長政も親父の言葉やほかの重臣の勧めに動かされて、遂に兵を挙げたという次第である。

さて、浅井挙兵となると、信長の今の立場は一挙に窮地と変った。前面に朝倉、背面に浅井と、腹背に敵をうけて挟み撃ちの状態に陥ったのだ。

信長が浅井に朝倉攻撃を事前通告しなかったのは、おそらく、彼としては浅井、朝倉の友好関係を考えて、浅井に知られると、かえって浅井の立場が困るだろうという考えがあったのだろう。つまり、表向きに浅井に朝倉征伐を挨拶すれば、朝倉と攻守同盟を結んでいる浅井家としては、それに反対を表明せざるをえない。それでは信長の所期の目的が遂げられない。ここは一番、浅井には黙って越前に出兵し、朝倉を退治したのちに、既成事実をつくりあげ、浅井に事後承認させようという肚だった。

そのつもりでいるから、信長もまさか浅井が朝倉と呼応して背後から襲撃しようなどとは思っ

てもいなかった。急を報らせる飛脚を再三まで彼が疑ったのは、そんな気持があったからである。しかし、これは信長の一方的な考えで、少々、虫が好すぎた。

腹背に敵をうけた今、信長は敏速に行動を起さなければならない。松永久秀は信長に即刻退陣をすすめた。「幸い今のところ浅井の軍配も俊敏を欠いている、今のうちに退きたまえ」と云ったのは家康だ。信長は、この意見に従い、四月二十八日の夜、敦賀撤退に決した。

さて、大軍を京都に無事退却させるには、よほどしっかりした者を殿としておかなければならぬ。金ヶ崎に誰を残すかと、詮議区々のところに木下藤吉郎秀吉進み出て、

「わたしが残りますから、安心して退いて下さい」

と申入れた。

戦場での華々しい功名は先陣だが、それにも増して困難な持場は殿軍である。先陣の場合は、味方があとからバックアップしてくれるから、ただ真一文字に進撃するだけでよいが、殿軍となると、本隊を先に逃して、最後に踏止まりながら敵の追撃を斥け、隙を見ては自分も退却しなければならないわけだから、先陣とは大そうな違いだ。

いわば先陣は背後の味方が全部敵に当るのだが、殿軍は自分だけの僅かな手兵による孤独な戦いである。

しかも、心理的には敗け戦だから、兵卒の意気も消極的だし、浮足立っている。真に討死の覚悟でなければ殿軍はつとまらない。また、大将を逃すためには、その身代りになっての討死覚悟だから、文字通り死地での戦いだ。これを志願した青年武将木下藤吉郎秀吉の心組みは、織田方の宿将を前に置いて昂然たるものがあった。

秀吉も、このくらい信長に尽さないと、柴田、佐久間、丹羽といった先輩たちに対して互角の

ところまで上ることができない。織田方の諸将も、彼が僅かな手兵で敵地に残る心意気に感じ、それぞれ一隊ごとに弓、鉄砲の屈強の者を出し、歴戦の勇士を五騎、十騎ずつ援兵として与えたというから、秀吉の感奮も想像される。

3

こうして信長は僅かの旗本と共に、朽木越えに向かった。この朽木谷は近江高島郡で、京都の北、八瀬、大原から若狭、越前に通じている間道の途中にある。谷は東西に狭まって南北に長い。その領主は朽木信濃守元綱という。

松永久秀は信長に向かって、

「自分は元綱と旧くから知っているので、彼を説き、人質を出させて、京都に御案内いたさせる。元綱聞かずば、刺し違えて死に申す」

と云った。彼は自ら元綱の館に行き、その言葉通りを実行した。元綱は信長を迎えて館で饗応し、四月の末、信長はようやく無事京都に入り、やれやれと安堵した。

家康はどうしたか。これには二つの説がある。例の「三河物語」には、信長が自分の身を大事と考え、家康をあとに捨てて沙汰無しに(無断で)宵の口に引取った、とある。そして、夜が明けて木下藤吉郎が案内者に云いつけ、家康を退き口に誘導したと、大久保彦左衛門は書いている。

別の一説は、殿として木下藤吉郎が若狭の境に入る頃、朝倉勢が多勢追いかけて、秀吉の手兵に喰いついて一戦に及んだ。秀吉勢危うくみえたとき、秀吉が家康へ助けを求めたので、家康は自分で鉄砲を取り、朝倉勢を防ぎ、家中の面々を励まして敵の追撃を退けたとある。これは徳川方で編纂した「武徳編年集成」「東照宮実記」などの記事だ。

いずれにしても、家康は信長とコースを違え、若狭の小浜に出て、根来谷に入り、針畑を越えて鞍馬山を過ぎ、京都に帰った。このコースは今でも難路で、根来谷は根来耶馬渓の称がある。家康の行軍も難儀したに違いない。

丹羽長秀、明智光秀らもまた若狭から五月五日に無事帰京した。これも朝倉と浅井の機動力が敏活を欠いたお蔭である。朝倉義景は浅井が敵の後方を絶ったというので、進撃せず、浅井の軍事行動も緩慢だったから、信長も家康も虎口を脱した。だがこうして信長の朝倉征伐は、浅井長政の背面の蜂起によって失敗した。

しかし、このままでおさまる信長ではない。彼はいよいよ朝倉、浅井の連合軍を正面から撃滅すべく、ひとまず、岐阜に引きあげることになった。

元亀元年五月九日、信長は京都を発ち、十九日、日野城主蒲生賢秀父子の案内で千草越えを過ぎた。このとき、六角承禎に頼まれた杉谷善住坊という隠れなき鉄砲の名手が、僅か十二、三間離れたところから通過する信長を狙撃した。弾丸は信長の袂に当った。供の者は騒いだが、信長はこれを捜索することを制止し、ゆるゆると打過ぎ、二十一日には岐阜に帰った。

江州には柴田勝家、佐久間盛政が残っていたが、彼らもよく六角勢と戦った。

柴田勝家は蒲生郡の長光寺の城に籠っていたが、ここに六角承禎は軍勢を率いて押寄せてきた。近郷の百姓たちは六角方になじんだ者が多いので、忽ち柴田に反抗して一揆を起した。その百姓が、長光寺の城は井戸が無い、城外から樋をもって水を入れているので、水の手を切れば城兵は渇するから、城は忽ち落ちるであろう、と云いつけた。

承禎、大いに喜び、水の手を切り、樋を塞いだ。城中、忽ち水が欠乏した。折からの炎天つづきであるから、たまったものではない。頃合よしと、承禎は家来の平井甚助という者をわざと城

内へ使にやり、開城の交渉をさせた。柴田は対面して、これからみんなと相談するから、明日まで待ってくれ、と返事した。

甚助はわざと小姓を呼んで、手水を使いたい、と頼んだ。小姓は飯銅に水を入れて、二人して甚助の手にジャブジャブとおしげもなくかけた上、残りの水をわざと縁の上から庭の白砂の上に投げ棄てた。甚助、案に相違して、この旨を承禎に報告し、

「城中は存外水が多く、たくさんに使い棄てています。このぶんでは早急にはこの城は落ちますまい」

と云った。

勝家は甚助を騙して帰したあと、城中の水を点検すると、今までは何とか五月雨の軒の雫をためたものでしのいでいたが、はや六月の炎天では雨も無く、二石入りの水甕三つにはいくらも残っていない。

勝家その三つの水甕を広縁に担ぎ出させ、城中の侍を悉く集めて、夜もすがら酒宴した。

「明朝はわれらも共に斬って出で討死すべし、同じ死ぬなら渇死するよりも戦闘で討死するこそ武士の本望なれ。今は最後の思い出に、残りの水をことごとく飲み干せよ」

人も馬もガブガブと腹いっぱいに飲んだ。

これで城兵も覚悟ができ、団結心が固まった。勝家は長刀の柄を持って、その石突きで空になった三つの甕を悉く叩き破った。勝家、夏夜すでに明け方なれば、みなみな松明を点じて斬っていでよ、と下知し、必死の覚悟で六角方に突入した。

不意を衝かれた六角勢は算を乱し、討死する者八百ばかり、承禎も命からがら退却し、勝家のヤケ糞戦法は図に当った。——すなわち、「甕割柴田」の由来。

さても、一方、準備の成った信長は、六月十九日岐阜を発し、二十一日には浅井の本城小谷に迫った。信長は虎御前山に野営し、柴田、佐久間、丹羽、木下、蜂谷らは敵の村落の随所に放火した。

信長は二十四日に敵方の横山城を攻めた。これは小谷城に籠っている浅井方の兵を平野に誘い出す作戦である。横山城を攻囲している間に、彼は家康の到着を待受けたが、家康は二十七日兵五千を連れて信長の本陣竜ヶ鼻に到着した。

折から灼けるが如き炎天である。信長は甲冑を脱し、白いゆかたに黒の陣羽織、銀箔で桐蝶の紋を押したるを着し、黒き笠をかぶり、床几に打掛けていたが、家康着到を知ると、立上がってこれを迎え、家康の手を取って礼を云い、且、喜んだ。

僅か五千の加勢だが、信長にとっては家康の律義がどのようにうれしかったかしれない。以後、信長の死まで織徳連盟は一度も崩れていない。

信長の兵約二万五千、丹羽、柴田、明智、佐久間、森、池田、木下、稲葉といったスター級をすべて連れて来ている。家康また、僅か五千とはいいながら、酒井忠次、石川数正、小笠原長忠、大久保忠世、榊原康政などの精鋭を引具して来ている。

これに対し、浅井方は兵数約一万、朝倉は約一万の手伝だったが、義景は何のかんのと云って自分ではこないで、一族の孫三郎景健を代理として差し出している。

そもそも、この戦の起りは、義景が当事者だ。浅井長政は朝倉家との友好を考えて、盟約上、織田方の背後から起ったにすぎない。しかるに、今度長政が織田・徳川勢と正面から決戦しようというのに、義景は代人を出しただけで姿を見せない。こんなところに義景の人物加減が知れる。

さても横山城の陥落は目睫に迫った。浅井・朝倉方では、城が落ちる前に後詰しようとして、

長政は二十五日小谷城の東にある大寄山で陣を張った。朝倉勢も翌日ここに来た。そして、二十八日の未明には約三十町進んで姉川を前にし、野村・三田村の両方に分れて戦線を展開した。

だから、浅井・朝倉の記録では野村・三田村合戦といい、織田・徳川方では姉川合戦というている。

そもそも、姉川は東浅井郡の北端の山岳部から発し、南に流れて西に折れ、琵琶湖に入る湖北第一の大きな川だ。右岸の延長十八、九町の間は、高さ七尺以上の断崖だ。

この姉川の南岸に陣した信長は、二十七日夜、敵の焚火がしきりと上るのを見て、さては翌日彼に進撃の計画があると見抜き、むしろ先んじて、われより翌未明に押寄せんと軍議を定めた。

このとき信長は、家康に予備隊を振り当てた。家康、承知せず、

「それがし、ぜひとも先陣を承らむ。もし聞かれずば、これより直ちに陣を巻いて帰国すべし」

と主張した。

信長、その言葉を喜び、家康に先陣を与えた。柴田、明智を第二陣に、稲葉一鉄を第三陣に、丹羽の一手を横山城の押えとし、残る兵を分って十二段に備えた。

徳川は、今川義元亡きあと、三河、駿河を取ったとはいえ、未だ小国である。織田の、尾張、美濃、大和の南部、和泉、若狭、近江を合計して二百四十余万石の国力に対しては、小なる存在である。しかも、駿河の北部には武田信玄が未だ健在だ。北条氏政も早雲以来聞えた老舗である。小国が、これら大国に伍してその存在を主張するには、これくらいの危険を覚悟して働かなければならない。

秀吉が金ヶ崎の殿軍を自ら志願して、織田家宿将の間に発言権を強めたのも、家康がこの姉川の戦で、先陣を強く希望したのも、すべて捨身の自己顕示である。秀吉といえば、調子のいい口

先で信長から可愛がられ、出世したように思われているが、これだけの働きをしている。家康また、他日の大成には、先陣の危険も顧みなかった。

「徳川家康」みたいな本が、経営者の「参考書」になっているそうだが、その轍でゆけば、壮年の頃の家康、秀吉の意気は、徹夜の麻雀疲れの顔で、机の前にぼんやり煙をふかしている、無気力なサラリーマンの参考書程度にはなるかもしれない。

しかし、現代の資本機構はがっちりとしているから、どだい戦国時代のことが参考になるわけがない。せいぜい、精神衛生的な効果くらいだ。

4

戦いは、二十八日午前五時、織田・徳川方の南軍より、弓、鉄砲を射ちかけてはじまった。

浅井・朝倉の一万八千は、自分のほうから仕掛けるつもりだったのに、まず機先を制された。浅井は三田村に、朝倉は姉川を境として、午前四時ごろに備えを立てたが、姉川を中心にすれば、北軍は右岸、南軍は左岸にあった。

徳川方と浅井方との間に戦闘が開始されたが、双方、姉川を越しつ越されつの接戦となった。徳川勢は自ら先陣を乞うただけに、織田勢の眼の前での晴れ戦だ。大いに勇をふるって朝倉勢に迫ったが、朝倉勢もなかなか強く、徳川勢はしばしば立竦んだ。

このとき浅井方の勇将磯野丹波守員昌は、自ら率先して殺到した。磯野は佐和山の城主で、さきにふれたように信長と長政が盟したときの浅井方の立会人だ。織田勢はこの磯野の猛勇に押されて、酒井右近父子と兵百余人が討死した。

池田の陣も斬り崩され、十二段の備えのうち十一段まで潰れたというから、磯野の奮戦ぶりが

分る。彼はすでに信長の旗本に迫らんとした。

家康、これを見て朝倉勢に肉薄した。しかも、斬り込まれて彼の旗本も危くなった。

これを見た榊原康政らは、姉川を渡渉し、側面から朝倉勢を攻撃した。家康は、その機に乗じて勢いを盛返した。朝倉勢、狼狽したところを、これまで満を持していた稲葉の一隊が浅井の右翼を衝き、また横山城の押えとして残っていた丹羽の一隊に氏家卜全、安藤伊賀が浅井勢の左翼に攻撃をかけた。

三方からの攻撃に遭って、さしもの浅井勢も退路を断たれるおそれを生じ、ここに総敗軍となった。

朝倉・浅井方の勇将は、ほとんど、このときの戦闘に死んでいる。

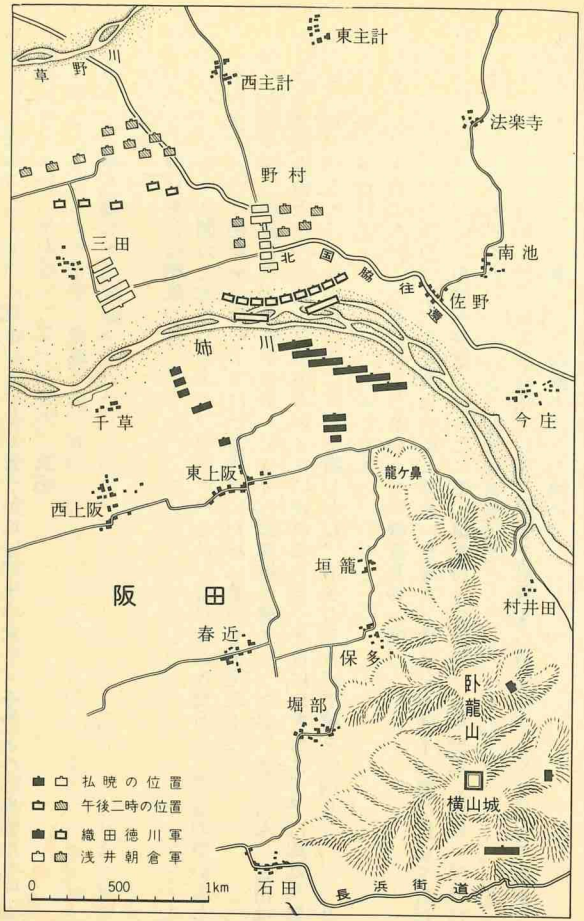
――さてもここに朝倉方に名を知られた、真柄十郎左衛門直隆という武者がいた。彼は強力無双で、長さ七尺八寸という、まるで薙刀のような大太刀をふるって敵陣にかけ入り、左手、右手に当るを幸い薙ぎ伏せ斬り伏せ、縦横無尽に走り回った。

この大太刀は幅が広いので、正面の敵が見えないので、ところどころ窓をあけていたという。十郎左衛門は、その窓をのぞいては斬り、のぞいては斬ったから、さすがの徳川方も十郎左衛門ひとりのために斬り立てられ、彼が向かうところ、四、五十間が間は空地の如くなった。

真柄、あざ笑い、ほっと一息ついたところに、徳川勢のうち四人ばかりがかかってきた。真柄これを見てニッコと笑い、

「やあ、数多の中よりただ四人われに向かわんとは神妙の至り、いざ参ろう」

と、例の窓のついた大太刀をとり、四人を左右に引きつけて六、七合も戦ったが、忽ち四人は薙ぎ倒されてしまった。



最後の一人が落馬して、すでに危く見えたとき、馬を飛ばせて馳せ来った一騎がある。

「やあやあ、真柄十郎左衛門に見参せん。かく云うわれは徳川の家来、本多平八郎忠勝なり」

と呼ばわり、大身の槍を捻って突っかけた。真柄、

「おう、望むところ。よき相手、参れ」

と応ずれば、平八郎も、

「云うにゃ及ぶ」

と、ここで一騎打ちとは相成った。

なにしろ、北国一と聞えた大力の勇士と、海道無双と名を得た壮士とだから、竜虎の争いもかくやとばかり、互いに秘術を尽してすでに三十合、にわかに勝負も見えなんだ。

十郎左衛門直隆、例の大太刀の窓をのぞいては平八郎の槍と渡り合ったが、なにぶん、真柄は五十に余る老武者の上に、今朝より数度のいくさに疲れておる。それにひきかえ、平八郎は今年二十三歳、新手のことであるから、遂に真柄が敵しかね、本多の突き出す槍を受損じて、どっとばかりに大地に倒れた。

……あわれ、大勇士も姉川の露と消えたという、軍談講釈の一席。

しかし、真柄を討ったのは徳川方の勾坂六郎五郎という者で、講談で本多平八郎に仕立てただけだ。だが、忠勝も、信長の旗本が危くなったとき、槍を持って敵陣一万余の真ン中に一文字に突込んで、家康から感状をもらっている。（本多家武功聞書）

また、のちのことになるが、長久手の戦のとき、家康を追撃する秀吉の大軍を、僅か十数騎で阻もうとしたのも忠勝で、秀吉、彼の武者ぶりを眺め、

「あれは誰か」

と訊いた。従者のなかで忠勝を記憶していた者があり、

「あの者は、先年、姉川の戦にて見覚えし本多平八郎という者に候」

と答えたというから、忠勝も相当眼につく戦いぶりだったに違いない。

こうして浅井方では名のある者がほとんど討たれたが、そのなかに、遠藤喜左衛門という浅井方の重臣が、信長を討つために、乱戦にまぎれ、織田の軍兵を装って信長の旗本まで忍びこんだ。織田方では彼を味方の者だと思っていたところ、遠藤の眼がキョロキョロしている。竹中半兵衛の弟久作がこれを見て取組み、遠藤の首を刎ねた。久作は、かねがね、

「江北のみならず、近国まで名の高い遠藤は必ずおれが討つ」

といっていたのが、その言葉通りになったわけだ。

浅井方の磯野丹波守は、敵軍の真ン中を通り抜けて居城佐和山に入った。ものすごい中央突破である。また、同じく浅井方の勇将安養寺三郎左衛門は捕虜となった。信長、彼に投降をすすめたが、応じなかったので、その勇気に感じて釈放し、小谷に帰らせた。

姉川の戦は午前五時にはじまり、午後二時に終ったから、九時間の激戦である。北軍（浅井・朝倉）の死者千七百余人、南軍（織田・徳川）八百余人。炎暑のさなかで、両軍とも汗みどろであった。

秀吉は、この機に乗じて小谷城を陥れたほうがよい、と進言したが、信長は、それをあと回しにして戦場から引揚げた。丁度、長篠の戦で勝頼を破ったが、すぐさま甲州に攻め入らなかったと同じ手である。

信長は、開城した横山城には羽柴秀吉を定番として入れ、竜ヶ鼻で将士の論功行賞をした。殊に家康には大いに感謝した。今日の大功挙げて云うべからず、という感状に長光の刀を添えて与

えた。この刀は足利将軍義輝の秘蔵のものだったという。信長としては、この戦に勝ち、家康の援軍を感謝しても感謝しきれなかったであろう。

佐和山の磯野丹波守に対しては攻撃をかけさせたが、磯野はよく防いだ。そこで、城下に火をかけ、東西南北に砦を築いて封じこめ作戦に出て、所要の将兵を残し、八日には岐阜に帰った。家康もまた軍をまとめて居城岡崎に戻ったが、次いで、出来上がったばかりの遠江浜松の城に移っている。

姉川の戦は、織田・徳川の緊密な協力に対し、浅井・朝倉は初めから連繋に不備があった。殊に、肝心の朝倉義景がこの大事な戦に出陣しなかったことが、どれだけ第一線の将兵に、心理的な悪影響を与えたか分らない。長政も、一体、誰のために戦争をはじめたのか、と云いたいくらいだろう。

将軍義昭は、朝倉と浅井が敗北したので、信長打倒の望みが、ひとまず挫折し、落胆した。しかし、それを顔色に出す義昭ではない。

信長はいったん岐阜に帰ったが、そこから三好の残党が立籠っている野田、福島を奪回すべく押寄せた。三好党は信長の隙を窺って火事泥式にここを奪っていたのだ。このときは将軍義昭も信長に従って野田、福島攻めに参加している。

野田、福島の三好の残党は、投降を乞うたが、信長はこれを許さず、一挙に潰そうとかかったとき、石山本願寺の攻撃を受けた。

信長にとって宗教相手の戦争はいつも苦手となっている。伊勢長島の一向宗の一揆も彼を苦しめ、また本願寺では生涯、手を焼いている。

信長が、こうして摂津で三好党や本願寺と対峙している隙に、朝倉・浅井勢は叡山の麓、坂本

を襲った。ここには森三左衛門を置いていたが、城は破られ、勢いに乗じた浅井・朝倉勢は、大津その他に放火して逢坂を越え、醍醐、山科を焼き払って、すでに京都に迫ろうとした。

信長は摂津中島にいたが、この急報に接して柴田勝家に殿を命じ、馬を淀川に打入れて渡り、二十三日に義昭と共に帰洛した。

姉川の戦で信長の前に屈した浅井・朝倉勢は、あえて京都に入らなかったが、信長が逢坂を越えて坂本に到着すると、いずれも叡山に逃げ登った。

大体、朝倉は代々叡山延暦寺の大檀越（スポンサー）だ。叡山側が朝倉・浅井の軍勢を庇護したのも当然である。

信長は叡山に向かって、われに味方して浅井・朝倉の兵を差出せ、さすれば自分が押えている分国中の山門領を返してやろう、味方しないまでも、せめて中立をせよ、との二箇条を示し、どちらも聞かざる場合は叡山悉く焼き払うべし、と厳命した。

叡山側では何のかんのと云って時間を稼ぎ、浅井・朝倉をかくまうばかりか、女や食糧まで叡山に運び上げた。

信長は怒って叡山を包囲した。ところが、義昭はもともと浅井・朝倉の勢力を温存しておきたいので、自ら講和の役を買って出た。信長も連戦のあとではあり、兵馬も疲れている。いま叡山にこだわって長いくさとなれば、石山の本願寺、摂津の三好の残党、伊勢長島の門徒衆など四方に敵を引受けることになるので、やむなく義昭の仲介に応じた。あるいは義昭の調停を丁度幸いと思ったかもしれぬ。

元亀二年春になると、浅井方の磯野丹波守も遂に投降して佐和山城を開いた。信長は、この城に丹羽長秀を入れた。五月には信長は、いよいよ長島の門徒退治に出かけたが、かえって苦戦に

陥り、氏家卜全などは、その途中で戦死している。一向宗との戦は、さすがの信長もいつも黒星であった。

いよいよ八月に入ると、信長も今まで放っておいた浅井・朝倉を絶滅することに決心した。これをそのままにしておいては、絶えず四方の敵が呼応してくる。

浅井・朝倉を討つには、その与党ともいうべき叡山の僧兵を、まず叩かねばならない。彼は、元亀二年九月十二日、いよいよ叡山攻撃に出た。根本中堂、三王二十一社悉く灰となり、僧侶のほか美女、童など老若男女の区別なく召捕って、首を刎ねた。その数、数千といわれている。いわゆる叡山焼打ちで、信長最大の「残酷物語」である。

しかし、叡山の堕落も、攻撃されても仕方がないところがあった。

「ああ信長は不仁なり。何ぞ恨を仏神に遺し、手に立たぬ僧徒を焼打にし、殊に朝家護持の法跡、国土安全の道場、おのれ一人の恨を以って焼亡すること、狼藉血気の小人なり。逆亡久しからず、必ず獅子身中の虫の為に身を堕し、一生の功空しく、子孫の面を恥しむる者なり」

と長政は云ったという（浅井日記）が、本能寺の変の予言は、後世の筆者が書いたもの。

叡山を平らげた信長は、山麓の滋賀郡を明智光秀に与え、坂本に在城せしめた。のち、山崎合戦に敗れた明智方の左馬助光春が、大津から湖水を渡って坂本に入ったのは、そこが光秀の居城だったからである。

5

元亀元年の夏に姉川の戦があってからのち三年経った。この三年間は、信長なりに多忙であったが、その最も大きな事件は、足利義昭との手切れである。

前にも書いた通り、義昭は初め信長に頼っていたが、のちに自分がロボット将軍にすぎないことを見出して、密かに諸領主に密書を出し、さながらアンチ信長同盟のようなものを作らせた。朝倉義景もそうだが、武田信玄、石山本願寺、毛利輝元などである。

他人から見れば、没落して奈良の坊主で一生を送っても仕方のなかった身が、とにもかくにも足利将軍の地位に就き、表面上だけでも、奉られているのだから、信長を徳としなければならないと思うだろうが、当人は、いざ将軍になってみれば、その父祖の如く、独裁政治をやりたかったに違いない。

また、表面は父と呼んでいたが、尾張の一介の領主にすぎなかった信長を、成上り者と蔑んでいたであろうし、その信長が、名実共に足利将軍として自分に臣従しなければならぬと考えていたに違いない。

信長は義昭の策動を知っていて、当分は素知らぬ振りをしていたが、あんまり陰謀を逞しくするので、遂に元亀四年（天正元年）正月、義昭に対して注意書を与えた。これが世にいう十七箇条の諫書である。

諫書とはいえ、内容は義昭の急所を衝き、今後妙なことをすると承知しないぞという脅迫である。

だが、信長から見れば、義昭が謀叛してくれたほうが、むしろありがたい。それだけ早く、利用価値がなくなった将軍を、おおぴらに追落すことができるからだ。

信長が義昭を迎えたのは、いわば一時の方便、覇を唱えるための借り物にすぎぬ。されば新井白石は、「信長の義昭を扶持し、秀吉の信忠の男岐阜殿を翼戴せられし、みなこれ暫時の詐謀にして、その名を仮らむためなるべし」と「読史余論」で云っている。

信長の恫喝に遇うや、義昭もたまりかねてこの年の三月、反旗を翻した。三方原で徳川家康を大敗せしめた信玄が前年三河に入ったのだ。越前の朝倉、江北の浅井、姉川で敗れたとはいえ、まだ、その勢いを残存している。西に眼を向ければ、石山本願寺は依然として信長に対抗し、そのうしろには毛利が控えている。これ、信長に向かって起ち上がる好機と義昭は考えたに違いない。

ところが、義昭は手もなく信長のために敗れた。彼は居館を取巻かれて、他愛なく和議を乞うた。信長にとって一大脅威であった信玄は、信州駒場で歿した。これで東からの脅威が全く去ったので、いよいよ念願の浅井・朝倉退治に専念できる。

浅井・朝倉としても、信玄をずいぶん恃みにしていたが、その信玄には死なれるわ、彼の与党であった摂津一円は、完全に信長によって掃蕩されるわで、急に悲運の影が落ちてきた。残るのは本願寺一派だが、これとても信長に封じこめられて、自ら援兵を出すほどの力はない。

この時局を見て、浅井・朝倉の家中からも、続々と信長方に投降する者が出てきた。江州山本山の城主阿閉淡路守が心変りをしたので、信長は直ちに出馬して浅井方の月ヶ瀬城を取った。これで、江北と越前の通路を遮断したことになる。したがって、浅井も朝倉も孤立し、共同作戦が不可能になってしまった。

さすがの朝倉義景も、もう惰眠を貪っているわけにはいかなくなった。彼は浅井方の催促にようやく重い腰を上げ、二万の兵を率いて江北の余吾、木ノ本まで出陣した。しかも、彼はまた使によって、一族の者に自分の名代をさせようと出陣を命じたが、もはや、誰ひとりとして応じる者はいない。仕方がなく、自ら出陣した。

信長、これを聞き、すわこそ義景がノコノコと出て来おったぞ、逃すな、とばかりにその先鋒

に訓令した。

朝倉勢は簡単に潰走し、江北から越前さして逃げた。信長、息をつがずにこれを追撃した。その退路に二つの線が考えられたが、信長は敵が敦賀方面に逃げると察し、刀根(刀禰)口を択んで急追した。案の定、刀根山の峠で敵の後尾に追いつき、そこから敦賀まで、およそ十一里の間に敵の首級三千余を得た。この中には朝倉家の名の有る者が少くなく、信長、会心の追撃戦であった。

朝倉義景は、一乗谷の居城を支えることもせず、あわてて大野郡に逃げのびた。

信長は府中の竜門寺に本部を進めた。

すると、そこに百姓どもが、卑しからざる女房を探し出し捕えていたが、あるとき、その女房が硯を借りて、鼻紙の端に書置をして井戸に身を投げた。

ありをればよしなき雲も立ちかゝる
いざや入りなな山のはの月

これが大将義景の室と知ったときは、誰もその暗澹たる最期に涙しない者はなかった。

なお、この女性を家老桑山清左衛門信景の息女こと(十七歳)とも伝えている。

そのころの農民は、合戦のたびに一揆のようにして出て行っては儲け口を探した。勿論、旗色のいいほうについては、敗走軍をいじめるのだが、これも日ごろから武家に苛められている仕返しかもしれない。

平泉寺は、もともと朝倉家の菩提寺だが、信長に攻め込まれては、事実上、義景を殺さなければならない。僧徒は義景を包囲した。一族朝倉景鏡は、義景に迫って自殺させた。義景の首は竜門寺に送られ、信長の前に供えられた。義景、行年四十一歳。義景の母も嫡男も、捜索のうえ探

し出されて自害させられた。義景のもとに身を寄せていた斎藤竜興も朝倉氏のために刀根山の合戦に出て戦い、敗死した。こうして越前一円に蟠踞していた名族朝倉家は完全に消滅した。

今度は浅井征伐である。信長は、本営としていた江北虎御前に敦賀表から帰陣すると、早速、その翌晩、羽柴秀吉をして久政の居城を乗取らせた。久政は、かねて寵愛していた能役者の鶴松太夫という者を呼び、これに介錯させた。当時は男色である。

長政は父の生害を聞いて、今はこれまでなりと、九月一日、城に火をかけて切腹した。二十九歳。

彼は死に際して妻のお市に云った。

「そちは織田殿の妹、三人の娘はわしとの間に出来たとはいえ、織田殿にとっては姪。よもやそちたちを殺すことはあるまい」

このお市が、のちに柴田勝家に嫁いで、勝家が秀吉に敗れて北の庄で自刃するときも、同じように城を出るように勝家からすすめられている。しかし、亭主運の悪い彼女は、娘三人を出城させただけで、自分は夫と共に自害した。

三人の女の子の一番上が淀君で、次の妹が京極高次夫人、末が秀忠の夫人になったのは有名である。

かくて信長は、天正二年正月元日、新年の宴で、朝倉と浅井父子三人の首を肴に、近親の者どもを集めて酒を呑み、愉しんだ。首を肴に酒を呑むとは信長の残酷な一面を語るが、いかに浅井・朝倉征伐が、信長の数年に亙る宿願であったかが、知れるのである。

信長は、戦後、上杉謙信に備えて越前を柴田勝家に、また、多年、その地で働いたという褒賞として江北一円を羽柴秀吉に与えた。

義昭は、宇治に拠って一度信長に抵抗したが、敗れて毛利に走り、備後の鞆に養われた。後、秀吉がそれを聞いて可哀想に思い、お伽衆に加えて捨扶持をくれてやった。義昭は陰謀を唯一の武器として信長を苦しめた男で、ちょっと興味があり、私は前に「陰謀将軍」という小説を書いたことがある。

ところで、細川藤孝は落ち目になった義昭を見捨てて、いつの間にか信長の懐に入って知らぬ顔をした。彼は秀吉に移り、家康に変った。歌人のくせに、いや、歌人だからこそ権力の動向に敏感な、オポチュニストだったのであろう。しかし、それでなくては、戦国の世に子孫を繁栄させることはできない。

山崎の戦

天正十年六月十三日
（一五八二年七月一二日）

1

天正十年六月二日の早朝、織田信長は京都本能寺の宿舎で、明智光秀の急襲をうけてあえなく殺された。

「人間五十年、化転の内をくらぶれば、夢幻の如くなり。一度生を得て、滅せぬ者のあるべきか」という謡曲「敦盛」と、「死のふは一定、しのび草には何をしよぞ、一定かたりをこすよの」の小唄とは、日ごろ信長の愛誦するところだ。

信長は、ある意味で稀代の侵略主義者ではあったが、戦国時代に生れたからには、これくらいの虚無感も持っていた。死んだときが、定命に一年欠けた四十九歳。だが、彼もまさか家臣の光秀に殺されようとは、夢にも思っていなかった。

光秀が、なぜ信長を討つ気になったかについては、いろいろな説がある。説というよりも、光秀の心理を推測した想像説だ。それほど、彼の信長打倒には明確な原因がない。戦争には、必ず何か社会的な要因があるはずだが、これにはそれがない。云うなれば私闘である。

まず、光秀が日ごろから信長を恨んでいたという私恨説からふれる。

光秀が以前に信長の命で丹波を攻略したときに、八上城に拠っていた波多野兄弟にすすめて、その生命の保証を条件に城を開かせた。このとき、光秀は波多野方を安心させるために、老母を人質に出した。

ところが、信長は光秀の命乞いを諾かずに、安土に護送されてきた波多野兄弟を殺した。八上の将士は光秀の違約を怒って、人質の彼の老母を磔にした。光秀としては、敵方に男を下げた上に、老母まで殺されたのは、信長の冷酷によるものだとして恨んだ、というのだ。

しかし、これは事実が違う。八上城から誘い出された波多野に酒を飲ませ、酔ったところを縛って安土に送ったのは、光秀の最初からの計画だったのだ。

人質に出した老母が殺されたというので、以上の説が生れたのだろうが、実は光秀の実母ではなく叔母である。波多野兄弟を殺すような計略だったのだから、はじめから叔母が殺されるのは覚悟の上だったわけだ。

彼は、同じ丹波攻略の丹羽長秀、羽柴秀長（秀吉の弟）の二方面軍の戦果が上がっているのに、一向に自軍の戦況がはかばかしくないので、こんな計略を思いついたのだ。もともと光秀は内向型で、軍略の好きな男だった。

げんに、光秀はその功によって信長に賞され、在来の江州の一部のほかに、丹波一国の主となって感激している。信長は部下に切り取らせた国を与えるというやり方の、この方法で侵略をすすめている。

次に、芝居の「絵本太功記」などで有名な、信長にいじめられたという説。浜松から上洛してくる家康の接待係を命じられながら、饗応の準備がなっていないと信長に叱られて、信長の寵童

森蘭丸に殴られた上に、中国地方で毛利と対峙している、秀吉の応援に行けといわれて、腹を立てたという話。芝居では、蘭丸の鉄扇で打擲をうけて額が割れ、光秀が「や、や、や」と眼をむくことになっている。

光秀の家康に対する饗応準備が悪い、と信長が憤ったとか、蘭丸の折檻とかはフィクション。信長と家康との同盟は、実に二十何年間に亙っている。当時信長が二十八歳、家康二十歳だったのが、今や信長は定命に近く、家康も不惑を越えた。尾張と三河とは互いに隣国同士だが、この二つが攻守同盟を結んだのは、姉川の合戦のところでふれたように、浅井、朝倉と同じ形態の自存手段からである。しかし、今や自衛は攻勢に転じ、織田、徳川の両旗は、全国侵略の共同体にのし上がっていた。

されば、向背つねならぬ戦国の世に、家康の律義は信長も大いに徳とした。信長が天下布武の基礎を築き、安土に城を構えると、多年、同盟の誼(よしみ)をもって上方に招待したのだ。今度は朝倉退治の場合と違い、家康もまったく遊山気分で、上方をゆるゆると見物した上は、当時、自由都市だった堺を回遊する予定だった。この賓客をもてなすのに、信長が最も有力な部下の一人である、光秀を当てたのは当然なことだ。

当時信長の重立った武将は、全部四方に出陣していた。すなわち、柴田勝家は北陸方面軍司令官として越中に働き、滝川一益は関東軍司令官として、上州厩橋(うまやばし)(前橋)に出動し、丹羽長秀は四国方面軍司令官として摂津に渡海準備中であり、羽柴秀吉は中国方面軍司令官として、毛利方の備中高松城を攻略中であった。

こう見てくると、師団長クラスで遊んでいるのは、光秀だけである。

そこに、秀吉から毛利攻めが容易でないことが報告され、信長に至急来援を乞うとの急報がきた。信長は自ら総司令官となって出動するつもりだったが、とりあえず、光秀を家康の饗応役から外し、先遣部隊長に当てることにしたのである。

こう考えてくると、信長が光秀を臨時の儀典長から外したのも、俄かに秀吉応援に向かわせたのも、いささかも不合理ではない。

ところが、光秀の気持になってみると、必ずしも、信長の意図を素直に受容れられない点もあった。光秀は家康の饗応を準備していたが、そのためには相当な金も使っている。それを不意に中止させられたのだから、腹を立てて、器や皿などを、坂本城の濠に投げ棄てたといわれている。せっかく金をかけて支度をしたのが無駄になったというだけではなく、光秀としては、今さら後輩の秀吉の采配下に入るのが、いまいましかったのだ。

秀吉は、軽輩から取立てられて出世した男だ。初めは織田方の幹部も秀吉の才智を愛していたが、彼が次第に頭角を現し、牛蒡(ごぼう)抜きに僚輩(せいはい)を追越して先輩連の座に迫ってくると、先輩たちも動揺せざるを得ない。後輩として格段の距離が開いている間は、彼らも好意を秀吉に示していたが、いざ、自分と肩をならべるところまで追付かれると、今度は嫉妬と憎悪の感情に変る。これは現代のどこの社会にもあることで、政治家にも、一企業のサラリーマンの世界にも見られることだ。芸術家にもその例なしとしない。要するに実力の世界にはあり勝ちなことだ。

大体、信長は人使いがうまい男だ。部下については、いわゆる適材適所主義をフルに発揮した。だが、柴田、丹羽、滝川といった宿将たちには、秀吉の累進が面白くない。光秀は織田家のプロパーではないが、それにしても秀吉よりはずっと先輩だし、第一、毛ナミがいい。秀吉は百姓の倅だが、光秀は美濃源氏の土岐といって、清和源氏の流れを汲む名門の出身だ。

今まで後輩視していた秀吉が、自分と肩をならべただけでも、光秀の心は穏かではなかったと

ころに、今度は、たとえ、信長の先遣部隊として中国方面の応援に向かったとしても、軍司令官は秀吉だから、その麾下に入らなければならない。いわば、はっきりと光秀は秀吉の下にランクされるわけだ。エリート意識の強い光秀は、これを侮辱と思ったに違いない。

信長の処置もまた、うかつなところがあった。光秀の気持を察して事情をよく説き、納得させた上で救援を命じたならば、まだよかったかもしれないが、例の一本調子で「おまえ、すぐに備中へ行け」と荒っぽく命じたに違いないから、配慮も欠けていたと、いわなければならない。デリカシイに欠けた主人と、感受性の強い家来との性格の衝突である。

信長は家来を頭ごなしにして使った。罵詈雑言も平気であった。光秀の頭の恰好から、彼の名前を呼ばずに「きんか頭」と、平気で人前で呼びつけていた。

まだ佐官クラスなら我慢もできようが、師団長クラスになっても、こんなふうにやっつけられると、見栄坊の光秀には不愉快だったに違いない。秀吉なら、信長の嘲笑も罵詈讒謗も平気でエヘラ、エヘラと受流していられたが、光秀の内向的な性格は、いちいち、信長の言葉が胸の内側へ内側へと入りこんで毒素が醱酵する。人使いのうまい信長だが、部下の心理を解することでは欠点があった。

光秀の信長怨恨説には、まだいろいろなことが云われている。たとえば、稲葉一鉄の家来だった斎藤内蔵助という者が、稲葉から離れて光秀に身を寄せた。一鉄は、これを信長に愬えて斎藤を返すように頼んだ。しかし、光秀は信長の命を聞かず、斎藤のような侍を養うのは、畢竟、御奉公のためであると云った。信長は、「おれの云うことを聞かないとは推参なやつだ」と云い、光秀の髻を取って二、三間がほど突き放し、さらに脇差を抜こうとしたので、光秀は逃げ去ったが、次の間で涙を流して「今日は面目を失った」とこぼし、しおしおとわが屋敷に立戻ったという。

また、信州諏訪郡に信長が出陣したとき、土地の土豪たちが信長の居る寺に来て挨拶をした。光秀は、

「こんなめでたいことはない。われらが年来骨折ったため、諏訪郡の内はみなこうしてお味方につきました」

としたり顔で云ったので、信長の気色が変り、

「おまえは、いつ、どんな骨を折ったのだ？　おれが日ごろから働いたればこそ、こうなったのだ」

と、光秀の髪をつかんで、

「このきんか頭め」

と、欄干に頭を押しつけて叩いたという。

だが、これらはいわゆるお話であって、のちに脚色された部分が多い。

まだある。あるとき、信長が庚申待ちをして、柴田、滝川、佐久間、明智といった幹部連中を集めて夜通し酒盛をしていた。庚申待ちというのは、庚申の夜に夜通し酒を呑んで話をするという道家の風習で、江戸時代には、無駄話をしかけられると、「そんな話は庚申の晩にしておくれ」と云ったものだ。

その宴の半ばに、光秀が小用を催して中座しかけた。これを見た信長が「待て」と叫んで、広間に掛けてあった槍の鞘を外して駆けだし、うずくまっている光秀の細首に、槍の穂尖を押しつけた。

「このきんか頭め、何故に中座して座敷の気分をこわすか。今に、その細首を槍で突き刺してく

れる」

信長は尚も、光秀の咽喉の脇へ槍を突きつけたので、光秀は五体から冷汗をかいて謝ったために、やっと赦されたという。

酒宴の席で、黙って小用に中座するのは、エチケットだ。生理的な現象まで、槍を突きつけて止めるとは、人権蹂躙だが、信長にしてみれば、すべて気取った恰好で立居振舞をする光秀が、癇に障ったのであろう。いつも理智的な顔で、勿体ぶった動作をする光秀を見ると、信長は苛々してくるのだろう。そのとり澄ましたインテリ顔を眼のあたりにすると、むかむかするのだ。

そのほか、信長が白刃を突きつけて、酒の呑めない光秀に大盃を押しつけたとか、似たような話はいっぱいある。いずれにしても、貴族的なポーズばかり作っている光秀が、信長の性に合わなかった。つい、その気どっている皮をはいで虐めたくなる。

そんな信長のサディズムを秀吉のようにヘラヘラ笑いながら、幇間みたいに受流し出来る光秀ではなかった。そんなことをやられるたびに信長のウケが悪く、憎まれているようで、しまいには自分の前途も、どうなるか分らないという不安が起きたのであろう。内向型の人間にありがちな、気の回しかたも人の二倍も三倍も深かったと想われるのである。

2

光秀が信長を殺そうと思い立ったのは、信長が僅かな家来しか連れてなくて、本能寺に泊っていたという偶然な機会に魅せられたからだろう。

光秀は、五月十七日に安土を発して坂本に行き、二十六日には坂本から居城亀山に到着している。ここで、信長の命令通りに、中国出陣の軍備を整えたのだった。

この軍編成をしているうちに光秀は、ふと、信長がほとんど単身で本能寺に泊っていることを思い、この軍勢をして信長に向かわせたら、という想像が起ったかもしれない。

もともと中国行は、イヤでイヤで仕方のなかった折である。年来、信長に持っていた不快と不信感が爆発したというよりも、今だったら造作なく信長が仆せる、というチャンス感が起きたに違いない。

このときの光秀の胸中には、柴田勝家は北陸にあって上杉景勝と対峙し、滝川一益は遠く関東上州にあり、秀吉は毛利に釘づけされて、一寸動きも出来ない状態にある。丹羽長秀は長曾我部退治に向かうため、摂津方面に駐留しているが、この軍勢だけでは、さしたる人員ではない。いうなれば、織田の戦力はほとんど諸方に四散して、しかも、それぞれが急に引返してくることが出来ない状態にある。いま信長を討っても、彼らが戻ってくるのには相当な時日を要する。

また、信長が仆れたとなると、毛利にしても、上杉にしても、長曾我部にしても、急に勢いを増し、信長の各方面軍は、忽ち苦戦に陥るであろう。各個撃破されて自滅するかもしれない。さすれば、そののちに毛利や上杉と手を握ればよい、という計算も光秀に働いていたかもしれない。

当時は謀叛といっても、覇者交替は実力とされて怪しまれなかった。現に、織田信長は足利将軍義昭を放逐して実権を奪っている。光秀が信長を仆しても、それほど不道徳ではなかったのだ。

主殺しが、大罪とみられるようになったのは、徳川時代になって、朱子学が入ってからである。徳川幕府は、その支配体制を維持するために朱子学を利用したので、信長のころには、そんな道徳的な秩序観念はうすかった。

光秀は、居城亀山に着いた翌日の二十七日に愛宕山へ参籠している。このとき、神前に詣って籤を三度まで引いたと伝えられているが、これまでまだ光秀の気持の中にアヤフヤだった思念が、

ようやく現実的な計画となり、さらにその決心を固めるために、二度、三度と籤を引いたのかもしれない。事の吉凶を占うよりも、おのれの心に問う籤であった。

おそらく光秀の心中は、この大望の結実に従って昂奮状態にあったことと思う。愛宕山では連歌を催したが、その会の半ばで菓子として粽が出た。

粽といっても、今の若い人には馴染がうすかろう。五月の節句に町の菓子屋の店頭にならんでいる、笹巻の、米の粉で作った棒状の団子である。今は、砂糖を使って甘いが、当時は塩味だった。菓子に砂糖がふんだんに使われはじめたのは、江戸時代に入ってからで、当時の味つけは塩しか使えなかった。この会合に出た粽も、京都の塩瀬あたりで作ったものかもしれない。塩瀬は当時からあった古い老舗である。

光秀は、粽の皮をむかないで、そのまま食ったというから、その昂奮状態が知られる。

「茭粽手ニ在リ茭ト併セテ食フ」と頼山陽は詠んだ。

また、その晩、連歌師の紹巴が光秀の横に臥せていたが、光秀は終夜睡らず輾転反側した。紹巴が、ご気分でも悪いか、と問うと、光秀は、いやいや、佳句を考えているのだ、とごまかした。その晩の連歌では、光秀が「ときは今あめが下知る五月かな」と発句を作った。尚、つづく句は、

水上まさる庭のまつ山　西坊
花落つる流れの末を関とめて　紹巴

と、なっている。

「とき」とは光秀の出身の土岐氏にかけたもので、「あめが下知る」とは天下を取るという意である。つまり、このときは、すでに信長打倒の決意が固まっていたとみられる。

紹巴は、その字句の意味に気がついていたとみえ、光秀の敗軍を知ると、愛宕山に馳せ登って「知」という字を消して、その上にまた「知」とわざわざ書き直した。

のちに秀吉に訊問せられたとき、元の句は「あめが下なる」であったのを、自分に反感を持つ者が「知」と訂正したのだ、と主張した。事実、自分の手で消して書き直したのだから、その跡は歴然としている。

連歌師というのは、当時の権力におもねって生きていた文化人だから、このくらいの狡さは持っていた。秀吉は、紹巴のトリックには気づいていたが、知らぬ顔をしていたのだろう。敵が倒れた以上、寄生虫のような文化人を咎めても、仕方がないと思ったに違いない。

現在でも、政治評論家と称する文化人で、派閥に属して提灯持的解説を書く手合がある。こんな連中に限って、勢いのいい実力者に尾を振ってゆく。現に、そういう「評論家」でお茶屋のツケを実力者に回して遊んでいる手合を、筆者は知っている。だが、ただに政治評論家のみならんや、ほかにも似たようなのがいる。

ところで、光秀はもともと深い恨みは、持っていなかった。いや、かえって信長は彼の恩人なのである。

光秀は、さきにもふれたように、美濃土岐郡に土着した源氏の庶流の裔だ。ところが、斎藤道三のために美濃一国が取られ、土岐一門は没落した。光秀は、若いころから諸国に放浪したが、このときつぶさに、地理や、土地の人情を知った。

砲術も専門的な知識を持ち、建築のことにも達し、計数にも明るかった。礼典にも詳しい。万能のスペシャリストだ。光秀は、やがて越前の朝倉義景のもとに草鞋を脱いだ。このとき知り合ったのが、不遇時代の足利義昭を伴れていた細川藤孝で、両人の親交がこれから生じたことは、

姉川合戦の項で書いた通りである。

光秀は、朝倉家に疎んぜられてからは、信長のもとについた。これで器用貧乏の彼にも、やっと花が咲いた。いうなれば、光秀は一介の浪人から、織田家の師団長クラスにのし上がり、領土も江州の一部と丹後一国を貰ったのだから、苦情は云えないはずである。してみれば、信長を襲う気になったのは、たまたま、信長が単身同様の無防備状態で京都に居たことが、光秀の野心を燃え上がらせたとしか考えられない。

光秀が、初めから計画的だったら、事前に毛利方へ通報するとか、上杉に渡りをつけるとかするはずだが、彼はそういうことを一切やっていない。亀山に帰って戦闘部隊の編成をしているうちに、ふいと湧いた計画だから、信長も、その側近も、まったく光秀の動静を知るはずはなかった。

いや、信長の側衆だけではない。光秀の側近も、いよいよ軍勢が亀山城を出立する間際まで、主人の気持を知らなかった。

光秀は、慎重に軍の編成を了り、まず、輜重隊から出発させた。そのあと、婿の明智左馬助光春、重臣の斎藤内蔵助、藤田伝五など四、五人の者を密かに集めて、初めて本心を打ち明け、起請文を要求した。

重臣たちも仰天したが、ことここに到っては光秀の行動を止める術もない。一同、要請通り、命を光秀に託して同意した。

軍兵は、そんなことは露知らぬ。彼らは下知に従って粛々と亀山城を出発した。亀山から中国方面に出るには、三草峠を越えなければならないのに、老の坂から一気に路を左手にとった。右手にとれば大坂高槻方面。頼山陽の云う老坂西去備中道だ。しかるに、左手に馬首を向けた

のは、即ち、京都指向で、ここで行動ははっきりとした。

亀山城から東を望むと、老の坂（京都市右京区）は愛宕山が南に落ちた鞍部になっている。筆者は昨年（昭和四十年）の正月ここを通ったが、舗装道路の両側には、杉林が暗いまでに密集している。

六月二日の払暁、明智軍はいよいよ桂川を渡った。光秀は、カエサルがルビコン川を渡ったときと同じ心境になった。賽は投げられたのだ。光秀は、本能寺の森を指して全軍に進撃を命じた。時に夜はまだ明け切らぬ。すなわち、「鞭ヲ揚ゲテ東ヲ指セバ天猶早シ　吾敵ハマサニ本能寺ニアリ」（山陽）である。

信長は本能寺で殺され、その子信忠も二条城で自殺した。その顚末は省略する。

信長の出現は、中世的権威の否定になっただけでも、意義があった。

3

光秀は、翌三日に信長の本拠安土城を攻撃に赴いたが、途中、瀬田橋を焼かれて、五日ののちようやく安土城に入った。彼は、信長が永年の努力で蓄財した財宝を二、三日の間に悉く散じた。家来の或る者に七千両、四千両、三千両というふうに分けて与えた。京都には減税の布告をして、人心を収攬しようとした。

だが、光秀の関心事は、もちろん、変後の戦備だ。信長父子を仆して安土城を取るまでは、まことにうまく行った。予想した以上に障害もなく、計画は図に当った。

だが、前にもふれたように光秀は事後の計画を持っていなかった。彼は、ただ信長を仆しさえすれば、近畿一円は自分に靡くと思っていた。北陸の上杉も、中国の毛利も自分に味方して、信

長麾下の各軍団に対して、挟撃態勢をとってくれるものと考えていた。光秀の気持では、別にこれら信長の敵国に対して、事前の了解をとりつけていなくとも、交戦状態にあるのだから、当然、信長を仆した自分に味方してくれるものと、漠然と考えていた。ところが、計画の齟齬は、まず自分の足もとからはじまった。

光秀は、第一に、細川藤孝父子に使を出した。藤孝は年来の親友で、今は信長の麾下となっている部隊長だ。忠興は、いうまでもなく、光秀の女お玉をめあわせている婿である。何を措いても、招請状に応じてくるものと思っていたところ、藤孝は参加を拒絶し、忠興はお玉を丹後の山の中に押込めて、中国路にある秀吉に協力を申入れた。

こう書くと、藤孝はえらく筋が通っているようにみえるが、事実は、光秀の無計画さを知って、長くないと見切りをつけていたからであろう。いや、藤孝だけではない。安土に居たポルトガル宣教師のオルガンチーノも、光秀に頼まれて、高山右近を誘っているが、陰では光秀に靡かないように云っている。高山右近は、摂津高槻の城主で、有名なクリスチャン・ゼネラルだ。外国宣教師でさえも、光秀の運命は短命だと、見限っていたのである。

もし、光秀が最初から計画的にことを計っていたら、細川藤孝もどっちについたかわからない。出たとこ勝負の光秀のやり方は、結局、彼の文化人としての欠点だけが、暴露されたのみで、武将としては、甚だ頼りなく映ったに違いない。それであるから、安土城の留守居をしていた蒲生賢秀、氏郷父子が、事変後、その居城日野城に退いていたのを誘ったが、これからも断られた。

ただ、郡山の筒井順慶だけは、四国征伐の準備をして奈良に滞在していたが、事変を聞いて、その一部隊を京都に居る光秀のもとに出した。しかし、主力は郡山にあって動かない。形勢観望というところで、味方としても甚だ頼りなかった。

その間、堺を見物中の家康は本能寺の変を聞いた。家康、自分も腹を切って、信長のあとを追おうと云ったが、家来がこれを押止めて、思い留まらせた。この話がもしも本当なら、さすがの家康も、泡を食っていたといわなければならない。

家康一行は、ようやく間道を通って奈良に出た。ここで勘当していた本多正信と出遇い、彼をゆるして、いっしょに伊賀越えで伊勢の白子というところに逃れている。白子は、江戸時代から小紋など中形の型紙の産地。家康はその海岸から舟に乗って伊勢湾を横切り、三河に上陸したのである。正信はのち家康の総参謀長となった。

家康が間道を通って伊勢へ出るまでは、かなり苦労だったらしい。諸方の百姓が一揆化して襲撃してくるからだ。このとき本多平八郎忠勝の槍が、土民を威嚇したと伝えられている。だが、家康に協力したのは伊賀衆で、彼らの協力がなかったら、家康の脱出も容易でなかったに違いない。家康が天下をとったのち、伊賀の地侍を優遇したのは、このときの恩に報いるためだ。

一行と別れた穴山梅雪は、やはり土賊のために殺されている(これは長篠の戦の項で述べた)。家康は這々の体で三河に逃げ帰ったが、ここで部隊を編成して、光秀討伐に向かうには、あまりに時日を要する。

時日を要するといえば、前記のように滝川一益は上州厩橋で北条氏政と相対している。柴田勝家は佐々成政、前田利家などという部隊を率いて上杉景勝と越中で対している。信長の次子信孝は、丹羽長秀、蜂屋頼隆らと四国に渡ろうとして、大坂に足踏みしていた。だが、この渡海軍だけでは光秀に当るべくもない。この点は、光秀が最初に引いた図上作戦どおりだ。

ただ、図上作戦では、秀吉が毛利と備中高松で相対して、釘づけにされていることになっていたが、現実はそこが違ってきた。

秀吉が、高松城を水攻めにして、遠巻きの戦法を採り、安土に使を出して、信長の来援を乞うていたことは、前にもふれた。

光秀が本能寺を襲撃したころ、高松城は刻一刻と水の中に沈んでいた。城将清水宗治は、自決して城兵の命に代り、城を明け渡そうと、秀吉に申出ている。来援の毛利輝元（元就の孫）は、開城には賛成だが、宗治の自決には反対するという有様で、交渉がもたもたしているとき、本能寺の変の報は秀吉のもとに届いた。六月三日の晩である。

さすがの秀吉も動顚した。前面には、戦局有利になったとはいえ、毛利の大軍と対峙している。もし、信長の死が毛利方に分れば、高松城の開城は取止め、後詰の輝元も小早川隆景も、一挙に決戦を挑んでくるだろう。

信長の死を知った秀吉の将兵も意気沮喪し、浮足立つだろう。だから、逆に敗戦は必至となってくる。さりとて、毛利方に急戦も出来ず、このままに引返さんか、敗軍の譏をうける。右せんか左せんか、さすがの秀吉も沈思黙考しているときに、黒田官兵衛が進み来て、

「よくさせ給え、君のご運の開かせ給う時ぞ」

と云ったという。つまり、しっかりやりなさい、信長が死んでしまえば、これからはあんたが天下をとる番ですぞ、と激励したわけだ。

黒田官兵衛は、もと播磨の赤松氏の被官だったが、早くから信長に心を寄せ、有岡（伊丹）城の荒木村重が信長に反したとき、荒木を単身説得に出かけ、あべこべに捕えられて、長いこと土牢に入れられていた。入牢中に湿疹にかかり、生涯びっことなった。秀吉は、彼を「ちんば、ちんば」と呼んでいたが、家来にあだ名をつけて呼ぶのは、信長の真似である。

官兵衛は、黒田孝高で、秀吉の作戦参謀だ。あまり切れるので、秀吉が彼を煙たがったという

説があるが、官兵衛も、機会があれば天下を狙うくらいの野心はあった。

一説によると、秀吉は、京都の長谷川宗仁から出した、本能寺の変を報らせる使者を受取ると、直ちにこれを監禁し、あるいは斬り捨てたといわれている。いずれにしても、秀吉は、高松城攻囲中に信長が殺されたことを、毛利方に知られては拙かったのだ。彼は腹心の者を呼んで報告を読み聞かせ、各自の意見を質したところ、座にある者は当惑して返事に詰った。このとき黒田官兵衛が、そのことにはふれないで、秀吉の膝もとに匍い寄り、

「さてさて、天の加護を得られたものだ。もはや、何ごとも意のごとくなるようになった」

と囁いたという。

官兵衛に云われなくとも、秀吉には信長の死が、自分にとってチャンスであることぐらいよく分っていた。柴田、丹羽、滝川といった諸将が、急速に京都へ引返すことのできない状態にあったことも、分りすぎるくらい分っていた。その点は光秀の状況判断と全く同じであった。ただ違うのは、光秀はこれを自分のチャンスとし、秀吉また、これを自己のチャンスと考えた点である。

秀吉は、かねてから毛利方とこちら側との間を周旋している安国寺恵瓊を呼んで、急速に事態を収拾するように頼んだ。それは要するに、清水宗治を自殺させ、城兵を助け、城を明け渡すことだった。

この講和は、どちらから希望したかは、はっきりとしていないが、おそらく、情勢不利とみていた毛利方から、秀吉のもとに講和の希望があったに違いない。ただ、秀吉は毛利方の申出た、五カ国の割譲を呑まず、頗る高姿勢だったので、講和成立が難航していたのである。秀吉は安国寺に、五カ国割譲も呑む代り、清水だけは切腹させねばならぬ、と説いた。

恵瓊は水浸しの高松城中に入り、清水宗治を説得している。宗治は、城兵の生命がわが命に代

るならばと、これを承諾した。城外に応援として来ていた輝元も、遂に宗治の意に任せた。信長の訃報が秀吉のもとに届いてから、宗治の切腹までは、僅々七、八時間しか経っていない。ことが長引いては、いくら秘密にしようとしても、信長の死は毛利方に知れてくる。このときの秀吉の心境は、当面の敵は毛利ではなく、「時間」であった。しかも、秀吉はそれを乗り切った。

宗治が、一面湖水と化した高松城外に出て、舟中で腹を切った話は、あまりに有名だから省く。

秀吉は、講和条約が相手方と成立した四日の朝に、毛利から誓紙を取っている。本能寺の変の報らせが秀吉のもとに届いたのは、三日の午後ともいうし、夜に入ってからだともいわれている。いずれにしても、講和は電光石火の間に行われたことになる。秀吉は、これで「われ勝てり」と信じたに違いない。

清水宗治が腹を切ってのち、信長の訃報が毛利方に届いた。これで毛利方は、秀吉のために一杯食わされたと知った。吉川元春などは、講和条約の破棄、秀吉との再開戦を主張したくらいだ。

これを止めたのが小早川隆景で、秀吉は昔日の木下藤吉郎ではない、必ず近き将来、彼が天下を統一するであろう、と予言し、いま、彼の背後を衝けば、毛利家は秀吉から恨みをうけ、あとでどんな災難を蒙るかもしれない、と輝元に意見を述べ、吉川の発言を封じたといわれている。

吉川元春、小早川隆景は毛利元就の子で、元就の長子隆元の死後、その子輝元を二人は補佐した。どちらも勇将で、世に毛利の両川と云った。

また別の説によると、高松城開城ののちに秀吉のほうから、信長の死を毛利方に通告したともいう。いずれにしても、毛利は秀吉の奇計にかかったわけだが、秀吉が人馬を返して京都に向かうのを敢えて追撃せず、無為のままに見送った。秀吉としては、ずいぶんありがたかったわけで、のち秀吉が毛利を重んじ、特に小早川隆景に好意を持っていたのは、このときの恩義を感じたからであろう。

秀吉は、四日の夜には撤兵に着手し、自身は五日の午前二時ごろに高松を発して東に向かった。六日の夜には早くも姫路城に入った。姫路城は、中国攻略のために信長から新しく貰っていた彼の城だ。

秀吉は、ここで城中の金銀や糧米を悉く放出して家来に与えた。さらに留守居の三好武蔵守などに、自分が討死した場合、母も妻も悉く処分をし、城を残らず焼き払え、と命じて不退転の決意を示した。

八日の夜、秀吉は城門に待構えて諸将の来るのを集め、九日早朝、諸卒未だ整わないうちに、摂津尼崎に向かった。十一日午前八時頃には尼崎に到着。昼夜の別なく、人馬を休めずに急行したのである。

茨木城主中川瀬兵衛清秀、高槻城主高山右近大夫長房、いずれも人質を送ってきたが、秀吉これを返して、協力のみを受けた。信長の三子信孝も丹羽長秀も、池田信輝（高柳光寿氏によれば、信輝といった確証はないそうだが、ここでは通説に従う）も兵を率いて来り会した。これらは四国の長曾我部討伐軍だが、大坂で準備中に本能寺の変に遇ったのである。

秀吉は尼崎の一寺に入って剃髪し、精進料理を排して魚鳥を喰った。精力をつけるためだ。信孝に向かっては、

「光秀は親の敵、主の仇、存分に働いて討死されよ。われはそれを見届けて討死せん」

と云ったが、むろん元気づけるためである。秀吉の意気は光秀を呑んでいる。それほどむつかしい戦いとは思っていなかった。近畿の諸将、いずれも明智方に附かないことを、情報で知っていたからだ。

十二日、秀吉は富田で作戦会議を開き、部署を定めた。

4

さて、その間、光秀はどうしていたか。

光秀は、秀吉が毛利と中国で対陣し、容易にそこから抜けることができないと判断していた。のみならず、毛利と通謀して、秀吉を挟み撃ちにするつもりだったところ、秀吉がすでに、摂津尼崎から山崎に着陣したとの急報に接した。

光秀は愕然とした。まさか秀吉が、急遽毛利と講和をし、足もとまで飛んで帰るとは予想もしていなかった。このときの秀吉の迅速機敏な行動は、のちの賤ヶ嶽の合戦における、岐阜から木ノ本に引返したのと双璧だが、まだ山崎のほうが困難な情勢下だけに、奇想天外であった。毛利とこんなに早く和睦が成立しようとは、誰も考えていなかったのである。

光秀の驚愕の次に来たのは懊悩であった。当初の思惑通りには、近畿の諸将も集ってこない。のみならず、筒井順慶は、その一武将井戸某の一隊を、宇治槇島に出しただけで、奈良から容易に腰を上げなかったが、秀吉来ると知って、急に秀吉のほうに通じている。もっとも、順慶は、それほど旗幟鮮明ではなく、まだずいぶんと怪しげな態度であった。いずれにしても、光秀にとって危険な味方であった。

だが、ぐずぐずしてはいられない。光秀はともかく秀吉軍に対抗すべく、十一日には淀城の修繕を命じ、自らは下鳥羽に退き、斎藤内蔵助を洞ヶ峠に陣を構えている、筒井順慶に備えるため、その麓にとどめさせた。

なお、筒井順慶が、洞ヶ峠にとどまって、両軍の形勢を観望し、秀吉の勢いがよくなったのを見てから、初めて、明智方へ攻撃軍を向けたという説は嘘である。

順慶は、前記のように、秀吉が摂津に入ったときから、すでに味方となることを通告しているが、それにしても、彼の態度はまだ甚だ不鮮明であった。してみると、光秀軍の旗色が、初めから絶対的に悪かったとはいえない。順慶は、まだ、どちらとも判断しかねたのである。

この「洞ヶ峠」という名前から、順慶は日和見主義者の代名詞のように云われているが、山崎合戦の開戦前の形勢が、五分五分だったと観測したとすれば、あながち、彼の保身術を責めるには当らない。どっちに兵を向けるかによっては、身の栄達と没落の境目となり、参加する側も一つの大博奕だったのである。

それはともかく、両軍の兵力は、秀吉軍は、その手兵約一万五千、それに信孝、丹羽、蜂屋、高山、中川、池田の諸兵を合すれば、二万五、六千であった。これに反して明智軍は、その兵数約一万七、八千にすぎない。しかも、そのうち五千余は、山城で新しく徴募した兵で、本気に戦うつもりがあったかどうかは、分らないくらい質、劣悪であった。

しかも、光秀は秀吉に決戦を挑むべく、十二日に、折からの雨を衝いて桂川を渡り、御坊塚に陣した。その諸隊は、勝竜寺、西ノ岡、淀などに待機したが、折からの雨で軍卒の携帯した火薬は湿って、役に立たなくなった。泣面に蜂である。

このとき、筒井順慶に備えて洞ヶ峠にいた斎藤内蔵助は光秀に使を出して、いま決戦をするよりも、いったん坂本に退き、籠城されたほうが得策である、と勧めた。光秀、諾かず、明日払暁、その兵を山崎に集合せよ、と命じた。

秀吉もまた、山崎を決戦場として、高山、中川の両隊を最前線に配置した。第一隊の高山隊は二千人、第二隊の中川隊は二千五百、第三隊の池田信輝隊四千人、それに予備隊として秀吉の兵

一万、そのうしろには蜂屋、丹羽、信孝隊合わせて八千人が布陣した。

はじめ、高山右近と中川清秀とは、軍事会議で先陣争いをしたが、秀吉は、高山の居城が京都に近いので、高山隊を先手に決めたのだ。しかし、場所を変えて中川隊をも最前線に位置させた。このへんは、両人の面子(メンツ)を立てて互いに競争心を起させる、秀吉の人使いのうまいところである。

これに対する明智軍は、第一隊は斎藤の二千人、第二隊は阿閉(あつじ)貞明、明智茂朝らの三千人、中央予備隊は光秀五千人を率い、右翼に藤田、伊勢らの二千人、左翼に津田、村上といった手に二千人、別に山手の支隊としては並川(なみかわ)易家、松田政近らの二千人、合計一万六千人である。

秀吉は、六月十二日の正午に大坂からきた信孝と合して、午後四時ごろ山崎に到着している。陰暦六月十三日は陽暦の七月十二日であるから、すでに炎天下だ。秀吉、山崎に到着するや否や、直ちに全軍に進撃の号令を下した。

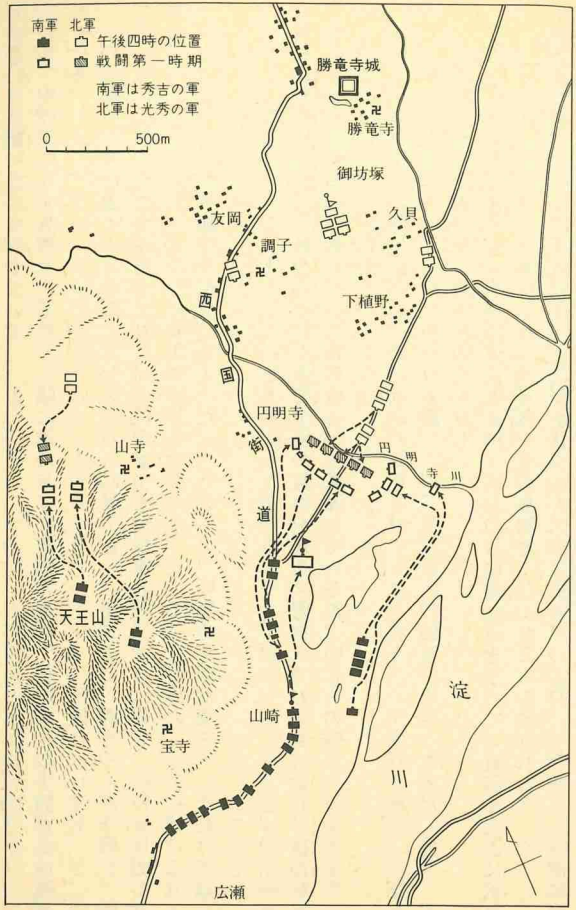
すなわち、高山、中川の先鋒隊は街道筋から進み、池田は淀川右岸の畔道を伝い、羽柴秀長は予備隊の一部として、天王山附近から前進した。

明智軍は絶対数の上で劣勢だが、猛烈に秀吉隊に抵抗した。明智方の斎藤も阿閉も大いに奮戦したが、池田隊が左の側面から突っ込んできたので、余儀なく退却した。

明智軍の松田隊は、天王山に向かって突進した。早くこの山に登って、展望の利くところを占領し、山崎の戦場を俯瞰し、有利に作戦を展開しようとしたのだ。

昔の戦争は、必ず展望の利く高所を占拠しようとして敵味方とも争った。平地では戦場の全面が見渡せないし、正確な地図もないから、どうしても、地形を俯瞰する場所が欲しくなる。ときによっては、この俯瞰地の争奪が戦局の分れ目となることもあった。

また一部隊を山に上がらせておけば、状況次第では山上から駆け下ろさせ、敵陣に突っ込ませ



ることができるので、有利な態勢ともなる。この天王山の争奪は、「天王山」などという勝敗の分れ目をいう言葉になって残っている。

だが、明智軍の山手支隊は、秀長らの隊に遮られて、激戦の末に、松田政近以下数百人は戦死している。

この戦闘は、別に書くほどのこともないくらいに呆気ない。要するに、秀吉の人海作戦が、明智方に致命的だったのである。それに、士気の上でも攻撃軍の旺盛なるに対し、防禦軍は頗る沈滞していた。殊に、前記のように新附の山城の軍兵も混っているので、戦わない先に逃げる兵も出てくる。なにも筒井順慶が洞ヶ峠を下ったからといって、明智方が致命傷をうけたわけではない。

しかし、明智方は、このような不利な条件にもかかわらず、よく奮闘した。たとえば、明智軍右翼の武将御牧兼顕は、戦況の不利をみて全軍の滅亡を憂え、使を光秀のもとに馳せ、退却をすすめたうえ、自らその援護に当って踏み留まって戦死しているが、明智方の残兵二百余人も悉く戦って死んでいる。

明智光秀は御坊塚に陣取っていたが、前線の敗色を見てこれを救うため予備隊の残部に突撃を命じた。その前進の途中で、前記の御牧兼顕からの、退却勧告の使者に出遇ったのだ。光秀、やむなく夜陰に乗じて坂本城に帰るため馬を返した。

こうなると敗戦は惨めだ。大将の敗走と共に、残余の兵はみな道を争って、近江や丹波に逃れようとしたが、秀吉軍に追撃せられ、久我畷や老の坂附近で討たれるもの数知れなかった。

明智軍が敗北するや、秀吉はすぐに堀隊を伏見から大津に出る道の山科と、京都から大津に出る道の粟田口に派遣して、坂本と安土の諸城への交通を扼せしめた。そして残余の兵をもって、

敗兵のこもっている勝竜寺城を囲ませた。

秀吉は、この夜、山崎に野営したが、翌々日には大津の園城寺（三井寺）に於て、早くも諸将の論功行賞を行っている。その軒昂たる意気振りが察せられる。

しかし、この日の戦争で、明智軍の死者三千余人に対し、秀吉軍もまた三千三百余人となっているから、その激戦ぶりが知られる。

5

「太閤記」を書いた小瀬甫庵は、光秀を評して云っている。

「光秀が、斎藤内蔵助の諫めに応じて、山崎での合戦をやめ、坂本に入って籠城したならば、秀吉もことが面倒になったと思う。殊に明智左馬助光春に二千余騎をつけて、徒らに安土城に残して置いたのは、愚の骨頂ともいうべきである。日ごろから蓄えていた軍勢を、一所に集めて一致して奮戦すれば、こんなに脆く敗けることはなかったであろう。自分の手兵をほうぼうに分けていたことは、以ての外の浅知恵だ。光秀が考えていたことが、悉く見当違いだったのは、天理に背いた故であろう」

たいていの史家は、小瀬甫庵と同じ批評を光秀に加えている。

これは俗耳に入りやすいが、果して、この批評通りに行ったかどうかは疑わしい。

たしかに、明智光春の一隊を安土城に残したのは、さなきだに少い明智軍の戦力を殺いだことになる。光春は聞えた武将で、その手兵は二千余人もいたのだから、これが山崎合戦に参加するとしないとでは、効果の点でずいぶんの違いだ。いうなれば、光秀は飛車と角の大駒を落して、将棋をやったようなものである。

だが、甫庵をはじめ後世の史家が評するように、光秀が坂本城に入ったとしても、果して彼がどれだけ余命をつないだかは、分らないと思う。

秀吉の本隊は、光秀が坂本に退けば、忽ち京都を占領するだろうし、光秀は京都を取られると、心理的にも、駆引の上からも、大きな違いとなる。光秀としては、あくまでも京都を自分の手で握っておきたかったのである。だから、進んで山崎で決戦し、秀吉軍を食い止めようとした。

由来、大坂方面から京都に入るには、いつも山崎の山峡が戦略の争奪点となっている。曾て足利尊氏が西上したときも、楠木正成は主上を比叡山に避難させ、山崎の隘路を要して足利軍を撃滅せんと建言した。

京都は四方山に囲まれた盆地で、ただ一つ山崎の峡だけが狭く通じているにすぎない。してみれば、光秀がここを決戦場に択んだのも、無謀とはいえないのである。いま、この地には、名神国道が坦々として通じているが、トンネルの附近が、すなわち、その最も狭隘な地点である。

さらに、光秀が坂本城に籠城したとしても、秀吉の戦闘部隊のみならず、その東には日野城に蒲生父子あり、丹後には細川父子があって、遠くから睥睨している。これらの軍勢がいつ出動して坂本攻囲に加わるかしれない。

いや、もっと光秀の心理を測れば、上杉景勝と対峙している北陸の柴田勝家や、北条氏政と対している上州厩橋の滝川一益が、大きな圧迫となっていたろう。この強大な二方面軍が、本能寺の変を聞いて、兵を撤して戻ってくること、毛利と和した秀吉の例でも明らかだと思ったのだろう。つまり、坂本に籠城しても、時日が経てば経つほど、光秀は織田軍の重囲に陥るだけである。

坂本城は比叡山の山麓にある。曾て、ここは越前の朝倉義景の領地であった。これを信長が焼打ちした。比叡山の僧は悉く信長を仏敵とみている。されば、光秀が坂本に籠城すれば、信長を

殺したという手柄で、叡山も些少の手伝いはしたかもしれないが、これとても、焼打ち以来起つことができず、どれほどの手伝いができようか。いや、叡山側にとっては、光秀も信長と同じ穴のムジナと見ていたろうから、逆に秀吉のほうに味方したかもしれない。

叡山の僧は狡いところがあるから、早くも秀吉の天下を予想して光秀を攻撃し、恩を売り、堂宇の再興ぐらい狙ったかもしれない。

こうしてみると、後世の史家が指摘する点は、光秀にはとっくに織込済みであって、その上での決戦行動だったと思う。ただ、光秀の敗戦があまりに呆気なく、また光秀自身も、土寇の手にかかって哀れな最期を遂げているので、こんな批評が出てきたのだろう。解説者というのは、いい加減なものだ。

光秀はいったん勝竜寺城に逃れたが、前に書いたように、深更、城を脱して坂本城に赴くべく間道をとった。彼は伏見の北を過ぎて、大亀谷というところから小栗栖村を通過中、待伏せた百姓の槍に刺されて死んだのである。これを「豊鑑」の記事によって書くと、次のような場面となる。

光秀は従者五、六人を連れて坂本城を目指し、大亀谷にかかったが、山中で鎧などを脱ぎ棄てた。小栗栖の附近で土寇たちの声がしたので、彼らが落人の鎧目当てに襲撃することを惧れたためだ。折から水無月の十三日、月は高く昇ったが、ひどく曇って道は暗い。ようやく里の半ばあたりを歩いているうち、垣根越しに突き出された槍が光秀の脇に当った。しかし声をあげては敵に知られるので、さあらぬ体で苦痛をこらえ、三町ばかり黙って通りすぎ、里の外れまで来て、苦痛に耐えかねて馬から転び落ちた。

それでやっと従者も、光秀の負傷を知ったのだが、騒げば、あとから野伏の百姓どもが追って

くると思い、そのまま、素知らぬ体で光秀を馬に乗せ、曳いて行くと、光秀は細い声で、わが首を打て、と命じた。

家来どもは、やむなくその言葉に従って彼の首を斬り、馬の鞍覆に包んで、道から一町ばかり傍らの藪の茂っている溝の中にそれを隠した。首の無い死骸は誰のものか分らないので、道の片脇に棄て、それから従者たちは、思い思いに落ちて行った。

光秀は時に五十五。もし、彼が予期通り天下を取っていれば、まさに円熟の境地にあったわけである。

ここで、ちょっと断っておきたいのは、当時の農民は、幕藩体制の確立した江戸時代の百姓とは違って、土地私有の名主群によって、農奴的に統率されていたことだ。そのため名主は、荘園的な領主としばしば利害関係で争っている。殊に、戦国時代となれば、武装兵の横行に対して自衛的にも武装しなければならなかった。集団武装しているから、敗残兵を襲撃できたのだ。

秀吉軍の堀隊は、安土城から救援に駆けつけてきた明智光春の隊と大津で遭遇した。しかし、光春は堀隊の進出によって光秀の敗走を知ったので、戦う目的がなくなり、坂本城に入るため湖水の渚を駆け抜けて走った。

このくだりは講談や琵琶歌で有名だが、えらく派手なシーンとなっている。

左に講談の見本。

《さても光春はその間に坂本の城を指して落ちようとしたが、陸地は敵が満ち満ちているし、殊には四倍の道程。湖水を突き切れば、一直線に坂本へ行かれる。おう、そうよ、とうなずいた左馬助光春、大鹿毛に一鞭当てると、満々たる琵琶の湖水へざんぶとばかりに乗り入れたり。

あれよ、あれよ、と堀の軍勢、追駆けるのも打忘れ、その手並みに見惚れている。溺れるどころか、左馬助、湖の中を浮きつ沈みつ波を切って泳いでゆく。折から比叡の山嵐に、光春が着用なしたる陣羽織、狩野永徳の筆になった墨絵の雲竜がひらひらとはためくさまは、まことに蛟竜が昇天するかとばかり。夕陽に輝く兜の金具は燦然として見る目もまばゆき有様。

さすがの堀久太郎秀政をはじめ一同固唾を呑んで見つめていたが、久太郎秀政、光春のあまりの武者振りに、軍扇をさっと押し開き、あれ見よ、あれこそ真の武士なり、と称讃の声を惜しまず、一同もやんや、やんやと喝采をした》

しかし、これは作りごとで、光春が湖水を渡ったという記録は無い。

光春は坂本城に入ると、光秀が安土から略奪した数々の珍しき道具を取揃えて、目録を寄せ手に渡し、城に火をかけて自殺した。

――本能寺の変は、秀吉に棚のボタ餅を手づかみで取らせたようなものだ。もし、光秀が信長を殺さなかったなら、秀吉は或は一生織田方の将校ぐらいで終ったかもしれない。彼の先輩には、柴田、丹羽、滝川などの連中がようようしている。

秀吉は、信長に認められて、やっと方面軍司令官になったものの、もとより、天下が取れるとは夢想もしなかった。光秀の行動は、全く突然変異のようなものだったが、秀吉の運命においても突然変異だった。しかも幸運なる変異だった。

秀吉が、いち早く光秀を討ったという行動は、なんといっても、戦場に間に合わなかった柴田や滝川などの先輩よりも、強大な発言権を持つことになる。これから、柴田勝家と滝川一益が、秀吉に力で対抗することになるのだが、その中で、柴田と同じクラスである丹羽長秀が、唯々として早くも後輩の秀吉の下に従っていたのは変っている。丹羽長秀の性格に筆者は興味を持っている。

川中島の戦

永禄四年九月十日
（一五六一年一〇月二八日）

1

川中島の戦といっても、今の青少年にはあまり分らぬ。筆者の子供時代の絵本といえば、必ず武田信玄と上杉謙信の一騎打ちが、極彩色で載っていたものだ。床几に腰かけ、諏訪法性の兜をかぶった信玄が、馬上で襲いかかる謙信の太刀を、軍配で受止めている図だ。

何となく謙信が勇ましく、信玄は小狡くみえた。信長や秀吉に人気があり、家康に人気がないのと似ている。実際、家康は信玄から民治など学んでいるので、性格も似通ったところがある。

川中島の戦は、戦前だと琵琶歌などに歌われ、特に頼山陽がこの戦を詩に作ってから、日本合戦史の華のように思われてきた。また、謙信と信玄の組合せが、山陽などに竜虎にたとえられたから、横綱同士の四つ相撲みたいに思われているが、事実は、謙信のほうが信玄にくらべて大ぶん見劣りがすると思う。

武田氏は清和源氏の流れで、源義家の弟義光が甲斐守となって赴任し、その曾孫信義が武田姓となり、以来、甲斐を領したということになっている。新羅三郎義光といえば、これも昔の武者絵には、足柄山で関東出陣の義光が、笙を奏する場面があった。応仁の乱後、群雄は各国に割拠したが、なんといっても、まだ毛ナミが幅を利かせたので、それだけでも甲斐源氏の信玄は名望があった。

信玄の父親は信虎という。この信虎も相当な男だが、一説によると、猿を好み、「大日」と称する大猿を可愛がっていたという。甲斐は野猿が名物だ。今でも山梨県の人間を甲州猿と悪口し、地元出身の財界人、小林中、小佐野賢治らによって山申会が作られている。策士型なのも信玄と似ている。

当時の甲州の周辺の勢力を見ると、南の駿遠三には今川義元あり、東南には北条氏康あり、伊豆・相模を領して、しきりと武蔵に進出していた。この二家は強国だ。ただ、北のほうの信濃方面は、小さな豪族の群居である。したがって、武田氏がもっぱら信濃の侵略をはじめたのは、地殻の弱いところに噴出する火山のようなものだ。

信濃のおもな豪族というのは、埴科郡葛尾城の村上義清、東筑摩郡深志城（松本）の小笠原長時、西筑摩郡福島城の木曾義康、諏訪郡高島城（上諏訪）の諏訪頼重、南佐久郡海の口城の平賀源心などで、それぞれ周辺の諸郡を領していた。その他の小豪族どもは、この五つの勢力のどれかに属していた。

このうち、甲斐から信濃に入るには、平賀源心の海の口城がある。八ヶ岳の南麓で、現在の小海線の途中になる。信玄は十六歳の初陣に、この城を攻め、源心を討取って佐久地方の大部分をおさめた。ところが、この功を父信虎が喜ばず、爾来、父子の間が面白くなかった。信玄は一人前になると、父信虎を、当時和睦していた今川義元に預けて隠居させてしまった。信玄を非難する者は親不孝者だというが、秩序体制の完成した徳川時代のモラルと、戦国時代とは大ぶんに違

う。当主を隠居させたのだから、信玄ひとりの力ではなく、国家主義的な武田家の家来の意向が強かったのだろう。

なお、信玄という名は、もちろん、彼が法体になってからで、それまでは武田晴信という。だが、ここでは面倒だから信玄で通して書く。

信玄は、信濃を次々と攻略した。天文十一年には諏訪に侵入して諏訪頼重を降伏させ、諏訪地方の全部を手に入れる。つづいて深志城の小笠原長時を攻めた。長時は葛尾城の村上義清と、福島城の木曾義康と同盟し、連合して信玄の北進を阻止しようとした。

村上義清は、北信一帯に勢力を張った豪族だが、三者同盟の効なく、信玄によって小笠原の本拠深志城が陥れられ、つづいて、村上の本拠葛尾城の南方にある戸石城も屠られた。ここにおいて義清はいたたまれずして、救いを越後の上杉謙信に求めたのである。

上杉謙信は越後の守護代をしていた長尾為景の次男で、信玄よりは九つ下だ。生れた所は、現在の高田市の西北にある春日山城で、今、信越線の窓から西北に当って田圃の向うに小高く見える山がその址である。

謙信は七つのときから僧に道を学び、十三歳のときに父を喪っている。それで家中に騒動が起ったが、二十歳のとき、兄のあとをうけて当主となった。本当は長尾氏で、関東管領上杉氏の被官だ。関東管領上杉憲政は北条氏康に平井城を陥され、越後に奔って長尾景虎に依った（天文二十年）。翌年、憲政はその姓氏・職号等を景虎に授けたので、景虎は上杉氏を冒し、関東管領を称することになった。すなわち上杉謙信である。もとの長尾姓は、先祖が相州長尾の荘（今の大船駅の近く）にいたからで、平家の末流である。

つまり信玄は源氏、謙信は平家というわけだ。

謙信は二十二歳のときに上京し、従五位下を貰い、弾正少弼に任ぜられた。米沢の上杉家の当主が、代々弾正少弼になっているのは、このためである。

村上義清が謙信に救いを乞うたのは、天文二十二年の八月で、義清を初め信濃の豪族、高梨政頼、井上昌満以下も、同じように謙信に頼って信玄の暴威を訴えた。

信玄に追われたこれら弱小国の国主は、領土回復のために謙信に頼ったわけで、われわれは、信玄のために身の置きどころがない、と愁訴した。

謙信、聞いて慨然とし、

「信玄、故なくして他人の国を奪う。その暴戻まことに憎むべし、高梨氏のごときは父の時代より余が親族である。諸氏の乞いをいかで拒もう」

と、救援を快諾した。

つまり、謙信としては、弱きを助ける幡随院長兵衛みたいな気持になったわけで、事実、上杉家側からは、信玄との戦いを「義戦」と称している。

しかし、実際は、謙信としても、信州地方の緩衝地帯が信玄によって占領されたのだから、一挙に信玄勢力と国境を接し、脅威を感じたのだ。義戦というのは美名で、実は自衛戦である。窮鳥を懐に抱えたといって、謙信もいい気持になっているときではない。

川中島の戦は、戦闘は天文二十二年から、二十年間の甲越両軍の交戦状態のなかで数回もあった。世間に有名になっているのは、永禄四年九月の合戦である。

その前の弘治元年にも犀川河畔の戦闘があるが、決定的な交戦にいたらず、両軍とも引揚げている。

信玄は、孫子の兵法に通じ、その軍旗には孫子軍争編からとった「疾如風徐如林、侵掠如火不

動如山」の字句を書かせた。別に諏訪明神を信仰して、「諏訪南宮上下大明神」と一行に書いた旗も用いた。

風林火山の旗は別として、信玄が諏訪明神を崇敬したのは、信仰というよりも、占領地の信濃一帯の民心を得る術策からだろう。諏訪明神の祭神はタケミナカタヌシノミコトで、例の古事記では出雲族の神だが、天孫族に国譲りすることに反対して出雲より逃れ、この地で追討をうけて戦死したことになっている。

敗死した神を、武勇の神に仕立てた理由は分らないが、古事記の物語は、編纂者の創作もあり、もともと諏訪地方にはタケミナカタの独立した伝承があったのであろう。

信玄くらい、民心をつかむのがうまい男はいないから、諏訪頼重を追うと、たちまち諏訪明神の礼讃者になった。

信玄は、国内に城を築かなかったことで、知られている。府中（甲府）の躑躅ヶ崎には館程度の住居しかつくらなかった。甲州は四方山に囲まれ、他国からの侵入口といえば、南よりは富士川に沿うた駿河口、北には韮崎台地よりの信濃口があるだけだ。東は笹子峠で、ここには岩殿山に砦を築いて押えとした。信玄は侵略だけで、一度も攻めこまれたことがないのが自慢だった。

信玄からみると、他国の攻略も云い分があろう。甲府盆地だけの僅かな耕作地では、食うに足りない。どうしても、信濃の平野を占領しないと、経済的にも人口的にも、自立が困難だ。戦時中、満州は日本の生命線などといって、膨脹する日本の人口の捌け口を、満州に求めたことがあるが、信玄も、まさに信濃平の沃野は、甲州の生命線と云いたかったかもしれない。曾ての日本のように、信玄も徹底した軍国主義者だった。

軍国主義には、統制と、重税と、産業奨励とが附きものだ。信玄が、いわゆる甲州法度なるも

のを設けたのも、その統制上からである。山には入山料を徴し、各戸からは棟別銭を取上げ、市場税、関所税などというのを作ったのも、その重税主義からだ。

また、漉紙、染屋、桶屋、鍛冶、大工、塗師等を待遇して、物産を奨励したのは、産業主義からだ。甲州漆は昔は有名だった。今でも和紙は、甲府南方の、市川大門あたりに特産物として残っている。

しかし、これらは平和産業で、大軍を四方に出動させるには、軍資金が必要だ。信玄が領内の黒川山、芳山、黒桂山、金山嶺、五座石などの諸金山を開発したのは、軍費調達のためだ。いわゆる甲州金として、慶長ころには大いに珍重された。そのほか、治水にも意を用い、釜無川の東岸には、二十五町の堤防を築いた。現在でも信玄堤と称されて、いかなる洪水にもびくともしない。民心を得るには、山田畑の災害を防ぐ治水が第一なのは、なにも古代中国の禹王の伝説を引合いにだすまでもあるまい。

2

一方、上杉謙信はどうか。

世間では、謙信も信玄も上洛の意があったが、互いに足の引張り合いで、遂に京師に入ることができなかったと云われている。これはまるきり嘘ではないにしても、謙信を少々過大評価しているきらいがある。

信玄は、ともかく三方原で徳川家康を鎧袖一触で蹴散らすや、西上をつづけている。不運にも彼は、その途中で病歿したが、もし、彼が健康なままでいたら、織田信長の抵抗を排して、病床のうわ言のように、瀬田唐橋に、甲州軍の旗印を立てることが出来たかもしれない。

ところが、謙信は、たびたび義昭からの催促に接しながらも、上洛の姿勢に出ることはなかった。入京しても足もとの不安を知っている彼は、それよりもまず、版図を近隣にひろげることに専念した。すなわち、関東管領上杉氏の使命感を継いで、関東平野を一手に収めようと、東するかと思うと、西して越中や能登、加賀を窺った。くるくる走り回っている。

謙信は、とかく煮え切らぬ男だと云われている。信玄の脅威をうけた北条氏康・氏政が、謙信に救いを求めて、たびたび同盟国を形成しようとしたが、そのつど謙信は煮え切らず、腰が重かった。遂に氏政が業を煮やして、かえって信玄と和睦している。

大体、関東一円は、北条早雲以来、北条家の狙うところだ。そのため、北条氏から圧迫された関東の大小名連中は、謙信に助けを求めた。関東に野心をもつ謙信が、越後から上州厩橋あたりに入ると、関東の大小名こぞって彼の勢いのもとに伏した。その中には、太田道灌の曾孫資正（三楽）のような策士もいた。

ところが、謙信のやり方に対しても、不満な分子がいるから、謙信が越後に引揚げると、忽ち彼らは北条氏の風に靡いた。謙信、それを知って、また兵を関東に入れる。大小名ども、そのときは再び謙信に従うが、謙信が去ると、またまた北条方につくという具合で、叛服常ならない。

強国と強国に挟まれた弱小国群の、必然的な運命ではあるが、謙信には、労多くして実を取るところがなかった。

その頃は北条氏康が健在だった。氏康は、川越の夜戦で、味方に十倍する山内・扇谷（おおぎがやつ）両上杉軍を破って、自らも三十余騎を斬ったという剛の者で、そのとき身体には疵（きず）七カ所、頬には太刀疵一カ所をうけたくらいに働いた。世間では、武士の面疵を氏康疵と云ったくらいだ。

この氏康も、その子氏政も、謙信と同盟して信玄を挟み撃ちしようと、謙信に再三提案したのだが、関東が欲しい謙信は、そのつど北条氏に苛酷な交換条件を出して、氏康父子を失望させている。

関東では利害の衝突する北条では、遂に謙信と絶ち、前記のように関東争奪戦となったのだ。

謙信がおちおち関東に留っていられなかったのは、西の能登、加賀を自領にせんという意図が強かったからだ。のみならず、信玄の煽動で、越中や加賀の一向宗が、絶えず謙信の版図内で一揆を起すから、彼もすぐそっちのほうに引返さなければならない。

能登七尾城を取って、「越山併セ得タリ能州ノ景」などと満悦してばかりはいられない。また馬を駆って関東に入るという具合で、本国越後を中心に、絶えず東西と忙しく駆け回って二兎を追った。

信玄が、着々と領土をひろげているのに対し、謙信は、目まぐるしく動くばかりで、一兎も得なかった。

謙信を頼った村上義清が、謙信から信玄の用兵を訊かれたことがある。義清は、

「信玄は十里働くところを三里、あるいは五里働きます」

と答えた。謙信、それを聞いて、

「信玄が用心深いのは、要するに国を多く取ろうとする考えからである。自分は国を取ろうとか、後途の勝ちを得ようとは考えないで、当面の戦闘から引返さないのを主義としている」

と云った。例の「名将言行録」に載っている話だから、どうせ作りごとだろうが、両人の性格の相違は出ている。

そのかわり謙信の動きは見た眼に派手だ。

「輝虎、体短小にして左脛に気腫ありて攣筋（れんきん）なり。居常に甲せず黒木綿胴服を着し、鉄小の鬱笠

を被り、世を終るまで采及び団扇を用いること無し。用いることは僅かに両三回にすぎず。常に三尺ばかりの青竹を取り持ちて衆を指揮す。これを梁常叡の竹如意に擬すと云う」

とあるから、よく武者絵に描かれている、あの恰好だ。彼は毘沙門天を信仰し、家の旗印も毘沙門天の「毘」の字を記したものを使った。信玄の諏訪法性の旗印と好一対だ。謙信は誓約させる場合には、城中に造った毘沙門堂の前で行わせた。

両人とも、ずいぶん神頼みをしているようだが、一たび戦場に向かえば、生死のほどは分らないのだから、部下を統率するためには、これくらいの縁起かつぎも仕方がない。それに、なんといっても神仏の信仰は、当時の民衆の中に根強いものがあったから、人心収攬のためにも必要だった。

謙信もまた、信玄に劣らず富国策を講じている。国内に織物を奨励し、上方と交易して利潤を上げている。越後上布は、その名残りだ。また信玄が甲州の金山を開発したように、謙信も佐渡金山を開発して、軍資金に当てている。

謙信も、決して荒武者だけではなかったわけだが、単騎敵陣に疾駆するスタンドプレイがあまりに華々しかったため、こんな地味な経営策は世間に忘れられている。

謙信のスタンドプレイといえば、永禄二年、北条氏政が謙信方の椎木城を囲んだことがある。謙信は八千の兵を引具して後詰したが、そのとき彼は、鎧兜を着けず、例の黒木綿の胴服を着し、十文字の槍を横たえて、僅か二十三騎を引具し、氏政の陣前を馬を静かに打たせて、椎木城に入った。北条勢、これを見て、謙信は夜叉羅刹の再来かと舌を巻き、怖れて彼に近づく者はなかった。氏政、また一戦もせずに、城の囲みを解いて退いた。

また、永禄四年、氏政の本拠小田原城を攻めたときは、城門の前まで単騎で行き、馬から降りて、弁当を取寄せ、茶を呑んだ。城兵が出丸から鳥銃十挺ばかりを連ねて撃ったが、一弾も当らなかった。謙信、少しも騒がず、長々と茶を三服まで呑んで、悠々と引返したので、城兵、その勇猛を褒めぬ者はなかったという。

これなどは大向うにはうけるが、大将のなすべき所業ではないと、菊池寛などは非難している。前の場合、氏政の大軍が、謙信の二十三騎に襲いかかったらどうする気か。あとの場合、鉄砲の弾丸が当らなかったからよいようなものの、もし当って死んでしまえば犬死ではないか、と云うのだ。理窟である。しかし、以上の挿話は史実には無い。

そこへゆくと信玄は深沈重厚だ。スタンドプレイがないから、外見には地味である。地味だから大向うには受けない。信玄は、謙信と離れた北条氏政と結んだり、今川と連盟を作ったり、加賀の一向宗を使嗾したり、相当術策を弄しているので、家康と同じく食わせ者だとみられている。

信玄が、信濃の群小国を侵略した点だけが世間に目立ち、謙信が関東一円をわが手に握ろうとし、また越中、能登、加賀も自分のものにしようとした強欲さは、あまり目立たない。人物の買いかぶりは、文芸批評家の筆だけではなさそうだ。

信玄は、よく部下を育成し、その武将にも馬場、山県、真田、小山田、原、跡部などという、名だたる者を出している。一方、謙信の武将では、せいぜい、直江山城守か、甘粕近江守くらいが知られている程度だ。

もっとも、武田二十四将は、例の「甲陽軍鑑」の宣伝のおかげだ。これに匹敵する上杉方の俗書には「越後軍記」があるが、それほど有名ではないから、謙信の人物も、その周囲も、信玄ほどには知られていない。PRの相違だろう。

前に、信玄と謙信の、神への信仰を書いたが、両人の仏門への帰依は、もっと強かった。武田氏は代々天台宗を信仰していた。近江の園城寺（三井寺）とは、特に親密な交渉を持続し、信長によって焼打ちされた叡山の延暦寺を、甲斐の身延山に再建しようとしたくらいだ。

もっとも、これは法華宗徒に反対されて果せなかった。

信玄は、天台僧侶の下向をしきりと求め、南禅寺の惟高妙安、天竜寺の策彦周良、妙心寺の岐秀元伯、美濃崇福寺の快川紹喜などを、甲斐に招いて恵林寺に置いている。ほとんどが禅僧だ。恵林寺のほかには、甲斐の府中附近に五山を定め、これを府中五山と称し、長禅寺を第一位とし、東光、能成、法泉の三寺および円光院をこれに列せしめた。快川は、勝頼の代に寺を織田方に焼かれたとき、「心頭を滅却すれば火もまた涼し」と云って、生き身のまま焼死したのは有名である。

一方、謙信も七歳のとき、春日山城外の曹洞宗の禅寺林泉寺に入り、名僧天室光育の膝下に参学の行を修め、家を継いでからは、二十四歳のとき上洛の機会に、紫野大徳寺に参禅し、在俗のまま三帰五戒を授かり、法号を許された。

彼は、天台、日蓮、時宗、浄土真宗各派にわたって広く信仰し、その日常生活も、熱烈な仏教信仰に支配され、戦場に臨むときは、観音、大師および大日如来の尊像を、黒塗りの厨子に納めて携行した（桑田忠親「戦国武将の信仰生活」）。

いずれも、明日の生命知れぬ戦国武将の「安心立命」からである。

3

永禄四年八月八日（太陽暦九月二十七日）、上杉謙信は、春日山城を出発して川中島に向かった。

謙信、この度はいよいよ信玄に対して徹底的な打撃を加え、信濃から甲州勢を追出さんずの戦意に燃えた出陣である。

謙信は、その年三月、小田原城に北条氏康を攻め、四月には鎌倉に入って関東管領の就任式を行い、意気まさに揚がっているときである。信玄また、同じ年五月には甲府を発して、信越の国境に最も近い割ヶ嶽城を奪取し、北国街道における謙信の出口を封鎖している。

謙信としては、甲州勢の旗印が、領地に接して翻っているのみならず、彼の最も年来の抱負とする関東経営の道を、完全に塞がれたことになるから、安閑としてはいられない。

越軍は、直江山城守、甘粕近江守、柿崎和泉守、新発田周防守、本庄越前守などを先陣とし、二陣には鬼小島弥太郎、新津丹後守、新発田尾張守など三千人を付し、後陣には飯盛摂津守など計三千人を配り、本陣には平賀志摩守、井上備後守など三千五百人、総兵力一万三千人であった。

もっとも、これらの人名は、「甲陽軍鑑」「越後軍記」などの俗書に拠るほかはないから、大ぶん疑わしい。

とにかく、これらの諸隊は二縦隊となり、主力は、富倉峠から飯山を経て善光寺に向かった。一部は北国街道から柏原を経、善光寺において主力と合した。指向するのは、善光寺平にある甲軍の拠点海津城の攻略だ。海津城主は、すなわち甲軍の勇将高坂昌信。

信玄が、埴科郡松代にあった清野氏の旧館を拡張して、城を構築したのが海津城で、これを僅か八十日で完成している。松代から信濃口までは、至近距離だ。されば、信玄としては敵前築城にも等しく、急速に工事を進捗させたのである。

高坂昌信は、甲斐の豪族春日大隅守の子で、その前は信濃小諸城代だったのを、ここの守将と

して移したのだ。いうなれば、甲州軍の第一線司令官。その勇名はつとに近隣に伝えられていた。

海津城は、東、西、南の三方を高地が包み、北側には千曲川が流れて城濠の代りとなっている要害堅固の地形。いま、松代市に編入されているが、その城址に上ると、千曲川はかなり前方を流れて、その間は一面の畑となっている。これは現在の地形で、当時は、城垣のすぐ下を川が流れていたらしい。謙信としては、領地から目と鼻の先にこんな城を築かれては、匕首を突きつけられたようなものだ。

ここに信玄の前線基地があれば、絶えず脅威を受けていなければならない。殊に、前記の割ヶ嶽城の奪取といい、明らかに信玄の挑戦と受取った。熱血漢謙信の忍ぶところではない。度重なる信玄との攻め合いを、今度こそ一挙に勝負を決せんと、進軍を開始した。

謙信来るの報は、海津城主高坂昌信のもとに届いた。昌信は狼煙を上げて、急を後方に告げると共に、濠を深くし、塁を固めて信玄の来着を待った。この狼煙は、葛尾、腰越、和田の各山頂に置かれた兵によって中継され、甲府まで二十里の距離を、僅か一時間をもって伝達されたという。

信玄は、高坂昌信からの警報に接するや、三日間をもって出発準備を整えた。

その軍勢は、信玄の嫡男武田義信、実弟武田信繁、同信廉をはじめ、宿将長坂釣閑（長閑）、穴山信良、飯富虎昌、山県正景、原種永、馬場信春、甘利晴正、小山田昌行、同信茂、真田幸隆、小笠原長詮などの率いる将兵、およそ一万七千人。「甲陽軍鑑」に拠ったのだが、この武将の名前もかなり怪しい。たとえば、山本勘助などという、架空の人物名まで載っている。

それはともかく、信玄は八月十八日（新暦十月七日）甲府を発し、松島から釜無川に沿い、上諏訪、和田峠を経て上田に出て川中島に向かった。

甲軍の速度はかなり緩慢であった。行軍しながら、附近の豪族の参加を得ようというのだ。すなわち、上諏訪では大祝義視が約五十騎をもって参加し、和田峠を越えたころには、善光寺の別当栗田永寿軒が、三百余騎をもって加入した。

信玄が、こうしてゆるゆると進んでくる前に、謙信のほうはどうか。

善光寺で主力と合した越軍は、大荷駄（輜重隊）を善光寺に留置いて、先頭部隊は全部、小市渡から犀川を渡って川中島をすぎ、雨宮渡より千曲川を渡渉し、妻女山に陣を構えた。妻女山は海津城を圧する位置にあり、大軍を山上に集めて、城を側背から脅かす。戦わないうちから、城将高坂昌信を威圧しようというわけだ。

どうして、一挙に海津城の攻略にとりかからなかったかというと、謙信は、そのことを進言した者に対し、弱敵を攻めるのは卑怯である、と云っている。だが、謙信は、ここに腰を据えていれば、必ず信玄がやってくることを予想し、海津城を事前に攻めることによって生じる、味方の消耗を避けたのだ。

さて、信玄、長窪を経て丸子町の西南約半里にある腰越まで来たとき、海津城からの使者二人の迎えに出遇った。使者は、

「越軍は妻女山を占領し、千曲川右岸を占拠しているので、屋代に至る道路は通過することができない。それで、地蔵峠を経て海津城に入られたし」

と伝えた。

信玄は考えていたが、

「謙信が犀川と千曲川を渡って、海津城の南方に深く入ったのは、自ら求めて虎穴に入るの類であろう。彼には必ず策するところがあるに違いない。しからば、われにも考えがある。直路直ち

に善光寺平に向かうべし」

と答えた。

信玄は、両人を先導として小牧山を越え、室賀峠から山田をすぎ、若宮八幡および猿馬場の東方を経て、二十四日には川中島の西方茶臼山に陣した。このとき甲軍は、くる途中の参加部隊を加え、総兵数二万を超えていた。その第一線は、横田、小森、東福寺から中沢、水沢に亙って配置され、海津城と呼応して、越軍の退路を遮断した。

川中島というのは、犀川と千曲川とが合流した地点で、ここは善光寺平と呼ぶ盆地となっている。

信州は、日本の屋根といわれる北アルプスをはじめ、重畳たる山岳地帯だが、それでも、「四つの平は肥沃の地」と県下の小学校で歌われた通り、千曲川流域の佐久盆地、上田盆地、長野盆地、犀川中流の松本盆地、天竜川流域の諏訪盆地などが珍重されている。このうち、長野盆地というのが善光寺平で、信州では第一番目に広い。これらの盆地に、昔から民衆が集って、産業と文化を興してきた。

また、以上書いた通り、信州は峠が多い。どこへ行くにも山越えであるから、二千メートル以上の高さのものが十三もあるという。

こうした峠を越えて越軍は妻女山に、甲軍は茶臼山に在って、何日間か対峙した。信玄は多数の紙旗を諸所の部落に立て、夜は数十カ所に大篝火を焚いて、恰も大軍が集結している様を装った。

越軍のほうでは、甲軍の優勢な有様を見て頓に士気沮喪した。大体、越軍が海津城近くに深く入ったのも、謙信の大胆な作戦なら、その妻女山の背後を通って、茶臼山に陣した信玄の作戦も

放胆だと評されている。

すなわち、普通なら謙信は、海津城にすぐ攻めかかるところだが、そんなことはしないで、その隣の山に陣を構え、海津城を側背から脅かした。また信玄も、普通だと直ちに妻女山に攻撃をかけるところだが、これも背面を素通りして茶臼山に陣取り、越軍の退路を断ったのも奇手であった。この作戦は図に当り、越軍では信濃への退路は塞がれたと思い、将兵の憂いは日に増し加わった。

しかるに、謙信、少しも騒がず、悠然として山上で詩を吟じ、琴を弾かせている。直江山城守、甘粕近江守などは謙信に、

「糧食は、余すところ僅か十日ばかりを支えるのみでございます。されば春日山城に残しておいた二万の兵を急遽招き、信玄の居る茶臼山の背後を衝かせたなら、挟み撃ちとなって、甲軍の敗退は火を見るよりも明らかです」

と進言した。

謙信、諾かない。よって諸将はさらに、

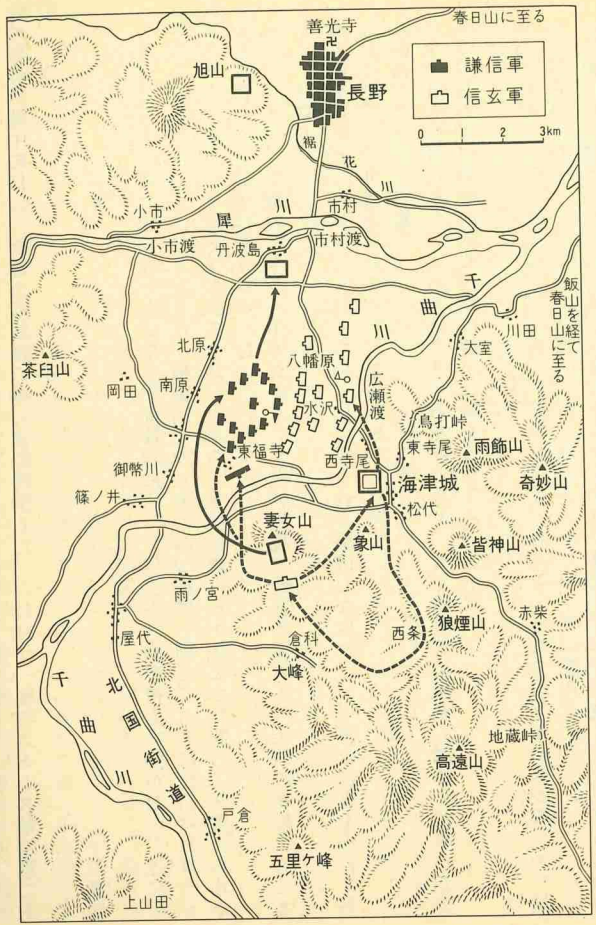
「もし、信玄が海津の兵をもってわれらを釘づけにし、彼自ら越後に入って春日山城に向かうなら、わが軍は甚だ不利になります」

と述べた。

謙信はすぐに昂然と答えた。

「春日山城には、二万の兵が置いてあるので怖るるにたらない。信玄が、もし越後に入ったなら、われもまた、馬を甲州に進めて、信玄の本拠を葬るあるのみ」

諸将、この一言で士気を回復したという。



一方、信玄は越軍の状況を見て、一向に動く様子のないのを知り、さらに斥候を放って妻女山を窺わせると、謙信は朗吟、弾琴で悠々としていると報告した。信玄、これを聞いて、俄かに軍を撤して妻女山の前面を過り、広瀬渡を渡って海津城に入った。

なぜ、信玄が急に陣地を引払ったかというと、一説では、信玄が謙信に策ありと察して、挟撃されるのを慮って撤退したといい、また一説には、越軍の退路を完全に遮断すると、かえって越軍を袋の鼠に追詰めた結果になり、敵軍の抵抗を死物狂いにさせる。いわゆる窮鼠猫を咬むの状態にさせるを、避けたからだともいわれる。

事実、近代戦でも、完全な包囲戦となると、敵の死物狂いの抵抗によって、味方も損傷するので、包囲の環の一方をあけて退路を与え、敗走する敵を追撃する作戦がとられている。

それにしても、信玄が、謙信の陣地である妻女山の前面を過って海津城に入ったのも豪胆な行動だ。これも普通だと、行進中に、いつ越軍が妻女山を下って、側面から襲いかかるかも分らないという心配から、なかなかやれないことだ。

一方、越軍では、甲軍の茶臼山撤退によって、本国越後への退路が開放されたので、将兵が大いに喜んで、

「信玄に、もはや、闘志なし。よろしく、この際わが軍も、軍を越後に回すにしかず」

と、謙信に具申した。帰路がひらけたのでほっとしたわけだ。

しかし、謙信は、この進言も用いず、依然として妻女山で弾琴、朗吟をつづけさせていた。

謙信が鼓を打ち、舞をまわせていたのは、別に不思議な行動ではない。およそ長陣となると、とかく人心が倦き、陣中に疑心暗鬼を生じる。そのいい例が秀吉の小田原攻城だ。秀吉は小田原城を、箱根山塊と相模湾から包囲していながら、進んで城を力攻せず、家康はじめ全武将をここ

に布陣させたまま、京から女どもを呼下して、連日のように歌舞音曲を興行し、茶会を催した。そのため、陣中に伝わった徳川殿叛謀の噂も雲散霧消した。これは、一種のストレス解消策である。

4

さて、こうして妻女山に陣した謙信も、海津城に入った信玄も、満を持して動かない。遂に、その睨み合いは十日以上にも及んだ。横綱同士の互角の四つ相撲と同じで、先に仕掛けたほうが仕損じるおそれがある。相手の出方を窺いながら、土俵中央に根が生えた状態だ。相撲なら水が入るところだが、戦争はそうはゆかない。

対峙中、まず、甲軍のほうから不安が生じてきた。馬場、飯富の諸将が、士気の萎縮することを憂えて合議し、

「敵の兵力はわれらの半ばにも達しない。出でてこれを撃破しなければ、甲軍は越軍を怖れて戦わなかった、との非難を受けることになる」

と飯富が云うと、馬場も、

「攻撃を徒らに延ばすと、士気を衰えさせるだけでなく、もし、春日山城から越軍の援軍が到着すれば、わが軍は窮地に陥る。故に速かに敵を攻撃するにしかず」

と述べた。

戦場からいうと、川中島は越後に近く、甲府に遠い。なんといっても、甲軍の兵站線は伸び切っている。間に諏訪、深志などの諸城があるとはいえ、もし、甲軍の旗色が悪くなれば、これらの占領地にある諸豪族が、いつ叛くか分らない。その点、謙信は、春日山城まで、甲軍の四分の一にも足りない距離だから心強い。それに、いつでも二万の兵を、そこから呼び寄せることもできる。

こんな不安が、海津城に籠る甲州勢に行亙ったことは、容易に想像される。信玄もここで、将兵の心機一転を考え、また、十日以上の睨み合いに業を煮やし、越軍に対し、先制攻撃をかけることに決意した。戦機ようやく動いたわけだ。

それは、軍勢を二隊に分ち、一隊を妻女山の背後に迂回させ夜襲を行わせ、他の一隊は、信玄自らこれを率いて、川中島に出て妻女山の前面に陣取りする。夜襲隊がかかれば、妻女山の謙信も、勝っても敗けても必ず山を下りてくる。それを待構えた信玄が、退路を扼して一挙に襲いかかり、捕捉殲滅しようというわけだ。

世にこれを「啄木の戦法」と伝えている。すなわち、啄木が、朽ちた樹木の穴に潜んでいる虫を捉えようとするときは、その幹の背面を嘴で叩く。穴の中の虫はおどろいて出てくる。それをぱくりとくわえて食べるという習性に譬えたのだ。これを山本勘助が献策したというのが「甲陽軍鑑」の記載だが、あまり信用できない。大体、山本勘助は、一等史料には一向に名前の出てこない人間だ。

さても信玄は、いよいよ九月九日（新暦十月二十七日）の夜、陽の沈むのを待って、徐ろに作戦の行動に移った。陽動作戦をかねた奇襲の、妻女山の夜襲部隊は、この辺の地理に詳しい高坂昌信を先頭とし、馬場、飯富、小山田、甘利、真田、小幡などが、約一万二千をもって、午前零時すぎに静かに海津城を発した。これは間道を西条から唐木道に登り、右に折れて森ノ平に出て大嵐ノ峰を越え、妻女山の側面に向かう。

越軍の下山を待受けての殲滅作戦部隊は、信玄自らこれを率い、弟信繁、同信廉のほか、山県、

穴山、内藤、諸角など約八千を従え、夜襲部隊が出発した三時間後に海津城を出て、広瀬渡を越え、八幡原に陣を布いて、敵の下山を待受けることになった。

ここまでは信玄の秘匿作戦だが、さすがの彼も、謙信がこれを察知しようとは、思わなかった。

謙信は、絶えず間諜を放って、海津城の動静を探っていたのだが、その夜、海津城からしきりに炊煙の上るのを見て、はは あ、と合点した。彼は直ちに直江、甘粕などの武将を招いて述べた。

「信玄は今夜から行動を起すようである。思うに、軍を二隊に分ち、一隊は夜襲を企図し、一隊はわが退路を遮断せんとみえる。これすなわち、諸葛亮の『半進半退の術』で、また『繰分の陣』とも称うるものである。されば、わが軍は敵の機先を制し、川中島に出て決戦せん」

直江、甘粕ら、いずれもその策に賛成した。

謙信は、この企図が洩れるのを防ぐため、全軍に対して、「大将は、明日帰陣する旨を仰せ出されたから、即刻、荷物を整理せよ。日が短いから、あるいは深夜の出発になるかもしれない。各自、その用意をし、もし、途中敵兵の遮るに遭うたら、斬り破ってでも善光寺に出よ」

と、ふれさせた。直ちに食事を摂らせ、各自に三回分の糧食を携行させ、特に隠密行動を要求した。

信玄が、この謙信の動きを知らなかったのは、偵察戦で敗けたといえる。当時の密偵は、正規の兵のほか、土民をしきりと使った。即ち、戦国大名の領国直接支配は、農兵の動員というかたちをとる。この統制化した結果が、歩兵集団の発生である。

謙信は、妻女山には百名ばかりの小部隊を残して、山上に紙旗を立てるほか、三十五カ所に亙って大篝火を焚き、やがて来るべき甲軍の迂回隊を欺くことにした。彼自ら率いる主力は、午後十一時ごろ山を下って雨宮に着き、十二ヶ瀬および狗ヶ瀬から、千曲川を渡って川中島に出た。

全軍、馬に枚を含ませ、鞭も鳴らさずに、粛々として渡河した。

「鞭声粛々夜河ヲ渡ル」である。

同時に、直江山城守をして小荷駄を指揮させ、犀川の北岸丹波島に移らせ、甘粕近江守をして一千人を指揮させ、千曲川の左岸東福寺附近に位置し、主力隊の右翼と背面を援護させた。

この配備を終ったのが、九月十日の午前五時である。折から川中島名物の川霧が、未明の中に真白に立込めて、一寸先の形も分らない。

一方、信玄は、川中島の中央八幡原に陣した。信玄は、越軍が妻女山を下りてくるのは早くても、午前八時ごろであろうと観測し、十二段の陣を布き、迂回隊が妻女山に夜襲をかけるのを、静かに待っていた。

山県昌景は神明附近に陣し、水沢には、武田信繁と穴山伊豆が陣取り、右には諸角豊後、内藤修理が田中附近に陣を構えた。信玄は八幡原の東方附近に、他の諸隊は、旗本を中心に左右前後に陣した。十二段の構えというのは、信玄の本拠まで何段にも敵に向かって陣立てをした謂らしい。

その信玄の傍には、風林火山の孫子の旗と、諏訪法性の神号旗とが翻っている。その位置は、現在の三太刀七太刀といわれている所で、いま、そこに記念碑が建っている。

こうして信玄は、妻女山の変化を睨んで、夜明けを待っていたのだが、いずくんぞ知らん、その越軍は、すでに半里の前方に展開していようとは！

夜が明けはじめ、暁の霧もうすくなりはじめた。甲軍は、不意に前方に当って、人馬の声を聞いた。それでも、それがまさか越軍とは考えていなかった。甲軍では、夜襲部隊が到着する時刻ではないし、また敵が今ごろ山を下ってくるとは思わなかったので不思議に思い、偵察の兵を放

った。このとき、越軍はすでに行動を起して、甲軍の眼前に殺到していたのである。まさに「暁ニ見ル千兵ノ大牙ヲ擁スルヲ」だ。

「甲陽軍鑑」には、

「武田の諸勢もこれを見て大いに仰天し、こはいつの間にかかる大軍がこの地に来れる。天よりは降りけん、地よりは湧き出ん、まことに天魔の所業なりと、さしも逸る武田の勇将猛士も、恐怖の色を現し、諸軍浮足立ってぞ見えたりける」

と描写している。

「謙信の諸軍勢不意に出て、信玄の旗本へかかりける。信玄の先鋒は、なお妻女山にかかってこれを知らず、時に陽出、霧靄るれば、謙信、忽然として信玄の近辺に軍列を備えて、徐々と進めり。信玄の旗本、これを見て驚き合えり」

とは「越後軍記」の記述。こっちのほうが「甲陽軍鑑」に比べてずっと文章が地味だ。

とにかく、甲軍の将士は不意討におどろいたが、信玄はすぐに、主力をいわゆる鶴翼の陣に立て直した。鶴翼とは横隊のこと。先陣には山県昌景が向かい、内藤修理、武田信繁がこれにつづいた。

午前六時ごろ、越軍の先鋒二千の精兵は、大蕪菁の大纏を立て、矢を放ち、槍先を揃えて甲軍に突入した。

当時の銃器は、まだのちほどには行亙っていなかったから、戦闘は依然として旧式だった。すなわち、まず弓隊から開始され、次第に敵に接近し、槍手は敵の突進、あるいは側面の攻撃に備え、騎馬兵は、機を見て敵中に馬を突入させるのである。

この川中島の会戦に、どれだけの兵力が使用されたかというと、用兵上の利便からいって、謙信は一万乃至一万五千、信玄は二万乃至四万の兵を便とした、とは高柳光寿説である。

機先を制した越軍の攻撃は、頗る猛烈を極めた。不意を衝かれた甲州勢は次第に劣勢に陥る。このとき信玄は、浦野という戦巧者の者に命じて、越軍の様子を窺わせた。浦野、偵察に出て急ぎ帰って報告するに、

「謙信はもはや、退き候」

と云った。信玄あざ笑い、

「謙信ほどの者が、宵から川を越して、そこで夜を明かし、何とてむなしく引取るべきや。その退きようはいかに」

と問うた。浦野、

「謙信、わが味方の備えをめぐりてたてきり、幾度も、かくの如く候て犀川のほうへ赴き候」

と答えた。信玄、聞いて、

「浦野ともおもえぬことを申すものかな。それは車懸りといって、幾回り目に、旗本と敵の旗本と打合いて、一戦するときの軍法なり。謙信は今日を限りと見えたり」

と、急に備えを立て直したという（越後軍記）。

5

車懸りの戦法というのは、謙信の旗本を軸とし、各隊を放射型に配置し、それが水車のように回って戦う戦法らしい。こうすれば、間に休みが入るから、絶えず新手新手と繰出して、敵と渡り合うのと同じだし、陣形自体も、一団と固まるわけだ。

こうして、甲越両軍とも必死の戦いとなったが、なんといっても、信玄のほうは、妻女山の夜

襲部隊に、兵力を割かれているので手薄だ。不意討の上に、兵数で劣っているから、甲軍、次第次第に追込まれた。

このとき、信玄の弟武田左馬助信繁は、自ら馬を陣頭に進め、頽勢を挽回しようと力戦奮闘した。彼は使を信玄のもとに遣わして、

「わが隊は、全員戦死をもって当面の敵を支えるから、この方面の増援隊の派遣の必要なし。われに構わず他に兵力を配置し、戦捷を企図されよ」

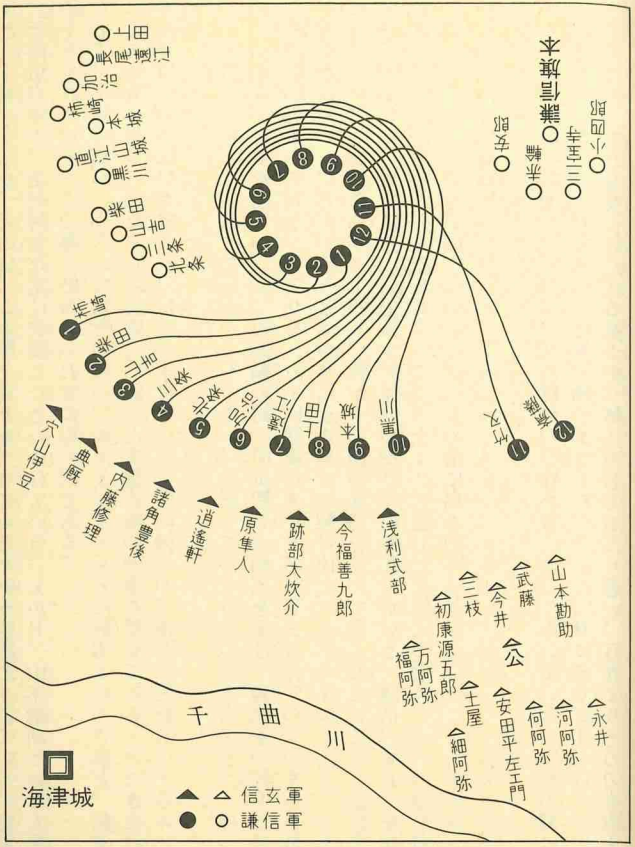
と申入れた。彼は家臣を招き、母衣と遺髪を託して、子信豊に送らんことを頼み、自ら敵軍に突入した。

信繁は聞えた武将で、信玄もこの弟をずいぶん頼りにしていた。されば、信繁が越軍の宇佐美駿河守と水沢に戦い、槍に突かれて戦死したとの報告を聞くと、流涕しばらく止まなかったという。いま、水沢に信繁の菩提を弔う典厩寺があり、その境内には信繁の墓がある。典厩とは長篠合戦の項でも述べたが佐馬助の唐名で、正しくは佐典厩である。

甲軍の諸角昌清は、典厩信繁の戦死を聞き、これも憤然として、越軍の陣に駆け入って縦横に戦ったが、新発田の郎党のために討たれた。

「甲陽軍鑑」のアテにならない記述によると、甲軍の智将山本勘助は、自分の作成した作戦計画が、越軍のために失敗したことの責任を取り、馬を駆って越軍の本庄、山吉の二陣を突破し、奮戦したが、東福寺村附近で、越軍の武将柿崎和泉寺の郎党の手に仆れたという。勘助、時に六十九歳。

その首級は、勘助の部下が越軍より奪い取ったが、遺骸は千曲川に流されてしまったため、あとで、その首級と胴とを合せてみて、初めて勘助の遺骸だと分ったという。いま、寺尾村に「胴



合橋」という橋があるが、そこは、この胴と首とを合せてみたという遺跡とされている。勘助の墓は、千曲川右岸の、芝村阿弥陀堂に改葬したといわれている。しかし、山本勘助という人物が、戯曲の上で生れた以上、この墓も熱海の「お宮の松」式である。

こうして、甲軍の諸将、相次いで敗死の報が、続々と信玄のもとに到着した。されど、信玄、泰然として床几に凭り、ひたすら、妻女山に回った夜襲部隊の到着を待っている。さなきだに手うすの甲軍は、越軍に打ち破られ、信玄の本営も、十二段の備えが、僅か三段をあますのみとなった。

味方の優勢に謙信、じっとして居ることができず、勇躍して自ら信玄の旗本に迫るべく起った。

謙信、この日の扮装を見てあれば、紺糸縅の鎧に萌黄緞子の胴衣を着け、烏帽子の締金の星兜を、白妙の練絹をもって行人包となし、右手に順慶長光、一名〝小豆長光〟の太刀を抜き放ち、宝生月毛の馬に跨って、ど、どう、とばかりに土煙あげて駆け出したり。……

謙信は、本陣に必ず信玄ありと目指し、僅か十二騎の従者を従えて突入したところ、近侍二十人ばかりに囲まれて、諏訪法性の兜を戴き、床几に掛けているものがいる。謙信、すわこそ信玄ぞと直感し、小豆長光の太刀を振りかぶって、馬上より突進した。信玄の近侍二十人は槍を持って防いだが、謙信、これを右に左に引払い、信玄の前に馬を迫らせて、

「おのれ、ここにいたか」

と大喝して、斬ってかかった。

ついでながら、小豆長光というのは、初め越後の百姓が腰に差して歩いていた。百姓の肩に担いでいた包から小豆がこぼれて落ちる途中、鞘の割れからのぞいた刀身に当り、小豆は二つに割れて道に散った。これを見つけた或る武士が、稀代の名刀かなと思い、百姓よりその刀を取上げ、

謙信に献上したため、この名ができたという。

さても謙信、その名刀を振りかぶって打ちこむこと九太刀。信玄は、軍配団扇を上げてこれを受け、はったと睨み、

「推参者、退れ」

と叫んだ。謙信なおも馬上から斬りつけようとしたが、馬が暴れて、思うように切尖が信玄の肩に伸びない。それでも、九太刀のうち二太刀は、信玄の肩先を傷つけたというが、致命傷にはならなかった。

信玄危うしとみた近侍の原大隅守が、急ぎ馳せ来って槍で謙信の馬を刺した。これで、謙信の馬がおどろいて走り、信玄の危地は辛くも救われた。なお、このときまでは信玄も、その旗本も行人包をしたその大胆な男を、謙信とは知らなかった。あとで、萌黄緞子の胴衣を着たその騎馬武者が、敵の大将と知っておどろいたという。

このころから、南風が吹きはじめ、砂塵を濛々と巻上げた。これがため、天地晦冥となったが、その中から、原大隅守が大音声を張上げ、

「妻女山に向かった面々は、はや到着したぞ。わがほうの大勝利じゃ」

と叫び回った。

この妻女山に向かった甲軍の夜襲部隊は、途中、険路のために行軍困難を極めたが、午前五時ごろ、ようやく山の背に達し、越軍の陣営に突入した。ところが、そこには一兵も無く、霽れゆく朝霧の間から、遙かに川中島方面に喊声や剣戟の響きを聞いた。

こは計られたりと、急いで川中島の本隊に加わるべく山を下ったが、千曲河畔で、越軍甘粕近江守の部隊に阻止された。甘粕隊は謙信から、やがて甲軍の迂回隊が山を下りてくるだろうが、

全力を挙げてこれを阻むべし、味方は勝利、甲軍の潰滅は眼前に迫れり、と命令されたため、死力を尽して防戦した。

しかし、早く本隊に合したい甲州軍の迂回隊は、死物狂いで甘粕隊の壁を突破し、ようやく川中島に入り、混戦中の越軍の背後に殺到した。こうなると、越軍は腹背から敵を受けたことになる。戦闘の局面は一変した。越軍は丹波島方面に退却をし、劣勢の甲軍は、逆にこれを追撃する態勢に移った。海津城の安否を気遣って、いったん山上から城に向かっていた高坂昌信も、再び兵を率いて、八幡原に来て信玄の本隊に合し、越軍の追撃戦に参加した。

高坂隊は、越軍が犀川を渡河するときに追撃最もつとめた。越軍は死傷者が出るほか、かなりの人数が水に溺れている。しかし、甲軍は越軍を長追いすることをやめ、犀川の線で進撃を中止した。信玄は諸隊を八幡原に集合させ、午前十時ごろ海津城に入った。

謙信は、信玄の身辺に迫りながらも、流星光底長蛇を逸したわけだ。彼は大多数の手兵を失い、主従僅かに数騎となって、午後四時ごろ、馬ヶ瀬渡を迂回して善光寺に到った。ここで退却の部隊を収容してみると、その数四千騎くらいだった。

彼が、兵を率いて春日山城に帰ったのは、十月初旬で、信玄が甲府に帰着したのはそれより早く九月半ばであった。

信玄は、謙信によって負わされた傷を、積翠寺の温泉で治療したといわれている。積翠寺温泉は、府中の後方、要塞山の途中にあり、信玄隠し湯の一つだといわれている。今では子の出来る温泉といわれ、湯はぬるいが鄙びた趣がある。

以上で、甲越両軍のクライマックスの場面は済んだわけだが、一体、どちらが勝ったのだろうか。この日の戦闘では、越軍の損害、死者三千四百、負傷六千、合計九千四百となっている。これに対し甲軍は、死者四千五百、負傷一万三千、合計一万七千五百で、断然、甲軍の損害のほうが大きいようだが、戦闘参加部隊の総計が、甲越両軍では違うので、比率からいえば、越軍のほうが多い。

この数は、日本の戦史の上でも激戦といわれている関ヶ原の戦に比べると、関ヶ原では、東軍の兵力七万五千の中で、死傷は僅かに四百、西軍の兵力八万の中、死傷は八千余人にすぎなかったから、いかに川中島の戦闘が激烈だったかが分る。越軍の損害は七二パーセント、甲軍は六二パーセントだ。

さて、勝利はどっちかという判定に立つと、初めは、謙信が信玄の裏を掻いて優勢だったが、信玄は、のちに迂回軍の到着を得て戦況を盛返し、謙信を、戦場から敗走させている。損害からいうと、甲軍のほうが越軍より大きく、また典厩信繁はじめ、討死をした武将は甲軍に多く、越軍には無い。しかし信玄は最後まで戦場を確保している。判定のむずかしいところだ。

これについて、のちに秀吉が批評したという言葉が「名将言行録」に載っている。

「卯の刻より辰の刻までは、上杉の勝ちなり、辰の刻より巳の刻までは、武田方の勝ちなり」

どうせ、秀吉の名前を持ってきた「名将言行録」の作者の、与太文句だろうが、自分の批評だけでは権威が無いとき、他人の言を引いてこけおどしにするのは、現今の一部評論家の踏襲するところだ。

しかし、以上述べた川中島の合戦経過は、史実的にはまことに疑わしく、前記のように、「甲陽軍鑑」「越後軍記」「川中島五度合戦記」などの俗書にだけ書かれていることである。したがって、ここに書いた戦況も、一種の講談と思っていただきたい。

「その戦況は正確なる資料に徴拠して考うるあたわず、甲陽軍鑑以下野史野乗の類はもとより信

憑すべからず。従って未だ確実なる戦況を知ることを得ず。この戦況を記したる書、旧時のものは虚妄荒誕一も信ずべからず。近世の著作に成るものもまた旧書を見て、これを二、三の遺跡地形に照らし、直ちに自己の想像に任せて記述したれば、二書三書、その数の多くを見るたびにいよいよ多く戦況を異にす。蓋し正確なる史記あらざるがためなり。故に著者は茲にこの戦況を敢て記さず」

という「武田信玄伝」の著者広瀬広一の態度が結局妥当だといえよう。

厳島の戦

1

弘治元年閏十月朔日
（一五五五年一一月二四日）

安芸宮島は日本三景の一とは誰でも知っている。平清盛が華麗な神殿を建てたことも、そこに日本工芸史上有名な、平家納経が所蔵されていることも知られている。だが、戦国時代の合戦場だったとは、それほどひろく知られていない。

厳島合戦は、毛利元就が陶晴賢の大軍をおびきよせて一挙に葬った殲滅戦だ。北条氏康が川越の夜戦で十倍の敵軍を撃破した天文十五年（一五四六）の川越の戦と、永禄三年（一五六〇）の桶狭間合戦と、この弘治元年（一五五五）の厳島合戦とは、日本戦史上の三大奇襲戦である。

川越の夜戦も、桶狭間の合戦も、多少、偶然性が働いているが、この厳島合戦は、毛利元就の緻密な作戦が功を奏した点で、ちょうど、上手の棋譜を見るような面白さがある。

陶晴賢は、周防山口の大内の重臣だった。大内氏は、中国地方の西部から北九州にまで、その勢力をおよぼしていた一大雄国だが、義隆のとき、その武威を背景に文化方面も大いに興った。天文十七、八年のころである。

応仁の乱後、京都が焼野が原となったために、家を失った公卿が京都を逃げだして地方の裕福な豪族に身を寄せた。そのなかで、とくに大内を頼ったのは、二条、三条、柳原といった公卿、殿上人で、北面の武士までが山口に疎開した。

義隆はこういう公卿連中と交るにつれ、その優雅な生活に染まるようになった。

「詩歌、管絃、月雪花の御遊興のみに御心を移され、自ら武道棄てさせ給ひ、弓馬兵術等の御稽古いささかもおはしまさず」

という具合。家臣はもとより、町人、百姓にいたるまで遊楽を好み、絃歌や茶の湯の稽古が流行した。

京都や堺から、名のある茶の湯の道具などを買ってきた家来が、槍先の功名よりも重く用いられ、山口中の誉れ者となるような有様で、山口は西の京と云われるくらい文化が発達した。例の画僧雪舟も早くから大内家がパトロンとなって明へ渡ることができたし、耶蘇宣教師のザビエルも、九州からこの山口に立寄っている。

大内の宿老には、相良武任と陶隆房とがいたが、義隆は文化派の相良を偏重し、硬派の隆房を排斥したので、隆房は天文二十年の夏に叛乱をおこし、義隆を攻めた。

義隆は、当時京都御所になぞらえた山口の山の館から逃げだして長門に走り、日本海側の仙崎港から船を出して石見に走らんとした。しかし、おりからの強風で船出ができず、仙崎に近い深川の大寧寺に入ったところを、隆房の兵に攻められて自刃した。

そこで、隆房は、義隆の甥に当る豊後の大友義鎮（宗麟）の弟晴英を迎えて、大内を継がしたが、その諱をうけて彼も晴賢と改めたのである。晴英も間もなく義長と改める。むろん、義長は床の間の飾りもので、晴賢のロボットにすぎなかった。晴賢は、ここで大内家の勢力範囲である

防、長、豊、芸、石五カ国の実権を握った。入道して、全姜ともいう。

晴賢は、陶という苗字で分る通り、その祖先は百済の王様の第三子で、これが渡海して、周防の国にきて陶氏の先祖になったと伝えられている。大内氏の祖もおなじである。百済王の太子というのはどうか分らないが、北九州人にしても、出雲や防長人にしても、早くから朝鮮人の血が混っていたことがこれでも分る。

毛利元就は、安芸の吉田（現在の広島県高田郡）に土着し、所領三百貫とも千貫ともいわれるが、とにかく、とるに足らぬ田舎地頭であったことは間違いない。早くから大内家の勢力下だった。

晴賢が大内家の実権を握ると、元就を味方に誘った。元就は今まで義隆から情誼を受けてきたのみならず、その子隆元は、義隆の養女の嫁ぎ先から妻を貰った関係もあって、即かず離れずの態度をつづけて、積極的には拒まなかった。元就はその精力を、もっぱら尼子の勢いを安芸、備後から駆逐するに費した。

元就が、安芸西南部の佐伯郡地方（ここは厳島神領の地で、義隆に属していたが、当時晴賢の勢力下にあった）を除き、安芸、備後両国のほとんどを鎮圧したのは、大体、天文二十二年の冬までで、ここではじめて、正面から晴賢に対抗しうる勢力となったのである。ときに元就五十八歳、昔流儀でいえば老人だ。その闘魂もさることながら、長子隆元、次子吉川元春、三子小早川隆景という出来のいい子に恵まれたから、野心を伸ばすことができたのである。

ところで、義隆の武将で、石見津和野城の吉見正頼という者がいたが、利害関係から晴賢と疎遠になっていた。そこで晴賢は、この吉見を討伐すべく出兵するにあたって、元就に、人質とともに援兵を要求してきた。元就は、三人の息子と宿老たちと相談の結果、晴賢に従って吉見征伐に従軍するのは、毛利家の勢力伸長をよろこばない晴賢の術策に陥る危険がある、と判断して拒

絶した。

のみならず、晴賢が大内義長を連れて石見に入り、吉見正頼を津和野城に囲むと、元就はかえってこのチャンスを狙い、吉見応援のため、晴賢討伐に出た。これで晴賢への敵対の態度がはっきりしたのである。

二十三年五月、元就は、その行動を起して吉田から佐伯郡に進入し、この方面の陶方の勢力である己斐、草津、桜尾の諸城を攻略した。

おどろいたのは津和野包囲中の陶晴賢で、腹背に敵を受けて進退両難に陥ったが、津和野城も城中の兵糧が乏しくなったときなので、八月になって両軍の間に講和が成立し、晴賢はやっと兵を返すことができた。

苦境をのがれた晴賢は、勢いに乗じて、にくむべき元就を一挙に破ろうとして、大軍を率い、安芸国境に近い周防岩国に進んだ。

その一支隊は、元就が新しく占領した桜尾城の西一里余りの、折敷畑山にまで進出した。

桜尾城は、いま、宮島に渡る渡航口の左手に小高い丘が見えるのがその址である。

ところが、元就は、隆元、元春、隆景などと共に、その支隊をかえって包囲全滅させ、晴賢の軍をしりぞけた。ここで元就の勢力範囲は、ほぼ安芸一円に及ぶことになった。

こうなると、元就と晴賢とは遅かれ早かれ決戦しなければならない運命となる。

――こう書くと、元就がなんの苦もなく安芸一円を平定したように取れるが、それまでの彼は彼なりの調略を巧妙に用いている。

その年の秋、陶晴賢が津和野攻撃から山口に帰ったときのことだ。晴賢は元就の反逆がよほど腹に据えかねたらしく、毛利退治の相談をはじめたとき、江良丹後守興房が進み出て、「昔から

良将は戦わずして謀を旨とすると云われているが、毛利退治には、まず間諜を入れて計略にかけるにしくはござらぬ」

と提言した。江良は陶方の智将だ。一同は、もっとも、とうなずいたが、さて、その間諜は誰にすべきかと詮議したとき、天野慶安という伽衆が人の機嫌を取結ぶのが巧いから、こやつを遣わしたほうがよかろうということになった。

晴賢が慶安を呼んで、このことを命じた。慶安ははじめ辞退したが、もし、調略が成功した場合は、恩賞は望みのまま、という言葉と、もし、これを断れば、自分の身が危い怖れとで承諾した。

そこで、慶安はわざと無実の罪を被せられて陶方から追放され、毛利方の安芸の国に流浪してきたのだった。

そのとき、彼は毛利の家来となっている旧知の者と出遇ったので、問われるままに涙を流し、「自分は讒者のため無実の罪を蒙り、召放され、かような体たらく。一時自害も考えたが、あまり腹がたつので、死ぬのも口惜しくなり、頼るべき人を求めて、かような恥ずかしい恰好で旅をしております」

と嘆いた。

その者は、早速、このことを元就に告げて、彼の者は陶方に長く召使われたものであるから、くわしく内情を知っている。いまは陶に恨みを抱いているので、この際お召抱えになったなら、彼の者も隠すところなく陶方の機密を残らず申し上げるに違いない、と進言した。

元就は、慶安を城に呼んで対面し、何かと温かい言葉を彼にかけた。慶安は涙を垂れ、ありがたき上意は忘却つかまつりませぬ、と感泣した。それから、元就が陶の様子を訊くと、慶安、え

たりとばかりに、

「陶は去る畑山の合戦で大ぶん勢力が減って困っておりますが、弱気を見せないために、やがて江良丹後のいる岩国に出張り、横山に陣を取ることと思います。そうなれば、早速に出馬され、御退治なさるのにはお手間はかかりますまい。御本意を遂げられるときは、この慶安も御威光をもって恨みを晴らしたく存じます」

と、まことしやかに述べた。

元就、聞いて、いかにもさもあることなり、と喜んだので、慶安は心中、調略成ったと満足した。

しかし、そのあと、元就は急に顔を曇らせ、

「それにしても、石見の江良丹後守は、かねてからこちらに内通している。もし陶方と一戦に及ぶときは、必ずわがほうに味方すると確約し、起請文まで寄こしているが、その後何とも音沙汰がない。それでその内通が露見したのではないかと不安に思っている。その起請文とはこれじゃ」

と云って、丹後守の出したという起請文を慶安に見せた。

慶安は、眼をまるくし、

「さては丹後守までお味方しましたか。それでは陶退治はいよいよ成就疑いございません」

と云ったが、慶安も、江良の変心をはじめて知ったので、内心、大いにうろたえた。

2

江良丹後守は、陶方の前線基地、岩国の城にいる。もし、元就が陶と一戦するとき、江良はもっとも邪魔になる存在だ。なんとかしてこれを除きたいとおもっていた矢先に、慶安が飛び込んできたのだった。

元就は、慶安が陶方から潜入してきたスパイだとはとっくに見抜いている。慶安にみせた江良丹後守通謀の起請文も、むろん、ニセモノで、彼は慶安という諜者を逆に使おうとしたのだ。

そこで、元就はさあらぬ体で慶安に向かい、

「そなたがわれらを恃んで来たのは、われらの武運が強い証拠である。されば、今から岩国に行き、丹後守と相談し、陶を偽って引っぱり出し、討果すように頼むと伝えてくれ」

と云い、その場で丹後守宛の書状を書き、もし、これが成功すれば、思いのまま恩賞を取らせる、と慶安に云った。

元就、さらに語を継いで云うよう、

「もし、この計画が整わないうちに陶が厳島に渡り、海上の運航を止めたときは、味方の損が多い。どうか、陶が厳島へ渡らない前に、この手立てが成就するよう、くれぐれも丹後守に申し伝えてくれ」

慶安は、その密書を受取って防州へ駆け下ったが、江良のいる岩国には寄らず、真直ぐ山口へ走って、晴賢にいっさいを報告した。

晴賢もおどろいたが、毛利と江良の通謀が事前に露顕したのは、わが武運のたまものと、手をうって喜んだ。この江良は、かねてから元就の非凡なことを見抜いて、毛利と戦うよりも和睦したほうがよいと、かねがね晴賢に進言していたから、元就への通謀説は無理なく晴賢に信じられたのである。

哀れなのは江良丹後守父子で、遂に晴賢の追手にふいに襲われ、岩国で闇討ちにされた。これ

で、毛利の当面の邪魔者は除かれた。敵のスパイを巧妙に逆用し、二重スパイ的調略をさせたところ、元就の陰湿性をあらわしている。

元就は、厳島の北端にある要害鼻に、宮ノ城を築き、大内の旧臣で、あらたに毛利に帰属した己斐豊後守と新里宮内少輔等に、これを守らしめて、目付としては小早川、福原諸家の侍をつけさせた。

今は駅名が変ったが、以前山陽線で広島の次に己斐駅があった。右の豊後守と関係のある土地かもしれない。また福原は、このときから毛利の重臣とみえ、のち代々毛利の宿老となっている。その末裔福原越後は、第一回の幕府長州征伐の際、責を負って自殺したことで有名であるが、越後は支藩福山毛利家の六男で、宗家の命で福原家を継いだものである。これは余談。

さて、元就は、厳島の要害鼻にあたらしい城を構築して、陶軍の瀬戸内海航行を脅かそうというわけだ。

大体、瀬戸内海中心の諸豪族は、水路を往復していたから、それぞれ水軍が発達している。伊予の河野、村上、いずれもそうだ。元就は陶軍が安芸を侵略するためには、必ず厳島の城を破らなければならないようにして、島に陶軍を誘いこむことにつとめた。

大体、大内軍の安芸侵入の順路はきまっているので、陶晴賢もその先例に従って、まず、宮ノ城を破って厳島を占領するものと信じていた。寡兵をもって大軍に体当りするには、ほかからの応援のない、孤立した狭い地形を戦場とするのが第一の条件だ。厳島はそれに恵まれている。

元就は、敵をなんとか厳島に上陸させるために、一つの風評を撒いた。それは、もし、晴賢が厳島を占領したら、元就はこれに対抗する術がないので、どうか厳島に敵が渡らないようにと心配しているという噂である。

もし、陶がこの計略に乗って、厳島に渡航したとしても、まだ元就には不安があった。それは、水軍の勢力において、絶対優勢を占めることだ。これによってはじめて、厳島と対岸との連絡を遮断でき、敵を孤立させることができるのである。しかるに、晴賢の水軍は、周防大島のほか、場合によっては大内義長を通じて、その親戚関係から九州の大友宗麟から援助をうけることも予想される。大友もきこえた水軍の勢力だ。

これに対する元就の水軍は、三子小早川隆景の率いる安芸東部の水軍に、今の広島県佐伯郡の沿岸にある児玉、山県、福井などの水軍をあわせたものがあるだけだった。これでは不安だ。そこで、元就は隆景に命じて、伊予の河野の一族である能島の村上、来島の村上の瀬戸内海水軍を招くことを交渉させた。

幸いなことに、河野一族はさきに利害関係から大内義隆に離反していたし、晴賢からは、村上一族が在来、厳島において、瀬戸内海航行の商船から徴収していた駄別料（一種の通関税）をも禁止されていたので、晴賢にも深い恨みを持っていた。

さらに、隆景の武将である乃美宗勝と、能島の村上一族とは親しい関係があり、したがって来島の村上ともよかったので、毛利応援の話はとんとん拍子に成功した。隆景はさらに村上を説いて、伊予水軍の河野氏に厳島出陣を懇請した。

一方、陶晴賢はひきつづき岩国に滞陣していたが、弘治元年五月、その水軍をもって厳島を急襲し、有ノ浦を焼き払って、毛利の守将児玉三郎左衛門というものを戦死させた。

元就は、それをみて宮ノ城の修築を急ぎ、防備を堅固にしようと苦心し、六月八日には、その督励のため渡海したところ、途中で偵察にきた敵船三艘と遭遇戦となった。しかし、元就は敵船を撃滅して、敵将桑原隆祐を討取った。さっそく、その首を要害鼻の麓にかけならべて、厳島合

戦大勝利の奇瑞なり、厳島明神の冥加われにありと、全軍の士気大いにふるった。

晴賢は、小癪なりと、武将三浦房清なる者をして水軍を率いさせ、厳島、仁保島方面を窺わせたが、宮ノ城の守備が日に日に堅固になってゆくのをみて、あせった。

そこで、彼は在来の大内軍安芸侵入の例に倣って、みずから厳島に渡り、これを攻略しようとした。

このとき、元大内義隆の武将で晴賢についていた弘中三河守隆兼は、晴賢の前に進んで、

「厳島に渡海されるのは、みすみす元就の術中に陥ることでござる。彼の者が厳島にわが軍の上陸することを気に病んでいるように、わざと噂を撒いているのは、すなわち、われらをそこに誘い込まんがためなりと存ずる。されば、厳島渡海は中止こそ然るべし」

と、面を冒して諫止したが、晴賢は、

「なにをぬかす。元就づれにそんな知恵があろうか。そちの云うことはカングリのまたカングリじゃ」

と云って耳にいれなかった。

九月二十一日、陶晴賢は大軍を率いて岩国から厳島に渡航し、上陸した。

彼は宮ノ城の南十町の塔岡を本陣とし、急遽、毛利方の宮ノ城の攻撃にかかった。

塔岡は、宮島行の渡航船が島に着くと、厳島神社にむかう参道の左側にこんもりと小高い丘があるあたりだ。

陶軍厳島に上陸、との報をうけた元就は、わがこと半ば成れりと雀躍した。全姜、まんまとおびきだされたわいとおもったが、残り半分の不安は、宮ノ城が陶軍によって陥落しない前に、こちらから敵前上陸することである。厳島に拠点を置いた宮ノ城の味方と、上陸軍とで陶軍を挟撃する計画だから、宮ノ城がさきに落ちたら作戦に齟齬をきたす。

そこで元就は、二十六日に五十六隻の兵船をもって、宮ノ城の救援に赴かせた。とにかく、ここは本隊の上陸まで、なんとか持ちこたえさせておかなければならないのだ。

一方、元就は、瀬戸内海の水軍誘致に赴いている隆景に急報し、はやく兵船をまわすよう督促した。伊予や安芸、河野の水軍が到着するかどうかは、じつに毛利勢の勝敗にかかわっている。このとき元就の先鋒、厳島とは眼と鼻の対岸地御前に進み、みずからも、その東二里の草津に到着した。

ところが、肝心の宮ノ城は、陶軍の攻撃に形勢が次第に悪くなり、その濠もことごとく埋められて風前の灯となった。元就もいよいよ厳島渡海の急なるを認めたが、まだ伊予水軍の来着はない。これを待っていては戦機を逸するので、手持の水軍五、六十隻と隆景の率いる六、七十隻とで勝負にでることにした。

しかし、敵は上陸兵二万数千人を厳島に充満させ、兵船は海岸一帯を警備して、容易に毛利軍の渡海をゆるさない。元就は、伊予水軍の到着を待って、爪立ちする思いだっただろう。

すると、二十八日に東南方の海面上に夥しい兵船が、波を蹴立てて一団となって押し寄せてきた。これぞ伊予水軍二百艘で、さきに伊予の河野に兵船を説得に行ったのが功を奏したのである。

一説によると、陶方も伊予の河野に兵船を頼みに行ったが、ただ貸してくれと云うだけであった。ところが、元就側は、

「たった一日でいいから船を貸してくれ、戦いに勝てば、あと船の要はないからすぐ返す」

と云ったので、水軍の連中は、元就もおもいきったことを云う、これは毛利の勝ちだ、と思って二百余艘の軍船を融通したという。俗説である。原因は、前記のように陶方と利害関係からの

反目があったのだ。

この水軍の応援をえて、毛利側の海軍は断然、優勢となり、敵を圧する体勢となった。

ここにおいて、元就もいよいよ厳島へ敵前上陸することになる。彼は草津を引払い、地御前に本営を進めた。二十九日には全軍に軍令を発して、

――旗差物は無用。三日分の食糧として各自餅袋一、焼米一、米袋一を携行する。各人は柵の木一本、縄一房、軍の合印は白布の鉢巻と縄襷、行動中いっさい話声を出さないこと。もし、これに違背した者は成敗する。合言葉は「勝つか」とかけたとき「勝つ勝つ」と答えること。

と決め、水軍に対する軍令は、一夜陣につき乗衆の兵糧を積まないこと、という一条をいれた。乾坤一擲、この一戦に賭けたが、元就の心中、すでに勝算歴々たるものがある。

3

恰も弘治元年九月晦日は、風雨荒れて海上は波立ち、天地晦冥の夜となった。元就は、かかる晩こそ敵の油断あり、と判断し、勇躍した。このとき陣中を立出た元就の装束は、緋縅の鎧に赤熊をつけた兜を着し、腰に焼米、餅袋を結び、六十近い老人とは思えぬ武者ぶりであった。

――安芸吉田という片田舎から身をおこし、おもわぬ環境の変化に気をよくして、次々と欲望をふくらましてゆく物欲のかたまりのような老将をここにみるようである。

元就は、本隊を率いて風雨の海上に渡航を敢行した。別働隊の小早川隆景、熊谷信直以下の部下を従え、厳島神社の大鳥居方面へ向かった。すなわち、元就の主力は、塔岡や宮ノ城の背面にあたる東南の包ヶ浦（鼓ノ浦）に向かい、ここに上陸して背後から敵に迫ろうというわけだ。

二百艘以上の船はことごとく燈を消し、総指揮官元就の旗艦だけに燈火を掲げ、諸船の目標とした。舳艫相銜んで、荒れ狂う闇夜の海上を、厳島めがけて押し進んだわけだ。

厳島の包ヶ浦に着く前のこと。元就は、それまで船中に伴ってきた、例の天野慶安の首筋をひっ捉え、

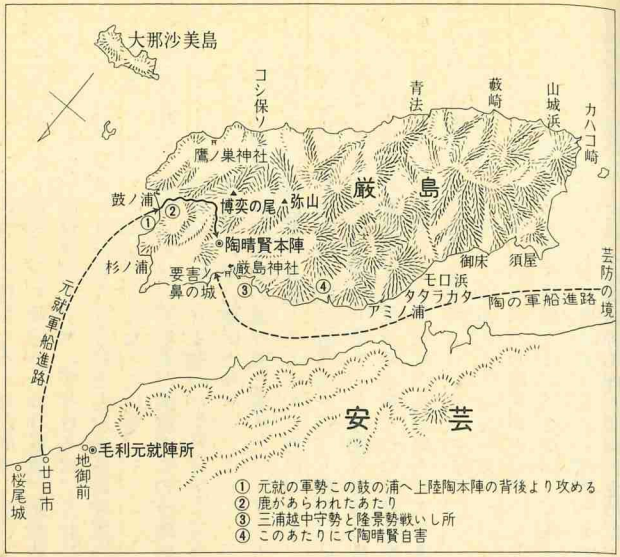
「陶への内通大儀なり。汝のおかげで全姜の首を見ること一日のうちにあり、先に冥土に行き、全姜を待て」

と云い、この利用しつくしたスパイを海に投じた。

かく大船団が渡っているとき、陶方の物見は何をしていたか。

「陰徳太平記」には、

「島の者共今夜敵の渡るべしとは思ひも寄らざりけり。いかなることにありけむ、水海月夥しく光りける間、陶入道、その外陣々より出たる外聞の者共、これ直事に非ず、海に坐す



神の祟りにや、又この弥山に住むなる三鬼と聞えし追帳鬼、時娟鬼、摩羅鬼なりという大天狗の荒れ給ふにやと怖れ戦き、みな陣中へ入りける故、敵船の一度に漕ぎ渡る舵音、船子共の物云ひ、どよめける声をも神鳴騒ぎにさへ聞えざりけるは、これひとへに厳島大明神の、陶が暴悪を誅せむが為、元就の義戦に合せ給ふなりけると、のちにぞ思ひ知られたる」

と、完全な毛利方の御用記述になっている。

元就の本隊は、無事に対岸に着いた。元就がこの土地の名前をきくと、包ヶ浦という。上の山は何ぞときくと、博奕尾という。元就

「さてはめでたき名なり。敵に勝ったぞ」

と云えば、家来一同、御意の通りだと答えた。ツヅミもバクチも打つもの、打つを討つにひっかけた語呂合せの縁起だ。元就とてもこの一戦はギャンブルであった。

包ヶ浦に上陸したのが亥の刻（午後十時）で、元就は、応援にきた児玉水軍に命じ、船をことごとく対岸の二十日市側に漕ぎ帰らせた。文字通り背水の陣を布いたわけである。もっとも、児玉と山県とはこっそり相談して、元就の乗船だけは、ひそかに岩蔭に隠しておいたという。

これからいよいよ進軍だが、博奕尾の山頂にかかるとき、鹿が一匹迷い出て走り去った。これが恰も、毛利軍の先導をつとめるようにみえたので、

「厳島の大明神の御加護にて御道のしるべ仕り候」

と、オベンチャラをさっそく云った家来がいる。

馴れぬ山道を闇夜に行軍する折とて、暗さは暗し、雨上がりのあと、黒雲蒼然として峰や谷に蔽いかかって、いずこが山路か獣の踏み跡か区別がつかぬ。松柏は朽ちて横たわり、落葉は積って苔深く、踏み迷っているうちに件の鹿が現われたのだ。諸士、心を勇ませ、紅葉踏み分け鳴く

鹿の、あとを慕って山路に入れば、アラ不思議、豁然として展けた谷間の水のほとりに出た。ここで将兵は布を水に浸し、絞って口中を潤し、咽喉の渇きを癒したという（吉田物語）。

このころ、小早川隆景の行動はどうかというに、これは前にふれたように、厳島神社の大鳥居方面から、敵船の間を掻きわけて島に侵入した。大胆な中央突破だ。このとき守備の敵に咎められると、隆景、

「お味方に参った九州の大友の兵だ」

とだました。敵も、そうかとおもいこみ、やすやすと上陸できたという。

かくて小早川勢は、塔岡の坂下に陣して、敵の背後の丘に、本隊の鬨の声のあがるのを待ちうけた。おりから東方の空が白み、雨上がりの黒雲の間から乳色の薄光がひろがってきた。夜が明けてしまえば、小早川の兵も敵に見わけられる。猶予はならない。彼らは本軍にあがる鬨の声を、固唾を呑む思いで待っていた。

陶のほうは塔岡を本陣としていたが、ちょうど、当日は宮ノ城を総攻撃の予定だった。すなわち、その早暁に毛利勢に前後から迫られたのである。

あたりが白んだころには、元就の本隊も塔岡を眼下にみる地点に到達していた。ここで元就は、

「昔、源義経は、勝浦に着いて、平家に勝ったが、われは博奕尾に登って敵に打勝つのだ。みなの者、勇め」

と下知した。士卒、勇気の微笑を含んでこれに応えた。采配とともに、一同、わあっ、とばかり鬨の声をあげ、眼下の敵陣めがけて駆け下った。

塔岡前に潜んで、待ちに待っていた隆景の軍勢も、これを聞くと同時に、喊声をあげる。

不意をうたれた陶晴賢の軍勢は、周章狼狽した。だいたい、陶軍は布陣が整然としていなかっ

たとみえ、虚を衝かれて、俄かの建直しができなんだ。

「すわ敵の大軍が攻め寄せたぞ」

とばかりに右往左往、あわてるばかり。

だいたい、陶方では毛利勢が島にくるには、海を渡らなければならないから、渡海の際に水際で討てばよいと、タカを括っていたのである。毛利軍の不意の上陸が、彼らをまず心理的にも混乱に陥れた。

このとき、博奕尾の下に陣取った、弘中三河守の陣だけはすこしも騒がず、すぐに篝火をあかあかと燃しつづけ、兵を固めた。弘中三河守はさきに陶にむかって、厳島渡海の不利を説いた智将で、また早くから、宮ノ城の総攻撃を進言していたのだが、ことごとく晴賢によって斥けられたのだった。

この弘中三河守が、

「味方は大勢だが、分散して戦うときは、小勢にも劣るべし、はやく本隊と合して一団となるよう」

と呼ばわったが、なにぶん、不意を討たれたこととて、すぐには効き目はない。それに、だいたい、陶方は大軍意識がある。まだ、敗けるとは思っていなかった。

《陶勢は大軍だが、それをたのんだ士卒、のんびりとしていて、いっこうに討死するとは思わず、三家の勢は僅かだが、戦死を覚悟のこととて、射れども斬れども少しも不疼、一時に斬り崩さんと進みに進んだ》

とは「陰徳太平記」の記事だが、両軍兵士の気力の相違が分る。「少しも不疼」の表現などは、うまいと思う。

元就父子四人、いずれもここを最後と行動し、大音声に下知しながら、みずから真先に戦いを挑んだ。

陶晴賢は、これをみて、先陣の者と二陣の者とを交代させようとしたが、狭い所に大勢で集っているから、なかなか自由が利かない。狭い所に大軍を集結させた元就の作戦が、見事に図にあたったわけだ。「側より通る所は無く、兵具をさへ捌き得ざれば、敵に渡り合はん様も無い」ありさまで、はや、陶軍は動揺を来した。

この勢いに乗じた毛利勢は、無二無三に斬ってかかる。陶勢は、左右前後から毛利勢にかかられて、自由に働くことができず、しかも用兵の自由が利かないので、敗色ようやく見えてきた。

晴賢は、これをみて、敵は小勢なるぞ、小勢に突き立てられるさまやある、返せ戻せと、采配を打振り打振り下知したが、浮き足立った陶軍は、行動の自由が利かないのと、毛利勢の猛攻に、押しあいへしあい崩れはじめた。波打際に退く者、山中に逃げ入る者が続出した。先陣が退いても、後陣の者は、交代はおろか、大将の晴賢も打捨てて退き、本土に逃れるために、われもわれもと船を奪い合った。

この船にむやみと大勢で乗りこんだため、沈没して溺死したり、先に乗った者はあとの者を乗せまいとして、槍、長刀で舷に取りつけた綱を切って乗り出したりしたので、あとの者は、敵よりも味方に斬られて死ぬ者が多かった。

だが、こうしてやっと船に乗って沖に漕ぎ出した者でも、かねて待機していた能島、来島、村上、因島、浦、赤川などといった船衆が追掛けて討果し、無事に対岸に逃れる者は少かった。

「そのさまは平家の一ノ谷における敗走と異ならず」とある。

4

さて、陶晴賢は、この情況を見て、まだ、わが旗本には三千ばかり残っている、元就と手詰の勝負を決すべしとし、

「敵は初度の合戦に、はや疲れしぞ、重ねての合戦に味方の勝利疑いなし」

と振るい立ったが、肝心の旗本も五人、十人と脱落し、今はようやく五百ばかりになってしまった。

そこに弘中三河守が馳せつけて来て、味方の敗軍ぜひもなし、この上は、われらが踏みとどまって社前に一戦すべし、入道殿は早々この間に退き給え、と進言した。この間にも毛利勢は猛攻をすこしもゆるめず、陶の本陣に迫ってきたので、三浦越中守という者が晴賢の肘を取って引立てた。

弘中三河守は、晴賢の退くのを見送ると、わずかの手勢を率いて、吉川元春の軍勢の中に斬り入って討死した。三河守は、さきに晴賢にいろいろ進言したが、用いられなかったのに、今度はみずから殿軍をつとめて、晴賢のために討死したのである。

さて、陶晴賢は、防州に渡る船を捜すため、毛利勢のいない反対側の海岸に出るべく、不馴れな路をたどった。

「木隠れの暗きに所は案内も知らず、しどろもどろに辿られけり。さるほどに、諸勢、西へ西へと退くほどに、味方の船共はみな乗り帰りぬ。詮方なくて山に入り、磯に出で、心細くも行くほどに、草木巍嵓をば追来る敵かと肝を消し、風声鶴唳をも鬨の声かと魂を絶つ。或は洞窟に入りて骨を砕かれ、或は千仞の海頭に落ちて身を沈む。後より退く味方共を、追掛ける敵かと引返し同志討する者もあり、行歩叶はざる老武者は自裁して臥すもあり、平家の十万騎、木曾義仲に計られて倶梨伽羅谷に落ちけんも、かくやと思ひやられたり」（陰徳太平記）

陶晴賢は、元来、大兵肥満で、二十二、三貫もあるうえに、重い鎧を着ていることだし、長く歩くことができない。付添う兵も、その手を取って引いたり、腰を押したりして歩かせていたが、やっと大之浦という海岸まで出てみると、コハイカニ、船は一艘もなくなっている。主人を棄てた家来共が、みんな奪い合って逃げ出してしまったのだ。

全姜入道晴賢、もはや、これまでと、鎧を取り、どっかと坐って腹を切った。

宮川市充という者が介錯した。

こうして元就の奇襲は成り、厳島の陶軍は完全に島内から掃蕩された。

晴賢の首級は、岩石のあいだに隠されていたが、その後、毛利方の捜査によって発見された。

この合戦に毛利軍の得た陶軍の首級は、当時、厳島神社の神官の手記には八千人としるされ、また、元春の部下で、直接従軍した者のおぼえ書には、四千七百四十余とある。両方とも数に多少の誇張はあるが、とにかく晴賢の軍は、島内の討死と、逃げるときに船の沈没による溺死とで、そうとうな数だったことが分る。

厳島合戦について、毛利方の勝利の理由としてかつて渡辺世祐は次の三点を挙げた。

①元就がよく一族を糾合し、また芸備の諸豪族を統率して、芸備の根拠を堅固にしたこと。そして、その軍は上下和融し、一致団結の力が強烈であったこと。

②合戦に直面しては、作戦の極めて周到であったこと。

③伊予水軍の参加と、その活動。

——まあ、こんなところであろう。

この合戦の結果、元就は、陶軍の残党を掃蕩し、山口に迫って大内義長を自殺せしめた。周防、長門の大内の旧領を、まったく自分の勢力下におさめたのは、翌々弘治三年のことである。

さらに元就は、出雲に出撃して、年来の壁だった尼子晴久を滅ぼし、やがて中国地方に覇をとなえるようになったのである。

この晴久の滅ぼし方も、また元就一流の調略である。

尼子は、山陰に長い間蟠踞していて、その兵は、山中鹿之助の話でも分る通り、勇猛果敢だった。しかし、尼子には、その一門に新宮衆という与党があり、これが強かったのである。新宮というのは、今は島根県大原郡加茂町に入っている。

新宮衆は尼子国久が首頭で、彼は宗家の晴久の叔父にあたった。元就は、新宮党があるかぎり、尼子にはうかつに手が出せないと思い、まず、これを除くことを考えた。それについて、彼に一つの思案がうかんだ。

元就は、諜者どもを集めて命じた。

「おまえたちは出雲領内に潜んで行き、新宮衆が毛利方に心を寄せて、晴久に逆心を抱いているように噂をたてろ」

諜者どもは、職人や百姓に変装して出雲領内に入り、新宮衆逆心のデマをばらまいた。

この噂が晴久の耳に入った。晴久も初めは相手にしなかったが、その噂が頻々と伝わるにつれて、やや疑心を抱いてきた。

元就は、ころあいよしと思い、家臣に命じて、領内で死罪になる科人を巡礼姿に仕立て、文函の中に「密書」を入れて携帯させ、出雲領内に放った。

科人は、釈放されると喜び勇み、出雲領内の山中に入った。ところが、うしろから尾けてきた毛利の家臣が彼を斬り捨てた。

出雲領の尼子方の役人が、巡礼の死骸を調べたところ、文函の中に、容易ならぬ手紙が入っている。

文面は新宮衆の一人にあてたもので、

「彼の仁を討ち果されたときは、所領の儀はお望みの如く雲伯を進じ申すべきこと」

という文句だった。つまり、毛利方が自分のほうへ心を寄せた新宮衆にあてた密書で、晴久を討てば所領は、おまえの望みどおり、出雲と伯耆をやる、という意味の内容だ。

晴久は憤った。毛利方では、前からひそかにまいたデマによって、晴久の身体には、ちゃんと毒をまわらせている。がそれだけでなく、元就はさらに入念な仕上げにかかった。

今度は、諜者を尼子の本拠である富田城内に忍びこませ、わざと手紙を落させた。それを城中の者が拾ったが、一見、ラブレターともみえるその文句には、ただならぬことが書いてある。

「わたしは毛利家へ味方するので、これからのちは、たとえ命を永らえても、あなたと遇えるかどうか分らない。それを思うと、あなたに心残りでならない」

恋文である。書いた当人の名前はない。つまり、城中に仕えている女が、男から貰った文を、うかつにも落したと判断される。

晴久は、これを読み、いよいよ新宮衆の逆心を確信し、その首領の尼子国久を富田城に誘いよせ、殺すことにした。

ただちに国久へ向けて、明日は能楽を興行するので、見物においであれ、と招待状を出した。

かくて、天文二十三年十一月一日、かくとも知らぬ国久は、わずかな郎党と共に富田城に登った。城中で晴久と対面となったが、叔父・甥とはいいながら主従の関係でもある。やがて、舞を

見物したあと酒宴となった。

そのとき晴久は国久にきいた。

「近ごろ、わが家中に、毛利に内通する者があるように世上で取沙汰しているが、叔父御は聞かぬか？」

「聞かぬでもないが、根もない噂だ。気にすることはなかろう」

五十を越した国久は、精悍な顔に笑いをうかべた。

「しかし、新宮党の中に異心を抱く者があると沙汰している」と、晴久は追及した。

「笑止なことよ。我等の間のことを知らぬ痴者の陰口じゃ。左様な取沙汰をひろめたは、おおかた、毛利方の細工かもしれぬ」

晴久は近侍に眼で合図した。近侍は酒を注ぐとみせかけて、いきなり瓶子を国久の面上に投げつけた。と同時に、隣の間から襖を蹴倒して槍の群が殺到した。

国久を討つと、晴久は大挙して新宮に押し寄せ、国久の子や、その一統を滅ぼした。

元就は徹底したマキャベリストだった。ただ、彼が中国地方という、中央から離れた地域にあったため、志を全国に伸べられなかったが、彼がもし中央にいて、信玄あたりと嚙み合わせたら、戦国時代ももっと面白くなっただろう。

元就のしあわせは、三人の子に恵まれたことにある。もっとも、長子は元就の存命中に死に、孫の輝元があとをついだ。だから、元就が死ぬときに、三人の子を枕頭に呼びよせ、三本の矢をたとえに、団結を説いたというのはつくりごとである。

この「三本の矢」は、現代で意外なところに役立ち、防衛庁の三十八年度国防計画の机上演習で、「三矢作戦」と名づけられた。

しかし、この三矢作戦の「三矢」は、米軍の極東戦略における "Three Arrows" Operation の直訳なのだ。これが国会で追及されるや、政府と防衛庁は、「あれは元就の故事にもとづいたのです」とゴマカした。

もっとも、アメリカの覇道と、元就の権道とに、一脈通じるものがあるとすれば、また、いくらかの意味をもつ。

（註）厳島合戦は正確な史料がないので、やむなく「吉田物語」「陰徳太平記」「芸侯三家誌」などの俗書に拠った。またこれらの本は面白い。渡辺世祐博士に、地方の古文書類による厳島合戦の考証がある。

九州征伐

戸次川の戦　天正十四年十二月十二日
（一五八七年一月二〇日）
高城の戦　同十五年四月十七日
（〃　五月二四日）
島津義久降る　同年　五月八日
（〃　六月一三日）

1

豊臣秀吉の九州征伐は、運命を決するような大勝負でもなく、華々しい合戦があったわけでもない。いうなれば、秀吉の上方勢と、その先手となった中国の毛利勢とが、九州の島津勢を圧迫し、ついに、薩摩領まで押して屈服させたというだけのことで、その点、北条氏政父子を取りかこんで、敗北させた小田原攻めとよく似ている。

しかし、それはまたそれなりの興趣がある。戦場が九州となっていることも、精悍をもって鳴る薩摩隼人の抵抗ぶりも面白さがあるとおもう。

この九州役に入るには、まず、その戦前の形勢を説かなければなるまい。

元亀、天正の頃の九州は、大体、北半部が豊後府内の大友宗麟の勢力圏、南半部が薩摩の島津の勢力圏となっていた。二家は、たえず領土をひろげようとして境界線で争っていた。

そもそも、大友の先祖というのは、鎌倉幕府の初めに豊前、豊後の守護職としてきたのだが、室町時代には九州探題となり、十三代宗麟にいたった。宗麟というのは剃髪してからの号で、義鎮という。

一方、島津家は、これも鎌倉幕府から薩摩、大隅、日向三カ国の守護職に任ぜられて以来、三百八十余年間もつづいた家柄で、十六代の当主を義久といった。義久には、義珍（のち義弘）、歳久、家久の三人の弟があり、従弟には征久、忠長があった。いずれも勇壮だが、家臣には新納武蔵守忠元といった武辺者もいて、家中、すこぶる強豪であった。

ところで、日向には、いまの飫肥附近に伊東義祐というのがいて、これが大友についていた。大友方からいえば島津に対する最前線の味方だが、島津方からいえばその最前線に塞がった敵方に当る。

伊東の遠祖は、曾我兄弟で有名な工藤祐経で、祐経から五代のちに、先祖が日向地頭としてこの地にきて土着したのである。

この伊東と島津とは、年来から境界線を争っていたのだが、その決定的な衝突は、元亀三年五月に行われた。

この戦いでは伊東があえなく敗けたが、その敗けかたが、まことにバカバカしい。

さきに手を出したのは伊東のほうだったが、島津方の加久藤城というのを攻めて一時は景気がよかった。

ちょうど、炎暑の盛りで、勝った伊東勢は島津追撃を一時中止し、三千の将兵が鎧も小袖も脱いで川で水浴した。そこに加久藤城救援の島津義弘が襲いかかって、文字通り裸の伊東勢を斬って斬って斬りまくった。首級を得ること五百余とある。

さて、この伊東を助けた大友義鎮も耳川の戦で破られた。島津義久は大いに気をよくし、それからは兵を肥後に出し、肥前に進めてこの辺の名門竜造寺隆信を屠った。さらに、余勢を駆って筑前に入り、今の博多附近の諸城をとり、さらに豊前に進んで、馬嶽（今の北九州市の南）、香春嶽、城井などの諸城の大半を勢力下におさめた。この辺は大友の勢力下にあった豪族たちだが、島津のためにいずれも屈伏させられた。

そこで、島津を怖れた他の九州の諸豪族も、争って島津に誼を通じたのだが、奇怪なことに、反島津の本家である大友義鎮までが、使を島津義久のもとにだして、その戦捷を賀した。

大友も意気地がないようだが、耳川の一戦で敗れて戦力を削がれたため、単独では島津と戦えなくなったのである。だが、表面、島津に頭をさげたのは、そのじつ、裏で使を大坂に急行させ、島津征伐を秀吉に頼むための時間かせぎだった。

大体、大友家は信長とよかった。それは、中国の毛利に対して、東西から挟み撃ちの態勢にする信長の意図からでていたのが、信長の死後、形勢が変って、毛利が秀吉に服従したため、もはや、作戦上の必要はなくなっていた。けれども、秀吉は信長以来の政策で、大友に親近感をもっていた。だから、大友家から島津侵略を訴えられると、一議におよばず、応援を快諾した。

もっとも、秀吉は、はやくから九州を平定する気持があったから、大友の訴えは渡りに舟だった。しかし、彼はすでに関白に昇っていたので、まず勅命をもって大友との戦闘中止を島津に勧告した。つまり居中調停の体裁だが、もとより島津がすなおに諾くとはおもってなかったであろう。果して島津の返事は、もともと大友から攻撃をかけられたので、やむなく戦ったので、休戦をいうなら、まず大友のほうにこそ敵対行為の中止を勧告すべきだ、といってきた。

島津方では自衛戦だというわけだが、肝心の大友はすっかり戦力を失い、島津の肥前における

勝利に慶賀の使をだしているくらいだから、これは一片の弁解にすぎない。

こんな子供騙しの言訳は、いくら当時でも通るわけはなく、秀吉にかえって西下の口実をあたえた。これが九州征伐の発端だ。

秀吉は、まえから島津に対して注意をむけ、天正十二年のころには、その家臣千石（のち、仙石）権兵衛秀久をひそかに九州に潜入させ、肥後と薩摩の境で、島津の事情を偵察させたということである。

島津は、まえから秘密鎖国政策を採り、その境界には厳重な関門を設け、他国人の入るのを許さなかった。されば、千石が肥薩の境に留って、どの程度の内探を得たかはわからない。

さらに秀吉は、本願寺の顕如上人を、布教のためと称させて薩摩に送らせた。顕如上人は獅子島に滞在したが、このとき上人には門弟を装った秀吉の密偵が随行した。彼らは薩摩内地に潜入して調査をとげたといわれる。坊主というので、入国しやすかったのであろう。

大体、戦国時代の僧侶は、密偵に仕立てられることが多く、たとえば、念仏宗で有名な遊行上人は、鎌倉の北条幕府のスパイとして、布教にこと寄せ全国を調査して歩いたといわれている。藤沢の遊行寺が、北条政権に保護されたのも、そのためだという人もある。

秀吉くらい、人を利用するのに巧みな男はいない。もともと、顕如は信長のころに石山城（のちの大坂城の地）に立籠り、信長に宗教抗戦にでたのだが、秀吉は宥和政策を用い、調停に成功している。されば、顕如も秀吉に懐柔され、唯々として秀吉の隠密的な役を引受けたのであろう。

しかも、九州征伐は、中国の毛利、吉川、小早川、四国の長曾我部を、自軍の最前線に用いた。これは彼らの実力をテストするチャンスにもなった。もっとも、病中の吉川元春などは、必ずしも秀吉の命に愉快ではなかったが、大勢に抗し得ず、宗家輝元、弟隆景の勧告にしたがった。

秀吉が出兵に先立って、島津義久に勅命という体裁で、居中調停をとったのはまえにふれたが、このときも、義久とは歌道の因縁から、細川幽斎、茶道の千利休を使って、おなじ趣旨のことを、島津の国家老伊集院忠棟に宛て、説かせている。

ところが、島津のほうでは、九州動乱の責任は一切、挙げて大友にありと強弁してきた。さらに、大友宗麟自らも大坂にきて秀吉に会い、目下の危急を訴えて、島津征伐のため関白の下向のはやからんことを乞うた。天正十四年四月のことである。

一方、この情勢から秀吉来るのちかきを知った島津勢は、そのまえに筑前のうち、岩屋城、立花城、宝満城の三城を落そうと、これに猛攻撃を加えた。すなわち、岩屋城の高橋紹運、立花城の紹運の嫡子立花宗茂、宝満城の紹運の二男高橋統増などは、これまでよく戦って城を守り、島津に降らなかったのである。

岩屋城というのは、博多の南、太宰府の近くにある山で、菅公ゆかりの天拝山のつづきだ。立花城とは博多の東、香椎のちかくにある山で、いま、鹿児島本線の車窓からみても嶮岨な姿である。岩屋城の高橋紹運は当時の名将で、宗茂は、その実子。立花道雪の養子となって立花姓をなのったのだが、道雪も大友方の名将だった。

さて、紹運は島津の大軍を待ちうけて岩屋城に籠城したが、立花城の宗茂は父紹運を気づかい、はやく岩屋城を引揚げて、宝満城に入るようすすめた。紹運、もとより切腹の覚悟であると断って、頑固に岩屋城にふみ止まった。

高橋紹運も、立花宗茂も、さきに大友宗麟が上坂して秀吉に会ったとき、推挙して秀吉の直参にさせたのである。したがって、紹運、宗茂ともに大友方ではなく、秀吉の幕下というわけだ。それで、島津方から投降を勧告された紹運は、秀吉の進発ちかし、島津の滅亡覿面にあり、と島

津にこたえている。

島津では、秀吉の実力をまだ充分に知っていなかった。辺陬の地にいる悲しさ、中央の形勢によく通じていない。秀吉を相変らず成上り者の猿面冠者と思っていた。しかし、それはそれとして、毛利や長曾我部が先手となって押し寄せ、さらに秀吉の本軍がくるとなれば、ぜひとも、筑前の三城は攻め落しておかなければならぬ。こうして、島津は決死的な総攻撃をかけたのである。

この戦闘のなかで岩屋城の攻防は、苛烈であった。が、ついに高橋紹運も刀折れ矢尽きて櫓の上で切腹した。三十九歳とも四十二歳ともいう。

いま、博多から太宰府までの国道を走ると、途中、左手に「高橋紹運公戦死の地」の碑が建っている。

薩摩勢は、岩屋城を攻め落したものの、その犠牲も大きく、大将株二十七騎、士卒五百余騎が戦死、手負いは千五百人に達した。ために、さすがの薩軍の気勢が挫けた。紹運は腹を切って名誉をあげたのである。

2

宝満城にいた紹運の二男統増も岩屋城の陥落でやむなく開城した。あと、残っているのが立花城の立花宗茂だ。ときに弱冠二十歳。後年、朝鮮役のとき、碧蹄館の戦で、みずから進んで日本軍の殿軍を志願し、奮戦したことはよく知られている。

宗茂は、七月末、秀吉にこの危急を報じる一方、岩屋、宝満の開城にもめげず、また薩軍の威嚇にも屈せず、この孤城に拠って持ちこたえた。

薩軍も、秀吉軍の到着ちかきをみて、いつまでも立花城にばかりかかっていられないので、囲

みを解いて退却した。しかも、宗茂は寄せ手の去るや、直ちにこれを追撃し、敵方の名のある武将を討取った。秀吉はそれをきき、九月十日付で宗茂に感状を与えている。

さて、秀吉のほうだが、彼は、七月二十五日、黒田官兵衛をしてまず京都を先発させ、自分は八月六日には芸州吉田に着いて、毛利と吉川、小早川両川に出兵を催促している。

秀吉は毛利方に、弾薬、兵力、兵糧などの不足分は、いくらでもこちらから補充するから、存分に働いてくれ、といっている。毛利方にすれば、その面目を天下に施すチャンスというわけだが、毛利方をここまで煽てた秀吉の力量もさすがである。

さすれば、毛利一家は秀吉の期待に背かぬように大いにハッスルした。輝元は、八月十日、三千人を率いて出発し、隆景は伊予から、元春は出雲から参会した。

彼らが関門海峡を越えて門司城に入ったころが、ちょうど、島津勢の立花城に迫るころで、吉川元春も、小早川隆景も、その対岸赤間関にきて黒田官兵衛と会っている。

このときの黒田の働きは前線参謀として遺憾なく発揮された。芸州吉田にきて毛利勢の進発を督促し、九州の事情を秀吉に報告するため大坂との間を往復するなど、大いに行動した。

十月に入ると、輝元以下毛利勢ことごとく門司、大里の線に展開し、島津方の小倉城を攻め落した。つづいて馬嶽城、古賀城なども降った。これらはもと大友方に属していたのだが、島津に降っていたのである。

こうして北九州の諸城を攻めている間に、吉川元春は陣中に歿した。病軀を推して出陣していたのである。秀吉、これを聞いて隆景に弔意を表し、その子の本領安堵と宗家の位置を保証している。

毛利勢は、元春の弔合戦とばかり香春嶽に向かい、昼夜をわかたず攻めた。香春嶽は、いま田

川郡の炭鉱地帯にあって、汽車の窓からは、その突兀とした風姿を望むことができる。この城も遂に十二月上旬に開城した。

これを知った豊前の他の城も、人質を入れてことごとく毛利方に降った。そこで、毛利もこの線にとどまって、秀吉の本軍のくるのを待った。果然、毛利は秀吉の期待にそむかず、その先駆としての役目を、遺憾なく発揮したわけだ。

一方、島津はせっかく筑前の諸城を占領したが、立花宗茂の立花城を抜くあたわず、上方勢到着ちかしとみて後退を開始した。これで筑前の足がかりを失うにいたった。しかし、まだ秀吉をあなどり、猿にも似た関白来るとも怖るるにたらず、主君をして九州の主人たらしめる、と傲っていた。

島津勢は、秀吉の本隊がつくまえに、できるだけ有利な迎撃態勢を確保するため、豊後口に働いて大友宗麟の本拠、府内に迫った。それで各所に小競りあいがつづけられたが、ここで、どうしても述べなければならないものに、戸次川の合戦がある。

そもそも、秀吉は、毛利勢を九州に押しだすと同時に、土佐の長曾我部元親、讃岐の十河存保などの四国勢、合計六千人を九州に赴かせた。彼らは伊予今治から豊後沖ノ浜に着き、上ノ原というところに陣をしいた。九月十二日のことである。軍監は、今は讃岐を領する千石秀久であった。

ちょうどそのころ、薩軍がひたひたと府内にせまっていた。その支城である利光城からも急をつげてきた。千石秀久は、すぐに出兵して島津勢を撃破すべし、と逸ったが、長曾我部も十河も、その不利を説いた。

「本隊がここにくるのも間近いのに、いま卒爾の振舞いは得策ではない。関白殿も軽挙妄動する

なと達しられているではないか。また黒田、小早川の諸将も豊前にいることだし、ともかくも相談の上、進むなり止まるなり決めたほうがよい」

と云うのである。秀久は、一蹴し、

「慎重にすべしとの関白の令旨は、もとより自分も承っている。しかし、いま、利光城は島津勢によって、まさに陥落の運命が迫っている。それを知って傍観しているのは、勇士のなすべきところではない。よろしい。諸氏が賛成しなければ、みずからの一手だけで利光城を応援する」

と、昂然としている。

長曾我部元親らは、その無謀なことが分っていながらも、軍目付である千石の主張を通さないわけにはいかない。軍監は秀吉の命をうけてきているので、事実上の指揮官だ。それに、あたかも利光城に後詰をしないのを、卑怯者のように云う千石に対しても、仕方なく従った。

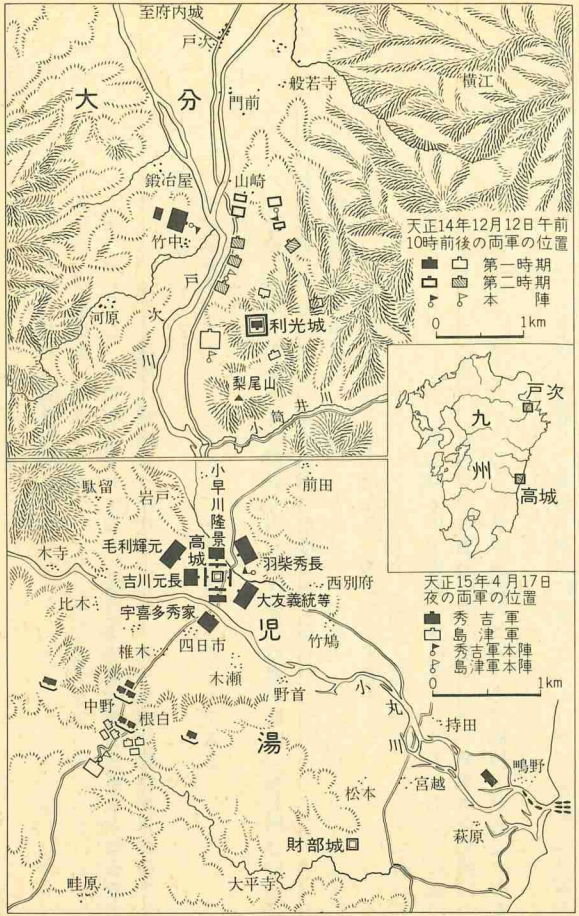
すなわち、彼らは十二月十二日の払暁、府内を出発し、大友の家臣の案内で戸次川（大野川）の左岸竹中山に着いた。

薩摩勢は、長曾我部らの応援がきたと聞き、利光城の囲みを解いて退き、斥候を附近の村にむけ、兵をまとめて、敵情に応じた臨機の作戦をとることにした。

上方軍は、右翼に長曾我部の兵を三千人配し、それをさらに三隊にわかち、第一隊は元親の武将桑名太郎左衛門が率い、第二隊は元親の長子信親が率い、第三隊は元親みずから指揮した。

左翼隊もおなじく三千の兵力を配し、その第一隊は十河存保一千人を率い、第二隊は千石秀久二千人を率いた。予備隊としては大友義統が若干の兵を連れた。

薩摩勢が利光城の囲みを解いて退却したとき、軍目付千石権兵衛秀久は、ただちに戸次川を渡ることを主張した。元親、これを諫めて、



「この地は守るに便利であるから、むしろ敵の川を渡ってくるのを誘いこみ、そののちに攻勢に転ずるが良策である」

と進言した。十河存保、また、これに同意した。

しかるに、ひとり猛りたった権兵衛は、

「左様なまぬるい方法で攻めても、手間取るばかりじゃ。秀吉公は常にぬるき軍を大いぬるやまと云われている。つまりは、かかる緩慢な戦闘をいわれるのじゃ。よろしい。諸公が気が進まなければ、われらは独りで川を渡るわ」

といい放つなり、その隊を率いて川にとびこんだ。午前十時ごろのことである。

「西国太平記」には、元親が、

「この戸次川は、いつも船で渡河しているので村民も川の深さを知る者がない。もし馬で川を渡られるなら、まず瀬踏みをしてから、その深浅を測ったほうがよろしかろう」

と云ったところ、権兵衛、聞かず、

「川へ颯と打入りければ、馬の背隠るるほどの大河なり、溺れて死す者多し」

とある。

私事にわたるが、いまから十七、八年前、筆者はこの川の渡し舟に乗ったことがある。石仏で有名な臼杵駅から途中まで木炭バスに乗り、買出しの唐芋を詰めた重いリュックサックを背負って、十キロの道を歩き、川の南岸に達した。このあたりは吉野村といって、梅林の名所でもある。

一棹、山陰の水を衝いて悠々たる流れを渡り、黄昏の対岸に着いた。上れば、「長曾我部信親公戦死之地」の木標が眼についた。すなわち日豊線竹中駅だ。いま、これを書きながら、当時をおもい、いささか感無きを得ない。

さて、千石秀久が張切って、その手兵を率いて単独渡河したものだから、元親も存保も傍観しているわけにはいかない。仕方なく、二手にわかれて川の上流と下流から渡りはじめた。

一方、薩摩勢の大将島津家久は、物見の報告で、敵兵の人数が案外すくないのを知った。彼は一部隊をとどめて利光城を監視させ、他の兵力を三隊にわかって、みずからは機動隊を率い、森林中に深く潜伏し、千石らのくるのを見まもりながら待ちうけた。

それとも知らぬ千石、長曾我部、十河など、途中抵抗もなく渡河を完了した。つまりは島津方の罠にかかったわけだ。

待ちかまえていた家久は、ソレとばかりに諸兵に号令した。島津方の伊集院は、まず右翼の長曾我部の諸隊に向かって攻撃を開始した。林中から俄かにあがる鬨の声と、突進する島津勢を見て、秀吉からつけられた軍目付の千石権兵衛、度胆を消したにちがいないが、長曾我部も十河も、それ見たことかと、頑固な権兵衛を罵りたかったであろう。

3

島津方の伊集院隊は、上方勢の右翼長曾我部隊を攻撃したが、それでも新鋭の長曾我部勢にかえって斬りまくられ、利光村に退却した。これを見た島津の第二隊新納勢は、憤然として長曾我部隊に当った。新納武蔵守は島津方でも聞えた荒武者、さすがの長曾我部隊も斬りたてられた。

と同時に、島津の本荘隊と、予備隊の島津家久は同時に殺到し、いったん退いた伊集院隊もまた取って返してこれに参加し、全軍一斉に攻勢に転じた。

このとき、さすがに薩摩隼人は、その本領を発揮して凄じい突撃をおこなった。ために四国勢

も大敗北し、戸次川に圧迫されてしまった。

元親も、いまは主従二十一騎となって、子の信親の行方も知れない有様となった。

元親は、もはやこれまでと、討死を覚悟し、馬から降りたち、太刀を抜いて進むと、主人を放れた馬は、いずれともなく奔走した。

元親の家来十市新右衛門というもの、急いで馬より飛んで降り、こは口惜しき有様かな、はや、これに召されよと、自分の馬を曳いて提供しようとしたところ、いったん走り去った元親の乗馬が、またどこからともなく駆け戻ってきた。

十市、大いに喜び、これすなわち家運の尽きざるしるしなりと、その元親の乗馬「内記黒」の轡をとって無理に元親を乗せ、上ノ原というところに落ちのびさせた。

一方、子の信親もさんざんの敗けで、父元親の生死のほどもわからなかった。彼はここで覚悟を定め、わずかな手勢で新納勢と奮戦した。

「信親七百余騎、三手にさっと分れて駆け合ひ、汗馬東西に馳せ違ひ、旌旗南北に開き分れ、追ひつ返しつ、巻きつ巻かれつ、互ひに命を惜しまず摑み合ふ」（土佐物語）ほどの大激戦となった。

桑名太郎左衛門というもの、信親に、急ぎ退き給え、といったが、信親、承知せず、新納方のものを六人まで斬り捨てたが、なにしろ兜の上から斬ったことにて、太刀は刃こぼれがして鋸のようになっている。彼はあたりを追払い、多勢に手傷を負わせて、腹を掻き切った。

信親の最期は、戸次川合戦の華だと云われている。ときに信親二十二歳の弱年。彼は信長の一字を貰って信親としたくらいの誉れ者だった。島津方は信親の最後の働きを見て、「まことに異国の樊噲にも、やわか劣り給うべきや……」と賞めそやした。

他日、元親は信親のために土佐長浜に菩提寺を建て、また高野山往生谷藤の坊に石塔を建て

た。「功名永クトドムル武門ノ中、劒ヲ按ジテ雄夫ノ勢ヒ空ニ有リ、能ク山川ヲ動カシ汗血ヲ流ス、臘典十二陣ノ風」とは、その偈である。

千石権兵衛秀久は、この敗戦によって豊前小倉城に逃げ帰った。秀久は、さきに讃岐高松城に封じられたのだが、このたびの卒爾な指図を聞いて怒った秀吉は、その封を奪ってしまった。

長曾我部元親は豊後海岸にでて、そこから伊予の日振島にのがれた。この島は宇和島の沖で、水軍藤原純友の本拠地として知られている。大友義統は、家来たちが敗戦によって逃げ散ったので、府内城を守ることができず、その夜、高崎城（野猿で有名な高崎山）に走り、さらに竜王城に移った。ここは宇佐神宮の北にあたる。彼は十六日になって、やっと、小倉にある黒田、小早川、吉川に援助を乞うた。

一方、勝ちに乗じた薩軍は、府内城を占領し、利光城も奪った。こうして島津の武威は、大分附近一帯から、完全に大友の勢力を駆逐した。

そのほか、島津義弘の一隊も豊後地方を攻略したので、家久とともに豊後の大半をほとんど占領した。

秀吉は薩軍が豊後の大半を占領したときいて、まず、北九州にとどまっている毛利、小早川、吉川、黒田らに命令をくだし、くれぐれも自重するようにすすめ、島津方が自然と疲労するのを待つ策をとらせた。

かくて、いよいよ、秀吉みずからの出馬となる。

秀吉としては、薩摩勢の精悍なことを知っているので、前線の軽挙妄動を極力戒めていた。されば、千石の軽挙はもとより彼の許さざるところで、そのため、出先軍のおもわぬ不覚となった。秀吉が権兵衛をきびしく譴責したのは当然のことだ。

秀吉くらい敵を見る男はいない。急遽攻めるべき相手には、果敢な攻撃に移ったが、手強い相手には、けっして軽はずみなことはせず、歯痒いくらいに自重に自重を重ねた。小牧長久手の戦に徳川家康と対峙し、容易に手をださなかったのも、そのためである。また、謙信さえ攻めあぐんだ小田原城を攻撃するときも、けっして性急な策はとっていない。大軍をもって圧倒しながらも、急がず焦らず、悠々と箱根の塔の沢あたりに腰を据え、歌舞音曲を愉しみながら、敵の開城するのを待った。

そのかわり戦機熟したとなれば、遮二無二痛快な攻撃戦に移っている。山崎合戦然り、賤ヶ嶽合戦然りである。「おおぬるやま」とは、信長がいつも手ぬるい攻めかたをする将校を叱った言葉だが、なんでも信長の真似をする秀吉も、この言葉をよく使った。さきに書いた千石権兵衛が引用したのもその言葉だが、権兵衛は秀吉の足もとにも及ばないから、とんだ思い違いをしたのである。

秀吉は、長曾我部、大友の敗戦を聞いて、ただちに大坂から出馬しようとしたが、ちょうど、十四年の暮が迫っていたため、小早川隆景と黒田孝高等が、冬期の渡海の不便であることをいい送って、出馬を春までのばすように頼んでいる。

秀吉が、畿内、東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海の諸道二十数カ国に、出動準備を命じたのが十二月一日で、十五年正月には、元旦を祝するとともに、九州征伐の手配をきめた。

先手は、岡山の宇喜多秀家の一万五千人をはじめ、中川、細川、福島、前田、蒲生、池田に、弟秀長をつけ、みずからの本隊をあわせて、総勢約十二万の動員を命令した。留守部隊として養子羽柴秀次に前田利家、堀尾吉晴、山内一豊をつけて京都を守らせた。

「甫庵太閤記」によると、秀吉、その日の装束は、緋縅の鎧、鍬形打ったる兜を猪首に着なし、

赤地に錦の直垂という、いと派手やかな扮装であったというし、また、それを見送った公卿の感想には、馬数三千、総人数二万五千、本願寺ならびに京、堺の徳人(富豪)以下多勢供に連れ、女房衆も多勢お供し、その有様は、高麗、南蛮、大唐までも攻め入るかと思われた、としてある。

こうして秀吉は三月一日大坂を出発し、十二日には備後赤坂というところで、前将軍足利義昭を引見している。

義昭は、姉川の戦で書いたように陰謀将軍だが、ついに信長に追われて毛利に走り、備後鞆に軟禁同様の身となっていた。両人は酒を汲んで昔語りをしたというが、曾ての前将軍と、当時の陪臣とは今や地位逆転し、一は流謫同様の落人、一は関白殿下の身である。両人とも、うたた人生の変転に思いふけったことであろう。

桜の花の咲きそろう十八日には、秀吉、厳島神社に参詣した。ここで歌合せなどをし、社殿の損じたるを見て、普請の材木五千石を寄進した。

こうして、桜の花の散る三月二十五日には、一行は赤間関(下関)に着した。備前から備後以西は毛利の領地である。おりから、輝元および両川は出陣していたが、毛利の重臣は輝元の命をうけて秀吉の歓待につとめた。これまさに、小田原征伐のとき、駿遠三の領地を通る際、徳川家康の接待の行届いたることと好一対だ。

赤間関では阿弥陀寺に詣でた。ここは源平合戦のおり、壇ノ浦に沈んだ安徳天皇を祀る。早速、歌合せ会を催し、秀吉は、

「波の花散りにし跡のこととへば昔ながらにぬるゝ袖かな」

とものし、悠々閑々たるところをみせている。その余裕といい、軍勢の圧倒的なことといい、すでに薩摩勢を呑んでいる。

その薩摩勢はどうしていたか。おなじ新年の正月を家久は豊後の府内に、義久は日向の潮見に、また義弘は豊後の朽網にあったが、彼らは朽網で軍議をこらし、上方勢の邀撃態勢の作戦をこらしている。

ところが、府内の家久の士卒は、さきの戸次川の勝利に酔って、気ばかり奢り、怠惰の風がようやく見えてきた。家久もこれを戒めたが、陣営に漲る倦怠の空気に、豊後占領の難いのを知り、別隊を後方に発して本国との連絡に備えた。

そのうち、秀吉の大軍が赤間関に到着したとの風説が伝えられた。これをきいた豊後の諸豪は大いに動揺し、はやくも島津から離れるの気勢を示した。もとより、彼らが島津に服したのは、その武力に圧倒されたからで、心から服したわけではない。

これを知った島津軍は、ともかく後退して軍を固めることに決した。すなわち、三月半ばには義弘、家久は豊後境を背進、日向の県(宮崎)に入った。ところが、土豪たちが、俄かに襲撃にでたため、苦戦ののちにようやく日向佐土原に帰るを得た。退却するほど惨めなものはない。島津勢は別に敗走したわけではないのに、後退ときくと、さっそく、まえに服していた土豪にそむかれるのである。

島津勢が日向に撤退するや、伊予日振島に退いていた長曾我部元親も、すわこそ仇討ちとばかり、大友家とともに水軍を率いて沿岸を固め、上方勢の援護にあたった。

この日向、大隅方面には、羽柴秀長を総司令官に、黒田、蜂須賀、尾藤の諸大隊を先鋒として、大軍が押しだした。その道案内は島津から追われた伊東祐兵がつとめた。秀長はみずから毛利、吉川、小早川、浮田などという中国筋の軍団を率いて日向に入り、県城を一挙に抜き、四月六日には、大友方としては屈辱の耳川を渡って高城を包囲した。

高城には薩摩の驍将山田有信がいて、島津方の諸将とともに守り、その兵僅かに千三百にすぎなかったが、かたく城を守って出なかった。

これに対し秀長は、秀吉流に高城の城外に五十一カ所の砦を築き、望楼を造り、秀長の兵一万五千を城東に、大友義統の一万五千がこれに合し、城北には毛利、小早川の二万五千、城西には吉川元春の嗣子元長、おなじく広家の兵一万、城南には宇喜多秀家の兵一万五千を配し、さらに別の連絡路は、黒田孝高、蜂須賀家政、亀井茲矩らが、それぞれ手兵をもって遮断した。長曾我部、大友、野島などの水軍も、この海岸に移動して碇泊し、糧秣の補給にあたった。

4

ときに島津義久は日向都於郡にあって薩軍の兵力を集合中だったが、高城の危急を知り、これを救うため、四月十七日の夜、義弘、家久の二人の弟とともに二万余人の兵を率い、上方勢の根白坂の砦を襲った。このとき島津方は、北郷一雲を左翼に、伊集院忠棟を右翼とし、その半分の勢力をもって猛烈な攻撃をかけた。

上方勢の根白坂の守将宮部継潤は、戦場駆引に老練な男である。彼は薩軍の北上を知り、今夜敵が夜襲をかけてくると予想して、あらかじめその準備にかかっていた。

彼は営塁の前に深さ二間、幅三間の空壕を掘り、その岸に二間木を柱とし、三尺ほど土中に埋めたてて、さらに土堤にも柱を突込み、その上に一間の塀をつくって、蔽いには巻藁を結びつけた。その塀は敵兵がとりついたとき、地につくほどたわんでも、決して柱が抜けて倒れることのないようにした。

その夜十時ごろ、予期通りに島津義弘らは、一万六千の軍勢で襲ってきた。島津方も、この辺

で食いとめなければ、後続の上方勢に押されて、ジリ貧となる可能性がある。いわば島津方にとっては、ここは最前線の防禦だ。されば、その攻撃の意気ごみも初めから違っていた。

が、継潤はよく防戦した。義弘は自ら長刀をひっさげ、先頭にたって攻めてきたので、島津方の諸将も、面もふらずに柵にとりつき、ここに激烈な白兵戦となった。島津勢が柵にとりついた様子は、まるで蟻が真黒にたかったようだった、とある。空壕にも隙間なく匍いこみ、両軍の死傷者はたちまち山をなした。島津勢が塀に手をかけて乗り入ろうとして、槍、長刀、それに鹿の角を結びつけた青竹で突っかかってくる。それを上方勢は柵の中から、おなじく槍、長刀で払って突き落した。

継潤はころあいをみて、柵を結んだ縄を切り、柵を壕の上におし倒したから、柵にとりついていた兵も、壕の中にいた兵も、柵の下敷きとなっておし潰され、島津方では死者八百余人をだした。

継潤の兵は、次につくられたもう一つ内側の柵の中に引込んだが、島津勢はそれでも屈せず、死人の上を走って内の柵を攻め破り、午前二時ごろには三の丸、二の丸を打破った。物凄い攻城戦である。

継潤は本丸に籠ってなおも頑強に防戦し、羽柴秀長の後詰を待った。こうしてその朝が明けた。さすがの島津方も攻めあぐねたが、もはや、退くに退かれぬ有様となっていた。

そこに、籠城方にとっては待ちに待った羽柴秀長の三万の軍勢が、小丸川の対岸まで押し寄せてきた。秀長は、根白坂の砦にとりついた島津勢の状態を見て、

「善祥房(継潤のこと)危うし、はや、小丸川を渡って応援せん」

と馬を川に乗り入れようとした。

すると、尾藤甚右衛門が秀長の馬の口にとり縋って、

「今日の島津勢の勢いを見ますと、武田勝頼が長篠の攻め方と、まったく同じです。この敵方の気勢の前に槍尖をつけるのは、たとえ関白さまでもかなわぬことです。決して川をお渡りあるな」

と諫めた。そこで、藤堂高虎が秀長に代り、搦手から根白坂の砦に入って、ここで継潤と力を合わせて防戦することができた。はじめて、城方と応援軍と合体できたのである。そのうちに黒田、小早川の軍勢も後詰として来援したので、城方も大いに勢いを盛り返し、逆に島津勢が敗退する結果になった。

島津方としては、正面に根白坂の上方勢、うしろに秀長の本隊がきているので、挟み撃ちにされる恐れがある。

このときの島津方の損害は、大そうなもので、義久の甥忠隣というまだ十九歳の若武者は、二重の塀を打破って敵方に駆け入ったが、たちまち鉄砲に仆れた。大体、島津勢の損害は、ほとんどが柵の中から射ちだされる上方勢の鉄砲のためで、上方勢は数百梃の鉄砲の筒先を揃えて、雨霰のように射ちかけたのである。このため、みるみるうちに島津の兵は射たれて空壕の底に転落し、ために深さ二間、幅三間の空壕が死人で埋まった。

この辺もどこか、勝頼と対峙した信長・家康の長篠の戦をおもわせるものがある。長篠の戦では、木柵を組んで武田勢の騎馬隊の突入をとめ、柵にひっかかってまごまごするところを鉄砲で射抜いたのだが、宮部継潤は薩摩勢古来の戦法である抜刀隊の突撃を、空壕と竹木の柵で阻止した上、やはり鉄砲で射ちはらっている。

ここで不思議におもうのは、もともと、鉄砲は薩摩領の種子島に渡って、それが全国にひろが

ったのだから、いわば鉄砲は、薩摩が発祥の地といわなければならない。ところが、島津方はあい変らず、昔ながらの抜刀突撃の戦法を捨てなかった。新来の武器を利用しなかったのは、辺陬の土地ゆえの意識の遅れであろうし、一つは、鉄砲製造の軍需工業が、上方ほどには発達しなかったためでもあろう。しかし、根本は、伝統的な戦術への信仰的な過信にあったといえよう。これも武田の騎馬戦法に対する信仰とおなじだ。

この高城の戦が、ほとんど九州の大勢を決したといっていい。薩軍は附近の村落に放火して敗退している。

なお、この薩軍の敗走を追撃しようと、小早川、黒田らは秀長に進言したが、軍目付尾藤左衛門佐知定は、深追いは不可だと、とめたので果さなかった。小早川、黒田、地団駄をふんで口惜しがったが、軍目付にはかなわなかった。

もし、このとき、上方勢が敗走する薩軍の後方から襲いかかったら、もっと徹底的な打撃を与えることができたに違いない。戦機をみるに敏な点においては、小早川も黒田も他人の追随を許さないのだが、尾藤というボンクラ軍監がいたばかりに、長蛇を逸したわけだ。

尾藤は、このためあとで秀吉に叱られ、千石に代って讃岐の地を貰ったばかりなのに、それを取上げられたうえに、追放となってしまった。

前の千石権兵衛は、逸りに逸ったために戸次川で敗戦し、同じくそのあとを襲った尾藤は、グズのために敵殲滅の好機を失った。軍目付の判断力のむずかしいところだが、新領地の讃岐は両人にとって鬼門だった。

九州役の日向口の進攻は、上方勢にとってはいわば搦手で、本道は、やはり秀吉のひきいる本隊によって進められた筑前、肥前、肥後の進入だ。

秀吉は三月二十八日に関門海峡を越えて、秀勝、蒲生、前田、細川、中川、堀といった軍勢を引連れ、ひた押しに西下した。もっとも、その途中に巌石城という島津方の城の攻めあいがあるが、全体の戦局には関係なく、あとはほとんどレールの上を走るように秀吉は筑後に入っている。

すなわち、秀吉は、筑紫を見物しながら、島津の居城を取巻くべし、という彼一流の表現で悠悠と陣をすすめ、四月八日には攻め落した秋月城のちかくまで陣を進めた。

このとき、立花宗茂が浅野長政の紹介で秀吉の目見えにきている。秀吉は唐織の夜着を着て、公卿流に鉄漿をつけてでてきたが、宗茂を見ると、

「立花、参ったか。ちこう進め」

と、たいへんな機嫌で、葦毛の馬に自分の鞍をつけて褒美とした。秀吉は宗茂が孤塁に籠って、ひとり薩摩の大軍を引受け、屈しなかったのを激賞し、

「東国に本多平八郎あり、鎮西に立花左近将監（宗茂）あり、天下二つの勇士なり」

といったという。

十一日には進んで肥後南関に入り、高瀬に進み、十六日には隈本（今の熊本）にきた。この辺はいずれも、のちに西南戦争でも戦場となっている。隈本城主城久基は人質をだして降った。

薩摩勢は、秀吉の大軍が肥後に進んだと知って隈本城で防ごうとしたが、肝心の隈本城主城久基、宇土城主伯耆顕孝らがみな背いて敵に降ったのを知り、八代を経て球磨川に沿って山間に入り、人吉から大口の線に退いた。つまり、薩軍は国境内に総退軍したわけだ。

秀吉はひたひたと南下をつづけ、隈本から八代にいたり、さらに四月二十五日には、ついに薩摩領の出水に入った。要するに、これは将棋でいえば位負けで、薩軍は秀吉の大軍にじりじりと押し込まれ、薩摩の一隅に王手、雪隠詰めの寸前とはなった。

すなわち、秀吉は五月一日には阿久根に着いて、激戦の地高城を経由し、三日には川内川のちかくの太平寺に入った。つまり、ここから鹿児島までは僅か十余里の距離、一日の行程にすぎない。王手をかけられるあと一手までに詰った。

秀吉が太平寺に本陣を置くと、島津も駒を投げざるをえなかった。鹿児島に戻っていた義久は、四月二十一日、秀長に向けて降伏を申入れた。彼は、その前月二十六日に高城を撤退したので、秀長は、このたびの合戦の殊勲者宮部継潤をこれに替らせた。義久は薩摩隼人的な武人だが、雪隠詰めになるまで駒を握っているような野暮な将棋をしない。彼は彼なりに、自陣を囲ったまま、余裕ののこっている間に秀吉の懐に飛びこんだのである。

また、これを秀吉に周旋した秀長の人物もよかった。とかく秀長は、兄秀吉の蔭に隠れがちだが、この人は性格が寛容で、人望があった。もし、秀長に長命を与えたら、のちの豊臣家の運命も、あんなふうに、はやく終ることはなかったであろう。

秀吉も、はじめから、島津を徹底的にやっつける意志はなかった。彼の面目は妥協にある。なるべく犠牲を少くして、相手をそっくり自分に靡かせることだ。しかも、今度の九州征伐は長途の遠征である。これまでも兵站線の伸びきっていることと、長途の軍旅に兵が疲れていることで、冷汗のでるような危機に見舞われないでもなかった。彼は、薩摩勢を追詰めて、かえって死物狂いの抵抗をうけるのを避けた。このことは、西南の役に、官軍が大きな犠牲をだしたことと思いあわされる。

義久は秀吉からの降伏受諾を受取ると、五月六日、鹿児島を発し、途中、伊集院の一寺に入り、髪を剃った。名も竜伯と改め、太平寺に行って秀吉に会い、その罪を詫びた。

このとき、竜伯が太平寺の白洲に平伏すると、秀吉は、これへ、これへ、とにこにこしながら

さしまねいた。竜伯が慇懃に膝行すると、秀吉は竜伯が刀を差していないのを見て、腰の周りが寂しかろうと、自ら持っていた備前包平、三条宗近を抜きだして、彼の前に投げだした。

和解の盃ごとになって、近侍が酒をつぐと、竜伯の心に、ふと、この酒を怪しむ気持がおこった。その顔色を見た秀吉は、

「酒は要らんぞ。盃の真似ごとだけでよい」

と、空の盃で乾す真似をした。この秀吉の気の配りようは、すっかり竜伯の心を捉え、彼は「今までの敵対、甚だ御後悔にて、凡慮の及ぶところにあらずと感じた」と、島津方の記録にある。この会見は、秀吉にとって大成功だった。すなわち、彼が死んだのちも、島津は家康に反対し、秀頼のほうについたからである。

秀吉は、翌日、島津に薩摩一国安堵の朱印状を渡し、竜伯を鹿児島に帰らせ、人質を受取って凱旋の途についた。

秀吉は、太平寺に約十四、五日滞在し、十八日には平佐に、二十日山崎、二十二日鶴田というふうに帰還の途についたが、このとき義久の弟、島津歳久は、その途上の宮ノ城にあったが、病と称して秀吉を見送らず、その部下も秀吉の行列を射撃した。薩摩のほうにも、この全面降伏に承服しない、終戦直後の一部軍人がいたわけである。

しかし、この途上のわずかな抵抗くらいでは、秀吉の帰還に支障はなかった。

島原の役

乱起る　寛永十四年十月二十五日
（一六三七年一二月一一日）
島原城陥る　同　十五年二月二十八日
（一六三八年四月一二日）

1

寛永十一年から三年間、九州の涯、島原領と天草島では凶作がつづき、飢饉がおこった。十四年の春からは餓死する者がふえた。麦も出来ず、夏は、旱魃で田は地割れし、苗一本育たない。盗賊が横行して人心が動揺し、不安はたかまった。不安に流言はつきものだ。流言は流言を生み、人々の恐怖をさらに煽った。

この不安のうちには、十三年以来、将軍家光の病状も入っている。家光は、この年に入って病勢がすすみ、伺候する者とも会わなくなったので、実は死去したのではないかという風説がたっていた。これも人心動揺の一因となっている。

家光の不例を背景にして、やれ、権現さまの末子、南竜公紀州さまが謀叛をおこされるの、牢人衆が一揆をおこすのという評判がつたわった。

九州地方ではさらに不思議な天然現象がおこった。朝焼け夕焼けは朱を塗ったように燃えたつばかり、秋に入ったというのに、まるで春のように花が狂い咲いた。この秋の末には世の中が火

の地獄になる前ぶれではないか、という不吉な噂もひろがった。

この地方は、旧領主有馬氏以来、吉利支丹信仰が民衆の間にしみこんでいる。次の領主松倉重政は、苛酷な民政をしいた。

慶長年間、ある異国の耶蘇教宣教師が書き遺したという記録には、「今に枯木に花が咲き、東西に赤雲がたなびくときがある、そのときこそ耶蘇教が大いに興隆するときじゃ、また二十五年目には耶蘇教徒は頭に十字架を立てて山野に白旗をなびかせよ」と予言してあった。すなわち、今年がその二十五年目に当る。今こそわれらは伴天連を信じて、年来われらを苦しめてきた松倉重政と天草島を支配する寺沢家に対して一揆をおこすときだ、と、圧政に苦しむ百姓がたち上がったのが、そもそも島原役のはじまりだ。

この一揆の総大将として、みなから擁立されたのが、島原領大矢野村の庄屋益田甚兵衛の一子、四郎時貞という美少年だった。

この騒動を、耶蘇教信者を弾圧している領主への反抗とみるだけでは解けない。従来、天草の乱は、あまりにも宗教戦争としての意義に重点をおきすぎている。実際は、ふつうの百姓一揆に、信念としての耶蘇教が加えられた戦闘である。

一体に天草地方は、自然の恩恵に浴さない土地で、山地が多く、ことに島原半島の中央には雲仙岳がそびえて、一帯は地味痩せ、耕地乏しく、しかも、昔からたびたび凶作に襲われていた。この悪環境の上に、百姓どもを苦しめたのは、その地方をおさめる領主や代官の苛酷な統治だ。吉利支丹大名の有馬が日向延岡に国替えされたあと、一時、長崎奉行の直轄とはなったが、その後、松倉重政が大和五条から移ってかわった。重政は、まず、領民に対して、国禁となっている耶蘇教の弾圧にのりだした。これは、島原の居城を定めて、百姓をその労役に徴発するためにと

った一つの恐喝手段でもある。この工事は数年におよび、領民をひどく疲弊させた。重政はまもなく死に、そのあとを継いだのが長門守勝家である。

松倉父子が、百姓をどのようにいじめたかは、たびたびの一揆の模様を伝え、その原因にまで云いおよんでいる外国商館長の記録で分る。

それによると、松倉勝家は農民に対して、負担しきれないほどの米穀の高を徴し、もし納めない者には簑を着せ、これを首と身体とに巻きしめ、両手をうしろにまわさせて縄で括った。こうして簑虫のような恰好にさせたのち、着物に火をつけた。

火をつけられた者は、火傷するばかりでなく、焼死する者もあり、なかには、身体についた火を消そうとして地に転びまわり、あるいは水の中に飛びこんだりした。この恰好を見物した領主たちは「簑踊り」と云って囃したてた。

のみならず、女たちを赤裸にし、両足を縛って逆さにつるした。その他さまざまな方法で彼女らを侮辱した。そんなありさまなので、なかには、その重税に耐えかね、坐して餓死を待つより死んだほうがましだと、女房、子と無理心中する者もでてきた。

天草島は、この松倉領の対岸で、寺沢領だが、これも苛斂誅求をつづけていたので、いつの間にか、松倉の農民と天草島の農民とが、相呼応するようになったのである。

また、諸書によく引用されている「鮮血遺書」にみえる、ポルトガル船長のドアルラ・コレヤの記録によると、次のように書かれている。

島原領主は、利欲のために圧政をもって人民をくるしめ、年貢のほかに、いろいろな名目をつけて税をあつめた。たとえば、役人を出張させて、煙草一本につき冥加金(税金)として葉一枚を取る、茄子一本につき実一個を納めさせる、あるいは牛一頭に何ほど、家一軒に何ほどというよ

うに課税した。

もし、これを出さないと、厳重な刑罰を課した。たとえば、その妻を捕えて水責めにした。平右衛門という百姓の娘は、水責めにされたうえ、そのあと裸に剝かれて樹に縛りつけられ、松明の火で焼き殺された……。

大体勝家の父、松倉重政は、はじめは耶蘇教に対してわりと寛大であった。しかるに、寛永二年将軍家光に謁してから、幕府の耶蘇教に対する方針がはなはだ厳重なることを知って、急に、その態度を一変、世にもまれな迫害者となった。これ、松倉が小心なためだ。保身のため、家の安全のため、幕府に阿った結果とすれば、その犠牲となった領民こそ、世にもあわれといわねばならない。

彼は領内に対して、徹底的に耶蘇信者狩りをした。前にもふれた通り、島原地方は有馬家以来の熱心な耶蘇教徒の地で、いわば当時の潜在的なメッカだ。領民にころび(転向)を強要しても、一向にきくはずはない。邪宗徒は続々として松倉の手に捕えられた。

松倉は、これら邪宗徒を、雲仙岳の噴火口の中に投げこんだり海のなかに沈めたり、あるいは焙籠と称するものに乗せて、下から火をもって焼いたりした。

この苛酷な弾圧によって、心ならずも転向した百姓は、あとで後悔し、村民二百人以上が島原にころびの起請文を取返しに行ったという話さえある。その首謀者は捕えられて、六人以上が田の中に埋められ、竹鋸で首を落された。領主は他へのみせしめとしたのである。

また、松倉は幕府の御機嫌をとるため、四万三千石の石高なのに、みずから志願して、馬場先門の石垣を築くとき、十万石の賦役を申出た。幕府は、その奇特を賞して所領を六万石にし、かつ、願いの通り十万石の普請をゆるしたという。

元来、幕府の方針は、諸大名の財政疲弊を策し、つねに賦役の負担をかけ、兵備の完全ならざるを狙った。されば、参覲交代と賦役とは、諸大名のもっとも重荷となったもの。ことに老中から普請御手伝のくるのを、どの藩も逃げまわり、この災難をのがれるため、莫大な賄賂を老中に贈ったくらいである。

ところが、松倉は石高に倍する格式で、この労役を引きうけようというのだから、よほどの見栄坊、虚栄家だったらしい。

領主の虚栄は、それで済むかもしれないが、その皺よせは、領民に対する苛斂誅求となる。ここにおいて、こらえにこらえた領民の怒りは一時に爆発した。一に苛酷な搾取に対する憤り、二に信仰に対する弾圧への怒りだ。そして、この両者が一体となってとけあい、鋼のような闘志と、信念とを彼らに持たせた。

当時は全国に牢人があふれていた。徳川幕府の統制によって、旧豊臣方は云うにおよばず、徳川家のためにならぬ大名は、無理な口実をもうけて、続々と廃絶させるか、禄高を減少させた。大坂役後、諸大名の改易されたもの、松平忠輝、福島正則、松平忠直、蒲生忠郷、加藤忠広、松平忠長、加藤明成、堀尾忠晴、京極忠高など、目ぼしい大名だけでも、二十家ちかくにおよび、総計六百万石以上にも達している。それだけ、大量の失業武士をだしたわけだ。

これも社会不安の大きな一つになっている。のちの由井正雪の謀反も、その一端のあらわれである。

そんなわけで島原の一揆も、その首謀者として小西行長の遺臣大矢野松右衛門、千塚善右衛門、大江深右衛門、山善右衛門、森宗意の五人があげられている。そして、前記のように、大矢野村の庄屋益田甚兵衛の子で、十六歳になる四郎時貞が、その総司令となったのである。

彼らが共同謀議した島を、いまでも談合島と云うている。

こうしてガソリンは地に撒かれた。あとはマッチを投げるだけである。

有馬村に吉利支丹百姓が多勢あつまって、昨日召捕られた二人の百姓は、処刑されてすでに昇天している、されば、もはや、自由自在の身であるから、それを拝ませてくれと、旗をたてて押しよせた。代官林兵衛という者は、これを鎮撫するために、家来どもと道に出たところ、激昂した百姓たちにかえって皆殺しにされてしまった。

昂奮した百姓たちは、他の村々へ急飛脚をたて、触状をまわし、代官、加判、出家、社人にいたるまで、ことごとく打殺してしまえ、と煽動した。

このマッチによって、ガソリンは燃え上がった。火は唸りをたて、風をおこして一帯に燃えひろがった。代官は殺され、役所は焼かれた。

松倉の家来たちは、これを退治するために有馬村に赴いた。一揆は、北岡という土地に八百余人ばかりがたむろし、銃口をそろえて彼らの来るのを待ちうけた。この機に乗じて、別働隊は一気に島原城を乗っとることにした。

これを見た松倉の家来は、あわてて退却し、今度は逆に籠城の用意にとりかかった。寛永十四年十月二十五日のことである。

2

一揆に加勢したものは、口ノ津村、加津佐村、小浜村、串山村、千々石村、有家村、堂崎村、布津村、深江村、木場村などの百姓たちだったが、城方でも備えをたて直し、一揆退治のために、三百余の兵を率いて深江村に向かった。

これは一揆の虚を衝き、ために、一揆方では九十余人が討取られた。一揆は猛りたち、布津、堂崎、有家、有馬の百姓たちの勢力を糾合し、勢いを盛りかえして、討伐隊のあとを追った。

さらに、遂に島原の町に押しよせた。このときの勢は三千余人にもなっていた。

城方では、鉄砲を射ちかけて懸命に防戦したが、一揆は島原の町の寺院を焼きはらい、多数の民家に放火した。城下の町人は城方から鉄砲や槍を借りうけて防戦に力をつくしたが、城でも、一時は大手が破られたくらいに危機にさらされた。だが、鉄砲が多かったために、ようやく一揆を退散させることができた。百姓たちは城下で略奪を行って引揚げた。

城下の町人のなかには、一揆に手伝いする者が少くなかったが、同時に、城中にもこれに呼応する者があらわれた。やはり吉利支丹の信者だったためだ。そこで、城方は、足軽、中間、召使にいたるまで、これを詮索して百余人を殺した。また、有馬村から鍛冶職三十人が入っていたが、これらもことごとく斬られた。

だが、そうした弾圧にもめげず、彼らのなかには、城方の武器を盗んで、一揆方に味方して逃亡する者がつづいた。

城方は、一揆に荷担しなかった村々の百姓に、武器、鉄砲をあてがって、一揆の討伐に使った。だが、そのなかからも、かえって、その武器を携えて、一揆方に参加した者も少くなかった。彼らは城方の命令で、やむなく一揆討伐に使役されたものの、心は服していなかったのだ。今の南ベトナムにおけるアメリカ兵とベトナム解放戦線との戦いに似ている。

こんな具合だから、松倉のほうでは一揆討伐の効果があがるはずはない。松倉ではすぐに、在府の領主のもとと、豊後府内(大分)の代官のもとに急使をたてて報告をした。と同時に、隣藩細川、鍋島両家にも援助を乞うた。

こうした間にも、松倉家の米倉が三方から一揆のため不意に襲われて、警備軍が敗走したりして、今は、ただただ城をもちこたえるだけで精いっぱいとなった。とても一揆方と戦いをまじえる余裕はない。

この情勢から、島原半島の西北部にも一揆がおこり、また長崎の背部にあたる茂木、日見両村でも、村民の動揺がおこった。長崎に波及すれば、たいへんなことになる。

当時、長崎奉行は江戸にいたが、大村藩では、長崎の町年寄からの要請によって出兵し、町の警固にあたった。茂木、日見の動揺は、代官の適当な措置で、一揆までにはならなかったが、もし、ここで一揆がおこり、長崎の騒動となったら、どんな国際的な情勢にまで発展したか分らない。

東大史料編纂所の岡田章雄は書いている。

「耶蘇教擁護を標榜して起った一揆の勢力が、もしも幕府の直轄に属するこの港に及んだならば、事件は地方的な問題から一躍して国際的な色彩をもつ由々しい大事と化したに相違ない。長崎は耶蘇教徒にとっては最も記念すべき由緒ある土地で、しかも当時はまだ媽港との間に葡萄牙の商船が往来している。一揆が長崎を陥れてここを本拠としたならば、或は教徒の援助を名として武器や兵力の供給を海外に仰ぐことが出来たかもしれない。尤も、一揆の計画に外国人宣教師が参加していたわけでもなく、従って事前に媽港その他の地方との間に連絡が取れていたわけでもなく、また新教国和蘭陀の勢力のために東洋貿易にかなり圧迫を受けていた葡萄牙・西班牙などの旧教国に援助を期待することが出来たかも疑わしいのであるけれども、一揆勢の意図はともかくも速に長崎を陥れることにあった。全国の教徒に呼びかけ、叛逆の意図を抱き、切支丹に心を寄せている諸侯に訴えようとするのである。幕府当局の危惧するところもまた同じで、しかもまた、

それが同じ教えを有する欧羅巴の強国の勢力を背景にして起つに至るかもしれないとの懸念があったのである」（大日本戦史第五巻）

幕府が、この一揆を重大視したのはいうまでもない。

しかし、幕府がその報告をうけて命令を発動するまでには、そうとう時間がかかった。当時の急報といえば、早馬か早駕籠しかない。これが九州の西端から、山陽道、東海道を走ってくるのだから、間にあった話ではない。

そこで、幕府は九州に事変がおこった場合を考えて、府内に目付をおいた。いわば、ここが幕府の出先機関であるが、前にふれたように、危機に瀕した松倉家の救援の訴えをうけた細川、鍋島でも、その兵出動の可否を、府内の目付に伺っている。

これは家康の定めた法度によって、幕府の許可なくして濫りに他領へ兵を動かすことが出来ないからである。どんな緊急事態になっても無許可で兵を動かすと、あとで譴責をうけ、改易となるおそれがある。ところが、府内の目付も、事態のあまりの重大さに自主的な決断ができなかった。

「斯様に御座候故、彼等国（肥後）へ加勢を乞申候。然れども、御法度故上意無くては罷不成候故、豊後の横目衆（代官）へ尋ね候へば、江戸に御意を得に差遣し候間、御諚次第相待候へと御申付候故、明日城落候へども御下知以前は見物にて御座候」（伊達文書）

これは、肥後熊本城主細川忠利が、江戸屋敷から仙台の伊達忠宗に宛てた手紙の一節である。つまり、何ごとも江戸老中の命令がこなければ、たとえ明日、城が落ちても、それまでは騒動を見物するほかないというのである。大名を規制する徳川幕府の統治政策は、こうした緊急の場合、自らの規則が身動きのならない枷と化し、破綻的な矛盾となっている。

一揆の勢力が、こうして島原半島の南半部に蔓延したとき、十日ほどおくれて天草島でも一揆が勃発した。これをきいて島原領から海を渡って、天草に手伝いに赴いた人数は、おおよそ五、六千人ともいわれている。両地方の一揆勢は、その総帥として、益田四郎時貞を頭にいただいたので、四郎は有馬村大江に渡って、ここに総司令部をかまえた。そして彼の周囲には、さきに書いた牢人たちが、作戦参謀として蝟集したのである。

さて、松倉家から一揆蜂起の報告が大坂城代阿部備中守のもとに着いたのは、十一月五日であった。阿部も独断では西国大名どもに下知することができない。彼もまた、江戸に指揮を仰ぎに使をやった。

ただし、阿部は府内の目付よりは少しマシだった。すなわち、江戸に注進する往復の時日を考え、その間に一揆の叛乱増大が心配されるので、とりあえず、自分の独断で、各隣藩は領国内の警戒を厳重にし、内から一揆方に呼応する勢力をおさえるように指令した。もっぱら一揆が他藩に及ばないための処置で、いうなれば、防備いってんばりの消極策だ。阿部とても、隣藩の兵力を松倉領に越境させるほどの勇気はなかった。

さて、大坂からの注進が、江戸に到着したのはいつだったか。松倉方との最初の交戦は十月二十五日で、この報告が大坂に達したのは十一月五日であった。そして、江戸老中のもとに届いたのが九日であるから、島原から急使がでて、実に十四日目である。火急に間にあう話ではない。

天草、島原の一揆連は、彼らを迎えて一戦しようとし、一万二千が天草の本渡で戦った。その結果は、唐津勢のさんざんの敗北だった。

じつは、唐津勢の三宅藤兵衛が本渡にきたとき、百姓どもは柔順をよそおって、敵の攻撃をおさえている間に、自分のほうの人数の増大をはかったのである。のみならず、討伐軍の計画はこ

とごとく一揆方にもれていた。これは、本渡附近の百姓が、唐津勢に偽装して味方になっていたのが通謀したからである。このへんもベトナム人民戦争とおなじだ。

唐津勢の主将三宅藤兵衛は戦死、並川九兵衛という大将も討たれ、全軍は敗走して、ようやく富岡城に逃げかえった。

勢いづいた一揆勢は、さらにこれを追い、富岡にちかい部落を焼きはらって本拠を置いた。総勢一万二千。これを五部隊にわけ、いずれも、白地に十字を描いた旗を立てた。二十五年目には、山野に十字架を立てた白旗が充満するという、予言通りになったわけだ。吉利支丹はいずれも、死せば天にめされるとの信仰から、文字どおり死を怖れなかった。

城方もまた、海岸につないだ船を、すべて唐津にもどさせて、城兵の士気をたかめた。十一月十九日の朝、一揆勢は、一挙に城を落そうと焦って城壁にとりついた。これを待っていた城兵は、鉄砲を一斉につるべ射ちにした。一揆方では、たちまち二百余人の死傷がでた。このため、さすがの一揆勢も気勢をそがれた。機をみた城兵が城門を開いて逆襲にでたので、一揆勢は敗退した。

しかし、城攻めを断念したのではなく、彼らは再挙の準備にかかった。一揆方は、城兵の鉄砲を防ぐために、八百六十ばかりの竹束をつくった。そして二十二日は、一万余人の一揆勢が、竹束を弾丸よけとして、城を何重にも取りまいた。城内の水口も断たれた。一揆勢は、ほとんど抵抗をうけずに城門を破り、三の丸、二の丸も占領した。そして、まさに本丸が陥落寸前となった。これは城方の作戦だった。

それまで満を持していた城方では、かねて用意していた火箭を一斉にはなった。弓箭のさきに油を塗り、火をつけたもので、これが寄せ手の陣の前にある竹束にあたると、竹束はたちまち燃え上がった。この戦術は、西部劇のインディアンの襲撃法をおもわせるものがある。

寄せ手は、竹束が爆竹のように弾けて燃え上がるので、たちまち混乱した。意表を衝いた城方の作戦に一揆勢が狼狽し、騒いでいるところを、城兵は、鉄砲を一斉に射ちかけた。そのため、寄せ手の大将はじめ、三百余名が弾丸にあたって死んだ。さすがの一揆方も、たまりかねて後退した。戦局一転、寄せ手は敗走し、島原勢は口ノ津に帰り、天草勢は上津浦に引きあげて行った。

3

ようやく注進の届いた江戸では何をしていたか。十一月九日、注進に接した老中は、さっそく会議を開いている。そして、翌日、板倉内膳正重昌を上使とし、目付石谷十蔵貞清を副使として、征討に向かわせることに決した。

在府の松倉勝家は、すみやかに所領にかえり、もし、松倉の手で一揆が退治できないときは、隣国の鍋島、寺沢は松倉に加勢せよと、老中から命じられた。

板倉重昌は、京都の名所司代といわれた板倉伊賀守勝重の二男で、おなじく名所司代といわれた重宗の弟にあたる。ついでながら、大岡裁きの話は、中国ダネと、この板倉勝重、重宗の裁判のことが、大ぶん紛れこんでいる。

さて、重昌は、はやくから家康の側に侍って、近習としてはもっとも寵愛された。彼は任官して内膳正と称した。

その名前が挙がったのは、大坂冬の陣後の和睦のとき大坂城に入り、秀頼から起請文を受けとり、みごと上使の役目をはたしたことであろう。ときに壮年二十六歳。家康のおもう通りの講和条件を成立させた。

家康の死後秀忠につかえ、御書院番頭となった。つづいて三代家光も重昌を尊重した。彼が征

討使に選ばれたのも、家光の意見が大きく動いたとみられる。

しかし、悲しいかな、重昌は小禄であった。すなわち、彼は三河額田（愛知県）において一万一千石の領主にすぎなかった。西国の鍋島、細川その他の大名を指揮するには、なんといっても、その家禄が不足であった。そのことに、はやくも気づいたのは、柳生但馬守宗矩だ。

重昌が十一月九日、老中の土井利勝宅に呼ばれて、上使の役目を云いわたされるや、このことをきいた餞別の客が、板倉邸に詰めかけた。重昌は、そのなかで、出陣の支度、人数の配り、武具、馬具の取りそろえに至るまで、てきぱきと整えたので、目のあたりにそれを見た者は、日ごろの彼の心がけに、感ぜぬ者はなかったという。

ところで、宗矩は、ちょうど、そのときよその家で猿楽を見物中であった。彼は重昌出陣のことをきくと、これはいかんと思い、その席上で主人から駿馬を借りうけ、すでに出立した重昌のあとを追うた。しかし、品川にきても追いつけない。川崎に行っても姿が見えぬ。宗矩は、しかたなく馬をかえして、夜中に登城し、家光に謁見した。すなわち、諫めて曰く、重昌ごとき身分軽い者を、上使として遣さるるならば、彼を死地に陥れるようなものだ、と。家光もその言を了承したが、すでに重昌の出立後とて、どうする術もなかった、宗矩の言葉は、果然、のちに的中したのである。

重昌は、かくて子の重矩とともに、十一月二十八日、豊前小倉に着き、十二月一日に肥後の高瀬に入り、ここで豊後府内の目付その他の幕吏や、近国の諸大名の家老たちと会合し、軍議をひらいた。

重昌は、肥後、肥前、筑後三国の兵をもって一揆討伐の命令を受けてきている。そこで彼は、鍋島、有馬、立花、細川の各藩に出兵を督促し、十二月五日、島原に着き、鍋島元茂らの出迎えをうけ、島原の城に入った。ここで江戸から急遽下っていた松倉勝家に迎えられた。松倉は、すなわち、今度の一揆蜂起の責任者である。

ここで一揆の模様をきいたが、一揆方はみな原城に籠っていることが分った。

板倉重昌は現地について、一揆が予想をはるかにうわまわって多数であり、勢いの猛烈なのにおどろいたに違いない。彼が江戸できいた話では、一揆はわずか二、三千人だということだった。しかるに、現地につくと、その数二万あまりである。彼はさっそく隣国の大名の出兵を早馬で催促したが、これは予定の計画だったとしても、江戸と現地との情勢のちがいに、定めし愕然となったことと思う。つまり、見るのと聞くのとは大ちがい。ここにおいて重昌も、すでに悲壮な覚悟をきめたことと思われる。

さて、賊徒のたて籠る原城は、数年前までは有馬の居城であった。松倉も、一時ここにいたこともあるが、のちに島原城を築いて移ってからは、原城はまったく廃城となっていた。この城は断崖の上にたち、三方は海にかこまれ、北側の一帯は潮田や沼田で、堅固な要塞となっていた。一揆勢は、ここを修理し、討伐軍を迎えうつため防禦をかためた。

寄せ手のほうでは、鍋島と松倉との先陣あらそいがおこったが、板倉の裁断で、上の手は鍋島、浜側は松倉と定めた。そして、九日、寄せ手は合計二万余で原城にとりかかった。

来てみると、城門にはクルスの旗印をかかげ、要害堅固である。寄せ手も、たかだか百姓一揆ぐらいに思っていたところ、これを見て大いに仰天した。

原城の防備はどうだったかというと、まず本丸は石垣が残っていた上を塀でかこい、本丸から二の丸の間、北側にあった水の出を深く掘って水源とした。

城の外側一帯にも塀をめぐらし、彼らが天草から渡ってきた船は、打ちこわされて、その裏が

こいに使用された。塀の内側には、弾丸や箭を避けるために壕を掘り、柵にそうて二歩ごとに箭眼をもうけて、鉄砲や弓を伏せ、石礫なども無数に用意した。石火箭は八十梃、五十匁玉から二、三十匁玉までの大筒が百梃、二十匁玉から十匁玉までの箭風筒が三百梃、六匁玉筒千梃を備えた。

また兵糧としては、近村から米や粟などを無数に運び入れた。松倉家の倉から奪いとった五千石の米と、弓、鉄砲、弾丸薬などを格納した。

城の周囲には、天使やクルスを描いた旗がかかげられた。いずれも、天草や島原の町家から略奪した布で製作したもので、中央に大きな盃を描き、その上に円形に十字架、左右にこれを礼拝する二天使を配し、上には葡萄牙語で「讃仰してあれ、いとも尊き秘蹟」と記された（岡田章雄「天草の乱」）。もって一揆勢の気魄が想像される。

しかし、寄せ手のほうは、大坂役以来すでに二十数年の、泰平に馴らされてきている武士ばかりだ。また、いま戦士としてこの地に従軍している者は、戦争の体験がなく、実戦を見たこともない。元亀、天正のころのいくさ話はもとより、大坂の役でさえ、遠い昔のできごととして、話に聞いているだけだった。

「東軍の方には臆病風にとりつかれた者も少くなかつた。奮戦したのは寧ろ捨鉢の牢人共であつた。島原役の如きは徳川幕府掉尾の戦争であるが、その実、戦争を欲せざる者共の戦争であつた。命が惜しき者共の戦争であつた。彼等が一挙にして原城を抜き能はなかつたのは、叛徒の強きよりも、恐らくは征討軍の弱き為であらう。」

とは徳富蘇峰の評だ。

いわゆる叛徒のほうでは、永いこと領主に痛めつけられたという復讐観念と、吉利支丹信仰という共通の信念とで、団結は堅固であった。しかも、彼らには、小西、有馬の旧臣たちが相当入

って作戦をし、戦闘を指揮した。彼らの多くは、白木綿の着物を身につけ、頭の前や後ろの髪を剃ってクルスを表わした。

城の中央、小高い所には十字架がたてられ、昼と夜と一度ずつ、城内の者はその前に集って祈禱をした。寄せ手のほうで、甲賀衆の忍びの者を入れたところ、彼らの話す地方語が分らず、それに吉利支丹の言葉をまじえて話すので、すぐに正体が露顕そうで、長く忍ぶことができなかったとある。忍者も役には立たなかったわけだ。

彼らは口々にゼスス・マリアを唱えて、死を考えずに突進した。これでは、柔弱に馴れた寄せ手の武士が、かなうはずはない。

さても、板倉重昌は、十日に鍋島勢と松倉勢を先手に、原城をかこんで鉄砲を射ちかけたが、城兵もさかんに応戦して防いだので、寄せ手は、さんざんのていたらくで引きあげた。このとき立花左近将監忠茂も到着し、寄せ手に加わっている。

翌十一日も双方鉄砲を射ちあわせて日を送ったが、十四日には、有馬忠頼が着陣したので寄せ手は総勢三万ばかりとなった。

そこで十二月二十日を総攻撃の日と決めた。その談合は、二日前に板倉の陣所で諸大名が会合して行われたが、その席で副使の石谷十蔵は、

「有馬、立花、松倉勢が三の丸大手のほうに闕を作って攻撃をかければ、城中の者はそっちのほうに引きつけられるから、別の場所が空虚となる。そのすきに、鍋島勢が攻め入ったならば、容易に城を乗っ取ることができるだろう」

と意見を吐いた。軍議はその通りに一決した。

ところが、翌る日になって、立花、有馬、松倉は、いずれもこれに同意せず、板倉もまた、天

草出崎の足場がよくないのを見て、鍋島勢を、むしろこっちのほうに向かわせ、大いに擬勢を作れば、城の搦手も本丸も、必ず騒動するに違いない、その機に乗じて立花、有馬、松倉の三手が、一緒になって大手に攻め寄せたほうがよろしかろう、と云った。石谷案とは逆になったわけだ。これが評議一決となり、二十日を総攻撃と触れだしたのである。

さあ、こうなると、鍋島のほうが納まらない。自分のほうは、ただ鬨の声をあげるだけで、手柄は、大手に向かった他家の者がたてることになる。われらは、案山子同然となるのは無念なりとて、若い者は小川瀬を越えて城下に潜伏し、大手のほうで鬨のあがるのを合図に、一同城に攻め寄せようとした。

これは明らかに軍律違反だ。鍋島勢の陽動作戦が成功してこそ、大手の突入が可能なのに、功名あらそいのために、鍋島は抜けがけを狙ったのである。

4

さて、いよいよ総攻撃のときがきた。かねて手配の通り、鍋島は、エイ、ヤー、オーとばかりに、派手な鬨の声を三度あげた。忍びこんだ鍋島の家来たちは、この声とともに、いちはやく城中に攻め入ろうとした。ところが、この下手な小細工は、たちまち敵方によって仕返しをうけ、城中より射ちだした鉄砲、石、材木などで、相当な物頭級が、たちまち十人ばかり討死した。

大手方に向かった立花勢は、陽動作戦組の鍋島に鬨の声があがったので、一気に城に攻めのぼった。しかるに城内では、それぞれ持場を決めて、たとえ他の持場が危うくなっても、決してそこには、応援のために移動しないことを決めていたので、立花勢が大手に寄せると同時に、おなじく鉄砲、木石を一斉に放った。このため立花でも、歴々の重臣三十人が手負い、ほかに雑兵あわせて三百八十余人が仆された。

怒ったのは大将左近将監忠茂だ。その父宗茂は、九州征伐のときに説いたように、世に知られた名将である。その子忠茂、味方の惨敗を見て、みずから采配をとって進み、しきりと奮闘したが、敵の弾丸が脇差の鍔と鞘にあたるくらいに接近した。

このありさまを、本陣から見ていた板倉重昌は、早々、かねての手はずの通りに、城にかかれたしと、二度までも使をだして催促したが、松倉は頑として云うことをきかないで、その場にじっとしているだけだった。そのため、この総攻撃は、ものの見事に失敗した。

松倉の言分というのは、立花勢が自分たちより先をこしたのは武道に反する、そんな連中とは、とても一緒に働けないというのだが、もともと、こういう大騒動になった原因は、松倉の苛酷な民政からおこったことだ。いわば松倉は、今度の事変の張本人である。しかるに、卑怯な彼は、おのれの責任を反省せず、いたずらに、立花の先を越したことのみを怒って、板倉の矢のような催促にも、従おうとはしなかった。

要するに、寄せ手は徹頭徹尾、統一がとれてなかったのだ。これは、上使板倉重昌が小禄ゆえに、九州諸大名に軽蔑されていたからで、まさに柳生宗矩の危惧が的中したのである。

総攻撃が失敗したので、諸大名は、それ以来、ただただ自分の持場をかためるだけになっていた。こうなると、城中からすっかり軽蔑されたうえ、城方の団結をいよいよかためさせるばかりになった。

江戸表では、はじめ、たかだか、百姓一揆にすこし毛のはえたくらいの騒動だと思っていたのだが、櫛の歯をひくように、次々とくる状況報告は、ことの重大さを知らせるものばかりだった。ここで、老中もはじめて愕然となり、さらに討伐使として、一代の知恵者、松平伊豆守信綱、戸

田左門氏鉄を差しつかわすことになった。信綱は武州忍城主で、老中の一人、ときに四十三歳の、脂の乗りきった男盛りだ。また、戸田氏鉄は六十一歳の老将ながら、美濃大垣の城主で、先年の関ヶ原、大坂役には武名をとどろかした一人である。

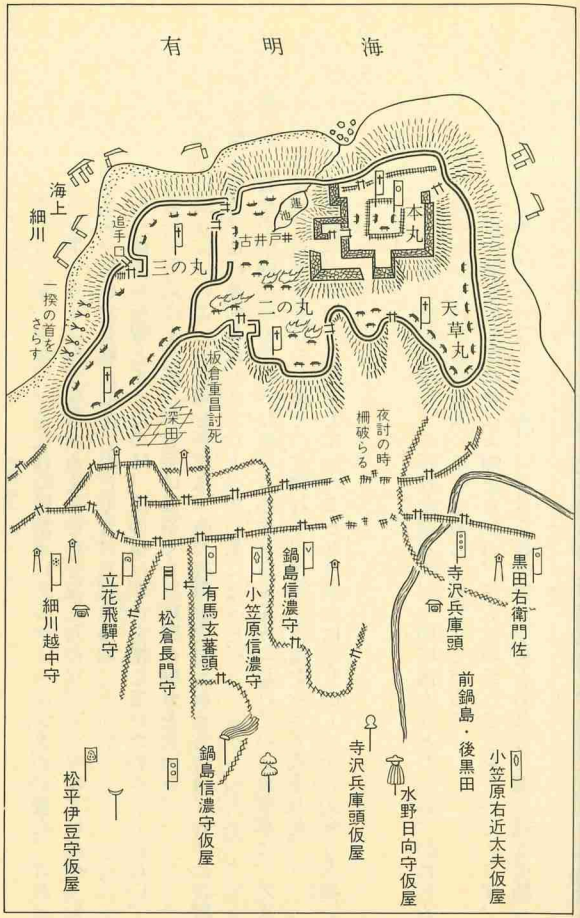
幕府としても、器量人とはいえ小身の板倉重昌を、討伐使としたことが失敗だったのを認め、ここに老中と、戦場駆けひきに老練な武将を、あらためて任命したのだ。大物の任用である。

だが、この報は、板倉重昌に大ショックを与えた。彼は、自分の任のいたらざるため、あらためて松平、戸田両使の派遣となったことを思い、このうえは、ただ斬死するばかりだと、ひそかに覚悟を決めた。すなわち、彼は、松平、戸田の来着がちかいのを知って、この上は面目にかけても、彼らの参着に先立ち、原城を抜くか、さなくば討死するばかりだと決心した。それが、寛永十五年正月元日の、第二回目の総攻撃である。

元日をえらんだのは、敵も正月なら油断しているだろうということと、攻撃時期の切迫からだった。元旦のため、敵の虚をつこうとする板倉の計画は、不幸にして誤算だった。なんとなれば、耶蘇教徒は元旦を祝賀する習慣を持っていなかったからだ。

のみならず、夜明け前、有馬勢は進撃の合図を待たずに、城に向かって、独走した。すなわち、有馬忠頼を先頭に、三の丸の濠際まで進んだころ、かねて、この日総攻撃のあることを探知していた城方は、たちまち大木、巨石を投下し、弓、鉄砲を一時に射ちはなった。有馬勢、案に相違して、みるみるうちに千余人ほど殺されたので、退こうとすると、今度は城兵が木戸を開いてさんざんに追撃した。城兵も心得たもので、有馬勢を十分にうちこらすと、たちまちさっと城中に引取ってしまった。

このとき他の大名も、有馬の敗走を傍観している。なぜ、だまって見ていたかというと、その



言訳に、闕の声はたしかに聞いたが、軍議で約束した時刻と違っているので、まさか有馬勢とは思わなかった、というのだ。

およそ戦争とは、緊密な連絡を保ち、一糸乱れぬ統制下にあるチームワークが必要だ。さもなければ抜けがけは厳しく軍令の禁じるところ。有馬があえてそれを犯したのは、いつに功名にはやったとはいえ、やはり、総司令官板倉を軽んじていたとしなければならぬ。

また諸隊も、有馬勢の潰走を坐視していたのは、彼の抜けがけを憎んでいたのかもしれない。が、いずれにしても有馬の敗走によって、寄せ手ははやくも総攻撃の効果を失った。

こうなれば城中のほうも、いよいよ防禦を厳重にする。有馬が先にかかったのは、わざわざ敵に、さあ、攻撃するぞ、という前ぶれを与えたような結果になった。

時刻が移って、寄せ手一同が攻めかかったが、はじめから足並みの乱れている攻撃軍に、効果があがろうはずはない。寄せ手の討たれるもの数知れず、諸兵、雪崩をうって敗走した。

この体を見た板倉重昌は、かねて覚悟をしていたこととて真先に乗り出し、金の采配うち揮い、松倉に向かって、

「早々、先を駆けてかかられたし」

と下知するが、松倉は、敵の鉄砲の厳しさに怖れをなして、一向に進もうとしない。われらも今朝からの戦いで、手の者多く討たれたと云ってしゃあしゃあとしている。

重昌は苛だって、石谷十蔵とともに諸陣に下知をしたが、誰も彼の云うことをきいてくれず、一人も進む者がない。味方に見はなされた重昌は今はこれまでと手勢を引具し、濠を越して数十丈の塀をよじ登りはじめた。

死を覚悟の彼は、城中から飛んできた大石で兜が砕かれたが、屈せず、さらに石垣をはい登る。

城中の者は、すわ敵の大将よと、われもわれもと重昌の登っている塀の上に集った。その鉄砲の一弾が、彼の乳の下にあたった。まさに、数十丈の塀を乗りこえるばかりのときだった。

さすがの重昌も、そのまま仆れた。家来が、その身も深手をおいながら、主人の屍を肩にかけ、塀をはい下って本陣に引返し、やっとその死体を収容した。

板倉重昌は、この攻撃にさきだって、副使石谷十蔵に書を送り、

「去年の元日は江城にて烏帽子の緒を締め、今日は鎮西原の城に兜の緒を締む。はやうちたち候。何事も変りゆく世の習、今更に候。

新玉の年にまかせて咲く花の名のみ残らば　魁と知れ」

一方、石谷十蔵も、重昌につづいて南の塀下にとりついたところを、敵兵が長身の槍をもって、肩さきを上から突き刺した。家来がその敵を突き伏せている間に、石谷はようやく後退した。この石谷十蔵のことは、山本有三の小説「不惜身命」にくわしく出ている。

この戦いでは、寄せ手の討死、手負いが四千人以上に達したのに対し、城中では手負いと死人がわずか九十人ばかりだった。ことに立花勢は、第一回の総攻撃にほかの者が応援しなかったのを憤り、この日の総攻撃には、浜手に向かう命令を受けていながら、云うことをきいていない。こんなことでは敗けるのは当然である。

それにしても、気の毒なのは板倉重昌、ついに指揮不統一の責を負って、自殺したようなものだ。

板倉の死は江戸を震駭させた。老中部屋では急遽九州諸大名の帰国を命じ、前記の参加諸部隊のほか、あらたに黒田、小笠原、水野、島津に動員をかけた。これらの諸部隊は、松平、戸田の到着とともに、約十万の大軍にふくれあがり、原城をかこんだ。

しかるに、城中は泰然自若として一向におどろかず、十万の兵を眼下に睥睨し、さらに開城の

様子をしめさなかった。彼らはたびたび太鼓を打ちならして叫んだ。

「かかれかかれ、寄衆もっこでかかれ、寄衆鉄砲の玉の有らん限りは。有がたの利生や、伴天連様の御陸で寄衆の頭をずんと切支丹」

松平信綱は、性急に力攻めすることなく、かねて連れてきた鉱山の人夫を使用して、地下道を掘らせようとしたが、これも成功しなかった。また、甲賀衆を使って忍びこませ、城中のようすを探らせようとしたが、これも前記のように、言葉の不通で効果がなかった。

しかも、信綱は慎重に包囲をかためた。攻め口は、いずれも柵を厳重にし、濠を二重に掘り、築山を築き、望楼をもうけ、海のほうは細川、鍋島、黒田の船によって海上封鎖をおこなった。その兵力総計十二万五千人と伝えられている。この包囲は長陣だったため、京、大坂から商人たちを呼びよせ、いろいろの日用物資を売らせたという。

また、当時、武士の失業者は、このときとばかり、手柄をたてて、いくばくかの禄にありつこうとし、諸家の陣営を借りて戦いに参加したともいわれている。が、いずれにしても、信綱の慎重な包囲戦は、秀吉の小田原攻め、同弟秀長の九州攻めにおける高城包囲戦と同じに、完全に敵の糧道を断つ作戦に出たのである。

果然、この効果はあった。糧道を封鎖された一揆は、次第に不安を生じ、この不安はさらに落人の続出の心配となってきた。ここで城内では、坐して飢餓を待つより、むしろ進んで城外に打って出て、敵の糧食を奪うの策に出た。

5

それより前、攻城戦には和蘭陀船が砲撃に参加している。これは、当時の日本船では船も小さく、鉄砲だけでは、原城の城壁が高いために効果を奏せなかったので、当時平戸に碇泊していた和蘭陀船に回航を命じたのである。

この和蘭陀船を攻囲軍に参加させた顚末は、当時、長崎代官だった末次平蔵が斡旋したもので、平蔵は、さきに板倉重昌が上使として派遣された報らせを聞き、平戸の商館長クーケ・バッケルに宛て、将来、日本貿易に有利な地位を占めるためには、この際、和蘭陀船を幕府方に参加させたほうがよい、とすすめたのだ。つまり、幕府に恩を売っておけば、この先何かと商売上の見返りが取れる、と勧告したので、クーケ・バッケルは、デ・ライプ号とベッテン号の二船を平戸から回航した。しかし、この両船が現地に到着したのは、重昌が一月一日の総攻撃に討死を遂げた十日ものちのことだった。

一月六日、右の商船二隻は有馬に回航し、クーケ・バッケル自身もデ・ライプ号に乗って、旧暦一月十一日午後に、原城ちかくの地点に碇泊した。ここで一行は、重昌の後任松平信綱から丁寧な待遇をうけたが、初めクーケ・バッケルは城の模様を観察して、砲撃がほとんど効果を齎さないだろうと直感した。

彼の観察によると、城内の家屋は藁や蓆で出来ているので、弾丸が当っても穴をあけるだけで、これを爆破させるわけにはいかない。防塁の壁の下部は粘土で築かれ、城砦の上部は巨石をもって築かれてある。大砲は攻城用のものではなく、海上戦闘用のものにすぎない。しかも、砲撃を開始すれば、敵城の背後には友軍の陣地があるので、それに弾丸が落ちてくる危険もあった。

しかし、デ・ライプ号は十三日に砲撃をはじめて、二十七日までに都合四百二十五発を発射した。だが、予想どおり、この砲撃はそれほどの効果はなかったのみならず、この戦いに外国人を参加させたことは、敵側ばかりでなく、味方からも非難の声があがり、細川忠利も信綱にこれを

進言したという。つまり、内戦に外国軍隊を参加させたことが反省されたのである。信綱も二十七日になって和蘭陀人の砲撃を全部停止させ、その労を謝して、平戸に両船を帰させている。

もっとも、城方からすると、和蘭陀船の参加は心理的にかなりの打撃だったに違いない。和蘭陀もキリスト教だが、これは新教で一揆方の奉じる旧教ではない。だからこそ和蘭陀船も商売上の利益とわりきったのと、新旧宗教の相違から砲撃に参加したわけだが、城方では同じキリスト教徒の手で砲撃をうけたのだから、一時に士気が沮喪したといわれている。

さて、信綱は、当時熊本に拘置されていた益田四郎の母、姉、妹、四郎の姉婿や甥などを正月の末に本営に移し、二月一日には四郎の姉婿の小左衛門に手紙を書かせ、これを甥の小平に持たせて城中に送らせた。

その要領はこうだ。

――寄せ手の軍勢は数十万に達している。城から脱走する者は、命を助けたうえに金銀を与えられ、さらに、その在所の内で当年は作り取りにさせるというている。無理に吉利支丹にすすめられた者は、その旨を聞き届けられたうえで生命は助けられる。しかし、むろん、吉利支丹宗に背きがたい者は牢につなぎ相果てることになる。寄せ手は大軍をもって囲んでいるうえ、柵の所を厳重に封鎖している。江戸からの命令でも、城内の全員は干し殺しにするようにと通達が来ている。

城中の大将は四郎という者だとは分っているが、事情を聞くと、彼は十五、六人にすすめられて今度のような一揆を起したと思える。したがって、四郎の名を借りて、無理に一揆に引入れられた者もあると思う。それで、たとえ大将四郎でも、帰順を申出た者は赦免になるとのことである。

自分たちがこのようなことを云うのは命が惜しいからではなく、城中から帰順を申出たい者があれば、それを出されたうえ、われらは城内に入り、残りの籠城組と一緒に相果てる所存である。――

大体、このような文面だった。至れり尽せりの文意だが、たぶん、松平信綱みずからがこの手紙を起草したのではないかといわれている。

また一方、四郎の母と姉とに手紙を書かせて城中に送らせた。

これに対して、城内からは即日返事がきたが、それには、自分たちは他宗の者を無理に吉利支丹にしていることはない。城内の者はすべて身命を天主に献げている者ばかりである、と書かれ、降伏を拒絶してきた。

だが、この投降勧告の手紙は、すぐさま効果はなかったにしても、城内に心理的な動揺をきたしたことは事実だ。たとえば、山田右衛門作のような裏切者が出たのも、有馬左衛門からの矢文に心を動かしたためである。

しかし、城内の心理的な動揺は見えたが、これによって城を脱け出た者は、三万人の籠城者の中で僅かに数名にすぎなかった。信仰の力が、天下の大軍を前にして怖れなかったのは、信長に対抗して石山に籠城した門徒衆以来、ここでもそれを見せた。

こうなると、さすがの知恵伊豆も、いよいよ総攻撃を敢行しなければならなくなった。それまで江戸表からも、たびたび通達があり、無理な力攻めをして味方の損傷が出ることを憂い、あくまでも兵糧攻めにするよう命令してきていたのだが、調略もきかず、城内はたびたび太鼓を鳴らし、天主信仰の歌をうたい、踊りまくって気勢を上げているのを見るにおよんでは、信綱も遠巻きを際限なくつづけるわけにはいかなくなった。第一、天下の名だたる大名をあつめての攻撃が、

たかだか浪人や百姓の籠る一城を攻めあぐねたとあっては、知恵伊豆の面目、幕府の威信にもかかわることである。

恰もよし、城内でも前記のように兵糧が尽きてきて、自分から城外に打って出ることになった。すなわち、城方では、防備のうすい鍋島、寺沢、黒田の三陣を襲って敵の弾薬、兵糧を奪ってくることに議一決し、二十一日の夜、折からの闇夜を利用し、右の三陣に夜襲をかけてきた。

このとき不意の襲撃に黒田藩の家老黒田監物が戦死したくらいに形勢非だったが、まもなく攻城軍がたちなおり、黒田は云うにおよばず、寺沢でも、鍋島でも、諸士大いに奮戦して敵兵を城内に追込んだ。このとき宗徒勢は三百余体の屍体を遺棄して退いたのである。

信綱は戸田氏鉄とともに、この現場を回り、城兵の死骸の腹を割かしたところ、中から海藻の類が出てきた。これによって城内の兵糧の少くなったのを知ったのである。

城方としては食うものが無く、切羽つまって敵陣に奇襲をかけ、食糧を奪おうとしたわけだが、こうなると、太平洋戦争で敗戦した日本軍が、ゲリラ戦で米軍の基地を襲い、糧食を奪おうとしたのとよく似ている。物資の不足は一揆の気力をようやく減退させた。そのうえ、さらに一揆勢の偶像である四郎時貞の権威を、一挙に転落させる一事が起った。

或る日、時貞は本丸で碁を囲んでいたが、このとき砲弾が彼の左の袖をかすめて落下した。傍にいた男女四、五人は即死した。城兵は時貞の命の助かった幸運よりも、敵弾によって死傷者が出たことについて、天帝の加護を失ったと悲観した。この頃からようやく落人が増加してくる。

前に述べた南蛮絵師山田右衛門作が、矢文によって城外に寝返りを考えたのもこれ以後で、彼は攻囲軍の総攻撃の日を待って、計略により時貞を船の上に誘い、彼を捕えさせようと連絡を取っていたのである。しかし、城外からの矢文がほかの城兵に拾われたので、彼の陰謀は発覚し、そのため城中の牢に幽閉されてしまった。

総攻撃の前日、右衛門作は処刑されることになって本丸に移された。その妻子がまず本丸で斬られたが、ちょうど、彼の身にその処刑がおよぼうとしたとき、攻囲軍が城中に迫ったので、彼はその場に取残され、攻囲軍に捕まった。ところが、その持っていた矢文によって彼の返忠が分り、無事に外に救いだされ、のちには松平信綱に拾われて、江戸に伴われて上ったといわれている。

時貞がいろいろな奇蹟をあらわして、あたかも天帝の使者のごとく、吉利支丹宗の信仰を一身にあつめていたのが、どれだけ城兵の結束を固めさせていたか分らない。ところが、以上のように時貞もタダの人間と分り、彼に対する信仰が失われると、結束もそれだけ弱くなってくるわけだ。

一方の攻囲軍では、城内の糧食の欠乏を知って、いよいよ干し殺し策の効力があがったことをみて喜んだ。そのうち江戸から上使水野勝成も来着し、二月二十四日にいよいよ軍評定がはじまった。

この作戦会議では、まだ兵糧攻めをつづけるべし、と主張するものもあったが、水野勝成は大声を出して、

「今日までは、遠攻めにして味方の兵力を失わないようにするのが上策ではあったが、一揆もすでに百日あまり籠ったいまは、糧食も矢種も尽きている。このうえ何を待とうとするか。ただいまよりは、ひたすら敵の城を攻め破るのが第一である」

と云った。

戸田氏鉄が、

「それでは、城にちかい鍋島、細川の軍勢をして攻めさせ、他は闕をあわせよう」

と云うと、水野勝成は居丈高になって、

「細川、鍋島両将のみが攻めると、両名の勇名こそ高くなれ、その他の人々は、まるで物見見物に集ったように見られるだろう。勝成、不肖ではあるが、そのかみ神祖の御供をして十六歳の砌、三州小豆坂の初陣から戦場に働くことすでに五十余度、一度も人に越えたこともないが、また人に劣った振舞をしたこともない。いわんや、闕の声ばかり作って鶏軍したためしはない。およそ城を攻めることは、味方の心を一つにせずしては叶わぬことはもとよりだ。このたびの軍は竹釘軍というもので、頭たらん者無きに似たり。伊豆守殿追討の御使に御下向あれば、このたびの総大将は伊豆守殿に紛れもあるべからず。ただ伊豆守殿御下知のことはいかで背き候べき。老人の長居は無用。倅美作守勝俊も若きとき大坂の軍に召され、大和口にて後藤又兵衛出張のとき高名を遂げ、軍の様をよく見知った男であるから、父の代りとしてここに留め置く。些少のお役には立つであろう。さらば御免」

と座を起ったので、評定は水野勝成の意見でまとまり、二十六日に総攻撃を決定したと「徳川実紀」には記述されてある。

しかし、二十六日は雨のために二日ほど延期され、総攻撃は二十八日に決定して、これを諸軍に告知せしめた。

6

ところが、前日の二十七日に戸田氏鉄の陣所に諸将があつまり、明日の攻撃の評定をおわり、

茶を呑んで談話をしているとき、物見が走ってきて、鍋島勢がはや城攻めにかかっていると注進した。松平信綱は、「そんなばかな」と、自分で櫓のうえに駆け登って城を望むと、はたして物見の云うとおり、鍋島の上白下黒筋違いの旗が城壁めがけてすすんでいる。

信綱も鍋島勢が抜け駆けしたことを知ったので、いまはかねての手筈の無駄を知り、一同に、いずれも心にまかせ城を乗取らるべし、と号令した。鍋島の抜け駆けは今度が二度目で、これによって乱おさまってのち、鍋島勝茂は幕府から譴責をうけている。

攻囲軍の初めの手筈では、「火の挙がるを見て起き、鐘を聞いて食し、鼓を聞いて進み、貝を聞いて戦え」という軍令だったが、鍋島の抜け駆けで、この申合せもメチャメチャとなった。総司令官信綱に自由行動で攻撃しろと云われた諸将は、もとより望むところとて、面々馬をひき、陣所陣所にかえった。

鍋島勝茂もその場にあったが、申合せに違反して先に攻めたのは家来たちの粗忽で、まことに申しわけない、と詫びたが、もとより逃げ口上だ。

一説によると、当夜、鍋島の陣営が城にちかく、しかも城内があまり静まりかえっていたので、鍋島の家老が竹束の傍まできて敵城の模様をうかがった。それを他の家来が見誤って、はや城乗取りをするぞとて行動に移ったため、あたかも抜け駆けのようになったという。

鍋島勢は三の丸に攻め入って火を放った。また細川勢も三の曲輪を打ち破って、午後六時ごろには本丸の海手東方を攻めとって旗をたてた。また有馬、立花、小笠原、寺沢、松倉も外曲輪を乗取り、黒田も大江口を破って天草丸を乗取り、ここに夜陣をしいた。

水野勝成は自分の陣中にいたが、攻撃勝手次第のことを聞くと、その子勝俊、孫勝貞が軍議から帰るのを待ちかね、人数を本城めがけて打ち発たせた。ここは鍋島の攻撃場所だったが、その

最中を押し通って本丸の石垣下に押しよせた。水野勢は敵の鉄砲に当ってたちまちに百余人が死傷したが、勝俊父子は自ら槍を取って無二無三に下知し、ついに石垣を越えて一番乗りの馬印をたてた。

勝成は、孫が初陣に城乗取りをしたのを見て、

「大坂の役にはわが子が功をたてたことがあるが、今日は孫の一番乗りを見ることができた」

と、泪を流して喜んだ。

信綱は、日没になると、全軍に命じてその占拠場所に陣を取り、夜の明けるのを待つことを命令した。無理な夜戦をして、いたずらに兵の損じるのを憂えたからである。攻囲軍は、僅かに残った本丸を前において、さかんに篝火を焚き、天明を待った。

翌日の黎明には、最後の総攻撃が開始された。本丸に立籠った一揆勢は、最後の防禦に力を尽したが、弾薬も尽き果て、鍋釜その他の器物を投げ、あるいは蓆や藁に火をつけて投げ放つなど、いよいよ悲壮な抵抗戦となった。攻囲軍も無数の火箭を放ったので、これが城中の小屋に燃え移り、火煙の中に老人や女子供の叫喚の声が巻起った。

四郎時貞の首を取ったのは、細川の家来陣野佐左衛門という者である。

佐左衛門が黒煙に包まれた本丸の中を進んでいると、負傷したように絹を引きかぶって伏している者がある。その横には美しい女がひとり付ききって、しきりと介抱していた。佐左衛門が馳せ入ると、その者は起きあがろうとしたので、佐左衛門は一刀のもとに斬り伏せ、首を取った。

横にいた女は、その場を去ろうとする佐左衛門を必死に引留め、首をとり返そうとする。その女を三宅半左衛門という者が斬り伏せ、外に走りでた瞬間、棟が焼け落ちた。まるで映画を見るような場面である。

佐左衛門が抱いていた首を細川忠利が見て、その年齢といい、美少年ぶりといい、多分大将の四郎であろう、と考え、その首を洗って上使の実検にそなえた。他の諸隊からも、四郎のだと称する多くの首が出されていたが、どれが本モノだか決着がつかない。そこで、四郎の母と姉とを呼びだして多くの首を見せると、老婆は少しも臆せず、

「四郎はわが子であるが、まことは天使であるから、討たれるなどとは思もよらず、今は姿を隠して南蛮、呂宋あたりに行っているに違いない」

と、平然としていた。

ところが、佐左衛門が取った首を見せると、老婆は俄かに顔色をかえ、その首の疲れた顔を見て泣き叫び、さぞかし苦労したことであろう、やれ、可哀想に、とかき口説いて、崩れ伏したまま起き上がれなかった。これで四郎の首だと断定されたのである。

一揆は蜂起以来四カ月を持ちこたえ、幕府は、その討伐の費用として金子約四十万両を使ったうえ、十三万以上の兵力を動員している。渺たる九州の小城に、これだけの日数と兵員と費用とをかけようとは、当初、誰が想像し得たであろう。信仰で固まった百姓を討つのがいかに困難であるかは、信長の一向宗退治の教訓をまたずとも、幕府もしみじみと肝に銘じたことであろう。

幕府の犠牲は合計八千百三十五人に上ったといわれる。

しかし、籠城した人数、男女あわせ三万七千人も、ことごとく首を刎ねられ獄門にかけられた。首を刎ねる前に、吉利支丹の宗旨を棄て他宗に立返るならば命を助けるべし、と云い聞かせたが、女童にいたるまで他宗になる覚悟はなく、天主のもとに召されるのを喜び、少しも死を怖れず、いずれも笑って首をさしのべた。

乱が終ると、松平信綱は三月三十日唐津に戻り、四月三日には豊前小倉に入った。

ここで上使太田備中守が到来して戦後の処理をおこなったが、備中守のたずさえ来った上意によって、今度の騒動の責任者松倉長門守は美作の森内記に預けられ、寺沢兵庫頭は天草の知行四万石を没収と決った。しこうして、松倉は美作に赴いたのち、その年七月十九日斬罪に処せられ、弟右近ものちに会津に流されたが、遂に自殺した。

さらに寺沢も天草四万石を没収されたのを遺恨に思い、これも、ほどなくして自殺している。

こうして責任者はことごとく自滅したが、のこっているのは鍋島の軍律違反の問題だ。前記のように、鍋島は軍事評定に反して無断で定刻前攻撃をかけている。そこで、幕府は鍋島勝茂を江戸に召喚し、評定所で審問した。

鍋島勝茂は種々弁疏するところがあったが、幕法は重く、六月二十九日、酒井忠勝の宅にふたたび呼びだされ、上使の命をもちいず、抜け駆けして諸軍を騒動せしめたこと、粗忽のいたりなりとして、出仕停止を命ぜられた。

もっとも、この閉門はほどなく赦されている。なんと云っても島原役の功労が、鍋島を第一とすることは衆目の一致するところだったので、譴責も長くはできなかったのであろう。

鍋島の閉門を聞いた大久保忠教は、ある日鍋島の玄関にあらわれ、

「以前は一番乗りをすれば、御感状、御加増の恩典にあずかったに、今日では一番乗りをすれば、軍法を破りたりとて閉門を仰せつけられる。さても世の中の変化ぜひなき次第。彦左衛門、御見舞のために参った」

と、大声で叫んで帰ったという。彦左衛門も、また、新体制からとり残された落伍者だったのだ。

天草役は幕府に種々の教訓を得させた。その第一は、この戦争が牢人を主体としていたことである。前記のように、原城に立籠って指揮をとったのも牢人なら、攻囲軍のなかでも牢人たちが、ここぞ出世の機会とばかりに、各藩の持場をかりて奮戦している。大坂役後、諸大名の改易によって失業した浪人群の脅威を目のあたりに見た幕府は、これ以後、浪人取締令をすこぶる厳重にするようになった。

また、吉利支丹の信仰禁止は、家康のころから行われていたのだが、この島原役後、さらにそれを厳密にした。もし、この内戦に和蘭陀や西班牙の外人部隊が参加したなら、どんな国際紛争にまで発展したか分らない。その危険性も事実、ないではなかったのである。幕府も慄然となったであろう。

だが、島原役によって、幕府はその実力低下を満天下にさらした。また、それに劣らず、諸大名の武力低下も暴露された。大坂役後、さしたる戦闘もなく、武士団の戦闘力も、いつのまにか衰弱していたのだ。ただ、幕府にとって幸いだったのは、諸藩の実力が幕府同様に低下していたため、相対的に幕府の威信が傷つけられなかったことである。

島原役を最後に、世はいよいよ泰平となり、武士階級の腐敗が深化し、のちに幕末の自己崩壊を迎えるのである。

関ヶ原の戦

慶長五年九月十五日
（一六〇〇年一〇月二一日）

1

豊臣秀吉は、慶長三年八月十八日、六十三歳で伏見城内に死んだ。

「露と散り雫と消ゆる世の中に何と残れる心なるらむ」

が「秀吉事紀」にある彼の辞世の歌という。

世間には、

「露と落ち露と消えぬる我が身かな難波の事は夢のまた夢」

の辞世がひろく知られているが、「秀吉事紀」に掲げたほうが、彼の死にぎわの心境が託されている。

秀吉は、五月五日、端午の節句の儀式をおわって発病したのだが、六月二日から足腰がたたず、しだいに危篤状態におちいった。彼は生に執着した。人間どんな高齢になっても死にたくないものだが、秀吉の場合、生に異常な執念をもった。子の秀頼が幼いからだ。

それに朝鮮役に出征した将兵が、まだ帰還していないことも気がかりの一つだった。朝鮮役は

秀吉の一代の不覚で、これは過去の秀吉の輝かしい経歴をご破算にするくらいの失敗であった。

だが、秀吉の心残りは、渡海している将兵の未帰還よりも、むろん幼少の秀頼の身のうえだ。

秀頼は、秀吉の晩年、淀君に生れた子で、この子に対する秀吉の溺愛ぶりは、いろいろ伝えられている通りである。

秀吉は死床につくと、五大老、三中老、五奉行の組織をつくった。五大老とは、毛利輝元、上杉景勝、宇喜多秀家、徳川家康、前田利家。五奉行とは、前田玄以、浅野長政、増田長盛、石田三成、長束正家である。

五大老はいずれも大名で、当代の実力者ばかり。とくに家康と利家は超大型であった。

これにくらべると五奉行は、いうなれば次官クラスといったところだろう。すなわち、五大老が協議した結果を、下部機関である五奉行におろす。五奉行は、五大老の決定した政策を実行に移す。

三中老とは、その両者の連絡または調停役である。

以上は、秀吉の死後の運営にそなえた後見委員会制である。秀頼が十五歳になったら実権を彼に渡し、この機関は解消、または後退する予定だった。少くとも、秀吉がこの制度をつくったときは、そのつもりだった。

とくに秀吉があとを頼んだのは、前田利家と徳川家康だ。利家はいうまでもなく秀吉の若い時からの友だちで、一度も彼の信義を裏切ったことのない実直者。秀吉が大成してゆく最大の協力者でもあった。

協力者といえば、家康は信長のパートナーで、彼もまた一度も信長を裏切ったことがない。世にいう織徳同盟である。もっとも、これは互いの自立策から出たのだが、それにしても、誰をも

信用できない戦国時代にあって、家康の「信義」は信長に感謝された。万事、信長気取りの秀吉は、そうした家康をかなり信頼していた。その家康は、秀吉の弟分をみずから買ってでて、律義ぶりを発揮している。

それで、いとけなき秀頼を託するに、秀吉もこの両人をもっとも頼みとした。秀吉は何回にもわたって、彼ら五大老に起請文をださせている。

「秀頼さまに対し奉り御奉公の儀、太閤さま御同然粗略に存ずべからざる事」

以下、数箇条にわたっている。同じような起請文を何回となく要求しているくらい、秀吉は死にぎわに安心できなかった。

ことに最期の直筆になる遺言状と称するものに、

「秀頼事、なりたち候やうに、此かきつけ候しゆを、しんにたのみ申、なに事も此外にわ、おもひのこす事なく候。かしく」

というのがある。そぞろ遺児を思う煩悩にとり憑かれた一老父を見るようである。

秀吉は小牧長久手合戦までが取柄で、関白になってからは愚物に転落した。こんな人間は、当面の敵がみんな無くなって、ただひとり、最高位にのこってしまえば一種の虚脱状態になる。小牧長久手までは、とにかく彼の攻撃すべき標的があった。そこに秀吉の人生目的があり、実力以上の力が発揮された。だが、その目的をうしない、張りあいがなくなってくると、頭脳がおとろえる。バカバカしい贅沢のなかに据えられ、追従ばかり聞かされていると、どんな天才でも鈍化しよう。

秀吉が朝鮮役をおこした理由はいろいろだが、一つは彼がふたたび目標をもとめて老衰をふせごうとしたのではあるまいか。ただ、結果がいささか勝手がちがっただけである。

八月十六日、秀吉はいよいよ死にのぞみ、家康、利家、輝元、秀家、景勝の五大老をまねいて、くれぐれも秀頼のことを頼んだ。が、このとき、ふくよかな顔で頼もしげにうなずいた家康の心中には、どのような思いが駆けめぐっていたか。

家康は、当時すでに諸大名間に儼然とした勢力を張っていた。秀吉が死ねば、天下はおのずと自分のほうにころがってくる自信があった。秀吉が十八日の朝丑の刻（午前二時）に息を引き取った瞬間から、家康は、

「やれやれ、長いこと待たされたぞ」

と、凝った肩を自分の手で叩いたかも分らぬ。

実際、家康は、秀吉さえいなかったら、とうの昔に信長の跡目がつげたかもしれない。思いもよらず、横あいから秀吉に政権を奪られたのを、どんなに口惜しがったかわからぬ。

もし、本能寺の変後、家康が秀吉よりもはやく、三河から手勢をひきいて京都に入り、光秀を討伐したら、その日からでも彼の天下になったかもしれぬ。なんといっても、光秀を討った秀吉の実績が、彼に以後のヘゲモニーをにぎらせた。してみれば、毛利と和睦して、快速で摂津尼崎に引きかえした秀吉は、光秀のみならず、家康にとっても恨みたい男だった。

が、それはともかく、家康は秀吉のもとによく隠忍し、よく屈従してきた。しかし、これは家康にとってまるきり無駄ではなかった。彼は秀吉のやりかたをじっと見て、その欠陥をつぶさに観察していたのである。このことが後年役だって、秀吉の欠点を排除、「東鑑」を愛読したように源頼朝の長所を導入して、三百年にわたる幕藩体制の基を築いたのである。

さて、秀吉が死ぬと、たちまち大名間の勢力に動揺がおこった。そもそも秀吉が五大老、五奉行などの合議制を敷いたのも、はやくから諸大名間のひそかな暗闘を知っていたからである。

もっとも、この五大老、五奉行委員会は、秀吉が秀頼に無事に天下をとらせたいための後見制度であるから、はじめから自壊の要素を持っていた。秀吉は、なぜ、もっとはやくこの委員会をつくろうとしなかったのか。子供の「後見」でなく、「政策運営」委員会にすべきだった。そうすれば、豊臣の天下は、もう少し長くつづいただろう。このことに着眼したのが家康である。家康は譜代大名数名をもって老中部屋を構成し、内閣的な性格を与えて、徳川幕府を安泰にさせた。

秀吉は、関白になってから文官を多く登用した。これは、戦争がなくなってしまえば、融通のきかない武将を使うよりも、能吏を使ったほうが行政に便利だからだ。石田三成、長束正家などがその筆頭だった。三成は田舎寺の小僧あがりで、目から鼻に抜ける才智者、正家は算盤にあかるく、もとの主人丹羽長秀を富ませた者、秀吉が丹羽から彼を請い受けて一万石にとりたてた。以来、正家は秀吉の出納係として出世した。

だが、これをもってすぐに秀吉が側近をひいきにしたとはいえない。秀吉は、彼らの行政手腕をみとめたので、戦争ばかり強くて頭の弱い大名にはないものを買って抜擢したのだ。昭和の敗戦後、GHQによって急速に官僚群が躍りでたのとちょっと似ている。

しかし、大名連中からいえば、これが面白くない。加藤清正、福島正則などといった単純な武将は、まえから三成らの文官派を、こころよく思っていない。朝鮮から帰還してみると、彼らは五奉行などと大きな顔をしている。自然とアンチ文官派が家康のもとに集るわけだ。

いってみれば、関ヶ原役の原因は、武人派、すなわち軍服組と、文官組とのヘゲモニー争いともみられよう。これは古来どこの国でも見られることで、GHQ内部にもその両派の暗闘があったのは知られている通りだ。また今日の防衛庁でも、「内局」と「外局」が対立し、文官優位の原則を不満とする外局の軍人組が、内局の文官組の鼻をあかそうとして、「三矢作戦」などというような物騒な計画を、こっそりと作り上げるのである。

2

秀吉は生前、家康と前田利家とを対立させようとしていた。そのため、なにかと利家を引きたてるようにしている。

彼の考えでは、たがいに対抗させることで輩下の均衡を保とうとしたのだが、秀吉の晩年には、はるかに家康のほうが有利な地位にたっていた。家康のほうが利家よりも若い。しかも、家康は関八州に勢威をはって、東国の大名のみか、秀吉にかくれて、こっそり西国大名とも誼を通じていた。

利家は、宇喜多秀家、上杉景勝、長曾我部元親、毛利輝元といった秀吉恩顧の有力大名だけをたのみにしていた。これらの大名は、途中から秀吉に附いたのだ。かえって秀吉子飼いの武将が家康に走った。これはひとえに、三成憎しの感情が秀吉の旧恩を超えたのである。

しかし、利家が生きている間はまだよかった。なんといっても、家康には利家が少しは煙たい存在だった。毛利輝元、上杉景勝、宇喜多秀家などにいたっては、はじめから家康の眼中にはなかったのだ。

もし、利家がもう少し存命であったら、あるいは関ヶ原の戦はずっと遅れたかもしれない。家康は、天下取りと、おのれの年齢と競争するような焦りはあったが、けっして無理をする人間ではなかった。

だから細川忠興が利家との調停を申しいれるや、彼はこころよくこれに応じている。すなわち、慶長四年正月、利家は、大坂から淀川をさかのぼって、伏見に家康を訪ねているが、家康は、こ

のとき途中まで鄭重に出むかえ、病体の利家を自分の肩にのせて館にともない、善美をつくした饗応をおこなっている。

家康もまた三月に入って利家に答礼している。しかし、このときはすでに利家が重病の床にあったのである。

利家の死去はもう目睫にせまっている。家康は欣喜雀躍したにちがいない。彼の胸中には、いかに豊臣の遺臣をおのれの側に多く奪いとるかの策略が駆けめぐっていた。

家康は、そのまえから、秀吉の作った法度を無視して、勝手に諸大名との縁組をおこなった。許可なくしての大名同士の私婚は禁じられていたのに、彼は伊達政宗の女を自分の六番目の子忠輝にむかえ、また甥の女を養女にして福島正則の子の妻にし、外孫の小笠原秀政の女を養って、これを蜂須賀家政の子に配偶させている。

このときは、利家も他の大老らも、大いに憤慨して家康を詰問したが、彼は、

「媒妁人から届けがでているとばかり思っていた」

と、ケロリと答えている。

また、家康の縁辺を嫁にもらった福島、蜂須賀、伊達なども、詰問にあって不得要領な返事でごまかした。これなどは、すでに秀吉の権威そのものを、家康が蹂躙している。

家康が幕府を立てたのち、大名同士の婚姻を許可なくおこなった場合、これをようしゃなく廃絶の処分にする「武家諸法度」の制定と照らしあわせてみれば、いかに家康が秀頼を無視し、傍若無人な行動にでていたかが分る。彼はもう天下をとったつもりでいたのだ。

前田利家が死んで、誰が一ばん打撃をうけたかといえば、石田三成である。

三成は、はじめ利家とあまりよくなかった。また前田家にも三成を好まない郎党が多かった。

しかし、三成は押し強く利家のもとに出入りし、利家が死床にあったときは看病と称して、昼夜、その傍を離れなかったくらいにとり入った。

三成は、家康打倒をひそかに考えていた。それには種々な原因があろうが、なんといっても、その第一は、家康の周辺に三成を毛虫のように嫌う武将がかたまっていて、彼を排斥していたことである。

三成とても、早晩、家康の勢力が伸びることは予想していたにちがいない。いや、怜悧な彼は、家康が利家を越えて天下を取りそうなのを見抜いていた。

だが、その家康の天下になったとき、自分の凋落を彼は考えずにいられなかった。三成は、秀吉生存中、能吏としては第一の出頭人である。彼は関白の官房長官であり、秀吉個人の秘書長でもあった。由来、こういう地位の人間が、そのボスの勢威を被るようになるのは避けられない。当人は、そんなつもりはなくとも、周囲からそう仕向ける。が、こういう人間は、次の代になると急速に落ちめになる。これは単に歴史上のみならず、現代にも通じることだ。社長が死ぬと、その側近が新社長のもとで冷遇される例はザラだ。池田内閣のもとで勢いのよかった秘書官組が、佐藤内閣になって冷飯を食わされている現在も似ている。三成、もとより聡明であるから、そうしたおのれの運命を予知した。彼としては、その保身上からも家康を倒さねばならない。

しかし、家康のほうは三成をそう憎いとは思っていなかったにちがいない。はっきりいえば彼は三成を問題にしていなかった。もし、三成が利家のもとに強引に出入りしたように、家康のもとに、叩頭三拝して近づいたならば、家康も彼を利用できる能吏として、ある程度まで認めたのではあるまいか。

しかし、家康の周囲には、あまりにも反石田派がかたまりすぎていた。その壁のため、三成は

家康に近づけず、利家のもとに走ったといえる。家康の周辺に反石田組が集団を組んでいたのは、三成の不幸であった。家康にしてもある程度不本意だっただろう。

朝鮮出兵中は、加藤清正と小西行長とが反目していた。小西行長も根っからの武将ではなく、泉州堺の薬屋の息子だ。だから、武将たちには薬屋とか町人とかいってバカにされていた。事実、朝鮮での小西の働きは批判される行動が多かった。そして、帰還後、この朝鮮役の賞罰に関して二人の間に確執が起った。加藤清正、黒田長政、細川忠興、福島正則、加藤嘉明、浅野幸長、池田輝政など、いわゆる七将は、三成が軍目付と謀って、自分たちを秀吉の前に讒訴したと考え、よけいに三成憎悪の炎を燃えあがらせた。

この七将が、前田利家を看護中の三成を殺そうとしたことがあった。しかし、三成は利家の看護に邸内に入りこんで手がだせなかった。が、利家が死んだ夜、彼らはその三成殺害を実行しようとした。これを知る者があり、三成に密告し、また三成の親友佐竹義宣にも報らせた。

義宣は三成の屋敷に行き、彼を女乗物に乗せ、まず宇喜多秀家の屋敷に送り、護衛をつけて逃したが、その前途には危険がせまって、三成の安全な場所がない。このとき三成は敢然と家康のもとに飛びこんで行ったのである。

三成としては、死中に活をもとめた行動で、七将の意表をついたわけだ。しかし、三成には、家康が自分を殺すことはないだろうという確信があったろうと、多くの史書は伝えているが、それは結果論であって、このとき三成の心中は、生死五分五分の目算ではなかったろうか。家康が自分を殺さないという保証は、どこにもなかったのである。

現に三成が救いをもとめて飛びこんだ夜、家康は、その参謀、本多正信を呼んで三成の処置を訊いている。

正信はそれに答えた。

「いま石田を殺すのは容易ですが、もし、この時期で石田を殺せば、大名連中は勝手な熱を吹くでしょう。しかし、彼を助けておけば、諸大名は三成憎しでかならず一致して殿にお味方するでしょう。いま石田を殺すのはもったいないですよ」

家康は、それを聞いて、

「実は、おれもそう思っているところだ」

と大いにうなずいたという。

つまり、正信のいうところは、諸大名はいま三成憎しでかたまっている。彼らの共同の敵である三成を今、消してしまえば、七将の目標がなくなり、自我に返って、かならずしも家康に味方するとは限らないというのである。以上の話は「関原記」に出ているのだが、真偽は別として、家康の心理は出ている。

こうして家康は三成を助けて、彼の居城佐和山に無事に帰らせた。ただし、家康も、三成が関ヶ原において、西軍の総指揮官的な存在になろうとは、夢にも思わなかったにちがいない。ただ、せいぜい、彼を生かしておけば、この謀略好みの男が、いろいろと策動して世を騒がしてくれ、ますます、こっちに有利になると判断しただけだろう。

利家が死に、三成を追っ払った家康は、誰に遠慮もなく、大っぴらに伏見城に移った。いうまでもなく、この城は秀吉が築き、京都をひかえ、秀頼のいる大坂城を指呼の間にのぞんでいる。このときから世人は、家康を称して天下殿といいはじめた。

さらに家康は、自分のために働いてくれたというので、堀尾吉晴を越前府中（福井）の五万石にし、本領遠州浜松の十二万石をその子の忠氏に譲らせた。一説によると、堀尾を府中に移したの

は、反徳川方の加賀の前田に備えさせたためだという。また、細川忠興は豊後杵築五万石を与えられた。森忠政は、美濃から信州川中島十二万七千石に移封された。以上は家康の独断である。

大名の加封は、豊臣家の許可がなければならないが、家康は気随気儘に、勝手に思いどおりの命令を発した。また、この家康の命を受けた諸大名も、なんら怪しむところなく、欣喜して任地に向かっているから、世人の噂通り、家康は事実上の将軍であった。

もう一つある。

家康にとって、前田家は依然不愉快な存在だった。先代の利家は彼の対立者であり、拮抗者であった。いまは、その子利長があとを継いでいる。家康たるもの、この際、前田家を消しておかなければならぬ。単に亡き利家に対する感情のみならず、いま前田家を潰すのは家康の勢威をしめすことで、諸大名の人心を左右する、大きなキイ・ポイントだ。

すなわち、家康は、前田家が家康を暗殺する謀主になっているとの噂をまかせた。むろんフレーム・アップだ。家康は、これを利用して前田征伐の声明を発した。

これを聞いて、利長はじめ前田家の老臣は大いにおどろいた。ただちに重臣を家康のもとに遣して、全くその事実がないことを弁明させた。そこで家康は、のしかかって、他意なき証拠として、前田家からは利家夫人（芳春夫人ともいう）を人質として出させ、さらに、長子秀忠の女、自分にとっては孫娘と利長の弟利常とを縁組みさせよ、とせまった。

当時、芳春夫人は前田家の事実上の独裁者で、あたかも秀吉亡きのち、淀君が豊臣家を独裁していたのと似た立場にあった。しかも、芳春夫人はわが家の難を聞くや、すすんで家康の人質になることを快諾した。むろん、秀忠の女を利常に娶ることも承知。これでやっと前田征伐が取消しになったのだが、その芳春夫人は、大坂から伏見にきて家康と会い、それから江戸に移って、

その地に留まった。大名夫人の江戸に抑留される第一号だ。

のみならず、その親戚関係から、細川忠興も家康から疑われたが、彼もその子忠利をすすんで江戸の人質とした。また、浅野長政もその子を江戸に送っている。これが諸大名の嗣子が人質となる先例だというが、秀吉の遺志などは、家康によってメチャメチャにされた。

3

まえにも触れたように、家康は、関八州はもとより、それから以北を統一し、さらに東海道から北陸道一帯の中部地方も自分の手中ににぎる意図でいた。奥州では、老伊達政宗が、すでに家康の前に叩頭している。また、北陸の雄加賀の前田は、家康の恫喝のまえに慴伏した。利常は嫌疑を恐れて、鼻毛を伸ばし、精薄児を装ったといわれるくらいだ。残るのは会津の上杉景勝である。

会津は、蒲生氏郷が死んで、そのあとに越後の上杉が移った土地である。生前の秀吉が、家康の背後の牽制策として配置したのだ。それで、家康からすると、上杉はまえから準敵国であった。秀吉の死後、家康に実権が移っても、彼は、その対上杉観念をあまり改めなかった。また、そう見られても仕方のない態度が、上杉景勝にもあったのである。景勝は、秀吉から頼まれたことを生一本に守る単純さで、よくいえば律義者、悪くいえば策もなにもない融通のきかぬ男だった。

この景勝の宿老に、直江山城守兼続がいる。これが石田三成と肝胆相照らした仲だった。直江兼続が、そのために主人景勝を誤らせたという見方もある。

家康は、そのまえに諸大名の帰国を許している。これは、一つは、あまり大坂にばかり拘束しておくと、かえって反撥を買うという配慮からだが、一つは、叛く者は叛け、従う者は従えとい

うわけで、その大名の色分けを、帰国中の彼らの行動から判断しようとしたのだ。景勝は、会津に帰ってから、この色分けのうち、もっとも鮮明なほうに入った。すなわち、アンチ家康の旗幟を掲げたのである。

早速、「景勝逆意」が風聞となって上方に達した。すなわち、まず、その諸城を修理した。道路をひらき、食糧を貯蔵し、あまたの牢人を召抱えた。さらに、越後にちらばっていた、謙信時代の遺臣に檄を飛ばし、上杉たつ日には、加勢せよ、と命令した。だれが見ても、戦闘準備である。

こういうことが、具体的な景勝の謀叛となって家康の耳にはいった。家康からみれば、景勝の挑発行為だ。これが彼のもとに、いろいろな人間から続々と告発され、注進されてくる。

家康は、それでも、ひとまず景勝に対して、かような風聞があるが、真意はどうなのか、もし他意がなかったならば、ただちに上洛し、その旨を弁明せよと、文書を発した。体裁は質問だが、赤か青かのリトマス試験紙だ。これに対して景勝は、家康の要求どおりの誓紙をださなかった。かえって宣戦布告にも似た、積極的な回答を出したからたまらない。家康も遂に上杉征伐を決意した。上杉のこの回答は、家康のひそかに待つところだったかもしれない。

家康は、四月十四日、福島正則、細川忠興、加藤嘉明らに、会津攻撃の先鋒たるべき内命をあたえた。また、二十七日、会津からの回答が到着する以前、島津義弘にむかって、上杉征伐の留守中、伏見城をよろしく頼む、と告げている。

さらに、景勝の領地に接している諸大名には、国境警備を厳重にいいわたし、かつ出兵準備をうながした書簡を送った。すなわち、動員令だ。

このとき他の奉行、中老たちは、家康の出陣を極力諫止した。秀吉の遺志に違背するというのだが、家康は、これは故太閤の島津征伐に倣うものだと称して蹴った。

六月二日には在京の諸将に、会津征伐の期が七月下旬になることを報らせ、六日には大坂に諸将をあつめて軍議をこらし、彼らの進撃路を定めている。

その受持は、白河口に徳川家康、秀忠父子が向かい、関西の諸大名が属する。仙道口には佐竹義宣、信夫口には伊達政宗、米沢口には最上義光が向かい、津川口には前田利長、堀秀治と村上義明と溝口秀勝がこれに属する。

右のうち、三成と仲のいい佐竹義宣は、態度不鮮明だったが、表向きはともかく上杉討伐組にはいった。また、堀秀治は上杉景勝の旧領越後に移封されたのだが、そのとき、上杉家と領地の収穫の問題でトラブルがおこった。堀はそれを根にもって、上杉異心を率先して家康に通報していたものだ。

家康出馬をきいて、勅使権大納言勧修寺晴豊は、大坂に下向して家康を慰労し、晒布百反を贈っている。当時の皇室も、結局武家の有力なほうにつくほかはなかったから、家康への好意は、逆に秀頼無視となるわけだ。

その家康は、十五日、秀頼に面会して告別したが、秀頼は家康に刀、茶器と黄金二万両、米二万石を贈っている。家康からすれば、単に冷たい儀礼的な挨拶だが、大坂からいえば、この際、家康の機嫌を損じてはならなかった。大坂城内では、まだ家康が秀吉の遺言を守って、秀頼成長のあかつきには、政権授受がおこなわれるものと半分は信じていた。

こうして家康は、井伊、本多、榊原、酒井の四天王をはじめ、大久保忠隣、奥平信昌、小笠原秀政、天野景康、高力忠房、内藤信成など三千人をひきいて大坂を発し、伏見城にはいった。家康は、その子飼いのベスト・メンバーをつれて上杉征伐に向かったのである。

伏見城では、家康がもっとも信頼する臣、鳥居元忠に留守師団長を命じ、これに内藤家長、松平家忠をつけた。

家康には、もともと、自分が会津征伐に向かった留守に、三成が背後で旗を揚げるかもしれないという期待があった。そうなると、三成方は真先にこの伏見城を囲むにちがいない。その際は、衆寡敵せず、この城は葬られる。また鳥居にしても、その予想で、家康から留守を命じられたときから、討死を覚悟していた。

家康の到着した十七日の夜、家康の東北下向をおくる送別の宴が開かれた。君臣今生のわかれの饗宴でもある。席上、老武士鳥居が扇を持って舞うのを見て、家康が落涙したという。

鳥居は十二歳のとき、駿府の今川家の人質となっている家康のもとに、家来として三河から呼びだされた。当時、家康は彼より二つ下の十歳だった。家来というよりも遊び友だちだ。その夜は、たがいに竹千代、彦右衛門の昔にかえって思い出話に夜を更かしたが、明朝はご出立が早いから、はやお寝みを、と云って、鳥居が家康を無理に寝所に入れた。

さても、家康は上杉征伐に出発したものの、道中まことにゆるゆると、見物、遊山でもするように緩慢に東海道を進んだ。背後で三成がことを挙げると分っていたから、いつでも引返せる態勢にしていたのだ。いつ、その旗揚げを行うのか、そして目下いかなる準備がなされているかが、分らなかっただけである。

彼は大津に着いて京極高次の饗応をうけ、石部から近江水口に向かったが、ここでは泊らなかった、彼は一行を武装させ、えい、えい、と掛声をかけて水口を通りぬけた。

水口城主は長束正家だ。正家は、五奉行の一人として石田方であったため、家康の警戒するところとなったのである。この用心はあとで無益でないことが分った。

次は、関の地蔵、四日市から船で三河吉田（豊橋）に着いた。二十三日には浜松に出、堀尾吉晴の饗応をうけ、二十四日は小夜の中山で山内一豊の嚮導によって島田に宿した。

この地帯は、いずれも、家康には思い出の旧領地だ。二十五日、駿河にはいったが、駿府の城主は中村一氏だ。一氏は秀吉から、家康が江戸からことを構えて西上する場合の、押えとして駿府に置かれたのだったが、一氏は重病の故をもって、家康への従軍を辞退した。仮病ではなかった。

しかし、家康はそれを疑い、先頭隊の行進を止めて、使をもって一氏の病気見舞をさせている。むろん、真偽の実検だ。

一氏は、家康の使者を迎え、床の上に家来に抱えられて坐りながらいった。

「このたびの会津御進発に供奉できないのは拙者死後の遺恨である。よって伜一学はまだ幼いから、弟彦右衛門尉をもって隊長となし、自分の軍勢を相添えて、会津までお供いたさせたい」

一氏は重病で気息えんえん、言語もはっきりしなかった。

秀吉がもっとも信頼した家臣の一人、中村一氏も、今や、その弟を家康につけて、おのれの従軍にかえようとする。世の変遷、想いみるべしだ。

家康は、二十六日に三島、二十七日に小田原、二十八日に藤沢、二十九日に鎌倉に到って、この辺を見物している。七月一日には湘南金沢を遊覧し、金沢文庫を閲した。やっと江戸に到着したのは七月二日であった。

こうなると、戦争に向かっているのか、遊覧旅行なのか、はなはだ区別がつかない。いうまでもなく、家康は、上方の変が報じられてくるのを、爪だちする思いで待ちうけ、途中の進行速度を無理に落していたのである。

江戸に着いた家康は、在府の諸将に従軍を命じたが、これは彼が命令するよりさきに、われもわれもと諸将から従軍を乞うた。その主な人名を列記する。

浅野幸長、福島正則、その子正之、黒田長政、蜂須賀豊雄、池田輝政、弟長吉、細川忠興、その子忠隆、生駒一政、堀尾忠氏、加藤嘉明、田中吉政、京極高知（高次の弟）、藤堂高虎、寺沢広高、山内一豊、真田昌幸、その子信幸、幸村、金森長近、九鬼守隆、有馬則頼、中川忠勝、池田知政、宇喜多正親、松倉重政。

まだまだ、このほかにも多いが、略するとして、その兵数合計約五万六千人。これに家康が大坂からひきいてきた前記の四天王をはじめ、子飼いの粒より三千人が加わっている。

七月七日、家康は諸将を江戸城の二の丸に集めて宴をもよおし、いよいよ二十一日をもって会津攻撃の出発の期と定め、同時に軍令を公布した。

4

では、その間に、石田三成は、どのような挙兵計画をいだき、またそれを実行に移しつつあったか。しばらく筆を三成の上に移すことにする。

三成は七将に追われて、危いところを家康に助けられ、居城佐和山に引込んでいたが、しきりと城塁を修復し、将士を招いていた。しかるに、いまや家康は、みずから大兵をひきいて大坂から関東に赴いている。この機逸すべからず、彼は、かねて直江山城守を通じて動かしていた、会津の上杉景勝と謀り、家康を挟撃するの態勢にでた。

このときの三成の胸中は、まさに天下の大博奕、乾坤一擲の大勝負どころだっただろう。彼は寺の小坊主出身にすぎぬ。以来、ひたすら官僚の道を歩き、秀吉の寵愛をうけたが、この履歴が

武官派に対し、彼にどのようにコンプレックスとなっていたかしれない。彼からみれば、武将連中はいずれも頭のわるい荒武者にすぎない。しかも彼らは、その門地家格を自慢にして、三成を蔑視してきた。三成ならずとも、いわれのない不条理であり、屈辱感である。

その上、彼は秀吉という大黒柱を失ってからは、まったく天涯孤独、その権力の座からもすべり落ちた。太閤が生きているときは、ヤレ、石田殿、ヤレ治部殿と追従していた武将たちが、秀吉死後、掌をかえしたようにそっぽを向いたのも、腹にすえかねたにちがいない。よし、それなら、おれでも家康と大勝負ができないことはない、権力の鼻息をうかがってウロウロする腰抜けの武将たちに眼にもの見せてくれんと、憤慨したであろう。

また、彼のクーデターの裏には、成功を信じるだけの計算があった。彼はおのれの才能を信じ、手腕を自負していた。

彼がどれだけ秀頼のためを思って、家康討伐の決心になったかは、はなはだ疑わしい。彼は挙兵の総帥に秀頼を戴かなかった。ただ、そのスローガンとするところは、秀吉の遺訓を無視する家康への非難と弾劾だった。

この家康糾弾は、秀頼への忠義には通ずるとはいえ、それはどこまでも漠然たるもので、三成のかかげる錦の御旗は、家康の背信と専横への攻撃だけだった。それで関ヶ原役には、秀頼の手兵は動こうともしなかった。三成もあえて大坂と連絡をしていない。大坂の中立態度は、東西どっちが勝つか分らないための、形勢観望でもあった。いや、むしろ、大坂方としては、両軍が戦い、共に疲弊するのが、最大に望ましいことではなかったろうか。

とにかく、三成にすれば、今度の挙兵はまたとない生涯のチャンスだ。これを逃したら、ふたたびこんな機会がめぐってくるかどうか分らない。

ところで、家康が大坂を発向して、近江水口に到着するまえのことである。三成の謀臣島左近が三成に進言した。

「今夜、家康は、水口に泊るそうです。すぐさま、家康の館に、夜討ちをかけたらどうですか？」

三成は、それを聞いて、

「それにはおよぶまい。かねて長束とは示しあわせておいたから、彼が水口で謀を行うだろう」

と答えた。島は納得せず、

「天狗も鳶と化せば蜘蛛網にかかる譬もあります。今夜の機会を逃さず、ぜひ決行なされ」

とすすめたが、三成は愚図ついている。

そこで島は、自身で三千人をひきい、水口のちかく、葦浦観音寺あたりから、大船二十余艘を調達して水口まで押寄せた。すると、家康は、水口には泊らず、その夜のうちに通過したと聞き、島は地団太を踏んで引返した。この三成の優柔不断さを、あとで大谷刑部が大いに批判している。

さて、三成は家康が下向するまでは、さあらぬ体でおとなしくしていた。彼は隅東権六という者を使として家康のもとに行かせ、このたびの上杉征伐にはお供したいが、隠居のことであるから、息子隼人佐に人数をそえ、大谷刑部少輔といっしょにお供させます、と申しでている。家康はこれを了承したが、家康とても三成のこの申出が詐術だくらいは、とっくに読みとっている。家康は肚の中でせせら笑っていた。

では、三成は、この大事を事前に誰に洩らし、連絡をとっていたか。この点ははなはだ彼も慎重居士だった。真田昌幸が三成から、反家康挙兵の一味に誘う密書を受けて、その返書にそのことを問責すると、

「事前に洩らすと、計画が暴露する恐れがある。だから心ある方面にも黙っていたが、いうまでもなく、貴殿のごとき豊家恩顧の大名は、挙兵となれば、いちはやく賛同されるものと信じていた」

と三成は答えている。

したがって、三成は、自分が蹶起すれば、当然、アンチ家康や豊家恩顧の大名たちが、翕然と集ってくると予想していた。

この辺が彼の戦略の甘さといえば甘さだ。一人でも謀を事前に打ち明けると、たちまち計画が暴露するという懸念は、三成の深慮だが、その過度な深慮のために、かえって組織づくりが弱くなっている。また、彼がひたすら、直江兼続や安国寺恵瓊のような、策士とばかり連絡を取っていたのも、彼自身が策士ゆえか、あまりに相手個人の力を過大視し、大事な統制を失ったといえるだろう。

安国寺恵瓊は、毛利、吉川、小早川一族に食いこんできた男だ。彼が秀吉の中国征伐の際、毛利方と秀吉の間を周旋し、平和交渉のパイプになったのはあまりにも有名だ。以来、恵瓊は、毛利のみならず吉川元春の子広家とも昵懇であった。その恵瓊自身は、はじめからアンチ家康だった。

三成が他の武将との連絡を疎にした欠点はともかく、この恵瓊は関ヶ原役で毛利、吉川を石田方に参加させ、直江兼続もまた上杉家をして家康と正面衝突させている。この点は、三成の、彼ら二人の策士に対する炯眼に誤りがなかったわけだ。しかし、猟師山を見ず、あまりに両人を射るのに接近して、肝心の巨大な背後の把握ができなかった。

だが、ここにただ一人、三成が事前に計画を打ち明けた武将がいる。大谷刑部少輔吉継である。

まえに書いたように、三成は、その子を大谷吉継につけて、家康の討伐軍に参加させると家康にいっているが、その吉継のほうは、実際に東北征伐陣には参加するつもりで、その居城越前敦賀を千余騎にて出立、七月二日、濃州垂井に着陣した。七月二日といえば、家康がようやく江戸に着いた日である。

大谷吉継は、癩病のためほとんど視力をうしない、身体も自由でなかった。三成は、がんらい、吉継とは親友であったが、吉継のほうは、また家康とも親しかったのである。ところが、ある事件があって、刑部は家康と感情を疎隔した。この好機を、三成がなんで逃そうか、彼は垂井に着いた刑部を、強いて、佐和山に迎えた。ここで彼は、吉継に向かってはじめて重大な機密を打ちあけたのである。

三成はこう云った。

「現在のままなら、早晩、天下は家康のものになるにちがいない。家康は諸事太閤の遺言にそむくのみならず、秀頼をも蔑視している。われらともどもに太閤の大恩をこうむった者。かかる次第を見聞きするにつけても、家康に対して腸が煮えかえるようである。いま、家康は上杉景勝と合戦するため奥州に向かっている。これを背後より追討ちするときは、家康の首はまさに手中にあるようなものである。この際、ぜひ、われらに味方され、豊家の禍根を除き、太閤の御恩に報いられたし」

刑部は聞いて仰天した。愕きがしずまると、彼は三成を諫めた。

「それはまことに不都合な考えである。貴殿は諸人に憎まれ、すでに切腹のとき某が種々の方便をなして家康に乞い、いままで無事に過してこられたのだ。いままた、ここで事をおこさば、去年の意趣の輩は大敵となるべし。家康はいまや三百万石にもおよぶ大名であるから、人数は多く、人心を得ている。しかるに、貴殿は僅かの禄高であるから、人を動かすことも意のままになるまい。われらがこの病軀を押して、はるばる会津へ下ろうとするのは、ひとえに徳川、豊臣両家の無事を扱おうとするためである。貴殿のような左様な企ては、必ずおやめなされ」

治部少輔は諾かないばかりか、さらに彼に懇願した。

「われらのこのたびの思いたちは、まったく一身を顧みず、豊家のために命を捧げんがためである。いま止まれよと申されても、もう引返しはできぬ。すでに、この計略は会津の直江山城にも、また毛利方の安国寺恵瓊にも通じてあるし、彼らの動きで、すでに上杉はご覧のように家康に手向かっている。また、毛利、吉川両家も、ほどなく家康討伐の旗を掲げるでござろう。ぜひぜひ、貴殿の合力を願いたい」

吉継はなおも断った。

「貴殿がかような大事を上杉の家来の直江などに相談されたのを、今日までわれらに隠しておられたことは、まことに不本意である。しかし、いまは、そのことをとやかく云うわけではない。ただ、このような大事となれば、貴殿に対して、二つほど申し入れたい儀がある」

彼はここで三成に忠告を試みた。

「総じて貴殿は、諸人に対して、ことのほか横柄であるという評判で、諸大名はじめ末々の者まで、日ごろから評判がよろしくない。ところが、家康は、その家柄といい、官位といい、さらに日本には並びなき大身であるのに、諸大名に向かっては云うにおよばず、小身の者までも、会えば慇懃にいたし、それぞれ言葉をかけ、愛想を尽すので、まことに評判がよろしい。されば、このたびの大事も、毛利輝元、宇喜多秀家両人を頭に戴き、貴殿がその下についてことを計らなけ

れば、成就はおぼつかないと思う。貴殿の知慮、才覚は抜群であるが、ただ一つ勇気の点が不足しているように思われる。たとえば、家康が関東に下向する途中、石部に泊ったとき、これを夜襲し、焼打ちをかけたならば、疑いもなく勝利を得たはずなのに、左様な大切な機会を、ゆるゆると構えて、家康を関東に逃したのは、虎を千里に放したも同様で、大きな油断と申すもの、これすなわち、貴殿に決断のないところである」

吉継は、面とむかって三成を手きびしく批判した。

5

三成は、大谷吉継の直言に遭ってもたじろがず、なお彼の援助を要請した。三成とても、この際吉継の参加、不参加が重大な岐路だと思ったであろう。が、このときは、その三成とても、吉継が関ヶ原役で、あれほど働いてくれるとは予測しなかったに違いない。

しかも、吉継は三成の懇請を斥けて、いったん垂井の陣に戻った。が、彼は、これまで多年の三成との交誼を考えると彼が気の毒になり、ここに翻然と三成の側に投じる決心になった。

吉継の占いでは、三成必敗と出ていたにちがいない。それを承知の上で、吉継は三成の帷幕に参じたのである。いわば、彼は三成と共死を覚悟したのだ。関ヶ原役を叙す者、ことごとく吉継のこの俠気を特記している。

吉継は、翌日、垂井の陣を払って敦賀に帰った。対家康戦の準備のためである。

一方、毛利輝元は、安国寺恵瓊にすすめられて大坂に着き、宇喜多秀家などから反家康の盟主におされた。彼は、家康が秀吉の遺命に違背した事項十三箇条をあげて、長束正家、前田玄以、増田長盛の奉行三人の連署で、これを家康に送った。彼らがはじめて公然と家康に発した宣戦布

告である。

またおなじ日、前田玄以ら三人は、諸大名に向かっても家康非難の檄文を通牒した。

問題は、このときの毛利輝元の甥吉川広家の態度だが、恵瓊から、宗家もすでに石田方に荷担しているゆえ、早々に上坂されよ、と申しこんできたが、広家は逡巡している。結局、彼は心を翻し、徳川方に向かって石田のいっさいの事情を報告した。おそらく、三成に決定的な勝算があるとは思えなかったからであろう。

それにつれて、肝心の毛利家でも、また藩論が二つに分れた。輝元の西軍荷担を不可とする者は、このたびのことはまったく恵瓊の策動であって、恵瓊が江州までかけ、三成や吉継と密談したのは、輝元の関知しないところである、したがって、毛利家の正式な決定から出たのではない、というのだ。その底は、やはり家康と対決するの不利が考えられたのだろう。

だが、輝元は、そんな反対論は無視して、さっさと大坂に出むき、盟主に祭りあげられた。

これが毛利の将兵をして、関ヶ原役では、火の玉となってかたまらせなかった理由であろう。しかも、身内の吉川広家が、家康に心を通じるにおいてをやだ。広家は、黒田如水とも親交があって、如水を通じ、家康への接近をしきりと試みたのだ。

ここで、西軍の勢力を見てみる。

毛利輝元、宇喜多秀家、島津義弘、小西行長、小早川秀秋、吉川広家、鍋島勝茂、長曾我部盛親、増田長盛、蜂須賀家政、生駒親政、毛利秀包、長束正家、脇坂安治、秋月種長、木下重賢、相良頼房、赤松則房。

この中には、吉川広家のように当面をごまかして敵に内通した者もいた。兵力、およそ八万というが、小早川秀秋のように、やむなくその地勢上から西軍に加入した大名もいるので、人心は

はじめからバラバラであった。

では、盟主の毛利輝元はどうかというと、彼は凡庸な人物で、とてもこの大軍の総司令官になるほどの器量ではなかった。いや、一藩の統率さえ危いくらいだった。

輝元がどうにか中国に覇を保ち得たのは、その祖父元就の余威と、故吉川元春、故小早川隆景の両叔父のよき補佐があったからだ。その両川いまや亡し。輝元、とても自前でやれる腕ではなかった。

してみれば、この烏合の衆にもひとしき上方勢のなかで、真にわが身をかえりみず、家康打倒に燃えたのは、石田三成と大谷吉継の二人だけということになる。

長束正家は、もとより収納官吏のあがり、三成ほどの度胸もなければ武力もなかった。頼みの吉継は癩病で、身体の自由がきかぬ。彼は人と面会するのに、侍臣の取りつぎで相手を知り、挨拶したというから、その重症のほどが知れる。しかも、彼は、その病軀を輿に担がせ、関ヶ原の戦では縦横の指揮をとったのだ。

こうなれば、関東勢の一致団結が戦後の加封や出世を狙うためとはいえ、家康の命令に統一化された大軍団とは、比較にならない。関ヶ原役は、戦わずしてすでに、勝負あったようなものである。

ところが、三成は、このときになって小細工をした。家康に従いて会津征伐に向かった諸将の、大坂の留守宅にある妻子を、大坂城に入れて、これを監禁しようとしたことだ。諸将も、可愛い妻子が人質なので、家康から離れると思ったのである。そこで起ったのが、細川忠興の妻、ガラシア夫人お玉の死である。

この有名なクリスチャン・レディは人質受けとりにきた人数を前にして、みずから屋敷に火をかけさせ、火中で死んだ。

そのために、石田方は京極高次の妻を奪ろうとしたが拒まれ、藤堂高虎の弟も人質にすることができなかった。また、伊達政宗の長子も人質にしようとしたが、乳母たちが抱いて京都東山に逃れさせた。加藤清正の妻も、家来が大きな水桶のなかに隠して、船で豊後国に逃がしている。三成はじめ奉行たちの知恵も、これでオジャンとなった。

だが、とにかく、関西方面の諸大名は三成のほうに荷担した。ただ、伏見には家康が留守番として置いた鳥居元忠がいる。大津には京極高次があり、丹後の田辺には、忠興の父細川幽斎がある。これらはいずれも、上方勢に頑強に反抗した。

伏見城の鳥居元忠は、もとより、この日あるを期して上方勢の包囲を待った。この伏見城は秀吉が最後に築いた城で、要害最も堅固である。攻城戦は七月十九日の夕方から始まったが、攻撃の猛烈にもかかわらず、城兵はよく死守した。だが、衆寡敵せず、八月一日になって城から火を発し、ついに寄せ手が城内に攻めいって陥落した。老将元忠はじめ部下三百五十人、ことごとく戦死した。家康が会津に下向する際のこの前の送別が、予想通り主従今生の別れだった。

元忠の首は京橋口に梟されたが、元忠の殊忠に感動した京の町人が、その首を盗み、百万遍の寺中に、ひそかに手あつく葬ったといわれる。

さて、西軍本部の策略はどうか。総軍八万三千七百余人にのぼる西軍では、宇喜多秀家が諸将と会して云った。

「いま数万の兵を擁して敵のくるのを待つのは上策ではない。家康は進んで会津を攻めるか、退いて江戸を守るか、あるいは西上するか、この三つの策の一つをとらざるを得ないであろう。されば、よろしく進んで軍を出し、まず敵の機を奪うにしくはない」

諸将あげてこの説に賛成した。具体的な方策として次の作戦をたてた。

――毛利輝元、増田長盛は、大坂にいて秀頼を補佐する。宇喜多秀家、石田三成、長束正家は、他の諸将とともに美濃、尾張方向に進出して家康の動向を偵察し、爾後の行動を決する。

――大谷吉継らは北陸方面の攻略に当る。

――もし、家康が西上してくれば、輝元は大坂から美濃、尾張方面に前進し、秀家とともに全軍を指揮し、勝敗を決する。

あとでは、家康がその力を持ちながら、関東にこもるはずがないと、だれしもが想定する。しかし、家康の麾下、たとえば、本多正信、井伊直政らですら、西軍に対っては箱根の嶮を扼して対峙し、それより先に進まぬが上策と進言しているくらいだから、一概に家康が一大決戦に出るとは、当時、予想はできなかったにちがいない。されば、西軍も、東軍の行動を以上の三つに想定し、これに対するそれぞれの方針をたてたのだ。しかし、家康は、はじめからこのなかの最後の作戦をえらんでいる。

家康は、七月二十四日、野州小山の陣において、三成挙兵の確報に接した。彼はただちに軍事評定をもよおしたが、もとより、いまさら改めて評議にかけるほどのことではない。彼の脳裡には、すでに、いっさいの作戦図が精密にたてられていた。評定は、その席で、家康が諸将に云い聞かせるだけであった。

家康は一同に宣言した。

「諸氏の妻子は、みな大坂に置いてあることゆえ、さぞかし、あとを案じ煩われることであろう。すみやかにこの陣中を引きはらい、大坂にのぼられ、宇喜多、石田らと合力されても、われらはさらに恨みとは思わぬ。わが領内では旅宿、人馬のことは全部手配しておいたから、心おきなく

大坂にのぼられるべし」

言葉は鄭重だが、石田方に与したい者は、この場から去れという意味だ。一同愕然として一言も発しないでいると、福島正則、進みでて、

「われらにおいては、かようなとき、妻子に惹かれて武士の道をふみちがうことは、さらさら思わず、内府(家康)の御為に身命を抛ってお味方仕るべし」

と口を切った。それにつづいて、黒田、浅野、細川、池田の諸将はいうまでもなく、一同は一人のこらずお味方仕ると云い、家康に対してさらに二心なきことを誓った。

もとより、彼らの誰もがこの勝負、家康に分があると思っている。だから、たとえ大坂に置いた妻子が殺されようとも、この際、家康の味方についていれば、あとで大いに肥る道理だ。諸将いずれも、このバスに乗りおくれまいと「忠義」を競いあった。

このとき家康は、当面の作戦として、会津の上杉を先に攻略して、しかるのち上方に進発すべきか、あるいは、景勝はそのままにして、まず上方征伐から手をつけるべきかと相談した。

一同、いずれも口をそろえて、

「上杉は枝葉なり。宇喜多、石田は、その根元なれば、会津をすてて、上方征伐こそ急がるべし」

と意見を述べた。そこで、僅かな部下を、宇都宮その他、奥州境の諸城に留め置き、上杉を牽制し、主力を挙げて西上に決した。これも家康の予定にあった。

家康、満足ひとかたならず、

「さらば、清洲、吉田の両城は敵地にちかいゆえ、正則、輝政ともに先陣されよ。ひきつづき先手は清洲に着陣し、われら父子が出馬するのを待たれよ」

と云った。オッチョコチョイの正則はまた進んで云った。

「わが居城清洲は、いっさい挙げて内府殿に献げまいらせますゆえ、城は御家来にて守らせたまえ。われら軍資はかねて備えおきたれば、存分に働き申さん」

山内一豊も負けず、

「わが居城掛川も内府殿に献げるゆえ、御旗本勢をここに留められ、後陣の御心安く御進発あるべし」

と、正則のあとにつづいた。それを聞いた東海道に城を持った大名連中は、みな異口同音に「わが城を献上すべし」と両人の尻馬に乗った。いや、諸将そろって、家康のペースに乗せられたのだ。

家康は、ひとりで眼を細めた。

彼には、人の心理が「東海道の地図のように明らかだった」とは、芥川龍之介の家康を描いた小説の中の文句。

6

七月二十八日、この会議で家康が軍略を定めると、二十九日から各将はいずれも小山の陣を引き払った。おりしも、雨がつづき、小山から引揚げる路は壁土をこねたような泥濘だった。

「緩き土の中に一足づつ渡候。なかなか眼も当てられぬ体なり。槍をば五、六本、旗竿を五、六本、縄にてからげ、二人、三人づつして肩に担ひ通る。馬上の者ども雨に濡れ、雨具もしかじかとなり、綯えたる体苦々しき分野なり」

であったと、家康の家臣が書きつけている。

しかし、全員はほとんど月末までに引きとった。家康は、対上杉への処置その他を済ませて、八月四日、小山を出発した。そして、六日、無事に江戸に着いている。

家康の行動はいかにも悠々としているが、これは客将に先手を務めさせ、たがいに功名を競わせる肚だ。こうなると、彼の眼中には、もはや、三成方に対する勝利以外の何ものもない。

では、背後の上杉方は、そのときどうしていたか。上杉景勝の重臣直江兼続は、三成挙兵の報に接してから、すぐ長沼(福島県)にある景勝のもとに走り、このさい家康勢を追撃する策を具申した。

が、景勝は、いま軽はずみに追撃すると、背後を伊達政宗、最上義光などの軍勢に衝かれるから、まず彼らを踏み潰したのちに西上したほうがよいと、直江の意見を取上げなかった。家康が上杉の背後の押えとして、政宗や義光を置いていたのが、ここで生きている。

このとき直江の献策がよかったか、景勝の作戦がよいかは問題だが、正統論からいえば、景勝のほうがまともである。

背後の敵を撃滅して取って返すのは上策だが、相手は煮ても焼いても喰えぬ伊達政宗だ。そうやすやすと踏み潰されるとは思えない。対伊達戦となると、勝敗がつくまで時日が遷延する。その間に上方の戦局には間にあわなくなる。だから、むしろ直江の献策をいれて、思いきって家康追撃に出たほうが、あるいは面白かったかもしれない。

奥州棚倉に在った佐竹義宣も、家康江戸に退くの報を聞いて、老臣が追撃のチャンスだと云って意見具申をしたとき、やはりこれを斥けている。彼も両面作戦の不利に怯えていたのだ。いや、怯えたのはやはり家康の威力に対してだろう。

とにかく、こうして上杉、佐竹という三成方の挟撃体勢の一方は、奥州に釘づけになってしま

った。家康たる者、後顧の憂いなく東海道筋に馬が進められるわけだ。

なお、家康は、上杉景勝と佐竹義宣に備えて、その子結城秀康に蒲生秀行、小笠原秀政、里見義康をつけて宇都宮城に置かせた。

家康は、自分が西上した場合、景勝が尾撃してくるか、関東に入って攪乱をするかに違いないと判断した。そこで、秀康に策略を授けて、景勝の兵が進めば、彼らが鬼怒川を越えてくるのを待ち、そのうしろを遮断せよ、しからば、景勝はかならず兵を返すであろう、それに乗じてこれを追撃せよ、決してこっちから進んで手出しをするなよ、とかたく命じた。

このため家康は、その兵力の何分の一かを宇都宮に残しておかねばならなくなり、対石田戦には手もちの兵で戦うよりほかなかった。

これは家康にとってかなり痛かった。このさい少しでも兵力が殺がれるのは、それだけ戦力が弱まるわけだが、さらにもう一つ重要な戦力を家康は捥がれている。

それは、加賀の前田利長・利政兄弟の膠着である。前田兄弟は、会津征伐に参加するため、まず後顧の憂いを除く必要から、七月二十六日、二万五千の兵を率いて金沢を出発、小松城にある丹羽長重を攻撃した。丹羽は石田方とみなされている人物だ。しかし、攻撃はしたけれど、小松城は容易に落ちない。そこで、利長は城をそのままにして、おなじく石田方の山口宗永の大聖寺を攻略、さらに北ノ庄の青木一矩に攻めかかった。

これを聞いた敦賀城主大谷吉継は、八月三日に二万余の兵を率いて敦賀を発向、府中城（現在の武生）を抜き、翌日には北ノ庄に達した。

利長は、五日には金津までは来たが、前面に吉継の有力な部隊がいるし、攻撃している城は落ちないし、また、大坂から大軍が海路金沢の西海岸に上陸するという風説が伝わったので、にわ

かに金沢に戻り、弟利政も七尾城に帰った。

加賀の前田の戦力が最初から列外に出たことは、家康には大きな齟齬であった。したがって、彼はますます現在保有の勢力で、西軍との決戦に向かわねばならなかった。しかも、旧豊臣方の客将はいずれも自分の手中にあるとはいえ、まだすっかり安心はできない。少くとも譜代の家来のように自由にまかせることはできぬ。こう考えると、家康のこのときの前途も決して安楽ではなかったのである。

それにしても、癩で眼が盲い、手足の自由の利かない吉継が、前田の大軍を加賀に追返した手腕はたいしたものである。彼は平日家臣に対して慈心深く、義をもってこれを奨励したから、みな、その命を捧げて、その恩に報じたと伝えられている。彼が前田勢を追払ったのは、「士卒を訓練すること肘の指を使うが如し」という日ごろのシゴキがものを云ったのであろう。

だが、計画齟齬は東軍ばかりではない。西軍にも当初大きな誤算があった。それは田辺（舞鶴）の細川幽斎の籠城である。

三成は、もともと、幽斎の子忠興と反目していた。忠興は福島正則や加藤清正に劣らず三成を憎悪していたのみならず、秀吉の死後、三成の陰謀を、裏からいちいち破壊して回った男だ。だから、石田方が、家康に従って上杉征伐に行った忠興の留守を攻めたのは当然の順序である。ことに忠興の妻ガラシア夫人まで、死をもって石田方に一矢を報いたのだから、この生意気な女房めと、三成も癪にさわったに違いない。

田辺城には、隠居となった幽斎細川藤孝が残っていた（忠興の所領は豊後杵築城）。手兵わずか五百。これを攻めるもの小野木公郷の一万五千。城方に対してまさに三十倍の兵力だ。

これがわけなく落ちるかと思ったが、さにあらず、幽斎、よく防いだ。

「寄せ手はきびしく攻めたが、もとより覚悟の上なれば、幽斎、少しも憂なく、おりにふれて詠歌などし、あるいは、諸士に天理を論して義を進め、愛憐を垂れたので、下卒にいたるまで一人も臆病を振りまわす者はなかった。幽斎夫人も具足をつけ、夜まわりをし、士卒に心をつかった。幽斎は、敵方の砲撃が激しくなったときには、『ここ指して射つ鉄砲の玉きはる命に向ふ道ぞこの道』と得意の和歌を作って生死に超然としていた」

と「細川家記」には書いてある。しかし、幽斎がかならずしも強くて六十日間も城をもたせたのではなく、実は寄せ手のほうには、すでに心を家康方に寄せている者もあり、また幽斎の歌道の門人もいたので、攻撃が真に一丸とならなかったのである。なかには空弾を打ってゴマ化す寄せ手もいた。敵兵一万五千というけれど、実際、真面目に攻撃したのは、その何分の一かにすぎなかった。

このときに一つのエピソードがある。それは、幽斎が歌道にかけては定家卿以来の二条家正嫡流「古今伝授」の相伝者であったから、彼は、討死する前に古今相伝の書類をことごとく八条宮（後陽成天皇の弟・智仁親王。桂離宮の設計・造営者）に献上すると手紙で云い送った。そこで宮は幽斎のことを天皇に奏し、その助命を乞うた。

よって朝廷では公卿を大坂に使させ、幽斎を失うのは歌道の一大不幸であると伝えた。当時秀頼は八歳だから理解するはずはない。これは北政所に諭したのであろう。また、別の公卿は、この勅命を幽斎に伝えたので、幽斎も今はいたしかたなしと観念し、開城することとなったのである。

しかし、田辺城が開城したのは、関ヶ原の合戦がおわったあとであったから、結局、石田方の一万五千の大軍は、幽斎五百の兵のために、むなしく六十日を田辺城に釘づけされることになった。

幽斎細川藤孝は、姉川の戦の項で触れたように、一種のオポチュニストだった。はじめは足利義昭について主人を利用し、信長の家来となってからはその義昭を棄て、次には秀吉の側近となり、今度は家康に味方するという具合である。もっとも、見方によっては節操もない変節漢だが、乱世には、こういう処世術でないと身を全うしなかったのである。昭和の戦前戦後を通じても、おなじような文化人が目につくから、あえて幽斎を責めるにも当るまい。

それにしても、大局に影響のない田辺城に一万五千もかからせた西軍の意図が分らぬ。これだけの兵を関ヶ原の主戦場に投入したら、いくらか石田方も強力になったであろうに、六十日間も大軍を田辺に釘づけさせたのは、やはり忠興憎しの三成の感情から出ていたのかもしれぬ。

7

さて、東軍の先鋒隊は、八月十四日には福島正則の持城である清洲城にことごとく集合した。つまり、ここは東西両軍の接点である木曾川を挟んで、前面に犬山、岐阜、竹鼻の諸城があり、いずれも石田方である。

岐阜城には信長の孫の秀信がいる。秀信とは、絵本太功記などの芝居で、大徳寺の焼香争いに、秀吉によって抱きかかえられて現れる三法師君のことだ。

芝居でもジャリのくせにきらびやかな装束を着けているが、秀信は平素から華美をこのんで、なかなかのお洒落男だった。彼は家康に味方し、会津征伐に従軍のため、七月一日に出発するはずのところ、行列の華美ばかりを気にしたので、その準備に暇がかかり、期日におくれてしまった。そこに三成が濃尾両国を増封するからと誘ったので、秀信はついに部下と共に石田方に従っ

たのである。関ヶ原役でいろいろ武将もあったが、これくらいだらしない男もいない。

三成は、この方面の重要性を大いに認識し、みずからは大垣城に入り、附近の城を統率した。

一方、東軍では清洲に集合したものの、いつまでたっても家康が江戸を出立したというようすがない。また開戦の命令もこない。敵の主力を眼の前に見ながら、ただ毎日ぼんやりとしていた。

そこへ家康の慰問使として村越直吉というのが到着した。表面は慰問使だが、実は家康の命をうけて攻撃開始の煽動に来たわけだ。すなわち、家康は諸将の去就を確認した上で江戸を出馬すると、わざと口走ったのである。

そこで、並みいる諸将は大いに腹をたて、いまさら家康の命を待つべきではないとして猛りたった。ことに福島正則と池田輝政とは、早速、先陣争いの口喧嘩をはじめるという次第で、家康のアジテーションは、まんまと単純な諸将をエキサイトさせるに成功した。

家康にしてみれば、どの程度の働きをするか分らない客将たちの様子を確認しないうちは、うかつに江戸から前に出られないわけだ。この点、軽率に動きまわった三成とは、大きな対照である。家康は、ただ坐して客将の挙動を待つだけではなく、慰問使という名の煽動者を送って、はやいとこ西軍と戦うように、令せずして仕向けさせている。人心掌握術の相違だ。

さても、東軍の諸将、いかで家康に忠勤のほどを示さばや、というわけで、正則と輝政の先陣争いは、結局、軍監井伊直政、本多忠勝のとりなしによって、正則は下流から、輝政は上流から河を渡って岐阜城を攻めることで妥協がついた。ただし、正則はわが下流は少々遠まわりであるから、上流の池田方は、われらが狼煙(のろし)をあげるまで渡河を待つべし、と輝政に約束させた。

そもそも岐阜たるや、稲葉山上にあって、北は長良川(ながら)が自然の濠となり、東南は谷で、西は断崖となっている。斎藤道三がここに城を築いて、のち、信長がさらに増築したもので、いまは、

その信長の孫秀信が西軍のために守っている。

当時、岐阜城には、秀信の手兵と、石田から派遣した援兵と、あわせて六千五百人が立籠っていた。六里ばかりへだてた犬山城には、石田三成の婿の石川貞清が守っている。また、岐阜より四里ばかりの竹鼻城には、これも石田方の杉浦五左衛門というのが守っている。

秀信は東軍が岐阜城を襲うと聞き、軍議をしたが、籠城説を主張する老将に対し、彼はこれをしりぞけ、豪気に迎撃に決した。

二十二日の夜明け前、この秀信の隊が、敵影の対岸にあるを見て、木曾川の右岸から鉄砲を鳴らした。池田輝政は福島正則との約束で、下流の狼煙があがるまでは渡河を控えていたが、いま敵から戦端を開いたうえは応戦さしつかえなしと自分で判定して、兵を率いて上流を渡った。つづく浅野幸長の兵も川を渡った。

一方、正則は、上流の兵が渡河を完了したのを知らず、舟を集めて河を渡り、太郎堤まで進んで、明日早朝、岐阜城を攻撃することに定めていた。しかるに、思いもよらず、その日の夕方、池田輝政から使者が来て、上流の軍は、すでに河を渡って岐阜にちかづいたから了承してくれ、と伝えてきた。

輝政と先鋒争いをした正則は、おのれ輝政め、たばかったな、とばかりに立腹した。また、正則に合流していた加藤嘉明や細川忠興も、こうなれば、ここに夜陣を張るよりも、このまま徹夜して進軍すれば、よもや彼らに遅れはとるまい、と昂奮した。そこで彼らはその夜八時ごろ岐阜に赴いて城外の桑畑にひそんだ。つまり、それだけ織田秀信軍は手もなく東軍に打ち破られたわけである。彼らはことごとく岐阜城内に逃げ帰った。

秀信の老臣たちは、今日の敗軍は味方の兵力手うすのためである、よって明日は迎撃せず、石

田の援兵を待って城中に合し、共に守って大垣からの援兵を待つのが上策である、と建言した。

これに対し、秀信はまたまた諾かず、岐阜城の外曲輪で防守することを命じた。

あくる二十三日の午前六時、攻撃軍の福島正則は、その野営地点から南方を望むと、輝政の兵の黒影が遠く朝霧の中に見えている。おどろくと同時に怒った正則は、使者を池田の陣に向かわせ、

「先日、あれほど堅い約束をしたにもかかわらず、それを破って当方の狼煙を待たずに渡河したのは武将にもあるまじき背信。このうえは輝政とわれと一騎打をいたそう」

と、決闘を申込んだ。

輝政は、笑って、

「約束に背いたわけではないが、ただ、敵から戦いをいどまれ、余儀なく応戦したまでじゃ。だが、正則の立腹も分らぬことはないから、今日は正則が大手口から攻撃せよ、われらは搦手から向かうであろう」

となだめた。単純な正則は、それで納得した。

この結果は、埒もなく城兵の大敗に終り、ついに秀信が降参を申入れた。城兵、逃げたり死んだりして、僅か三十余人しか残っていなかったというから、さんざんな敗戦である。

秀信は切腹しようとしたが、正則は信長の孫であることを考えて、使をもって家康に命乞いをした。このとき正則は、もし、家康がこれを許さないときは、自分の戦功をもってかえようと云ったという。秀信は、のち、高野山に落されたが、病死している。

もっとも、秀信だけが薄命というわけではない。信長の二、三男、信雄も信孝もよい終りではなかった。彼は、その両叔父とともに、必然の悲運をたどったわけだ。

大垣に居た三成は、東軍に備えて、大坂から来ていた島津義弘を墨股（すのまた）まで進めさせ、自分も小西行長といっしょに兵三千余人を率いて、大垣城から清洲街道にある沢渡村まで出張っていた。

ところが、岐阜城が東軍のために落ちたと聞いたので、三成は、島津義弘を墨股から呼びもどし、小西行長といっしょに今後の処置を協議した。そこに敗報が続々と入ってくる。

三成は、すぐに退却を主張したが、義弘は、自分の部隊を墨股に残しているので、この兵を収容したあとでなければ退却はできないと反対した。三成は義弘を捨てて大垣に向かって退却した。義弘は仕方なく伝令を墨股にある部隊に馳せて、その退却を命じた。さいわいに東軍は島津隊を攻めてこなかったので、部隊は損傷することなく無事、大垣城に入ることができた。

こういうところが、三成の人望を落すゆえんかもしれない。もし、三成が義弘の窮状にみずから命を賭す覚悟で同調したなら、義弘も西軍のために命まで捧げるくらいの覚悟になったかもしれぬ。敵が攻撃しなかったからよかったものの、もし、攻められて墨股の部隊が敗北したなら、さきに見捨てて大垣に走った三成を、島津方はどれだけ恨むか分らない。

東軍の諸部隊は、岐阜附近の攻略がいちおう成功したので、翌二十四日に、その全兵力を大垣の西北にあたる赤坂附近に集結させ、兵力を休養させるとともに、家康の来着を待った。このとき、家康の本陣を山岡という所にさだめ、その設営にあたっている。

赤坂附近に集結した部隊は、井伊、本多などのほか、藤堂、京極、黒田、金森、加藤（嘉明）、細川、福島、堀尾、山内、浅野、池田、生駒、中村、田中、有馬という顔ぶれだった。これで見るとおり、井伊、本多を除いては、ほとんど秀吉子飼いの武将ばかりだ。

ここで、眼をその後の加賀方面に移してみる必要がある。前田利長は、さきに大谷吉継にさえぎられて、越前方面への進出ができず、それに加えて上方勢の上陸も伝えられたので、金沢から

身動きすることができなかったのだが、十日に小山から発した家康の使者が利長のもとに来て、即刻越前を攻略して、東軍に加わるように求めてきた。

そこで、利長はまた越前に兵を向けようと考え、使を七尾にある弟利政に送って、その出動を求めた。

このとき利政は、

「大老、奉行の通牒を見ると、今回大坂の挙兵は国家の為におこなったものであるから、兄貴の命令とはいえ、東軍に荷担することはできない。また、亡父利家は、太閤の死にさいして、天下のことを委されたのだが、その義務を果さないうちに亡くなったのを残念がっていた。遺志を継いで豊臣家に恩を返すようにとは、亡父の遺言だ。その言葉は、なおまだ自分の耳に残っている。秀頼に叛くことはできぬ」

と断った。

利長も、弟が加勢しなければ、単独では越前攻めができない。また、このときはまだ大谷吉継が越前に頑張っていたので、自然と両軍は加賀、越前国境で睨みあいのかたちとなっていた。

しかし、そののち、三成から吉継のもとに岐阜城陥落の報が到着した。吉継は、いつまでも前田にかかずらってはいられなくなり、これには僅かな守備隊だけを残して、急遽、関ヶ原に前進したのである。

ここで前田利長も、はじめて動けるように解放された。

8

右の前田利政の言葉でも分るとおり、まだ、秀吉の恩顧を考えている大名も多かった。だから西軍の総帥毛利輝元は、秀頼をつれて出馬するつもりであった。秀頼が形だけでも大将となれば、これに弓を引く太閤恩顧の大名はあるまいというわけだ。

当時、秀頼は八歳であるから、いくら秀吉の遺児でも何の働きもできないわけだが、すくなくとも秀頼を前面に押し出せば、家康についた旧豊臣方大名は怯んだにちがいない。また、家康も、ちょっと持てあましたであろう。また、西軍からすれば、士気も盛上がったろうし、人心も一致したにちがいない。ところが、この輝元の計画は、彼自身が大坂から出るのが遅れて潰れてしまった。

したがって、西軍の事実上の総指揮官は石田三成ということになる。もともと、家康に味方した旧豊臣方大名は、半分は三成憎しの感情で走ったのだから、三成が総大将となれば、ますます敵意が固まるわけだ。例に出すのはいささか悪いかもしれないが、河野一郎憎しの立場から、自民党内の反河野派が団結するのとどこか似ている。

家康は、もちまえの懐柔と恫喝を適当にないまぜて、これら諸将を操縦したから、彼我の強弱の差は、ますます開くわけである。人心からいっても、関ヶ原役は戦うまえから西軍の敗北だった。

その家康はまだ江戸にぐずついて、いつ西に向かって腰をあげるか分らない。

家康は、前記のように、その先鋒が旧豊臣方の武将ばかりなので、彼らの働きぶりを見とどけたうえで出立する考えであった。大丈夫とは見込みをつけたものの、なんといっても新附の味方だから、心は許せないわけだ。ところが、岐阜城が彼らの手によって陥ったと聞き、家康もようやく重い腰をあげる気になった。慶長五年九月一日、いよいよ江戸城を発し、西上の途についたのである。家康とても、どれほどこの日を待ちかねていたかしれない。彼の心は、その脚に畳の

目が喰いこんだように、痺れを切らしていたにちがいない。

家康は、約三万三千の兵を率いて江戸を出発したが、その夜は湘南の金沢着、二日藤沢、三日小田原、五日は駿河に入って清見寺、六日島田、七日中泉、八日白須賀に到着した。上杉征伐のため、大坂から江戸に下ったときの緩慢な速度と比較せよ。

白須賀では、小早川隆景の養子秀秋の使者に接した。秀秋は、そのまえにも二回ほど使を送って、家康に味方することを密約している。

いうまでもなく小早川隆景は、その兄吉川元春とともに毛利家の両柱であった。隆景は、中国役を契機として秀吉に心服して以来、ずっと彼のために働いている。しかるに、実子なく、秀吉のすすめで夫人北政所の甥を養子とした。これが秀秋である。

秀秋は、関ヶ原役で形勢観望し、家康に寝返りを打ったように伝えられているが、これは誤りである。また、東軍に味方したのも、彼だけの意志から出たのではない。それには北政所の考えが大いに秀秋に影響している。すなわち、秀吉歿後、大坂方では高台院（北政所）と淀君との対立があったが、家康は早くから高台院を庇護していた。高台院としては淀君の子秀頼の隆昌よりも、家康の好意への傾斜が強かったわけである。この辺は女性間の嫉妬を利用した家康の巧妙さである。

家康にとって秀秋からの極秘通牒は、旅の幸先として心をはずませ、九日岡崎着、十日熱田、十一日は、基地となっている清洲城に入った。十二日には風邪気味で薬など飲んだが、この滞在中に服心の井伊直政、本多忠勝などを集めて、いわゆる清洲会議を開催している。

その会議とは、中仙道から西上中の嫡子秀忠の大軍が、まだ到着しないので、合流のためにしばらくここで待つか、あるいは、戦局すでに動いている現在、単独で西上を進めるべきかの討議だった。

その結果、家康は、秀忠軍の未着のまま、速戦即決に出たほうが有利と判断した。もとより、秀忠軍がくれば、その兵力はおよそ三万八千。麾下には榊原康政、大久保忠隣、酒井忠重、奥平家昌、菅沼忠正、真田信幸、小笠原忠政、仙石秀久、諏訪頼水などの有力な将校を集め、智将本多正信がその参謀をつとめている。しかも、家康は、戦機の熟したるを大事とみて、この中仙道軍の来着を捨てた。だが、心の中では、どれだけ秀忠軍の遅延にあせって、

「一体、何をぐずぐずしてやアがる」

と、わが子に悪態をついていたか分らない。

こうして家康は十三日清洲を出発、陥落したばかりの岐阜城を通過し、さきに前線部隊が設営した赤坂の指揮所に到着した。

――これに対して、西軍はどうしていたか。

西軍は、先に岐阜、犬山、竹鼻の線が東軍によって破られたため、すぐに大垣から使を大坂に出して毛利輝元に出馬を乞うた。と同時に急使を越前に馳せ、大谷吉継に京極、脇坂らの隊を伴って関ヶ原附近に来会するように告げた。そして、三成自身は大垣城を脱出して、密かに佐和山に帰り、防禦に専念したのである。

これは、東軍が赤坂に集結して急には大垣城に迫らず、垂井、関ヶ原附近に放火したのを見て、三成は東軍がすぐにも自分の居城佐和山を襲う計画だと早合点したからである。こんなところにも、総指揮官としての三成の狭量さが出ている。

天下の兵力を二分した、東西の大会戦が迫っているというのに、何ぞわが城の大事なる。自分のケチな城などは無視して、全体の作戦に専念すべきだが、どうも三成のやり方はコソコソしす

ぎている。しかも、大坂の毛利輝元のところに出した使者は、途中で東軍のために捕えられ、輝元のもとには達しなかったのである。それを三成は、最後まで知らなかったのだから、いよいよ万事、たちおくれている。

大谷吉継は、三成からの急報に接して北陸路の守備隊を残し、その子吉勝、次子木下頼継、脇坂安治、小川祐忠、朽木元綱、戸田重政などと共に九月三日美濃路に入り、関ヶ原の西南にあたる山中村に来った。

また、毛利秀元、吉川広家、安国寺恵瓊、長曾我部盛親、長束正家などは三万余の兵を率いて伊勢路から入り、赤坂の西にあたる南宮山に上った。ここは関ヶ原でも小高い丘になっていて、東軍の諸営所を見下ろす恰好の地となっている。

佐和山の防備を強化した三成は、ふたたび大垣に戻って、書を大坂にある毛利輝元に送り、早早に出馬をするように催促する。輝元は、十二、三日ごろ秀頼を奉じて大坂から佐和山に入ろうとしたが、折から増田長盛が東軍に内通しているとの噂があったので、その出発を見あわせた。これも戦機の上で大きなチャンスを逸し、石田方の損失となっている。秀頼が前線に出られなかったのもそのためだ。増田長盛が東軍に款を通じたとの風聞も、あるいは家康方から放ったスパイの謀略であろう。

さらに島津の兵は、はるばると薩摩から加勢に来会したが、それは僅か千五百人だった。これに義弘手持ちの兵を加えても、島津方の兵力の不足はどうすることもできなかった。

今度は、問題の小早川金吾中納言秀秋の動静である。彼は心を家康に寄せていたから、とかく態度が不鮮明だった。もともと彼は鳥居元忠とともに伏見城を守るつもりだったが、行違いで、心ならずも西軍に加わったのである。

それからは宇喜多秀家とともに、大坂にいたが、秀家が伊勢方面の家康方勢力を掃蕩する際に秀秋を誘ったが、彼は言を左右にしてこれに従わず、近江から敦賀方面を歩いて、病気保養を口実に、悠々と狩猟などして日を送っていた。

9

宇喜多秀家は、この秀秋の肚のなかを早くも察し、三成や島津義弘と諮って彼を糺明しようとしたことがある。このとき戸田重政は、

「もし、秀秋が大兵を率いて裏切りすれば、わがほうに勝利の見込みはない。この人の今後の向背は、実に西軍の勝敗に関する。されば、われは今より彼の陣営に赴き、軍議を口実に彼と対し、もし、叛意が見えたら、その場で彼を刺し殺す」

と、決死の覚悟を見せた。いあわせた人々、感動し、平塚為広を介添として重政につけた。

しかし、秀秋もさるもの、両人の意図を見抜いたかどうか知らないが、病が激しいと称して、ついに面会しなかった。重政と為広とはむなしく立ち戻った。

それから数日をへて、秀秋は八千の兵を率い、樫の棒に鉄条を巻かせた棍棒を屈強の者百人に持たせ、柏原まで来た。秀秋は大垣の三成のところに使者を向け、

「自分が病臥していたため、あらぬ噂がいろいろ飛んでいると聞く。しかし、いまは病気も癒ってここまで来たのだが、嫌疑をかけられている身であるから城中には入らぬ。この上は身のあかしを立てるため、まず東軍と戦闘を交えた上で諸氏と相まみえるであろう」

と申送った。大垣に入れば、どんな目にあわされるか分らないという警戒で、尤もらしい偽装をしたのである。

九月十四日、彼は松尾山に上り、頂上の古い砦を修復した。これに対し、脇坂、朽木、小川、赤座といった諸将も陣形を移した。

大谷吉継は、最も秀秋を疑った一人だ。吉継は、十四日の夜、秀秋の陣営に赴いて、彼の志を変えさせるため直言を試みた。このとき、秀秋の老臣たちは、傍でいろいろ弁解した。

「秀秋は病のために出馬の機を失し、種々の嫌疑をかけられたが、本心は断じてお味方するにあるから、ご心配下さるな」

「秀秋殿はまだ年若であるから、おそらく佞人(ねいじん)のために悪しきよう誘われるのであろう。御身たちは、よくこの辺を心得て油断をされるな」

と、吉継は老臣たちを戒めて帰った。しかし、それで安心したのではない。彼はみずから秀秋の裏切りに備えて、その陣を立て直したのである。

こうして西軍のほうで秀秋の態度にいろいろ気を揉んでいるのに反し、家康のほうでは、秀秋がとっくに款を通じて来ているから、かなり安心していた。が、まるきり楽観していたのではなく、秀秋の向背が予断できぬとみて警戒は怠らなかった。

つまり、秀秋が最後の決心をもって行動に出るまで、東西両軍とも不安な眼で彼を監視していたわけである。

当時、秀秋は八千の兵を擁していた。これですら、関ヶ原の決戦を左右する大軍とみられたのだから、さきに述べたように、田辺城に釘づけにされた西軍の一万五千が、どれだけ痛手であったかが分るというものだ。

ここで西軍の主な配備を見よう。

大垣附近には、宇喜多秀家、島津義弘、石田三成、小西行長がいた。

南宮山附近には、毛利秀元、吉川広家、安国寺恵瓊、長束正家、長曾我部盛親などがいた。

松尾山には、小早川秀秋があり、関ヶ原西方には、大谷吉継、脇坂安治、朽木元綱、小川祐忠、赤座直保などがいた。

これに対し家康は、赤坂附近に集結したまま、まだ動かなかった。が、東軍の団結は、すでに分裂を孕んだ西軍を呑んでかかっている。西軍の中でも、長束正家と安国寺恵瓊は南宮山にいたが、これは戦うためではなく、身の安全を保つためだった。三成は、とっくに両人の心理をさとって、

「かの山は人馬の水も無いくらいの高山で、戦争のときにも、人数の上り下りも出来ないくらいの山であるから、味方の者も頗る不審を持っている。察するところ、かの両人は、自分の身の安全だけを図っているようである」

と大坂の増田長盛に与えた通信の一節で云っている。分っちゃいても、この両人を三成は命に従わせることすらできなかった。

ここで三成の二十万石という小身が、いかに総指揮官として貫禄不足だったかがこたえてくる。彼にはさしたる武功もなく、また、敵地を切り取ったキャリアもない。およそ武官の間では、なんといっても戦歴がものを云う。秀吉の秘書としてしか有能を認められなかった三成の悲劇がここにあるのだ。

安国寺恵瓊や長束正家の輩(やから)にしてすでに然り。他の西軍の大名にいたっては、心から三成の指揮に服する者は一人もいなかったといっていい。僅かにそれを挙げれば、ただ友情で結ばれた大谷吉継くらいであろう。

徳富蘇峰は関ヶ原役について、次のように評している。

「およそ関ヶ原役の如く人間の弱点を露骨で赤裸々に発現したものはない。険悪なりと云はん乎、醜悪なりと云はん乎。両天秤でなければ必ず表裏がある。二枚舌や、二重腹は云ふまでもない。人は人と相疑ひ、人は人と相欺く。中立を装ふて形勢を観望せざれば、必ず内通して、逃げ道をこしらへておく。裏切る者もあれば、またその裏を掻く者もある。真にあさましき人心は、遺憾なく、この一場の葛藤に暴露せられた。公義に託して、私怨を報ずる如き、公事を名として、私利を営むが如きは、ほとんど尋常の茶飯であつた」

——関ヶ原役たるや、その東西いずれの陣営に属したる者も、その家名と、子孫保存を賭けての私欲の戦いだった。しかも、人心は、秀吉治世のかなり長い平和時代をへて、それ以前の単純さではなくなっていた。各将とも多分に政治性が加わって、駆け引きあり、謀略あり、安全の余地を作る工作があった。

もとより、それらは彼らの自我、利己心から出たもの。眼中には百姓なく、庶民なかった。筆者は、これまで合戦譚を書きつづけてきたが、戦争と民衆という視点からは、まだ一度も捉えていない。このことは、あるいは読者の一部に大きな不満を与えていると思うが、この稿は合戦の経緯を述べるのが主で、それらはわざとはずした。決してなおざりにしているわけではない。それはまた別な視点から書き改めなければならないことであり、また、この分野は、未だ学界でも未開拓の世界となっている。

一つは、記録のほとんどが、権力筋にだけ遺っているためもあり、また一つは、当時の民衆が文字を解せず、記録として遺せなかった資料の不足もあろう。しかし、誰かがこれらを採集してやらねばならない仕事である。

再び戦闘に話を戻す。

西軍では初め、赤坂に東軍の将士が誰やらを待つような気配でいるのを見て、それが家康だとは推察したものの、いつまでたっても、その旗本があらわれる様子が見えない。そこで、三成は、これは畢竟、家康が上杉景勝に妨げられて西上できないのではないか、とひそかに考えた。もちろん、この考えの中には、家康には来てもらいたくないという、希望的な観測が入っている。他の西軍の諸将も同じ心理だったであろう。彼らは口にこそださないが、早くから家康に対して臆病風にとりつかれていたのである。

だから九月十四日、家康が岡山の陣所に到着し、その旗幟の盛んに立つを見て、西軍は大恐慌をきたした。なかには、まだ、家康が着陣したかどうか、半信半疑の者もいたくらいで、物見を出してその実否をたしかめるなど大騒ぎだった。

宇喜多秀家の家人と石田の家来とが、岡山の近くに斥候に赴いたところ、彼らは馳せ帰って、「内府(家康)の着陣に間違いありませぬ。というのは、旗本の渡辺半蔵の指物に見おぼえがございます。渡辺は持筒の物頭ですから、内府の出馬がないのに、そこに現れるはずはありません」と報告したので、陣中、いよいよひしめいた、とある。では、家康の岡山における作戦はどうだったのか。

誰しも考えることで、その進路は二つしかない。一つは、まず大垣城を攻めること。一つは、大垣城の攻落はあとまわしとして、ここには牽制軍を置き、長駆して江州路に入り、大坂の根拠を覆すことだ。

家康は、はじめ大垣城を攻め落すつもりだったようだが、軍議で加藤左馬助の進言を採用し、そのまま進撃と決定した。左馬助の進言とは、

「明日は早速にも戦闘開始が上策と思われる。というのは、この季節は朝霧が深いゆえ、攻撃に

は甚だ有利である。敵は防禦陣を張っているので、霧のため間近に進んでも気がつかないこともあろうし、また油断もしているに違いない。それに、毛利輝元はまだ大坂にいることだし、それだけ現在の敵の戦力は手うすとなっている。また、小早川秀秋はすでにお味方をしているし、つづいては吉川広家も内通確実である。いま大垣城などにかかずらって、いたずらに敵に軍備を充実させるよりも、この機を逃さず、一気に攻撃するのが何よりと存じます」

というのであった。

一説には池田、井伊などが大垣城を攻めよと勧めたというが、左馬助の献策が家康によって妥当として採用されたのである。すなわち、家康は、その全兵力をもって、当面の進路を驀進することに決したのだ。

これと比較するわけではないが、西南役のときに、西郷隆盛が熊本城などに引っかからないで、一気に本州目指して東上したなら、戦局はまた別なかたちになっていたであろう。西郷は熊本城に膠着したばかりに、政府軍に兵力増強の余裕を与えることになったのである。されば、家康が大垣城の攻撃を抛棄したのは、当をえた作戦であったと同時に、慎重な家康が、それほど果敢な作戦に出た裏には、十分な成算と、その上にたつ鬱勃たる勇気のためである。

家康は、この大前進の意図を隠さず、むしろ西軍に向かって宣伝した傾きがある。つまり、敵が大垣の城に籠れば、それを横目に見て押し通るし、城を打って出れば、正面衝突はむしろ望むところといった気概だった。

これに対して西軍のほうでは、大部隊を関ヶ原の線まで後退することに決した。大垣籠城の説はなかったが、その晩のうちに夜襲しようという論はあった。それは島津義弘が勧めたことで、赤坂にいる敵情を偵察すると、敵兵いずれも疲労の余り、甲冑を枕として眠りこけている者が多

い。この際、家康の本営を奇襲すれば、必ず功を奏すであろう、と云い、もし、この作戦が許されるならば、自分はみずから先鋒となろう、と申出た。

このときすでに、三成は関ヶ原の線までの後退を決したあとでもあり、また、その参謀島左近が、夜襲は寡兵が多勢を相手にするときのことで、今はよろしく堂々と正面の決戦をすべし、とさえぎったので、夜襲の議は行われなかった。

島津義弘の提言を伝えたのは、その甥の島津豊久であるが、島左近が奇襲論を排して、「われら久々にて内府の押付(陣容)を見申さん」と云ったとき、豊久はさあらぬ体で、

「そこもとは内府の押付を見られたということだが、それはいつのことか」と訊いた。左近は、「われら先年故あって武田信玄の家来のもとにあったころ、山県昌景が一手をもって、内府を掛川の城近くの袋井まで追いかけたことがある。その節、内府の押付を見たことがある」と答えた。これは三方ヶ原の戦のことである。

豊久は左近にむかい、「それは下劣の譬にも云う杓子定規と申すもの。その節の内府と、ただ今の内府とを同じと考えるは大きな誤りである。明日にも一戦のとき内府の押付をご自分でご覧なされば重畳」と云い捨て、冷笑の中にも満腔の不満をあらわして座を起った(落穂集)。

豊久が云うのは、三方ヶ原で敗戦したときの若い家康と、現在の家康とは大きな違いというのだが、もし、このとき豊久の奇襲作戦が用いられていたなら、関ヶ原の前哨戦として、本戦にも違った影響を与えたかもしれない。運が悪いときはどこまでも悪かったのである。三成も島津の建言に心動いた跡があるが、島の言葉を押えることができなかったのは、やはり三成の器量不足である。

10

さて、関ヶ原に転進する西軍諸部隊は、九月十四日、大垣城に兵七千五百をとどめ、午後七時に出立した。西軍は、あけっぴろげの東軍の軍事行動の態度とひきかえ、何事も隠密行動に出た。馬舌を縛り、松明を点ぜず、闇の中を関ヶ原に向かった。第一隊石田、第二隊島津、第三隊小西、第四隊宇喜多の順である。

折から驟雨、蕭条として降りしきり、四面は漆を塗ったような暗黒だ。ただ長曾我部盛親の陣所のある栗原山の、赤い篝火を唯一の目じるしとして野口村を過ぎ、牧田路を取り、狭いごつごつした山路を行くこと四里ばかり。将兵ことごとく雨に濡れて、寒冷、肌を徹り、行軍すこぶる艱難を極めた。その先頭部隊が関ヶ原に到着したのは、十五日の午前一時ごろであった。

このとき三成は、大部隊が大垣を出発したのち、僅かな供まわりを連れ、単騎で一行のあとを追い、途中、長束正家、安国寺恵瓊にあい、松尾山の麓では小早川秀秋の老臣平岡頼勝とあって、明日の戦略を伝え、狼煙の上がるのを待って東軍の側背を衝くように云い含めた。

関ヶ原に着いた西軍の新配備は——

栗原山に長曾我部盛親、それより少し離れた岡ヶ鼻に長束正家、安国寺恵瓊、南宮山と、その北方山麓には毛利秀元、吉川広家がいた。

松尾山には小早川秀秋、山中村とその東方高地には、大谷、脇坂、朽木、赤座、戸田などが陣し、天満山には宇喜多秀家、その北方には小西行長、小池村に島津義弘（惟新）、同豊久、最後の笹尾山附近に石田三成、蒲生郷舎、島左近の総指揮所を置いた。

一方、家康は、十四日夜、敵の夜襲を考慮して篝火を焚き、しきりと警戒したが、その夜半、

西軍がほとんど大垣城を出て牧田路へむかった情報を聞いた。

寝ていた家康は、この報告を聞くやがばと跳ね起き、してやったるかな、と雀躍した。敵は労せずして、自ら潰滅を受ける態勢をとってくれたのである。彼は湯漬けをとり、具足をつける間にも、長久手の話などを小姓たちに聞かせ、殊のほか上機嫌だった。味方の人心に絶えず狐疑逡巡していた三成の心理とは格段のちがいだ。

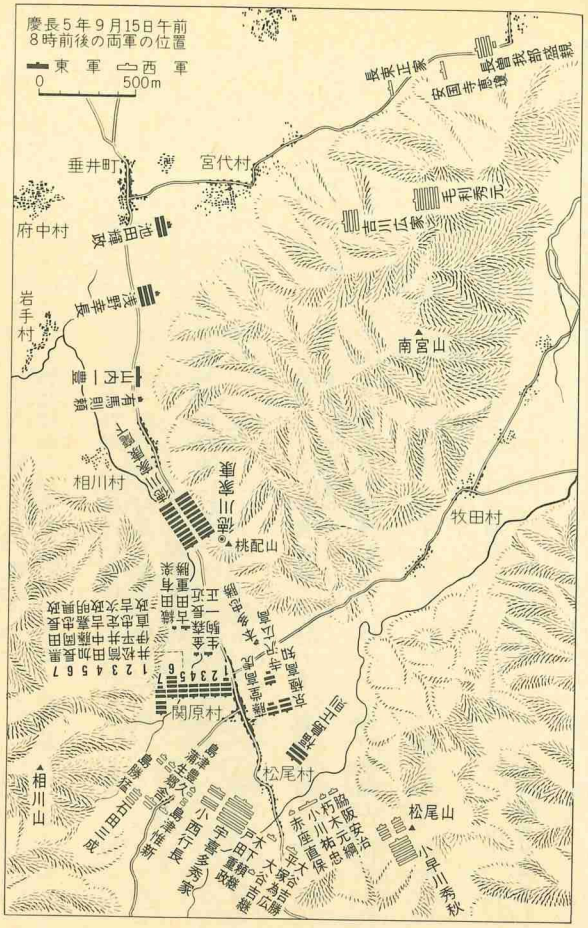
五十八歳の家康は、いつも着ている小袖の上に胴をつけ、黒広袖の羽織と塗笠という気楽な軽装だった。あまりに支度がはやかったので、家康の行先の分らない家来も多く、いずれに出御なさるや、とたずねれば、敵のほうへ、と家康は答え、馬に打ち乗って駆け出した。旗、槍、鉄砲の衆もあわてて、そのあとから走り、垂井というところで人数が揃ったというから、家康たるもの、いかに雄心が押え切れなかったかが分る。

東軍は、十五日午前三時から逐次、諸部隊とも行動を開始した。その先鋒諸隊は、夜明けによううやく関ヶ原に達した。しかし、夜来の雨はれず、濃霧は山間を蔽って、五十間先が分らない。福島隊の先頭と、宇喜多隊の後尾とが接触しても混乱し、敵か味方か、どちらも分らないくらいだった。

こうして東軍は、すでに、その前面に西軍の存在を知り、行進を中止して、いよいよ、その陣地についた。福島正則は左翼にあって宇喜多隊に対し、黒田長政は右翼にあってもっぱら石田隊にむかった。細川、加藤、田中、筒井および松平忠吉、井伊直政は、その中間にあって小西、島津の兵と対した。その後陣には金森、生駒、織田有楽、古田重勝などがあった。

また、福島陣の背後斜めには藤堂、京極、寺沢などが控えて、大谷吉継隊とあい対した。

東軍の数約七万五千、西軍約八万、彼我の兵力はほぼ伯仲しているといってよかろう。



家康は、前進するたびに先陣からの報告をうけ、近臣に命じて、絶えず前面の状況を偵察させ、自分は馬を桃配山にとどめた。すでに石田、小西、宇喜多、大谷などという陣場とは、その間約一里ばかりしかない。鉄砲の音は、乳を流したような霧の中で爆竹を鳴らすように聞えはじめた。いまや天下分け目の決戦はまさに始まろうとする。ときに慶長五年九月十五日午前七時であった。

11

午前八時にちかづいたが、夜来の雨に関ヶ原一帯の山野は深い霧に閉ざされている。東西両軍十四、五万の兵は、白い闇の中にひそんでいた。すでに二時間前から鉄砲の音だけは散発的に聞えている。

家康の陣と大谷刑部の陣場とは一里ばかりしか隔たっていなかった。家康の旗本も昂奮した。気負い立ってんでに馬をそのへんに乗りまわすので、備えがしかと定まらないくらいだった。大レース前の競馬馬のようなもので、癇が昂って発走点に揃わないようなものだ。旗本の一人の野々村四郎右衛門などは、自分の馬を家康の馬につっかけたので、腹を立てた家康が刀を抜いて払った。幸い、野々村は逃げた。癇癪を起した家康はその刀で小姓の持っている指物を筒の根元から切った。さすが沈着の家康も接戦を前にして殺気立っていたのである。

しかし、両軍主力未だ対峙したままで戦闘開始にはならぬ。流れる霧の間から両軍の旗幟だけが隠見する。

逸った井伊直政は、婿忠吉とともに騎士三十人を率いて持場を離れ、福島正則の隊の傍まで進んだ。福島の先頭部隊長の可児才蔵がこれを咎めて、

「今日の先手はわれらの主人福島左衛門大夫にござる。抜け駆けは御法度でござるぞ」

と牽制した。

可児才蔵は講談でいう蟹江才蔵で、福島方の剛の者だ。直政は可児に対し、

「これは下野守殿（忠吉）と井伊侍従が物見に出かけるところでござる。抜け駆けでござらぬ。お通しなされ」

と宥めた。忠吉は家康の第四子で、秀忠の弟。正確にいえばこのときはまだ忠康。武州忍で十万石。それで直政も下野守殿と敬語を使ったのだ。可児も相手が僅か三十騎だから、ツイその言葉を信用して彼らに陣場を通させた。ところが、これが両軍激突の口火となったのである。

井伊隊三十騎は前面に出ると、宇喜多秀家の隊にむかっていきなり射撃を始めた。かねて示し合わせたのか、その銃声と喊声を聞いて、後方にいた井伊の本隊も一団となって駆けて福島隊の傍を通った。

おどろいたのは福島正則で、いかで猶予すべき、本営の命令を待たず、銃卒八百人を率いて左側から進んで宇喜多隊を射撃した。これが午前八時すぎだった。

井伊隊、福島隊に懸られた宇喜多隊は、秀家自ら指揮をなし、陣形を五段に展開して防戦した。朝霧は山間に残って未だに霽れやらぬ。

東軍の諸部隊では福島隊の銃声を聞くや否や、いずれも前面に突撃した。藤堂高虎、京極高知の二隊は進んで大谷吉継隊に攻撃を開始、寺沢広高隊もこれに参加した。

織田有楽、古田重勝、佐久間安政、船越景直らの東軍部隊は小西行長隊を攻撃し、田中、細川、加藤、金森、黒田、それに竹中の隊がいっしょになって、目指す主謀、石田三成の陣地を襲撃した。

桃配山にあった家康の本営では濃霧のため視界が利かないので、銃声と喊声は聞えるが、戦闘

の状況がわからない。声はすれども、姿はみえぬ。ほんにお前は……と、家康の参謀部でも眼をこすって敵、味方の形勢判断に苦しんだ。

このとき霧の中から喊声が三度にわたって大いに起った。家康が、「あれは勝鬨だろう」と呟いたとき、物見の米津清左衛門という者が敵の首をさげて駆けもどり、「御合戦は勝にて候」と報告した。これは景気づけで、そう簡単にはゆかない。

しかし、関ヶ原の戦は、戦前の形勢と、両軍動員数の大げさにもかかわらず、戦闘そのものは呆気ない勝負に終っている。それというのは、たびたび書いてきたように、戦争前から家康側は団結と闘志が一致していたのに、西軍は人数こそ東軍に劣らなかったものの、参加部隊はいずれも人心がバラバラで、しかも、相互不信で、他を疑えばわれも疑われるという有様で統制が取れなかったからである。

また、総指揮官としての石田三成の貫禄が足りなかった。三成が自ら各部隊を駆けまわって、戦闘参加を頼むようでは、勝てる戦いではない。島津義弘は三成の懇願を諾かずに、追い返した。

桃配山の家康は、旗本を魚鱗鶴翼の陣形で構えていた。魚鱗とは縦隊、鶴翼とは横隊だから、両方で構成した厳重な隊形だ。だが、依然として霧深く、「雨もそぼ降り物の色目も見え判らず、漸く巳の刻（午前十時）ばかりに空も晴れげに見えわたる」（太田牛一）ようになった。旧暦九月十五日の山間の雨と霧はすでに寒い。

このとき物見が家康の前に戻って云うよう。

「御敵治部少輔（三成）、島津兵庫、小西摂津守の旗頭を見申す。また、不破の関屋、北野の原、小関村より南辰巳にむかって人数を備えたるは、大谷刑部少輔、備前中納言（宇喜多秀家）、戸田武蔵（重政）の居陣にて候」

と状況報告した。

そこで、家康は、谷川を越え、関ヶ原北野へ人数を繰り出させた。先陣の福島正則、細川忠興、黒田長政、本多平八郎など、いずれも道筋を西にむかってどっとばかりに敵にかかった。

西軍の主将石田三成は、これをみて戦機すでに熟したと判断、狼煙を天満山にあげた。この天満山の前方麓には小西、宇喜多の両隊の陣があるが、山上からは小早川秀秋のいる松尾山、毛利、吉川のいる南宮山を展望する。この狼煙は、かねての約束通り、松尾山の小早川秀秋に、すぐ山をかけ下って東軍を攻撃せよとの合図であった。

しかるに、秀秋の軍は一向に動かない。三成は焦ってさらに急使を松尾山に馳せ、即刻出撃を督促した。また、大谷吉継も、小西行長も人を遣って秀秋の老臣に迫らせたが、秀秋に心を合わせた小早川の老臣たちは言を左右にして応じない。

ところが、家康のほうでも、かねて内通の約のある南宮山の毛利、吉川の兵が自分らの背後に回ってくるのを心配した。家康も秀秋が行動を起すまでは、彼らの向背を信じなかったわけだ。大いに不安がっていると本多忠勝が、

「秀秋にもし、われらに敵対の心あれば山を下るはずなのに未だ山上に留まっている。これは内応の約束がウソでない証拠。殊に秀秋には浅野、池田らが万一に備えているから、心配御無用」

といったので家康も落ちついた。

午前九時すぎ、家康は少し馬を進めて彼我の戦況を視察した。その視るところに従い、使を各隊に馳せて命令を伝えさせた。また、ときどき法螺を鳴らし、鬨の声をあげさせて士気を煽った。

本多忠勝は、家康に意見具申したように、松尾山の秀秋が当分は山を下る意志なしと判断したので、前面の戦闘が激烈となり、東軍がしばしば退却の色を見せるのをみて、進んで戦闘面の中

央に進出した。正面の敵は小西、宇喜多隊である。この忠勝の新鋭部隊のため、小西、宇喜多隊はかなり撃破された。

家康は、十一時ごろ、さらに三、四町ばかり前に進んだ。時に正午に近く、雲間の太陽は頭の真上にある。東軍の諸隊、全力を尽して攻撃したが、西軍の善戦で容易に打ち破ることができない。のみならず、かえって度々退却を余儀なくされる有様で、勝敗いずれとも定まりがたかった。

これを見た家康は、たまりかねて伝令を馳せ、黒田長政に秀秋の進退を問わしめた。戦闘互角の状態とあらば、家康とても松尾山の秀秋と、南宮山の毛利秀元、吉川広家の向背が大いに憂慮されるわけである。

長政は、家康の使者に、

「秀秋の態度はまだはっきりしていないが、もし、彼が応じない場合は、われらは当面の敵を破ってのち、直ちに彼に向かって突撃するであろう」

と答えた。長政は、秀秋を東軍に味方するよう家康に斡旋した仲介者だから、秀秋が違約すればその責任があるわけだ。長政は、秀秋が約に背けば、死を決して彼を刺すつもりだった。

家康の物見久保島孫兵衛も馳せ帰って家康に告げた。

「秀秋には西軍を裏切ってお味方する気配が未だに見えません」

家康は爪を噛んで、「さては、小伜めにたばかられたか」と悔んだ。家康は、気に入らないときや、腹が立つときは、よく爪を噛む癖がある。しかも中仙道から上って合流するはずの秀忠軍が来ぬ。

「秀忠はまだ来ぬか」

と家康は何度も旗本に訊いたが、その影も見えない。ここでその三万八千の大部隊が到着した

ら、どんなに助かるか分らないのだが、気の焦ることであった。家康は木曾路のほうを馬上から伸び上がってはふり返った。まさか、その大軍が信州上田の小城にひっかかって手間どっているとは夢にも思わない。作戦が齟齬するときは、二重にも三重にもなるものだ。

家康あせって、

「では、秀秋がどっちに向かうか、ためしに彼の陣に向かって鉄砲を放ってみよ」

と遂に命じた。使番(つかいばん)久保島は直ちに馳せ到って、この令を伝えた。そこで、東軍の前線銃隊は松尾山に向かって空弾(からだま)で一斉射撃をした。おーい秀秋君、イエスかノーか、ハッキリしろよ、というわけで、ギリギリの決着に追(お)いこんだ。

秀秋は、一方で三成、吉継らを焦らせ、また一方では家康すらも焦らせた。松尾山に位置づけられた秀秋は、そのまま、天下の戦局の帰趨を握るキャスチングボート的な存在だった。秀秋は大したことはない人物だが、この瞬間では、家康、三成などの大物や、東西両軍を手玉にとっていたのである。人間には、しばしばこのような運命的なシチュエーションが訪れて、その人を実力以上にさせる瞬間がある。

「あらゆる時の中できわめて稀に、運命はいかにも奇妙な気まぐれから、行き当りばったりに、いかにも平凡な人間に身をまかせることが往々にしてある。ときどき――そしてこれは世界歴史のもっともおどろくべき瞬間であるが――重大な運命を左右する糸が、一瞬間だけまったくつまらない人間の手に握られることがある。……彼らの一人がその機会をつかんで、それをつよく高めると同時に自分自身をも高めることはめったにない。偉大さが、つまらない者に身をゆだねるのはほんの束の間だけであり、それを取りにがすと、そんな機会には二度とはめぐまれない」

これはシュテファン・ツヴァイクが「ウォーターローの世界的瞬間」の中でナポレオンの将校

グルシーについて述べた評である。

「グルシーは軍部の序列の中から出て《世界歴史》の中に入りこんだということはなかった。今度は一瞬間だけそういうことになったのだが、しかしそれがまた何というたいへんな一瞬だったことか！」（片山敏彦訳）

右の言葉は、そのまま松尾山上の小早川秀秋に通じる。グルシーを秀秋に、ウォーターローを関ヶ原に、《世界歴史》を《日本歴史》に置き替えてよい。事実、秀秋はこの一瞬間だけの存在によって《日本歴史》の中に入り込んだのである。

秀秋は、山上に兵を集めたまま、眼下の戦局を観望していた。とはいうものの、はじめのうちは、朝霧のために視界が遮られ、銃声や鬨の声を聞くだけで、はっきりとは分らなんだ。

しかし、十時すぎになると、その霧も次第にうすくなり、戦闘の模様も視野に明瞭となってきた。しかも、眼下の高原にくりひろげられた両軍の戦闘は一進一退で決定的な観察はできなかった。

かねて黒田長政から秀秋の隊につけられていた大久保猪之助という者は気が気でなく、秀秋の老臣に、直ぐに西軍に攻撃を開始するように迫った。しかるに、ここでも老臣たちは秀秋の心事を忖度(そんたく)して、戦機未だ熟さずと称して動かなかった。東西両方からつつかれても、小早川主従は、まだまだ、とグズついていたのだ。

このとき、松尾山下の東軍の銃隊から秀秋の陣は一斉射撃を受けたのである。

秀秋も、これ以上、知らぬ顔の半兵衛をきめこんでいるわけにはいかない。このへんが限界とみた彼は諸隊長に命令し、直ちに西軍への攻撃開始を伝えた。そこで、小早川隊は二手に分れ、西北の西軍に向かって吶喊(とっかん)して山をかけ下りた。その山麓が、秀秋の動向に備えていた大谷吉継

の陣だ。小早川隊は大谷隊に向かって銃卒六百人ばかりで一斉射撃をなし、次に刀槍をふるって突撃隊が襲いかかった。秀秋にとって賽は投げられたのである。

12

もっとも、秀秋の家来の中でも、この裏切りを承服しなかった者もいた。秀秋の先頭隊長松野主馬（しゅめ）という者、西軍への攻撃の命に従わず、

「今や掌を返して東軍に応じるのは秀頼公に報ずる道ではない。たとえ主君が西軍を攻撃しても、自分はむしろ東軍に突撃して潔（いさぎよ）く斬死するまでだ」

とうそぶいた。使番村上右兵衛は、これを諭して、

「殿の内応は今日始まったことではない。前から内々に決っていることだ」

と云うと、主馬はしぶしぶ山は降ったが、遂に一戦もしないで傍観していた。

これをみても、秀秋は謀叛の意図を最後まで隠していたと思える。あるいは、最後の瞬間まで秀秋は迷っていたのではあるまいか。なにしろ、やりそこなえば元も子もない大博奕だから、用心に用心を重ねていたのかもしれぬ。

しかし、秀秋ほど積極的ではないが、消極的に西軍を裏切った有力な部隊がある。南宮山にあった毛利秀元と吉川広家だ。

家康は、秀秋の向背がはっきりしないとき、この南宮山の毛利隊がわが陣の背後から襲ってくるのではないかと危惧したくらい、この二万に近い敵を意識していたのだが、家康が午前九時すぎ馬を進めて関ヶ原の東口に来たとき、毛利も吉川も手を出さなかった。家康は、そのまま三、四町前進したが、その通路に当る山麓を家康の本隊が通過しても毛利方は鉄砲ひとつ撃たない。

南宮山の峰から、その麓の路までは、百間ぐらいしかなく、山峡のため、敵味方がいかにも間近く見えたのだが、山上の両隊はただ家康の通過を見物するばかりだった。家康、大いに安心したが、毛利秀元も、吉川広家も、とうに家康に対して誓約書を出しているのは前に記した通りだ。この両家は、積極的には西軍を攻撃しなかったものの、その苦戦を終始傍観していた。いわゆる東軍への中立援助だ。

家康は、小早川秀秋の隊が松尾山を下り、大谷の陣地に突入するのを見て大いに悦び、直ちに鬨の声をあげさせた。全軍、これに応じ、喊声は関ヶ原の山野を動かし、士気十倍した。東軍の前線部隊、ここにおいて総攻撃を開始したのである。

怒髪天を衝いたのは大谷吉継である。もともと、彼は秀秋の心を見抜いて、これに備えていたから、秀秋軍が松尾山を駆け下って味方を攻撃したのを見ても今さらおどろきはしなかった。彼は六百人の決死隊でこれを防いだ。そして、他の支隊も前面の敵を棄てて吉継の本陣に集り、一致して裏切りの小早川隊に当った。その勢いは五町にわたって小早川の兵を撃退し、さらに、家康から秀秋につけられた軍目付奥平貞治と、兵三十余人を仆した。大谷隊の全士卒がいかに秀秋に激怒していたかが分る。

秀秋はこれを見て、自ら采配をふるって本隊を進めた。吉継の麾下、平塚、戸田の諸隊は大いに奮戦し、秀秋の本隊を撃退した。敵三百七十余人を殺傷したというから、大谷隊の捨身の攻撃が知れる。事実、大谷隊も士卒百八十人が仆れた。

秀秋の裏切りは半ば織込みずみではあったが、やはり西軍にとっては大打撃だった。だが、秀秋隊の寝返りよりも、もっと寝耳に水だったのは、脇坂、朽木、小川、赤座らの諸隊の裏切りである。

大谷吉継は秀秋ばかりをマークし、これらの諸将には注意を向けなかった。のみならず、彼はあくまで脇坂らの誠実を信じて、小早川隊のいる松尾山の側面に右の諸部隊をして備えさせていたのだ。つまり、秀秋が裏切って西軍に突入するときは、これらの諸隊が側面から打ってかかり、小早川隊の行動を牽制する役目にしていた。

ところが、脇坂、朽木、小川、赤座らは、小早川隊が松尾山を駆け下り、大谷隊に突入するのを見て、戦局すでに西軍に分なしと判断した。すなわち、彼らは小早川隊に合流し、いっしょになって西軍を攻めたのである。もっとも、このうち、脇坂は、家康に内通していた一人だったから、当然の行動といえる。西軍は、吉継をふくめて、夢にもそれに気づかなかっただけだ。

脇坂、朽木らが大谷勢の戸田、平塚の隊に向かうのを見た秀秋は、これで気を取直し、ここで三方から大谷隊を攻めた。さしもの大谷隊もたまりかね、遂に潰滅となり、隊長の戸田重政、平塚為広は討死した。

吉継は、もし、秀秋が裏切りすれば、西軍の勝利なしと思い、自分から死を覚悟して、戸板の輿に乗って本隊を指揮していた。彼は癩のために身体は糜爛し、その眼もほとんど盲に近かった。

吉継は湯浅五助という家来をそばに従えていたが、戦闘中、彼は五助に、合戦は敗けか、敗けか、と、たびたび訊いた。五助は、まだ、まだ、と答えていた。

そのうち三方から攻めたてられ、大谷隊潰滅必至となったので、はじめて五助は、御合戦は御敗けにて候、と教えた。

吉継は乗りものから半身を出し、

「さらば、すぐにわが首を打て」

と命じ、不自由な手で脇差を抜くと、腹に切尖を当てた。五助の刀がその首を刎ねた。

吉継はかねがね五助に、

「首は隠して敵に渡すな」

と云いつけていたので、五助は主人との約束どおり吉継の首を地中に埋め、ついで自分も討死した。

この五助はもと関東の浪人で、大谷家では小身なうえに新参者だった。三十そこそこだったというが、彼を知っている者は、いかにも静かで物柔らかな男だった、と寄合の席などで話が出たそうである。

大谷隊の全滅は西軍にとって大打撃だった。なんといっても吉継は西軍の大黒柱だ。宇喜多、小西などは心あるも力弱く、力のある毛利、島津、長曾我部その他の諸隊には、心がなかった。思えば、吉継は、はじめ家康に従って会津征伐に合流せんと越前から垂井の駅に来たとき、三成のために口説かれ、いったんは三成の無謀を諫めて去ったものの、心を返して親友のために協力した。このときから吉継の心中には、今日の覚悟があったに違いない。ただ彼は破局を予想しながらも、秀頼のためといわんよりも三成のために、何とか東軍と五分五分のところまで勝負を持って行き、事態を収拾したかったのであろう。

大谷隊が潰れると、秀秋の軍勢は西軍の背後に回った。その騒ぎに西軍の陣中はよどめき渡り、すわ謀叛人が出たぞ、裏切り者が出たぞ、と口々に呼ばわった。

これまでやっと踏み止っていた西軍諸隊も、それを聞いて俄かに戦意挫折した。小西行長の隊がまず崩れ立った。その動揺は次の宇喜多隊におよび、いずれも東北方面に向かって潰走しはじめた。その死傷兵二千余人。

宇喜多秀家は秀秋の裏切りを怒って単身引返して秀秋と決闘をしようとしたところ、家来に諫

められて、僅か数人の供廻りで戦場を落ちて行った。

この小西、宇喜多隊の敗走の前面に島津隊がいた。島津は、この東西両軍の激戦中、未だ戦闘を開始していなかった。さきに石田三成自身が、馬を駆って催促に行ったとき、島津義弘がこれを断って以来、ずっと動かずにいたのである。

だが小西、宇喜多の敗残兵が、島津隊の前面にまぎれこみそうになってきたので義弘は、

「いやしくもわが隊を乱す者は、敵味方を問わず、容赦なく斬れ」

と命じ、兵をして膝を折らしめた。敗残兵、怖れて島津隊に近づかず、避けて逃げた。彼らは背後に迫る敵兵に迫われ、池寺池に落ちて数十人が溺死した。

目立ったのは、石田三成隊の奮闘だ。石田隊は、黒田、細川、田中といった東軍の最有力部隊と激戦を交えていたが、午後になってもまだ勝敗が決しなかった。これをみても三成が一介の文官でなかったことが分る。彼はとにかく今度の戦争の張本人だから、家人も主に心を合わせ、必死になって敵に当ったのであろう。その上、藤堂高虎、京極高知の隊が右側から襲い来て射撃したが、石田隊、毫も屈しない。互いに一進一退、散るかとみれば集り、集まるかとみれば散り、刀槍を交えること七、八回にもおよんだ。

だが、そのうち、味方の宇喜多、小西の諸隊の潰走がはじまったのを見て、さすがに石田隊も気力を失った。重立つ家臣は次々と戦死し、ほとんど全滅となった。三成は西北の山間に逃走した。黒田隊これを追撃したが、山腹まで到ってようやく停止した。

こうして西軍の宇喜多、小西、石田の諸隊が戦場からほとんど逃走したのだが、ひとり隊伍を整えて依然として踏み止まっているのが島津の一隊だ。そこで、当然、島津隊は、本多忠勝、福島正則、小早川秀秋らの諸隊の一斉攻撃の中心に曝された。

13

薩摩隊の部将島津豊久は、

「敵兵が接近しないうちは射撃するな」

と命令した。兵みな折敷いて敵の来襲を待った。至近距離になって島津隊は一斉射撃をしたが、勝ち誇った東軍は弾丸をものともせず、刀槍の襖を作って突入してきた。島津の前戦部隊もまた抜刀し、ここに両軍凄絶な白兵戦となった。

敵味方入り交っての混戦となり、僅かに合言葉を呼び交して区別したが、それすらはっきりしないくらいの激闘だった。しかし、衆寡敵せず、さすがの薩摩隼人も見るみるうちに仆れ、次第に数が少くなってゆく。

このとき島津義弘は小高い丘に上がって戦況を視察し、自隊の死傷が過半数に達しているのを見て、甥の豊久と、重臣の阿多盛淳を呼びつけた。

「うしろには伊吹山の嶮がある。前には雲霞の如き敵兵がある。今さら年老いたわれは山路を歩く体力もない。向うに見えるのは、その旗印からして必ず内府（家康）の居る陣所であろう。一期の思い出に、内府の旗本に突入し、思い切り戦って斬り死しよう」

と義弘は述べた。

豊久、盛淳両人、これをしきりといさめた。義弘もようやくこれに従ったが、かつては秀吉の九州征伐に際して、上方勢に一泡も二泡も吹かせ、朝鮮役でも奮戦した義弘も、今や老余の身となっていたのである。

ここで三人議して、全隊一団となってかたまり、果敢な敵中突破を試みることにした。

さて、その退き口の通路である。関ヶ原から京都に出るには通路が三つある。伊吹路にかかって北近江を通り京都に出るのが一つ、佐和山街道を経て京都へ入るのが一つ、伊勢路に出て京都に回るのが一つ、これその三である。

この三路のうち、いずれが帰国に最も便利であろうかと、盛淳が家来一同に訊いてみると、みんな重大な問題なので、即答する者がいない。このとき醍醐院喜兵衛という四十九歳になる老士がすすみ出て、

「今日の家康のやり方を見ていると、丁度、袋の口を結ぶような作戦で、西軍の敗兵を京、大坂辺に入れぬため、小早川秀秋以下の大勢をもって京口を圧迫している。そして、他の先鋒隊には敵兵に追討ちをかけさせ、北国に通じる伊吹山に追い込み、敗残兵を上方から遠ざけ、分散させてから各個撃破に出るようである。したがって、家康はすぐその大部隊を以て佐和山街道経由で京、大坂に入ると思われる。よって今、われらが伊吹路にかかるときは、帰国の望みは十のうち一分もなく、全滅に至ることは必定である。われわれは、敗れたとはいえ未だ数百人あるから、この人数をもって敵中を斬り通り、駒野峠にかかり、伊勢路を経て帰国を目指したほうがよろしかろう」

と意見を述べた。

喜兵衛は、この関ヶ原に来てから地理を調べていたので、その云うところ大体正鵠を射ていた。軍議はこの案を採り、敵中を強行し、伊勢路に出ることに決したのである。

とはいえ、これは決死行だ。西軍の戦闘部隊全滅した今、東軍は島津だけを目指して総がかりで襲ってくる。その中で血路を求めるのだから生還は期しがたかった。

義弘は隊伍を固め、陣列を「繰抜きの御陣法」に採り、一番を豊久、二番を盛淳、三番を先手

隊として、これを敵中疾走の機関車となし、義弘の本隊これにつづいた。この場合、本隊が即ち殿軍であった。尚、「繰抜き」の戦法とはよく分らないが、敵中突破のため、錐を揉むように進む隊列であろうか。

「急ぐなよ又急ぐなよ世の中を定まる風の吹かぬ限りは」

と、義弘はその場で数回高らかに自作の和歌を詠じて発進した。

士卒は列を正し、やみくもに、鬨の声をあげた。小人数といえども必死の鬨の声なので、天地も覆り、山野も裂けるばかりであったという。島津隊は馬標を折り、相印を取り去って、東南にむかった。

福島、小早川、本多、井伊の諸隊は、忽ちイナゴの如く群がって島津隊を追撃した。豊久は馬を返して、敵の先手と交戦したが戦死した。豊久の士十余人もみな討死をした。

本隊の義弘は、豊久の隊とは一町ばかり離れているうえ、彼我交錯しているので、まだ豊久の死が分らなかった。このとき本多の兵が、「豊久の首を打ち取ったり」と連呼した。

井伊隊、これを聞いて阿多盛淳の隊を急襲した。盛淳は義弘が遠く退いたのを聞いて、

「われこそは兵庫入道(義弘)なり」

と呼ばわった。井伊勢は義弘と思い違いし、盛淳を囲んで仆した。

義弘の本隊は福島隊に尾撃されたが、義弘は取って返し、これを破っては退いた。真に死地の戦いである。

この島津方の死戦を見ても、味方であるはずの毛利勢は傍観したまま、南宮山で高処の見物をつづけ、島津勢を見殺しにした。幕末から明治にかけての薩長の不仲の原因は、こんなところから生れたのかもしれぬ。

さしもの島津勢も千五百の人数が僅か八十余人ばかりとなった。それも、あるいは傷つき、あるいは疲労し、ほとんど役に立たない。これを抱えて牧田川を越え、多良方面に向かって逃げようとした。

このとき義弘は葦毛の馬に乗っていたが、従者は一人がうしろに向かって鉄砲を放てば、他の一人が列の中に走りこんで玉ごめするというぐあいで、これを繰り返しながらの退却だった。

井伊直政、葦毛の馬を望み、「あれは敵将か」と側の者に訊いた。あれこそ兵庫頭殿に相違ござらぬと答えると、あの葦毛の馬に乗ったる大将はわしが討取るぞ、と叫び、直政たんだ一人で乗り出した。

このとき島津方より射った鉄砲が駆け出した直政の右腕に当った。直政、槍を取落したが、家来より受けとり、なおも進もうとするところを、もう一弾が馬に当ったため、どっと落馬した。直政の家来二人が彼を抱えて近くの空家に連れこんだが、出血甚だ多く、直政は意識不明になりかかった。しかし、血止めの薬を持っている者は一人もいない。

このとき家来の一人が、気つけとして黒焼の薬を直政の口に入れた。直政、気づいて眼をあけ、敵はどうしたか、と訊いた。残らず落ち行きて候、と答えると、敵を討たずに終ったのは残念だ、と直政また気が遠くなりかけた。

そこで、家来がもう一度気つけ薬を口に含ませると、直政は、これを吐き棄てた。家来が、「気つけ薬にてはござなく候。御血止め薬に候」と云うと、血止めならば、よし、と云ってそれを呑みこんだという。これでみると、疵を負って意識朦朧となるのは武士の恥だったらしい。

それほどよく効く気つけ薬とはどんなものか。ためしに富士川游博士の「日本医学史」室町時代の項をみると、「人参、白芷、黄檗、松緑、紫汌車、甘草、麒麟血、合歓若緑、各二分、以上

八味」が当座の気つけ薬で、三服を与え、一服でモタなかったならば助からぬ、とある。また、疵につける外傷薬としては、「麒麟血、松緑、麻ノ霜、ホコリ苔、各等分、右何レモ細末トシテ疵ノ口ヘヒネリカケヨ」とある。

筆者などには何のことだか分らないが、いずれ、薬草や毒草の配合であろう。

こうして義弘は、毛利方の傍観する南宮山の西南麓を過り、伊勢路を指して、駒野峠をすぎ、裸になってようやく死地を脱し得た。日本戦史にも敵中突破は数々あるが、これくらい凄じいのも珍しい。

――残余の西軍の部隊はどうなったか。

長束、安国寺の両隊は、毛利隊といっしょに出撃しようと使を出したが、もとより、東軍に内通した吉川広家らは、言を左右にして動かなかった。そこで、彼らは敵情や戦況を視察させるため、使を関ヶ原にやったところ、路で島津隊の退却するのに出遇い、その敗軍の模様を聞いて帰った。これを聞いた長束正家は、忽ち戦わずして伊勢に走った。

また、南宮山麓に陣した長曾我部盛親も関ヶ原に斥候を出したが、はじめは要領を得ず、二度目の物見が西軍の潰滅後の有様を報告した。盛親も戦わずして伊勢に走った。また、吉川らは福島正則、黒田長政の勧めに従って、これも一戦を交えずして近江に退いた。毛利秀元も大坂に帰るため、これまた近江に向かった。安国寺恵瓊は逸早く遁走している。こうしてみると、三成は、ずいぶん頼りにならぬ味方をアテにしていたといわねばならぬ。特に安国寺恵瓊は、毛利輝元を大坂方につけた首謀者の一人だ。

ところが、この東西両軍天下分け目の戦いに際して、毛利は大兵を擁しているのに、遂に一発の銃を放つことさえしなかった。また、長束正家にしても、東西両方に出撃不便な山地にわざと

陣どっている。長曾我部も徒らに斥候を関ヶ原に出すばかりで、果して初めから戦意があったかどうか疑わしい。

だが、彼らはともかく関ヶ原まで来ているのだから、まるきり戦闘意欲がなかったわけではあるまい。また家康に内通した形跡も見えぬから、要するに、東軍の勢いというよりも、家康を恐れた臆病風にとりつかれたのである。

動かざる毛利に較べてわずか千五百の少数ながら悪戦苦闘し、鶏が羽毛をむしりとられるように、八十人に減じて敵中突破を強行した島津の奮戦ぶりは、印象的である。

西軍には、統一がなく、また裏切者があり、さらに拱手傍観した毛利、吉川のような、消極的な利敵行為をした部隊もあり、さらに安国寺、長束、長曾我部などのように家康に射竦められて手も足も出なかった部隊もあったが、それでも、大谷、宇喜多、島津、石田隊はよく戦い、しばしば東軍を撃退した。その戦闘が午前八時にはじまって正午をすぎても勝敗の色が判りかねたというのは、西軍の善戦ぶりを物語っている。家康もたびたび手に汗を握り、爪を噛むことが多かったのである。

東軍の勝利が決定したのは午後二時ごろであった。家康は天満山の西南に本陣を据え、頭巾を脱いで、裏白という一枚張の兜をつけ、青竹を柄にして美濃紙で張った采配を持ち、兜の緒を締めた。勝って兜の緒を締めるのはこの時である、と云ったというが、彼の得意や想うべし。

ここで首実検がはじまったが、一番に黒田長政を前に呼び、かけていた床几をはなれ、長政の前に行き、

「今日の勝利はひとえに御身が日ごろの誠忠によるところである。何を以てその功に報ゆべき。わが子孫の末々まで黒田家に対しては粗略あるまじ」

と礼を述べ、長政の手を推し戴いたという。このときの言葉がのちに生きて、例の栗山大膳の騒動のとき、黒田家は安泰で済んだのである。

そのほか、福島正則以下の諸将の功を犒った。小早川秀秋は家康の前に進み、伏見城籠城の際に参加できなかったことを詫び、進んで三成の居城佐和山城に向かうことを乞うた。家康は、今日の大功神妙なり、と賞めて、それを許した。

こうして家康が関ヶ原をすぎて大津まで来たとき、ようやく中仙道の秀忠軍三万八千が呆然として到着した。今となっては、何の用にも立たぬ泥人形の軍隊だ。

家康怒って、しばらくは秀忠の面会を許さなかった。

14

何故に秀忠軍はかくも遅延し、肝心カナメの関ヶ原の会戦に間に合わなかったのであろうか。

当初の計画では、家康が東海道、秀忠が中仙道と両道に分れて会戦場に合流する手筈だった。秀忠は八月二十四日宇都宮を発し、信濃に向かった。兵力およそ三万八千。もし、この大軍勢が関ヶ原の戦いに間に合っていたら、勿論、勝敗はもっと早くカタがついていた。家康も戦局混沌の際、爪を噛むこともなかったのである。しかも、秀忠軍には、榊原康政が先手となり、つづいては大久保忠隣、さらには本多、酒井、奥平、菅沼、真田（信之）、小笠原といった豪勇の士が揃っていたことだ。家康も惣領の初手柄を思って屈強の士を付けていたのだ。参謀には、家康の信任最もあつい本多正信を派した。

秀忠軍は軽井沢から、九月二日に小諸に到った。小諸の先には、上田城に真田昌幸がいる。中仙道をゆくには、この城下を通過せねばならぬ。

ところが、昌幸は、表面秀忠の勧誘に応じるように見せかけて、せっせと上田城の守備を固めた。様子を見ていた秀忠は、五日に小諸を発して上田城を囲んだ。

真田昌幸には二人の子があった。長子が信之、次子が信繁である。真田家は元来信州の豪族で、まえは武田信玄についていた。信玄死後に独立したのだが、それには秀吉を大いに徳としたことがある。

信玄が死んで、北条氏政がしきりと信州をうかがった際、真田の土地を奪った。秀吉はかねて真田に本領安堵を与えていたので、北条の不信義を責めた。秀吉の北条征伐の口実には、このことが一つ入っている。秀吉からすれば北条退治の大義名分にしたのだが、真田は秀吉の恩を感じたのである。

そこで、石田と徳川の二つに天下が分れたとき、真田昌幸としては、どっちにつくか去就に迷った。ことに長子信之の妻は、徳川の勇将本多平八郎忠勝の女だ。

その関係もあって、信之は関東方につくことを主張した。弟信繁は豊臣の恩顧を思って西軍につくことを主張する。昌幸、遂に決断して信之を家康につかせ、自分は信繁と共に西軍に投じた。これが昌幸の狡いところだと評する者がある。つまり、どっちに転んでも真田家の社稷が残るようにしたというのだ。丁半両方に張ったというわけである。

少し詳しく云うと、真田昌幸が初めて石田方の連絡を受けたのは、彼が家康について会津征伐に行き、野州小山の近くまで来たときだった。三成の密使は、西軍に味方するようしきりと説いた。

昌幸は、信之と信繁に相談した。その結果、昌幸と信繁は石田方に加わり、信之は徳川方に参加することになった。昌幸はただちに兵をまとめて、信之の居城沼田に向かったが、留守をあずかる信之の妻、すなわち本多忠勝の女は城門を閉ざして昌幸の軍を城内に入れなかった。昌幸は、別段の儀ではない、久しぶりに孫の顔を見てしばらく城中に休息したい、と云い送ったが、信之の妻は、今ごろ家康公を乗てて帰陣し給うのは合点がいかぬ、たとえ舅であろうと、わが夫のゆるしなくお入りになるのはお断りする、もし、強って城に入ろうと思召さば、まず幼児を殺し、城に火をかけて自害する、と云った。昌幸の使者が城門を出るときには、すでに櫓には弓、鉄砲を構えた兵が備えられ、女房どもは薙刀を持って鉢巻姿で睨んでいた。昌幸それを聞いて、まことに本多が女なり、と感歎し、沼田を素通りしてそのまま上田へ急いだ、とは「明良洪範」にある話。

一方、信之は小山の陣に駆けつけ、父の謀叛を告げ、自分には異心のないことを家康に誓った。真田家は、そのため、信州松代に維新まで無事なるを得た。

話を元に返す。秀忠は上田城の攻略にかかったが、ひとひねりの小城と思いきや、どっこい簡単には落ちない。三万八千の兵で総攻めにしたが、昌幸は楠正成の兵法よろしく寄せ手をさんざん悩ました。遂に、この渺たる小城のために十数日も無駄な日を費すことになった。

家康から秀忠につけられた参謀の本多正信は、この城をそのままにして通るには、あまりに穏便すぎて、家康の聞えもいかがかと思われる、秀忠の戦功のため、攻め落すべし、と主張した。

戸田一西という者、このたびの西上は急を要すから、ここには若干の兵を置き、本隊は急ぎ通過したほうがよい、と云った。正信聞かず、とうとう、ここに膠着させられることになった。

しかも、とうとう落城させる見込が立たず、正信も参って、戸田の説に遅ればせながら従った。秀忠軍は足を速めて木曾路を上ったが、間に合わず、九月十七日、木曾妻籠まで来たとき、関ヶ原の終戦を聞いたのである。

家康が秀忠に対して不機嫌だったのは当然だ。ようやく他の者のとりなしで秀忠は家康に会うのを許されたが、このとき家康、秀忠に云った。

「およそ、合戦とは囲碁と同じである。大事な石だけを得たら、相手のほうにどれほど目を持たせ、石があろうとも、それは結局役には立たないものである。このたびの一戦だに勝たば、真田ごとき小身は、何ほど城を持ち固めようとも、遂にわれわれの勢に怖気づいて城を明け、降参するものである」

叱ったあとで家康は訊いた。

「そちの供をした者の中に、かようなことを云った者はなかったのか？」

秀忠は、

「戸田一西が上田表で同じことを申しました」

と、小さな声で面目なさそうに答えたという。

責任者の榊原康政は、この責を負って遂に引退した。ただ、作戦を誤った参謀本多正信が依然として家康に用いられたのは、秀頼退治も残っていることだし、彼の奇才にまだまだ利用価値があると思われたからだろう。

家康がまだ京都にも入らず、大坂も押えず、大津にとどまっていても、京都からは公卿をはじめ、神官、僧侶、その他日和見主義だった武士どもが陸続と彼におじぎするため集り、門前、絡繹として列がつづいた。皇室が時の権力者を迎えるのは、ことさら珍しくない。

次は石田三成をはじめ、宇喜多秀家、小西行長、安国寺恵瓊の捜索である。関ヶ原の戦場で消えて以来、彼らは消息不明のままとなっていた。家康は、その捜索逮捕方を田中吉政に命じた。吉政は秀吉の下で、近江八幡山の城主だったが、のち岡崎十万石に移されていた。家康は、別に

毛利の軍中に恵瓊の消息をさぐらせた。家康は、恵瓊が毛利の中に匿まわれていると見ていたからである。

翌十九日、小西行長がまず捕えられた。彼は伊吹山の麓、粕賀部村にひそんでいたのを発見されたのである。石田三成もつづいて捕えられた。

三成は草野谷という嶮しい岩窟中にひそんでいた。ぼろぼろになったつづれを身にまとい、米を少しく腰につけ、草刈鎌を腰に差し、破れ笠を顔に当て、いかにも樵夫の姿で臥していた。村人が、何者かと訊くと、自分は薪を拾う山人だが、いま患いついているところであると答えた。田中吉政は「夏野の鹿を狩るごとく草を分けて」三成を捜索していたときなので、早速、この者を引き立てさせた。見れば、まさしく変り果てた治部少輔である。そのまま縄を打って大津の陣へ連れてきた。

「昨日までは綾羅錦繡に肌を隠し、身を飾り、崇敬せられし身なれど、乞食になり変り、眼も当てられざる有様なり。移り変れる世の中や。（家康が）あまりに不憫に思召し、忝くも御小袖を下され、衣裳を改め候也。万事正義に非ざれば民の悪むところ、天之を罰す。因縁歴然の道理、逃れ難き次第なり」

と、太田牛一は書いているが、万事正義に非ざれば云々の説教文句はよけいである。勝者即正義、敗者即悪人とは、東西古来の御用史家の綴るところ。

客観的な観察で定評のある太田牛一の筆も、ここにいたるとイヤになる。

安国寺恵瓊は洛北大原の寺まで逃げのびたが、そこからは鞍馬の月照院に逃れて一両日匿まってもらった。それまで彼に従いてきた五、六十人の家の子郎党も、てんでに主人の持金を奪って逃げ、残るところは僅か五、六人となった。安国寺はさらに谷へ逃れ、山々伝いに雲畑という在

所に出た。万一にも人に紛れて助かりはせぬかと、そこから東福寺を目指し、乗りもので洛中に出たところを途中で捕えられた。

「五山東福寺の僧綱の位階に進み、紫衣を着して人をさへ教化なすべき沙門の身として十二万石の知行を誇りしに、君主の掟を破り、愚人になりて天下の嘲弄、後代までの褒貶、仏罰迦法の者にて候也」

と、牛一はやはり媚びた筆誅をしている。

宇喜多秀家は行方不明だったが、江北の山中で死んだと伝えられた。その臣下が秀家自害のしるしとして持っていた短刀を本多正純に示したので、家康は深くも追わず、当分そのままにした。

こうして行長、三成、恵瓊いずれも捕えられたが、残る長束正家は南宮山からその居城近江水口に一旦は逃げ帰り、さらに、九月晦日、日野において自殺した。

臨時監察長官田中吉政は、捕えた三成がひどく衰弱しているので、守山の地に養生させた上、大坂に引き立てた。ここでは小西行長も安国寺恵瓊もいっしょだった。このとき三成は訊問に答えて、

「武運拙きは古来珍しいことではないから、自分は別段家康を恨みには思っていない。早速成敗されよ」

と云った。

浅野幸長と細川忠興とが三成を見て、

「日ごろの治部の利口に似ず、かような体たらくと相成り、見苦しき限り」

と冷嘲した。もともと、二人とも三成とは最も仲がよくなかった。三成は、両人に向かい、

「討死しさえすればよいというのは端武者のことで、大将たる者は何とかして逃れ、再挙をはかるのが心がけというものである。おれは臆病で逃げたのではない。大坂へ入り、家康と一戦せんと思っていたのに、こと志と違ったのは運のおよばざるところ、やむをえないまでだ。きさまらは武将の心得を知らぬとみえる」

と、かえってあざ笑った。福島正則これを聞いて、治部の申すこと至極尤もなり、少しも恥辱に非ず、と云ったという。

そのあと、三成、行長、恵瓊の三人を伝馬に乗せ、一条の辻から室町を下り、寺町に出て六条河原に引き出した。見物人群れをなしたが、そのとき坊主が出て、処刑前の念仏を唱えようとした。しかし、三成は自分は法華宗だからといって念仏を拒絶した。恵瓊は禅宗の出家とて、これまた念仏を断り、行長はもともと吉利支丹だからこれも念仏を拒否した。坊主は憎たれ口を叩いて引込んだ。三人の首が刎ねられたのは十月朔日のことである。

この合戦によって、家康が完全に天下の実権を握ったのはもとよりである。彼は大坂城に乗りこんで秀頼以下を威圧した。

大坂城にあってモタモタしていた西軍の主将毛利輝元は追い出された。毛利は家康の恫喝にあい、安芸、備中、備後、因幡、伯耆、出雲、隠岐、石見の八州を削られ、防長二州だけをやっと残してもらった。これでは毛利秀元と吉川広家とが、何のために関ヶ原で東軍に中立援助したか分らぬ。

しかるに、家康に敵対した島津は、薩隅二州の全きを得た。関ヶ原で義弘の果敢な敵中突破ぶりを見た家康は、島津を武力で討伐するの容易でないことを知り、かえって懐柔に出たのである。義弘の猪突が無駄でなかったわけだ。義弘、薙髪して惟新と号した。

この関ヶ原の戦の留守中、火事場泥棒的な働きをしようとした筑前の黒田如水、肥後の加藤清

正のことにもふれたかったが、別の機会にゆずる。

戦後、家康は大名たちの論功行賞をなし、封地の配置転換を行ったが、これが大坂の秀頼圧迫の態勢となり、ひいては徳川幕府の保存体制に通じたのは云うまでもない。

西南戦争

西郷隆盛率兵進発　明治十年二月十五日
西郷隆盛ら自刃　同　年九月二十四日
（一八七七年）

1

西南戦争の誘因は、征韓論に敗れて下野した西郷隆盛が、東京を去って鹿児島に隠退したことからはじまる。西郷は満腔の忿懣を木戸孝允、大久保利通などの中央政府に抱いた。その西郷の手で養成されつつあった鹿児島の軍事訓練学校である私学校の生徒が西郷の不遇に憤激し、武力蜂起を実行にうつそうとした。それを阻止していた西郷も遂に力およばず、止むなくこれを指揮して東上の兵を起したのである。

こういえば簡単だが、その内情はけっして単純ではない。幕藩体制の崩壊と新政府政策の矛盾のあらわれ、廃藩置県に附随した徴兵制度による全国武士階級の没落、政府の財政窮乏からくるインフレ、地租改正による農民の不安と秩禄喪失による士族の生活難、木戸と西郷の対立、派閥的には長州と薩州の反目が内在している。別の云い方をすれば、官僚派と軍人組の相剋であり、これを文治派と武断派、進歩派と保守派、新知識と固陋、近代政治指向と軍事独裁指向と、いくらでも対立者の名をつけることができる。

本稿ではこれらの情勢を説くのが目的ではないが、簡単にでもふれないと西南戦争が勃発するに至った真因が分らない。

西郷隆盛は明治維新の偉大な功労者であった。彼がいなかったら倒幕はもっと困難と時日を要したに違いない。ことに廃藩県のクーデターは西郷が薩摩兵を中核に東京に進出したからこそ成功したのである。もっとも、廃藩置県は西郷の志ではなく、勅使岩倉に鹿児島から引張り出された結果だった。だから、ある意味では、西郷は岩倉や大久保に欺かれたのだが、このへんの経緯をくわしく述べる余裕はない。

しかし、ここまでが西郷の任務で、同時に彼の限界だった。西郷はブルドーザーのごとく旧制度を破壊したが、緻密に鉄筋を組み立ててゆく建築家ではなかった。武人は敵の破壊が任務であって建設者ではない。「一介の武弁」とは山県有朋がいつも自己を評して口癖にいう言葉だが、山県にはまだ妥協性があり、政治性があった。西郷にはそれがなかった。彼は根っからの武人だった。

不幸なことに、そして、それが彼の強味でもあったが、西郷は薩摩藩士族にあまりに偶像視され、その中心に坐っていた。西郷の眼には失業した武士への哀憐の泪がやどっていたが、それは全国の士族というよりも、鹿児島の士族に重かった。

彼は士族階級の救済を考えたが、まずその第一着手は旧鹿児島藩士からだった。彼は中央政府のもとに恒久の軍隊として有力三藩の士族をその家族ぐるみ編成しようとしたが、この失業救済の第一は旧自藩からである。いわば西郷にはいつも旧鹿児島藩の士族が拡大して存在していた。西郷の人情が鹿児島県人にのみ慕われるゆえんである。そして、これが木戸ら長州人や岩倉ら宮廷派を不快にさせる理由でもある。

もとより木戸も大久保も大隈重信も井上馨も伊藤博文もみんな武士であった。しかし、彼らは、明治政府に入ると同時に武士から官僚に転向していた。征韓論に敗れて西郷とともに退いた板垣にも、準官僚の素質があった。司法卿としての江藤新平も優秀な役人的材幹を持っていた。ひとり西郷だけ純乎たる武人だった。彼だけは、頭の切りかえが出来なかった。

西郷は自己の軍事勢力に、過大な評価をかけ、戊辰戦争以来の彼の履歴と声望に彼自身が陶酔していた。人間、だれも自惚れはまぬがれないところだが、謙虚な彼にしても、それから脱することはできなかった。

西郷にとって不幸なことに、中央政府が近代化を指向すればするほど、木戸がヨーロッパから帰国して憲法制定を考えるほどに近代国家化を目指せば目指すほど、軍事は、政治の下に統率せられる。ここにも文官優位（シビリアン・コントロール）が打ちたてられる。これは、西郷のような軍事第一の政権を夢みる男には、耐えられないことだった。

しかも、その中心の官僚どもは彼の同輩であり同僚であり、後輩であり、いわんや武士の魂を忘れた「和魂」（西郷の木戸を評した言葉）や「腐れ芋」（同じく大久保を評した言葉）や「三井の番頭」（同じく井上馨を評した言葉）においてをやである。岩倉、大久保、伊藤らが、大挙して外国視察に出発したとき、それを見送った西郷が、あの船が沈没したらといったという戯言は有名だ。

幕府を兵力で倒した西郷が、その後に見たものは新政府による廃刀令、徴兵制、地租改正などのほか、士族の失業に与えるに長期年賦の秩禄公債と気に入らぬ改革ばかりだった。鉄道敷設に金を使うよりも兵力の充実に回すべきだと彼は不平満々だった。二百万の士族の困窮を、新政府が見殺しにしているのも不満にたえなかった。

岩倉、木戸、大久保らが帰国せぬ前に彼が「征韓論」を主張したのは、これら士族の救済をか

ねた活用策だ。彼らを戦闘に参加させ、勝利の暁には、朝鮮から領土の一部を奪うか、代償的な条約を結ばせて、これら士族の移住を肚で考えていたのかもしれぬ。これは想像だが、もし、そうだとすれば秀吉の朝鮮役の構想と変るところはない。

西郷がなぜに暴殺されるのを覚悟で、対韓交渉の大使を希望したかは、いまだに学界にも定説がない。都立大の升味準之輔助教授はそれについて、

「彼が一八七一年一月岩倉、大久保と鹿児島を発つとき、廃藩も、それにつぐ諸改革も予期していなかった。彼には一八六九年の鹿児島藩制改革の経験に基づいた改革方針と自負があったかもしれない。しかし、中央の情勢は西南の辺境における藩制改革からは思い及ばないほど進展し、かつ複雑であった。そして彼は心ならずも政府の中心に坐ったところが、その政府は廃藩クーデターの事後処理以上に走り出したのである。彼は不服であった。しかし、抑止もならず、かといって彼の前にもり上がってくる逆流をなだめることもできず、そのうえ廃藩と集権化を憤る久光の彼に対する個人的追及は甚だ急であった。進退窮して身の置きどころもなく、かくては人事を擲って世を逃れるために征韓に死場所を求めたのであろう。これは一つの想像である」

という意見で、傾聴に値するが、前段はともかく、久光に追及されて西郷が進退に窮したというのはどうであろうか。

島津久光と西郷の間はもともと冷たかった。西郷は島津斉彬には目をかけられたが、久光は例のお由羅騒動のお由羅の子で、したがって反お由羅党だった西郷を憎むこと甚しく、そのため西郷を二度も島流しにしている。

西郷が中央の舞台で働くようになってからも、久光との仲は円滑を欠いた。西郷が挙兵したときも久光は全く傍観していたくらいだ。久光が中央集権化と廃藩置県に憤ったのはたしかだが、

それがために久光の立腹を西郷が死ぬほど負担に感じたとは思われない。

それよりも、逆に対韓大使を志願した彼の性根に、挙兵の素因があるような気がする。西郷は新政府の政策とあわず、士族階級の救済もできず、せっぱつまって全権大使に血路を見出し、自分が殺されることによって朝鮮戦争を起し、士族の救済を考えたのではあるまいか。西郷には、薩摩潟で僧月照と海に投じて以来、どこか虚無的なものがあったようである。そのことは、長州と提携のため単身馬関海峡を渡ったり、江戸接収のために刀を抱いて敵地に乗りこんだりしていることでも推察できる。

西郷は、一度は気の弱い三条実美を強要して対韓交渉大使に決定させたものの、帰朝した岩倉らに図られて、それは取消しとなった。こうなると、西郷も廟堂に用のない人間となった。彼は憤然として参議を返上し、東京から鹿児島に帰る。行をともにする薩摩出身の軍人桐野利秋、逸見十郎太、村田新八以下おびただしい数にのぼった。

また、土佐の板垣、肥前の江藤、長州の前原一誠も西郷と共に辞職した。

西郷は政府を去ったとはいえ、それで、ただちに隠退を考えたのでは決してない。彼、ときに四十六歳。翁という名で呼ばれてはいるが、まだまだ働きざかりであった。

世に、西郷は私学校の生徒にかつがれて、心ならずも蹶起したと云われているが、もともと、彼はいつかは新政府に自己の武力を示す機会を狙っていたのである。それは武力対決という意味とは違っているが、あとでふれる。

板垣退助は、西郷が東京を去るまえに彼に会って、肝胆相照して善悪ともにその行動を同じくしよう、と申入れたところ、西郷は、「自分は、あんたの助力を必要としないだけでなく、また、あんたが自分に反対しても恨みには考えない。自分のことなどは放念して、あんたの思いどおり

にされるがよい。天下のことは、これからの自分の方寸にかかっている」

という意味のことを答えている。板垣はこれを「西郷の慢心」と受取って嘆息した。

西郷の眼中には、土佐もなければ肥前もなかった。ただただ自己の率いる薩摩の兵力あるのみだった。これは西郷の自意識の過剰である。

板垣の眼から見たら、なるほど西郷は慢心な男に映ったに違いない。さらには、それが西郷をして前原一誠の萩の乱に無関心を示させ、江藤新平の佐賀の乱をも雲煙過眼視させた心境なのである。西郷は、自分が手を挙げれば、たちどころに全国の不平士族が蹶起すると信じ切っていた。

東京を去るに臨んで西郷は、「独不適時情」云々の詩を詠んだが、実は、それはそのまま客観的にも彼の姿に当てはまっていた。

2

西郷の帰郷とともに、彼が引きつれて上京していた薩藩の将校、兵士もぞろぞろと国もとに帰ってきた。これらの大人数に対し、まず西郷が心を砕いたのは、彼らに生計の途を与えることだった。こうして出来たのが私学校である。

これは薩藩の子弟に対しての軍事教練学校ではあったが、同時に、帰郷した兵士をその教官にしたり、監督にしたりした。それとともに子弟をして土地を開墾させ、自給自足の屯田兵的なものにした。西郷自身は、霧島山麓や大隅半島などに犬三匹と従僕一人をつれて、狩に出かけ、城下を避けてはいたが、これら私学校生徒を県下の各地の要所に配置して、他日政府軍の来攻にも備えるところがあった。

また、士族の生活保障についても県令大山綱良をして特別計らいをさせた。大山も鹿児島藩士。

中央政府から任命された県令ではあるが、さながら西郷方の中央政府に対する窓口の観があった。県令がそうだから、県庁の役人ことごとく西郷党であったことは云うまでもない。いうなれば、鹿児島県は、中央政府の命令から隔離された独立国のおもむきがあった。大山県令は、中央政府の命令で牴触しないものは実行するが、こと西郷一派の利害に反するものはことごとくこれを拒絶した。

この状態に最も憤激したのは木戸孝允である。木戸が西郷とよかったのは、彼が桂小五郎のころ、倒幕の際、一時的に戦術として提携した間のことで、あとはことごとに西郷とは反目した。西郷が征韓論に敗れて勝手に鹿児島に去ったとき、木戸はそのわがままに立腹し、さらに軍人の多くが連袂辞職したのを、国家の一大事として痛憤した。そのため木戸は病気で倒れたくらいである。

しかし、ここに同じ薩摩士族でありながら西郷と行動をともにしなかった一派もある。彼らは軍人ではなく警察官であった。大警視川路利良はじめ末端の邏卒にいたるまでが政府側に留まった。これはちょっと奇態なことであった。

なぜかというと、維新になって、その鹿児島士族の就職先として西郷が取計らったのが、彼らを軍人と警察官にすることだった。川路利良のごときは、西郷の眷顧によって大警視にまでなったのである。ここにも西郷の薩摩藩士第一主義がみられる。彼は、自藩の士族はこうして中央政府の職につけて生計の途を考えてやったのだ。

ただに軍人、警察官のみではない。陸奥宗光は官員録を調べて、いかに薩摩藩士が官吏に多いかを大久保に指摘して、大久保に言葉を失わせたという話もある。すなわち、西郷の眼には旧武士あって国家機構なく、薩摩藩士族あって全国各藩士族は無かったのである。

しからば、なぜに薩藩出身の警察官は、軍人のように西郷に殉じなかったのか。その一因は、軍人が薩摩藩の「城内士」であって、警察官が「城外士」であったことによる。

だいたい、薩摩藩の制度は、近世になっても藩士の城下集中を行わず、城下武士とは別に領内の重要な各所に郷士を居住させたが、これが外城で、その地域を麓（または府本）と呼んだ。外城には地頭の仮屋があり、郷士はその下に統率せられたが、要するに鹿児島本城の衛星的な出城である。

それで、自然と城内士と城外士との間には差別観念が生れた。城外士は絶えず城内士に劣等感をおぼえ、城内士は城外士に対して絶大な優越感を持っていた。そのため両者の反目はことあるごとにあらわれ、たとえば、鹿児島城下の祭礼のときには両方の喧嘩がしばしば見られた。城外士出身の警察官が、城内士出身の軍人と行動をともにしなかったのも、一つはこうした理由もある。

さらに挙げれば、軍人と警察官との身分差別である。明治初年には軍人と警察官の喧嘩がしばしば起っているが、これはいつも軍人が警察官に対して身分上、上位であるというところからの優越意識にほかならない。天皇を頭とし、軍人をその股肱として天皇に直属せしめた「軍人勅諭」が山県によって制定されたのは西南戦争後だが、明治四年の「軍人読法」にその精神の萌芽が見えている。この軍、警の格差も城内士と城外士との身分差別の変質的な延長とも考えられる。明治初年の警察官のほとんどは、鹿児島県出身だった。

川路利良は、日本の警察制度の創始者で、「警察の父」と呼ばれる人だが、明治五年に渡欧し、欧州の警察制度を視察して帰った。

彼はフランスの警察制度についてかなり勉強したといわれた。これは興味のある点で、フランス警察にはフーシェと呼ぶスパイ警察の権威者がいた。川路もまた日本における密偵警察の創始者だが、あるいはフーシェあたりから暗示を得たのかもしれない。

いずれにしても、川路が恩顧のある西郷と行動をともにしなかったのは、①欧州の新知識を得て帰った、②警察制度の確立に使命感を持っていた、③その城外士としての出身者のリーダー格であった、などという理由があげられよう。

ここに微妙なのは大久保利通の立場である。大久保と西郷とは、一蔵、吉之助の昔から竹馬の友で、兄弟以上のまじわりであった。しかし、それも大久保が岩倉などといっしょに欧米視察に出発するまでのことで、大久保の帰国後からは両者の間がなんとなく冷たくなってきた。

それは大久保が西郷に、もはや、政府の協力者としての期待をなくしたこと。また西郷も大久保にわが党でないことを感じとったからであろう。事実、大久保は挙国一致内閣をつくるとき、木戸孝允に対しては三顧の礼をもって迎えているが、西郷にはそれをしていない。あるいは、無理に西郷を引き入れれば、閣内不統一の因になると考えたからではあるまいか。

帰国した大久保と西郷とはしばらくは頻繁に交通していたが、だんだんにその回数が減り、最後に西郷が帰郷するときなどは、彼のほうが大久保に暇乞いにきたが、

「いつでも大事な場合に逃げ出して、あと始末をおいにまかせておくとは、何ちゅうこつか」

と、大久保は不満を西郷にぶっつけている。

しかし、西郷は大久保の力量は認めていて、薩摩に帰ってその叔父を訪うたとき、叔父から、

「おまんさァは一蔵と喧嘩したちゅうが、ほんなこつか？」

と訊かれて、

「おいがおらんでも、岩倉どんと一蔵のおらすけん、廟堂は心配なか」

と云っている。

大久保は、はじめ西郷に対して出来るだけ宥和方針をとっていた。彼を憤らせないように、まるで腫れものにさわるように扱ってきた。それは幼時からの親友という情誼もあったろうし、また、西郷を憤らせると、薩摩士族の爆発があると怖れていたからでもある。

しかし、西郷の「わがまま勝手」に対して、最も痛烈に非難したのは木戸孝允だ。特に鹿児島県だけが、さながら独立国として中央政府の統轄外にあるのは、中央集権化を目指している木戸の、最も悪むところであった。それで、木戸はしばしば大久保に西郷の不遜とわがままをあげて、なんとか処理せよ、と逼っている。また、こうした木戸のシリをつついていたのは、反西郷派の三浦梧楼や山田顕義などだった。それに紀州人だが、長州人と土佐人と半々の性格を持っていた陸奥宗光も木戸を煽動していた。

木戸は名題の雄弁家だ。それが正論をもってぶちまくるから大久保も返す言葉がない。なるべく西郷に穏便にと考えていた大久保も、ついに進退きわまって、本気に西郷の処置を考えなければならなくなってきた。こうして行われたのが、大久保の腹心大警視川路利良の手による、密偵政策であった。

元来、薩摩藩は昔から鎖国政策をとっていた。徳川幕府でも、その密偵を薩摩に入れることは、すこぶる困難であった。かつて秀吉が薩摩領境まで押し寄せたときも、ようやく本願寺の布教坊主を潜入させて、わずかな情報を得たにすぎなかった。いわんや、中央政府と宛然、敵国の観あった西郷帰郷時においては、なおさらのことである。

それでも川路大警視は、鹿児島出身の警察官を続々と潜入させることにした。鹿児島弁がわからなければ密偵の正体がバレるので、他の県の人間を使うことはできなかった。

こうしたスパイの名前には、安楽兼道、高崎親章、柏田盛文などが見える。彼らはほとんど城外士族だった。川路は、彼らに鹿児島の情勢をさぐらせるだけではなく、私学校生徒間の離間工作にも携わらせた。それには、たとえ蜂起しても、政府に対してとうてい勝てる見込みのないことを述べた「鹿児島士族説諭」なるアジ文書もあった。その中に、こういう一項目がある。

「人ト生レテ自助独立ノ権ナク己レ生涯ノ利害ヲ人ニ任シテ羈縻セラルル（筆者註・しばられること）ハ牛馬ニ均シカラズヤ。君等尚陋習ヲ脱セズ、旧城下士族ニ欺カレ是ニ牛馬視セラルルノミナラズ、終ニハ天下ノ大罪ニ陥ラントス。吾輩是ヲ知リテ黙止スルニ忍ビズ」

つまり、川路は、城内士と城外士の対立感情を利用し、まず城外士を煽動した。文中、「旧城下士族ニ欺カレ是ニ牛馬視セラル」とか、「城下士族ニ僕視セラル」とか、城外士の差別待遇を衝いて、その城内士に対する反感を煽った。

一方では、鹿児島県内の動静が中央にも頻々と伝えられた。当然、それは針小棒大となって、情報というよりも警報の性格をおびた。

しかるに、西郷は相変らず城下をわざと離れて、大隅半島の山野を犬をつれて歩き回っていた。ちょうど、上野公園の銅像のような姿だったと思われる。彼を訪ねてくる反政府志士も少くなかったが、西郷はだれとも会わなかった。そのスポークスマンは桐野利秋がほとんど一手に引受けていた。

桐野は陸軍少将だが、性豪放、西郷の代弁者として、かならずしも適任ではなかった。彼が人に会って西郷の意図を伝えるのは、大筋において間違いはなかったとしても、どうしても彼の意見が入ったり、おまけがついたりする。それが中央政府の耳に入るころには、もっと尾ヒレのついたふくれあがった状態になる。こうして西郷と、その私学校の「不穏な動き」が、ますます政

府側を衝動させ、警戒させた。

だが、西郷党も、政府の密偵政策によって刺戟を受けた。ついには、政府が刺客を放って西郷を暗殺にくる、というようなデマにまでなった。この昂奮は西郷側と政府側との相互作用であり、その摩擦による過熱化である。

3

鹿児島県に潜入した警視庁密偵の中で代表的な宮内盛高の場合を引いてみよう。

盛高は、まず桐野利秋を訪ねて久闊を述べたが、そのとき利秋は、私学校党十数人と刀剣を検べていた。盛高が、何のためにそのようなことをするのか、と訊くと、利秋は、東京に出て君側の奸を除くは目下の急務である、そして、そのことはすでに決した、ここにいたって多くを云う必要はない、ことを挙げるのは来年である、われらは来年四月、墨堤（隅田川）の桜を見物しようと思っている、と答えた。

そこで、盛高は黙って去り、篠原国幹を訪ねて質問すると、篠原の答えるところも桐野と同じであった。

そこで、彼がさらに私学校党の淵辺直右衛門を訪うと、淵辺は、わが私学校党は国家有事の日に奮起猛進し、義勇奉公のために一死を捧げんとするもので、今日にあっては桐野、篠原のごときが妄動に出るべきでないと、前の両者とはすこし違うことを云った。

そこで、盛高は事態をもっとくわしく知ろうとして、島津久光の家令、内田政風を訪うた。西郷の動静について訊くと、内田は桐野、篠原については語らず、ただ島津久光と西郷隆盛は彼らの暴挙にくみしないだろうと断言した。

そこで、盛高は久光と西郷の心事を知り得たとし、西郷起たざる限り桐野、篠原がとうてい暴挙にでるはずはないと思わざるを得なかった。彼はただちに東京に急行し、このことを川路大警視に復命した。

この段階の報告では、まだ西郷動かず、周辺の桐野らと私学校党だけが騒いでいるようになっている。その情報判断としては、西郷が動かなければ、とうてい私学校だけでは挙兵のむずかしいことを結論している。

しかしながら、私学校党は、東京から藩出身の警察官が続々と帰省するので、いよいよ疑心暗鬼を生じた。私学校党は、彼らを東獅子といい、それを退治することを獅子狩と云った。ついに私学校党は警視庁から送りこまれた警部中原尚雄を捕えて、過酷な拷問をするようになる。

中原も旧城外士で、若いときは城下の祭礼の際城内士と大喧嘩をして名を知られたくらいだった。彼は、川路大警視の命をうけると、勇躍して西下し、鹿児島県川内に上陸したが、その二旬後、多数の巡査に取巻かれ、警察署に連行された。巡査が警視庁の警部を縛るのは奇妙だが、もとより鹿児島県の巡査は、ことごとく西郷党で、彼らは私学校党の走狗となっていたのだった。

中原の帰県は、表向き病父の見舞だったが、もとより、こんなことを私学校党が信じるはずはない。彼らは巡査をして中原を捕えさせ、鹿児島西田町警察第一分署に護送し、三畳敷の一室に閉じこめ、柱に縛りつけて、罵詈雑言と木刀の嵐をあびせた。

汝は西郷大将を暗殺に帰ってきたのであろう、と問い詰め、中原が否定しても、白状するまでは半死半生の目にあわせた。中原が失神すれば、水を飲ませ、また拷問にかける。彼らは、首を斬って肝をつかみだすのだ、とおどかしながら、何度となく拷問をおこなった。

中原が疲労困憊するや、ころを見計らい、口述書なるものを作って、強いて中原に捺印をおさ

せ、中原を獄中に押しこめてしまった。この口述書には「西郷暗殺」の文字があったので、中原は見て大いにおどろいた。

「無根の偽口供に因って冤罪の名を負ふと思へば憂懣胸を焦がし、恨しき限りなしといへども、詮方なく黙しゐたり。同月(二月)二十六日県庁内の新牢に移さる。ただ旦夕無慚の死を待つのみ」

とは、中原が助けられて東京に戻ってからの陳述である。

ところが、ここに一つの椿事が持ちあがった。それは、私学校党が鹿児島市外にある陸軍省所管の弾薬庫を襲い、弾薬多数を奪ったことである。

そもそもの起りは、政府が西郷党の不穏情勢に備えて、陸軍省の弾薬を三菱会社の所有船赤竜丸を派遣して、ひそかに夜中積みこませて持ち去ろうとしたことからだ。この弾薬は、当時の新鋭銃器であるスナイドルの弾丸ばかりだった。

私学校党は、政府が密偵を放って西郷暗殺を企んでいることと考えあわせ、今回政府が弾薬を運び去ろうとしたのは、これをもってわれわれの攻撃に使うつもりであろうと憤激し、イモ焼酎を飲んだ壮士数人は、すぐに五十余人を集めて、夜、草牟田の火薬庫を襲って、番卒を縛って乱入し、弾薬六百箱(一箱五百発入り)を持ち去った。その翌夜も千人ばかりが集って別の陸軍火薬庫を襲い、倉庫四棟を破壊して多数の弾薬を略奪した。さらに、それは拡大せられ、翌夜も海軍造船所所属の磯火薬庫を襲撃、小銃弾薬二万四千発を強奪した。

ところが、県庁は、この届出をうけても、すこぶる冷淡で、ほとんど対岸の火災視していた。もともと、県令大山綱良以下県庁の役人も警察も、ことごとく西郷党だから当然のことである。

これが図らずも西南戦争開始の端緒となった。これは、政府側が予防措置として、弾薬庫の弾薬を運び去ろうとしたことからはじまったのだが、これは私学校党からみれば、政府側の挑発であったし、政府側からみれば、政府の所有物を暴徒多数が強盗したのは、謀叛の意志があると考えたのだ。

もとより、こんなことがなくても、当時の情勢ではいずれ戦争になったに違いない。が、政府側も私学校党も、たがいに疑心暗鬼、両方で相手の挙動をうかがい、頭から予断をもって邪推をかさねていたときなので、事件はついに開戦の導火線になってしまった。

西郷は、そのとき大隅半島の白根島にあって狩猟にあけくれしていたが、事件は、西郷の実弟小兵衛が、鹿児島より海上三里を小舟で急行して報告した。

おそらく、このとき、西郷は万事休したと観念したに違いない。西郷は急いで鹿児島に引返し、私学校党の面々を集合させて、

「おはんたちは何ちゅうことをしもすか」

と激怒大喝したと伝えられるが、事ここにいたるまでの西郷の挙動も、明快を欠くところがある。

西郷とても、私学校党のただならぬ気勢を知らぬはずはなかった。いや、彼はそういう状態になるのをおそれたからこそ、身を鹿児島城下から避けたのではなかったか。しかし、彼のいる山村と、城下にある桐野、村田などとの手紙の往復は絶えずあった。それだからこそ、西郷も政府の刺客が潜入したのを警戒もしている。もちろん、私学校党の気勢が、日に日に険悪な方向にむかっていたことも、知らぬはずはあるまい。

かえって西郷が城下にいなかったことが、私学校党をして気勢をあげさせる結果になっている。これでは西郷が「避難」した意義はない。彼がもし真に私学校党の軽挙妄動を戒めるなら、なぜ城下に留まって彼らを監視し、訓告を与えなかったのか。過熱状態になるまで放っていたのでは、

西郷が坐してなにかを俟っていたと非難されても仕方がない。

たとえば、私学校党が火薬庫の弾薬を奪ったことも、西郷が城下に留まっていれば、第一回の略奪だけで熄んだであろう。彼が留守にしたばかりに第二、第三の火薬庫を襲撃したのみか、彼らは勢いを駆って海軍省管轄の造船所まで襲っている。いまさら西郷が事件の報告を聞いて鹿児島に帰り、いくら私学校党を叱っても意味はない。

そもそも、西郷の心境は何であったろうか。

彼は征韓論に敗れて東京を去ったとき、心ひそかに決するものがあったはずだ。それは、新政府は必ず近いうちに行詰るという自信であった。

事実、新政府の人気は、人民の間に悪かった。相次ぐ改革に、旧習になれた人々はなじめなかった。ことに地租改正は農民をしてほうぼうに一揆を起させたくらいだ。なかには血税をそのまま血を奪られると誤解しての騒動もあったが、おおむねは旧幕時代よりも重税になったことを恨んだのである。また、徴兵令も農民から嫌われた。それに加えて、一挙に生活の途を絶たれた、全国の士族の不平がある。

また、外には列強の圧迫があった。この間、大久保利通は台湾を攻略して、清国から五十万元の賠償金を得たものの、これはイギリス公使の斡旋があったからで、自力では決してなかった。新政府の当面の課題は条約改正だが、これもとうてい実現する見込みはなかった。

また、西郷は廟堂にいたため、あまりに新政府の中枢部の人間を知りすぎていた。彼らの長所も欠点も分っていた。西郷にとっては彼らの欠点が、ことごとく拡大して映ったに違いない。閣内の人心の不和、派閥の抗争、利害の不一致、そういったものが西郷には政府弱体、遠からず瓦解と思われたに違いない。

もし、政府が瓦解に瀕したならば、そのときこそ乃公いでずんばの自信が彼にあったのであろう。彼はふたたび部下の薩摩兵を率いて上京し、一挙に軍事政権をうちたてる企図があったと推測せられる。それこそ西郷の最後の希望であり、下野して以来の生きがいであった。

4

こういう考えがあるから西郷は、離京に際し、板垣からいっしょにやろうと云われたとき、自分のことには構わずに、おまえはおまえの道をゆけ、と答えたのである。

また、鹿児島に帰郷していた際、土佐の林有造が訪ねて来て、西郷は彼にだけは会っている。一切の面会を謝絶していたのに林のみを引見したのは、おそらく、背後の板垣への斟酌があったかと思われるが、林有造に意見を叩かれたとき、西郷は傲然としてこう云っている。

「木戸はおれを甚しく憎んでいる。ところが、いまは自分が土佐と組んでしまえば、木戸は決して自分を討つことができない。そこで、君は板垣氏を説いて木戸を煽動し、自分を討伐せよ。政府が先に手をだせば、自分は憤るし、薩摩国中の士も憤って、みな防戦するだろう。戦いとなっては、自分にはすでに戦略が決っている。この戦端が開かれたのちには、君らと事をともにするのも悪くはないし、君が政府を助けてもまた悪くはない」

これは明らかに林有造に対する揶揄だ。いや、土佐の板垣一派に対する嘲弄でもある。林は、このとき怫然として、

「自分たちはもとより木戸さんと意見が違っている。いまになって何で木戸に荷担し先生を討つ挙に出ようか。しかし、いま先生の言葉を聞く。私からみれば、お言葉は少し傲慢にすぎるようです」

と云った。「翁敢て咎へず」と「林有造旧夢談」にある。

これは林の書いたものだから信用していいかどうか分らないにしても、当時の西郷の心境をうかがわせてはいる。さきに板垣を憤らせ、いままた林を憤らせる。西郷もかほどまでに自信過剰に陥っていたのだ。

これは西郷だけではない。桐野利秋以下みんな、ひとたび旧薩摩藩士が西郷を頭に戴いて手をあげれば、たちどころに全国から士族の合流があると信じきっていた。

西郷、もとより稀有の英雄だ。その包容力といい、人情味といい肚の太さといい、行動力といい、他を絶している。しかし、おしむらくは、西郷も廟堂を去って二年、南隅の辺陬に起居して中央の情勢に疎かった。西郷は、明治八年十月八日の篠原国幹宛の手紙に、「政府既に瓦壊の勢ひにて」と書いているが、実際には、西郷が思うほど新政府は弱体ではなかったのである。

また、乃公ひとたび起てばの自信も、四囲の情勢判断が、あまりに甘かったと云わなければならない。

この点、大警視川路利良が中原尚雄らに与えた訓諭が、明確に情勢判断をおこなっている。

この要旨のうち大事な点を拾ってみると、次のようになる（原文は設問のかたちをとっている）。

《たとえ鹿児島で兵をあげても、日本国中を討つだけの兵力はない。もし、かりに政府軍を破ったとしても、私学校の連中に天下を治めるにたる人材はない。兵をあげても、その軍資金はない。また、薩摩からすぐ東京に乗りこむ船はない。陸路から行っても、肥後（熊本）鎮台が頑張っている。その戦いに死傷者がでた場合、これを見殺しにせずして、手当てする設備もない。》

さらに、川路は全国の形勢についてふれる。

《肥後の士族は神風連で不覚をとり、賊軍に応ずる余力はない。久留米、柳河藩には奮発力がな

い。福岡の士族は気力がないので恃むにたりない。佐賀の士族はたびたびの失策（江藤新平の乱その他を云う）で、もはや後悔しているし、兵器はまったくない。長州は政府に対してまったく不平を絶っている。芸州にはまったく協力する党はない。備前も覚束ない。因州には少々あるが、士族は甚だ病んで、武器もない。高知には立志社があるが、これは民権党で、薩摩のように頑迷ではない。庄内には開墾党や百姓党があるが、たちまち応ずべき気勢もないし、機会もない。旧水戸藩士族の多くは警視庁に勤めて、反抗の模様はまったく見えない……》

もとより、これは川路から見た意見であり、ことに私学校党の内部分裂を狙った謀略書であるから、執筆の動機は明々白々である。しかし、その指摘するところは少しも誇張なく、脚色なく、歪曲がない。内容は、いわゆるデマゴーグでもなければ怪文書的な宣伝でもない。客観的な、情勢論である。

いま、西郷側の戦略的な矛盾や弱点を考えよう。

西郷は他の旧藩士を恃みとしなかったのは、板垣や林などの土佐派の領袖に与えた言葉、佐賀の乱で敗れて逃げてきた江藤新平を一時逗留させた態度でも分るが、しかもその一方で、彼が兵を率いて一度たてば、全国の不平党が呼応するように期待していた。

「吾々が一たび肱を上ぐれば、天下の志士は皆金鼓を打たずして集る」とは桐野利秋の言葉だ（升味準之輔「征韓論以後」＝「思想」四九〇号）。これでは理論が混乱している。

それくらいだから、他藩に連絡もしていない。他に対して、事前の綿密な組織なくして、どうして呼応が得られようか。昔から、中央に反逆する場合は、その前に全国に密使、つまり、オルグを派遣して組織づくりと連絡に当らせたものだ。西郷党は、あまりに自惚れすぎていた。

その呼応を期待すべき他藩の不平士族党の現状は、川路の指摘どおりだ。彼らのなかには武器

の皆無なものもあった。西郷は、なぜにこれらを分析しなかったのか。

「兵を挙げて出づるに、直ちに東京へ乗り得べき船あるや如何」の川路諭告書の設問は、西郷党の急所をついている。西郷党には艦船がほとんどなかった。それにくらべて、政府は、強大な海軍力をもっていた。九州は四方海にかこまれた一島である。西郷党は馬関海峡を渡ることさえ困難であろう。強行すれば、艦砲射撃の集中にさらされることは必至だ。たとえ九州の大半を制するも、海上封鎖をうけて孤立化のほかないことになる。

当時、海軍の中枢部は、西郷の弟、従道をはじめ薩摩出身者がほとんどだった。薩派は日本の軍部を占有していた。長州は大村益次郎があって、陸軍には薩に対抗するにたるだけの勢力を入れていたが、海軍は薩の独占であった。

その海軍側の薩派は、西郷と行動をともにしていない。陸軍は西郷のあとを追って、ぞろぞろ辞職して東京を去ったが、海軍側は依然として政府側に留まった。これにはいろいろ原因はあろうが、海軍派としては西郷の陸軍第一主義に、ついて行けなかったのであろう。

大体、海軍派は当時としても海外の事情に通じて、陸軍より視野が広い。西郷従道も、明治二年に山県とともにヨーロッパに行き、彼は海軍の兵制を見てきている。簡単にいえば、陸軍は泥臭く、海軍はハイカラであった。両者の不仲は昭和の第二次大戦までつづいている。まして、頑固な西郷隆盛一派には、同じ薩派でも海軍派は同調できなかったのであろう。

西郷は桐野、逸見、村田等の陸軍側の側近にとりまかれていた。それは西郷の「股肱の臣」である。薩の陸派はさながら西郷の私兵の観があった。大義名分はともかく、海軍派がこういう連中と行をともにすれば、彼らの下風にたつことになって、快いものではなかった。要するに、同じ薩摩といっても、陸軍と海軍とでは西郷に対して親疎があり、また、たがいに対しての感情は、

対立といわざるも、わりあい冷淡であった。

それであるから、海上封鎖、西郷軍の乗船に対する攻撃ともなれば、薩派の海軍も、容易にその任務と義務を遂行したであろう。

「兵を挙げて出でんとする其軍資ありや」の川路訓諭の次の設問も、西郷党の弱点をついている。西郷は彼の最大のシンパであった大山綱良県令にさえ、

「あいつは武士の魂よりソロバンをはじくのがうまい」

と嘲弄をあびせたくらいだったから、西郷に財力のスポンサーがつくはずはなかった。その幕僚にも金をつくる才覚者はいなかった。もし、九州から東京に上るとすれば、途上で戦いながら民間のものを徴発、掠奪するほかはない。はじめは県庁の金だけが主な軍資金だった。西郷軍が熊本で敗れてからの話だが、彼らは日向で不換軍票(西郷札)を濫発して物資を徴発している。西郷がたのみとした戦力は、一に私学校党の火の塊のような闘志だけだった。

「其戦ひ各々手負死傷ある時見殺しにせずして療する手当あるや如何」

という項も、離間策の心理的効果だが、それを別にしても、西郷軍の後方不備を指摘している。彼らには軍陣医学的な設備はなにもなかった。ただこれ、屍を越えて進むの気概だけだった。一方、政府側には石黒忠悳(のちの初代軍医総監)があって、軍陣外科はかなり進歩していた。石黒は佐賀の乱にも従軍した。

これを要するに、政府側の万全の準備に対して、西郷軍はあまりにも自己を知らなかったということができる。

もっとも、西郷党をして、鎮台兵何するものぞと思わせたのは、その前年の神風連の騒動という見本だろう。このときは神風連が槍、刀など昔ながらの武器を持って、熊本城に闖入したとこ

ろ、城兵は近代武器を持ちながら狼狽して四散した。

司令官種田少将のごときは、暗殺されている。いっしょに寝ていた種田少将の愛妾が東京に「ダンナハイケナイ、ワタシハテキズ」（旦那はいけない、私は手疵）と打電したのは、わが国電報史上有名なエピソードだ。

鎮台兵の中には、遠く桜島まで遁げてきたものがあるというくらいだから、西郷軍がこれを侮ったのは無理もなかった。

西郷は、鎮台兵は百姓ばかりだと蔑視していた。彼が徴兵令に不満をもったのは、全国士族の失業を慮ったからでもあるが、一つは、農民兵が役にたたないという、先入観があったからである。それにくらべて、彼の率いる薩摩兵は、戊辰戦争以来、百戦錬磨の勇卒ばかりだ。明治新政府の武力的背景となった三藩献兵の中核は、薩摩兵であった。

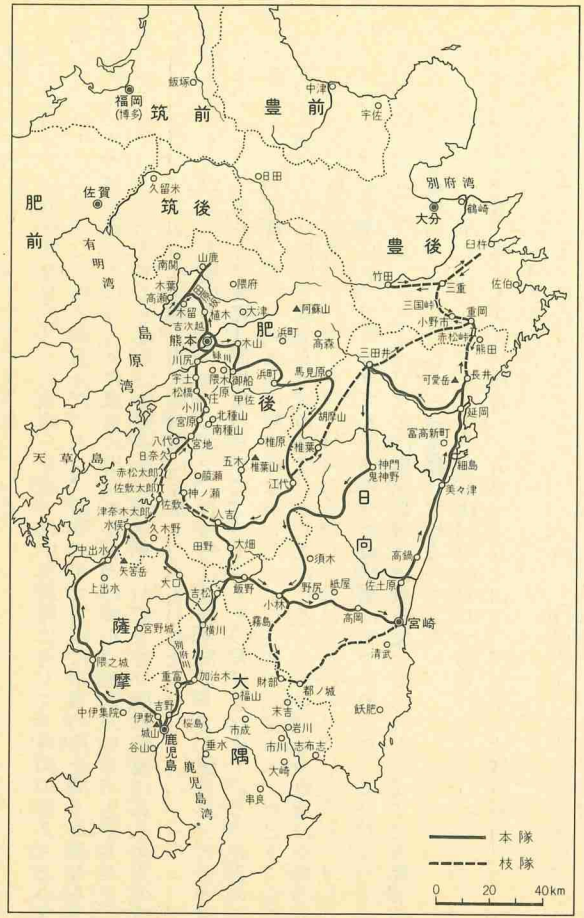
往昔から南隅にあって、他からの侵略をうけたことのない薩摩隼人だ。関ヶ原役後、家康が、敵対した島津に対して宥和政策をとったのも、薩摩藩と戦えば、容易ならざる犠牲の出ることを配慮したからである。

かつての日本軍のように、敗戦を知らない薩摩隼人が、わが往くところ、刃向かう敵なしと驕慢になったのも、辺陬の士、天下の大局を知らなかったとだけで片づけることはできない。

5

話はもとに返る。

白根島の狩猟地から、火薬庫奪取事件を聞いて、いそぎ城下に帰った西郷は、私学校生徒を集めて叱咤したものの、すでに騎虎の勢い、彼としても起たざるを得なかった。そこで西郷は、



「おいが身体はおはんたちに上げまっしょ」

と観念するのである。

出兵の名目は、西郷暗殺を目的とした中原らを放った中央政府に対して、尋問の筋ありというのだった。むろん、つけたしの大義名分だ。もし、西郷にして実際に不審の廉を問うためなら、なぜに彼は、その側近数人といっしょに東京に出向かなかったのか。西郷が単身で出京したとしても、まさか政府が彼を殺すことはないに違いない。いや、かえって、彼の背後にある兵力の重圧を感じて狼狽し、あるいは岩倉・大久保内閣は瓦解したかもしれない。

西郷がそれをしなかった理由の一つは、もはや、合法的に政府と掛合っても駄目だ、という考えが彼にあったのであろう。西郷は征韓論のときに、つくづくその苦杯をなめている。弁舌の上では、彼はもとより岩倉、木戸、大久保の敵ではなかった。かつて彼が廟堂にあったとき、会議には顔をださず、別室で板垣と戦争と相撲の話ばかりしていたというから、その政治に不熱心だったことがうかがわれる。

理由の第二は、私学校党が、西郷自身でも制御のつかぬ状態にまで過激になっていたことである。彼が大隅半島から引返したときは、すでに鹿児島城下は戦時気分であった。ここで西郷の性格にひそんでいる虚無精神が、むくむくと頭を擡げてくるのである。

さて、西郷のもとに集る者約一万三千。その編成は次のとおりである。

第一大隊長篠原国幹、第二大隊長村田新八、第三大隊長永山弥一郎、第四大隊長桐野利秋、第五大隊長池上四郎、第六大隊長別府晋助。

各大隊兵数はほぼ二千名。それに砲兵が加わっていたが、その火器は、四斤砲二十八門、十二斤砲二門、臼砲三十門であった。ほとんどが薩・隅の士族で、輜重部隊は大小荷駄方として各大

隊に付属させた。このほか別に貴島清の一隊があった。貴島は、元来、私学校党の一部とよくなかったため、西郷の進発には随行しなかったけれど、途中から薩軍の苦戦を見て、傍観できずに参加したのである。そのほか一万の徴募兵が加わって、総勢二万三千となる。だが、この徴募兵は素質が悪く、戦闘が進むにつれて脱落者がでた。

西郷が進発するにあたり、県令大山綱良は専使を熊本鎮台に行かせて、司令官谷干城に通告させている。これが明治十年二月十八日のことだ。

その要旨は、まず、警視庁の中原警部ほか数名が、名を帰省に託してひそかに帰県し、国憲を犯さんとする奸謀が発覚したので、これについて政府への訊問の筋あって陸軍大将西郷隆盛が東上する。ついては陸軍少将桐野利秋、陸軍少将篠原国幹以下旧兵卒が随行して、熊本城下を通るので、人民が動揺いたさぬように処置ありたし、というのだ。陸軍大将西郷隆盛の資格で陸軍少将谷干城に命令しようというのである。

当時、陸軍大将は西郷だけで、彼が中央を棄てて鹿児島に帰ってからでも、その陸軍大将の位は褫奪されていなかった。篠原、桐野も同じで、その給与は熊本鎮台に積みたててあったというから、政府も西郷にはかなり微温的だったわけだ。

菊池寛は、この大山県令からの通告を、西郷が陸軍大将として上官の資格で熊本鎮台司令官に命令しようというのであるから、子供だましのようなものである、と書いているが、西郷の大将の地位が正式に剝奪されていない限り、表むきには合法なのである。すなわち、のちの軍人勅諭にもあるとおり、上官の命は朕が命と心得よ、の精神だ。これは二・二六事件における参加兵隊の立場と相似ていて、命令系統の矛盾を露呈している。

さて、政府側では西郷党の不穏な動静に狼狽して、朝廷に云って有栖川宮熾仁親王を勅使とし

て、鹿児島に派遣することにした。天皇の命によって、騒動をおさめようというのである。

当時、明治天皇は畝傍の橿原神宮に参拝のため、軍艦に乗って神戸に上陸、京都にあった。陸軍中将山県有朋は供奉して西下していたが、熊本鎮台から、西郷党は二十日か二十一日ごろに開戦するだろうと報告してきた。

そこで、鎮撫勅使の有栖川宮を征討総督に切りかえた。これが二月十九日のことである。このとき、山県は参軍（事実上の総指揮官）となり、いそいで九州にくだったが、二十五日には博多に到着している。

山県は京都を発するまえに、薩軍の戦略を想定している。

①汽船ですぐに東京、あるいは大坂に入るか。

②長崎及び熊本を襲い、九州を鎮圧した後で中原に出るか。

③鹿児島に割拠して、全国の動揺をうかがった後、時機を見て中央に出るか。

この三つよりほかないと考えた。

いずれにしても、政府軍としては、敵がどの戦略をとろうとも、海陸から鹿児島を攻める方針とした。さらに地方の騒乱に備えては、各鎮台に厳戒させることにした。

これに対し、薩軍は山県想定の第二項のごとく、鹿児島より一万三千の兵で、堂々と熊本に押しだしたのである。

この戦争前、熊本鎮台司令官の谷干城をあやぶんで、司令官の更迭を山県に進言する者があったが、山県はこれを斥けている。これも山県の図に当ったといえる。

6

熊本での戦闘の模様を述べるまえに、日時はあとのことになるが、戦闘員がほとんど空っぽになった鹿児島に、ふいに政府からさしむけられた柳原前光勅使の一行が入ったことを書いておかなければならない。

西郷軍蜂起の報らせを聞いた中央政府は、鎮撫使として西下させるはずの有栖川宮熾仁親王を征討総督に切りかえる一方、岩倉の発案で、元老院議官柳原前光を勅使として鹿児島に下向させることにした。これには、陸軍中将黒田清隆、陸軍大佐高島鞆之助らを随行させた。その真意は、鹿児島にいる旧藩主島津久光父子を、西郷党に与しないように説諭するためだった。万事、消極的な木戸はこれに反対したが、岩倉が押し切った。

勅使一行は、三月一日に黄竜丸に乗って神戸を発ち、七日に長崎にきている。筑波、竜驤、清輝、春日の軍艦四隻が護衛した。長崎から玄武丸に移り、他の軍艦には、陸軍一大隊半と、警視庁の巡査七百余名を乗せた。三月八日山川港にはいり、鹿児島に到着した。八日といえば西郷軍は田原坂で官軍主力と激闘をくりかえしている最中である。

この七隻の艦船を鹿児島湾に見たときの城下の騒動はひとかたならず、市民は家財道具を山中の田舎に持運び、右往左往する有様だった。巡査が制止しても聞かず、騒ぎは一晩じゅうつづいた。

これでも分るとおり、薩軍なき鹿児島は、まったく無防備状態だった。西郷の戦略には、制海権が政府方にあるを忘れていたとしか思えない。まさか自分たちの出発直後に、完全武装の軍艦と陸兵が襲来しようとは夢想だにしなかったようで、ここにも西郷の自信過剰がみえる。

しかし、柳原勅使の一行は、鹿児島市を占領にきたのではなく、島津久光父子に、ひたすら、その自重を促すだけだった。島津久光は、もともと西郷とは犬猿の間柄である。だが、久光もま

た明治新政府が出来てから、ある意味で失意の人であった。その点、征韓論に敗れてから引込んだ西郷の境遇とは、一脈通じるものがあって、そのころは多少は意志の疎通があったように思われる。だが、西郷が兵を率いて去ってからは、久光はまたその中立派とともに孤独となった。

元来、旧鹿児島藩士のほとんどは西郷に心服していたから、久光は旧藩主という空位に留まっているだけであった。久光の心底には、西郷の人気に対する嫉視がなかったとはいえない。

柳原前光のもたらした久光に対する勅書は、鄭重を極めたもので、それまで多少は西郷に歩みかけていた久光も、これを読むにおよんで俄然政府側に立つようになった。政府への好意的中立は、西郷への敵視的中立である。

郷党を留守にした西郷が、最も信を置いたのは鹿児島県令大山綱良で、大山については前にしばしば書いたが、彼こそは政府から派遣された地方長官とはいえ、質的には全く西郷の傀儡(かいらい)だった。西郷軍の出発に当って、大山は軍資金や糧食米を提供し、その準備には、県庁の役人を総動員して徹夜で当らせている。

柳原勅使一行の来着は、この大山から、当時熊本攻城にかかって、川尻の本営にいた西郷のもとに報じられた。これに対して西郷から大山への書簡が来たが、それには、勅使下向の真意はよく分らないが、察するところ、敵方も策が尽きて調停の方法をさぐりに来たのではあるまいか、敵方では、熊本城を奪られては各地に不平士族党の蜂起をみるので、万事休すとみて和睦の策を講じるために勅使を下向させたのであろう、と云い送っている。

そして、西郷は大山を戒めて、敵は兵気も挫けたか、この間に少し息を休め、こちらに油断をさせて、何かまた策略をめぐらしているようであると述べた。これは官軍が苦戦している間のことらしい。「決して狸に騙されざる儀肝要の事」と大山に書き送っている。そして、大山が西郷

に柳原勅使の来県を報知した手紙も、それに対する西郷の書簡も、これが最後になった。大山綱良自身が、黒田清隆の甘言に乗せられて、軍艦に拉致(らち)されてしまったからだ。

なお、勅使一行は、このとき大山に命じて、投獄中だった警視庁警部中原尚雄以下を釈放させ、彼らもことごとく船に乗せてしまった。中原尚雄は西郷への刺客とされ、拷問によって、その供述書を書かされた男である。西郷挙兵の理由が、西郷暗殺未遂事件に対する政府への訊問とあれば、中原はいわば、西郷側の生き証人である。それを政府側に奪われたのであるから、西郷は、その主張の証拠がまったく失われたことになった。

だが、それにも増して痛手だったのは、大山綱良が勅使一行に拉致されたことである。西郷軍出発後の大山は、さながら、その兵站司令格であり、同時に県下の衛戍司令官であった。彼を失ったことは、すなわち、後方の安定を一挙に喪失したことになる。もともと、戦闘力の全部を熊本に移した西郷には、大山の率いる警察力だけが唯一のたのみだった。

しかし、この警察隊は、県民に対する治安維持だけの役にしかたたず、勅使一行の艦船七隻が入港したときも、手も足も出なかった。彼らを統御するのが大山綱良ひとりだったのだから、大山を失ったことは西郷にとっては大打撃である。

大山は、なぜ、唯々として勅使の軍艦に乗ったのか。黒田清隆は、今度の西郷挙兵については大山に罪はないと、極力彼を説いて乗船をすすめた。だが、政府から任命された県令が、西郷軍に、資金として県庁の公金や糧食を与えたことはどう弁解のしようもない。大山自身もこれは分っていただろう。

それなら、大山は何故に逃れて西郷軍に投じなかったか。その一つの理由として、いまさら大山がノコノコ熊本に出かけて行っても、西郷に厚遇されるとは思えなかったことがあげられてい

る。すなわち、西郷が大山を重視したのは、彼の県令としての権能を利用出来る間だけだった。地方長官としての一切の権力（西郷党は、それをフルに利用した）を失った大山に何の値打があろう。大山が強いて熊本の戦線に着いても、篠原や別府などの部隊長クラスの下にしか附き得まい。これが大山をして敢て西郷の下に身の保護を求めさせなかった原因だという。

もう一つは、当時政府では西郷の挙兵を怖れていた（木戸はその代表）ので、これまで政府と西郷との中間にあって従来いろいろと折衝してきた大山を、今後も政府がまだ利用するだろうと思って東上を決心した大山自身の計算違いもあったという。これも十分に考えられる。

しかし、大山自身は、その希望と、死罪とを半々にかけて、あえて黒田の言葉に従ったように思える。大山が船に行く途中、知人の妻と出遇い、その妻が、どちらにお出かけですか、と訊くと大山は笑って、

「これから東京に斬られに行くのだ」

と答えたという。西郷は、熊本の陣営で大山が東京に連れて行かれたと聞いて、

「あいつは命を知らない男だ」

と大笑したと伝えられる。

もし、西郷がその通りに云って大山を嘲笑したとすれば、西郷もずいぶん冷たい男で、大山の胸中の万分の一も理解していない。思うに、西郷の意識からは大山が政府の役人だったことが離れなかったのかもしれない。だが、西郷は大山を利用し尽し、その骨の髄までしゃぶったといってもよい。命を知らない奴だと大山を嘲ったとすれば、西郷の人情も酷薄だといわざるを得ない。船で神戸に着いた大山は、はたせるかな京都の行在所にも連れて行かれずに斬首の刑に処せられた。筆者は、この大山綱良という人物に興味を寄せている。

さて、柳原勅使の鹿児島侵入は、城下の人心を極度に不安にさせた。それは、西郷一辺倒だった薩摩人に、どれくらい西郷の威信を減じさせたか分るまい。西郷起てば、いまにも天下が彼のものになると信じこんでいた郷党人なのである。

その西郷が城下より僅々五十里の北、熊本県の南境にあるにもかかわらず、政府は悠々と武装した艦船を乗り入れさせた。

西郷の留守の空巣狙いといえばそれまでだが、もし、これが勅使でなく、正式な軍隊としての上陸だったら、鹿児島は一夜にして官軍に占領されたに違いない。すなわち、柳原勅使の来県は、政府の心理作戦としても大成功だった。木戸がこの計画に反対したのはよく分らないが、当時彼は病床にあって気が弱くなり、万事に消極的だったからだといわれる。

これに反し、この策をとらせた岩倉具視のヨミの深さは、木戸とは段違いだ。木戸もまた西郷と共に維新までの一人であり、過去の人間であった。明治政府は、岩倉、大久保、伊藤の線で、その地歩を固めたのである。

勅使一行の乗込みによる郷党の不安は、西郷自身の不安でなかったとは云い切れない。

西郷は、大山綱良に与えた手紙では強気なことを云っているが、それがどこまで本音かは疑問だ。彼は郷党が全く裸のままで官軍の前に曝されているのを思い知った。この不安状態は同時に、西郷に従っている薩軍三万の兵にも影響を与えたに違いない。

若い私学校生徒はともかくとして、幹部クラスの中には、かつての戊辰役のとき西郷に従って東北各地を転戦している者が多い。彼らはつぶさに会津や仙台の敗戦悲劇を見てきたはずである。それがいかに悲惨であったか、藩士の家族がどのような残酷な目に遭わされたかは、記憶に生々しいところであった。その加害者が今度は立場をかえて被害者となり、彼らの家族や血縁者に同

じ悲劇が降りかかってくるかもしれないのだ。

福地源一郎の田原坂戦の従軍戦報に、

「昨日今日の戦は敵味方相近く、時に味方より大声にて、コラ〳〵ワイどもが根拠の鹿児島は八日に乗取タゾと呼出し呼出し攻め掛り、敵もさながら期したる事なるも、大いに心を痛ましめたる景色ありき」

とあるが、さこそと思われる。故郷を占領されたと聞けば、薩兵の士気も沈んだに違いない。筆者は、西郷が熊本城奪取に頑固に執着した一つの原因を、鹿児島との連絡をあくまで確保したかったからだと考えるものだ。

7

さても西郷軍は、二月二十一日、鹿児島県境を越えて熊本県川尻に達した。五十年ぶりの大雪に悩まされて鹿児島を出発以来の行軍は、困難を極めた。

これに対し、熊本鎮台司令官陸軍少将谷干城は、すでに早くから籠城を決し、準備万端を整えて薩軍の来攻を期していた。

本稿のような少い枚数では、西南戦争全体について記述することは不可能である。したがって、戦闘の推移は重要なところだけを取出し、大略を述べるほかはない。

熊本鎮台側は、どのような準備をしていたか。

政府では、さきに神風連の乱で仆れた安岡県令の後任には富岡敬明を当てていた。富岡は佐賀県小城の産、国事に関係して久しく入獄していたが、その牢はおそろしく窮屈なもので、ほとんど身の置きどころのない有様だったが、彼は、十余年の入牢生活から出されると、すぐ高下駄をはいて路上を濶歩したという豪傑漢だった。

また、熊本県庁には、内務大書記官品川弥二郎がいた。品川は、鹿児島の形勢が不穏になってから大久保利通によって急遽派遣されたものである。彼は、いうまでもなく吉田松陰門下で、奇兵隊にも加わり、戊辰役にはしばしば死地にも出入している。ドイツに行き、帰ってからは、前原一誠の乱にも現地にあって善後策を講じた。内務官僚としての山県有朋の一面をうけついだ第一人者といえば、品川弥二郎に指を屈する。

谷は早晩西郷党が来襲することを予想して熊本城の防備を修理し、兵糧をたくわえ、大砲その他の武器を充実させた。彼が最初から籠城一点張の方針をとったのは、一つは鎮台兵が百姓あがりのところから野戦では薩軍の敵でないと察し、一兵も城から出さないことにしたのである。

そもそも熊本城たるや、築城の名人加藤清正の設計で、難攻不落として天下に聞えていた。神風連のときは不意討ちに斬りこまれたので思わぬ失敗を喫したが、それがかえって薬となり、城の欠点は修正され、強化された。また、兵器も西郷軍がスナイドル銃一つに頼っているに対し、籠城軍は政府から支給された最新式の火砲を持っていた。このような条件を西郷はまるで顧慮していない。いわゆる肱を上げれば一挙に鎮台兵が城を出て投降するくらいに思っていた。西郷の頭は、鎮台兵が百姓ばかりの烏合の衆という固定観念から一歩も出てなかった。彼は、薩軍が来襲したと聞けば城兵が慄え上がり、熊本城などは易々と通過出来ると信じこんでいた。

熊本には前から国権党というのがあって、早くから反政府党だった。国権党というのは佐々友房、池辺吉十郎などが率いていて、前から西郷軍と気脈を通じていた。薩軍がくれば、当然彼らは薩軍と合流する。

元来、熊本県人は、鹿児島県人に次いで狷介だといわれている。秀吉の頃、ここに越中富山か

ら佐々成政が国主として封じられたが、佐々は土民の一揆にあって統治することができず、その責を問われて秀吉から死を賜ったくらいだ。それほど肥後人は昔から反骨精神を持っていた。佐々友房も、あるいは、その成政の縁につながる者の後裔かもしれない。

はたせるかな、西郷軍来ると聞いて、国権党は私学校のやり方を真似て、県庁を自分たちの傀儡化しようとした。県庁の役人は周章狼狽し、池辺らに三千五百円の金を出している。池辺は、これをただちに西郷の軍資金に回した。

富岡県令、品川内務大書記官などは、危うく佐々や池辺らの捕虜にされかかったほどだ。富岡らは、有栖川征討宮が県内に入られたのでこれを迎えに行くと偽って、ようやくかこみを脱して熊本城に入った。この機転がなかったら、県令も内務大書記官も命がなかったかもしれぬ。したがって、後年の内務大臣品川弥二郎もなかったことになる。

後日、明治十四年、佐々友房は東京に行き、おりから上野公園で内国勧業博覧会を主管していた品川内務少輔と歓談し、当時を回想したという。

熊本城内の兵力は、戦闘寸前に到着した小倉第十四連隊の一部と、警官六百名を加えて三千五百十余名であった。これに対して薩軍は、本隊の一万三千名に途中合流した各隊を加え三万名にのぼっていた。

薩軍が続々北上して、すでに水俣、八代に到ったという警報は刻々に城内へ伝えられたが、両軍の初めての接触は、二月二十一日の真夜中、川尻における戦闘だった。このときは偵察に出ていた城兵がさきに発砲したのだが、弾薬を惜しんだ薩軍は、あえて発砲しなかった。だが、これをもって薩軍では開戦の責任を鎮台兵にあるとしている。

二十二日、薩軍が熊本城を包囲するにおよんで本式の銃火を交えた。結果だけをいうと、薩軍

がどのように力攻しても、城を抜くことが出来なかったのである。

大体、城内の高級将校には鹿児島県出身が多かった。参謀長の樺山資紀もその一人だが、谷干城は放胆に一切の指揮を樺山に任せて悠々としていた。また、城内では、事故によって貯蔵した米倉が焼けたりしたが、これもすぐにあとを補充して、かえって前より余計に貯蔵できた。伍長谷村圭介が変装して植木方面の官軍本営に城中の状況を報告したのはこのあとのことだが、有名な話なので略する。

さすがの薩軍も、この堅城には攻めあぐねた。鎮台兵は西郷の云うような百姓兵の烏合の衆ではなかった。薩軍から矢文を投じて投降を勧告したが、変心者は一人も出ない。第一、薩軍は、攻城に必要な重火器も持たなかった。これでは堅固な城が落ちるわけはない。

こうしてもたもたしているうちに、政府軍は着々増援軍を送り、筑紫平野を南下させた。また、八代に上陸して薩軍の背面を衝く官軍も所在の薩軍を掃蕩しながら北上し、薩軍を南北から挟撃する態勢に出た。薩軍の勇将永山弥一郎は、この背後からの北上軍を防ぐに失敗して自尽している。

こうなると薩兵も、その兵力を三分しなければならなくなった。つまり、一つは熊本攻城をつづけ、一つは北方より大挙南下する官軍主力に対する邀撃、もう一つは、背面軍への防禦である。

そもそも、北の筑後平野から熊本に入るには二つの道がある。一つは大牟田から南関に至って道を山間部にとり、高瀬、植木を経て熊本に入るのと、一つは高瀬から海岸に沿って行き、左折して吉次越を越え植木に合流する線である。

田原坂は高瀬から東寄りの山間部を通って植木に至る途中にあり、木留は吉次越から植木に至る途中にある。現在の鹿児島本線は後者を通っている。政府軍が攻めてくるも、また薩軍がこれ

を防禦するも、この山間両道の途上の峻となる。田原坂と木留の線に激闘が行われたのはこの理由からである。

8

これより先、小倉第十四連隊長乃木希典少佐は、谷司令官の命を受けて、小倉の兵を率いて熊本に赴いた。二月十四日午前六時、第十四連隊第一大隊は営所を発し、黒崎から靴を草鞋にかえ、直方に泊った。この日も大雪であった。

乃木少佐は十五日には熊本に着き、城内に入った。このときはまだ薩軍の包囲が始まる前だったのである。乃木は谷少将と打合せをしたのち、十六日熊本を発ち、山脇大尉の率いる隊を迎えるため久留米に向かった。この日、朝から終日雪がやまず、寒気酷烈で、山脇大尉一行の小倉兵はすこぶる疲労したとある。

十七日、乃木は久留米で山脇大隊と合した。そして、彼は久留米近郊の地図を作るように命じて、そのまま福岡に行った。

薩軍が水俣から熊本に入る報が谷少将から山脇大尉にあったのは十七日の夜で、ただちに大隊は二十日午前までに熊本に着くようにせよ、と命令が来た。乃木は福岡で谷少将からの電命を受取った。福岡屯営の第三大隊も出動の準備をした。この山脇大尉の第一大隊左半大隊だけが、ようやく熊本城に入り得たのである。薩軍は二十二、三日ごろ、すでに山鹿方面に兵を出して、その主力は植木、田原坂、木葉の南北の線に注いで、右翼は吉次越、三ノ嶽方面に配置した。乃木連隊長の率いる第三大隊右半大隊が南関を発して高瀬に着いたのが二十二日正午ごろである。

薩軍の、すでに植木の線に展開した報告を聞いたのは木葉駅に着いたときで、その後、植木の

薩軍は一時退却したという報らせがあり、乃木隊は、この夜植木を中心として陣をしいた。薩軍の植木方面は、伊東直二の四番大隊九番小隊と、村田三介の率いる五番大隊二番小隊であった。

乃木隊の兵力は一中隊にも満たず、時に午後六時、夕陽はすでに没して、あたりは犬の遠吠えのみで、人影なく、蕭条としている。乃木は散兵線を植木の駅外に展開させて、さらに斥候を放つと、俄然、薩軍の伊東隊と村田隊とが林の中から襲撃してきた。乃木は戦闘態勢に移らせたが、味方の少数を敵に覚られぬよう発砲を禁じ、銃剣を着けて地に伏し、敵の動静をうかがった。

七時、薩兵は一団となって声をあげ突撃してきた。時に月は中天にかかり、真昼のごとくにあたりを照らしている。乃木隊、初めて発砲したが、薩兵は右翼に転じて進んできた。乃木隊は兵力が少いので、将校も負傷者の銃をとって戦うという不利に陥った。しかも、薩兵は白刃を閃かして吶喊してくる。両軍、ここに相混って激闘となり、死傷者続出した。しかも、薩兵は多勢である。次第に乃木隊の背後に回って包囲の態勢をとってきた。

ここにおいて乃木は、河原林少尉の腹に軍旗を巻かせて敵兵に奪われないようにし、全軍を収拾しようとしたが、正面の本道にある敵を突破しなければとうてい進退はできなかった。

だが、九時四十分頃にようやく後退できた。が、集結した味方を点検すると、河原林少尉の姿が見えない。兵に問うと、撤退のとき少尉がひとり刀を揮って敵兵の中に入って行くのを見たと云う者がいた。乃木少佐は、軍旗を失って何の面目があろう、直ちに取って返し旗を奪い返す、とあせるのを、部下の軍曹たちが泣いて少佐を抱き止めた。乃木少佐、軍旗を奪われるの一席。

翌二十三日も木葉を中心に戦闘が行われたが、このときも官軍は敗北し、吉松少佐以下戦死している。薩軍では地理に明るい佐々友房の熊本旧藩士隊が先導して、さらに陣を進めて進軍の態勢に移った。この作戦は、あくまでも小倉第十四連隊の熊本入城を阻止する目的だったが、博多

に上陸した第一旅団、第二旅団の兵が相次いで南下すと聞くにおよんで、薩軍もその主力をこの戦線に本気に投入しなければならなくなった。

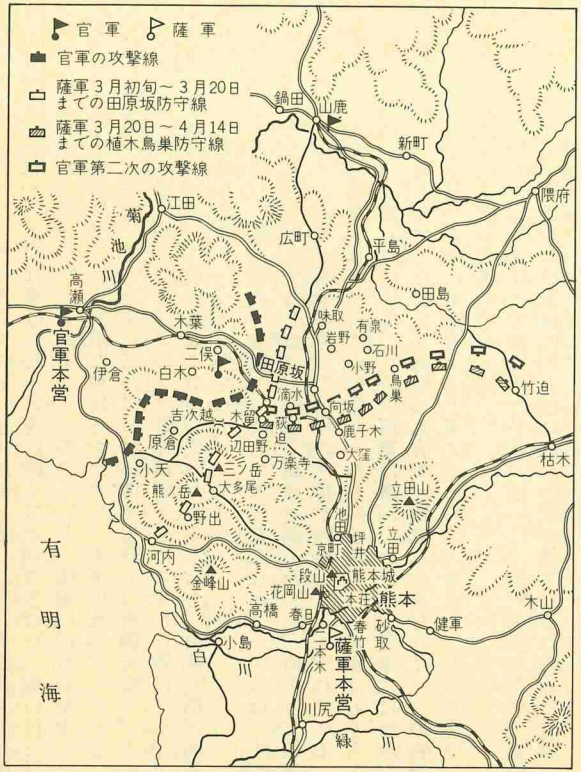
薩軍では先日来の戦闘で官軍の侮り難きを知り、一気に高瀬の官軍を排除するために、高瀬進撃の態勢をとった。一番大隊長篠原国幹、二番大隊長村田新八、六番、七番の連合大隊長別府晋助が主力となり、右翼軍として四番大隊長桐野利秋が山鹿方面から進んだ。いかに薩軍がこの方面の防禦に全力を尽そうとしたかが分る。ここを破られれんか、熊本攻城中の薩軍の態勢は一挙に崩れるのである。

二十五日、官軍では新着の第一、第二旅団の兵が南関から高瀬方面に進撃していた。これが二十五、二十六、二十七の三日間に亙って薩軍と衝突し、山鹿、木葉、吉次越、小天の線で激戦を繰返すことになる。しかし、一進一退で容易に勝負はみえない。小天は九州山脈の支脈にあたる山塊が有明海に迫ったところにある要衝で、つまり、筑後と肥後の両平野を遮断して東西に走った小山脈が熊本攻防の鍵となったのである。

官軍はこの丘陵地帯を突破すれば、ただちに熊本平野に雪崩れ込んで、籠城軍と連絡できるから、これも必死だ。余談だが、小天は温泉地で、漱石の「草枕」のモデル地である。

こうして両軍が激闘をつづけているうちに、広島鎮台の三浦梧楼少将の率いる第三旅団が博多に到着した。

薩軍は、その戦闘の中心を田原坂の防禦に求めたが、数日来激戦を繰返しているうちに、官軍ではすでに第十四連隊が戦線にあるほか、新鋭の野津（兄・鎮雄）少将の第一旅団、三好（重臣）少将の第二旅団、大山（巌）少将の四個大隊と、警視庁の巡査隊も戦線に参加した。薩軍でも鹿児島、宮崎方面から、貴島隊、佐土原隊、高鍋隊などが続々として援軍に加わり、ここに官薩両軍



の主力戦が始まった。

薩軍は田原坂の要害に拠って、その左右を味取、金比羅山、轟、二俣、横平山、五郎山、原倉、吉次越、三ノ嶽の線に展開したが、官軍はこれを容易に抜くことができない。戦いは三月四日から始まったが、毎日激闘の連続で十数日を経過している。しかも、戦場は田原坂を中心として南北わずかに各二里、前面約一里半という狭隘な地域であるから、両軍の死闘ぶりが分る。

山県参軍はすでに博多に到着していたが、三月二日には博多を発し、南関を経て、大山少将とともに兵二中隊を率いて高瀬に向かった。このとき野津鎮雄少将はみずから陣頭にあって諸隊を指揮し、木葉の敵軍を陥れ、もっぱら田原坂にかかっていた。すなわち、山県有朋が高瀬に到着したときは、田原坂の激闘の真最中だったのである。

この西南役における山県の方略は極めて慎重で、決して無理をしなかった。彼は一歩ずつ確実に敵を追詰める方針をとった。ともすると逸りたつ麾下諸隊を制したため、時としては戦機を失うようなことさえあった。この点、内治に見せた山県の性格が戦略にもよく現れている。

だが、それというのも、畢竟、官軍に兵力が豊富だったからである。応援軍はいくらでも繰出せるし、海上は海軍によって握られている。当時の海軍は微弱だったが、薩軍には皆無だから、官軍の絶対優勢だ。山県としては、たとえ局地戦でも官軍が敗北したとなれば、この戦争の成行をみつめている全国不平士族の心理にも影響すると考えたから、大事をとったのだろう。彼は焦らず急がず、じっくりと確実な駒の進め方をした。

それにひきかえ薩軍は、全力をあげて熊本に来ている。彼らには後続部隊がない。兵站線も手うすである。つまり、かけ代えのない手持の兵力だけだ。山県の悠々たるに対し、薩軍が焦慮したのも無理はない。

そもそも、田原坂の地たるや、外高く内低く、あたかも凹字型をなした急峻な地形で、加うるに曲折をもってし、坂の左右は断崖峭壁をなし、樹木鬱蒼としてこれをおおい、昼なお暗く、天険をなしている。田原坂はタバルサカといって、タワラサカとはいわない。九州の訛は「原」をハルといい、「春」をハラという。薩兵は、塁を要所要所に築き、坂下より進む官軍を上から狙い撃ちする有利な地勢を占めていた。

ことに弟野津道貫大佐が参謀長たる第二旅団の向かった吉次越（七二八メートル）の戦いは激烈で、官軍に死傷者続出し、どうしてもこれを抜くことができない。しかし、薩軍もこの戦闘で篠原国幹を喪って大きな犠牲を出している。

篠原は緋色の外套をかぶり、手に赤銅の太刀をひっ提げ、始終戦線に立ってみずから指揮していたが、ほかの者が安全の地に移るようすすめても、云うことを聞かなかった。官軍の中で篠原を知っている者がいて、射撃のうまい兵にこれを射たしめた。篠原は一声も発せずして斃れた。この射撃者は、のちの陸軍少将で、村田銃の名のある銃の設計者村田経芳とも云われている。

篠原は、薩軍では桐野とともに西郷の片腕で、西郷は、その部下のだれよりも彼を最も信頼していた。西郷の信用は桐野にではなく、篠原にあったと云われているくらいだ。たとえば、私学校党が事を挙げようとしたとき、西郷に最後の決心をつけさせたのは篠原であったといわれる。彼の死は、西郷に大きな落胆を与えた。

また、西郷にとってもう一つの不幸は、弟小兵衛が高瀬方面の戦いで戦死したことである。小兵衛は人物においてその弟信吾（従道）ほどではないにしても、彼は心から兄隆盛のために挺身し、その手足となって働いてきた。篠原の死と、小兵衛のそれとは薩軍に暗澹たる前途を感じさせたに違いない。

9

西南戦争中、両軍の犠牲が最も多く出たのは、田原坂と吉次越の戦場である。官軍では吉次越を地獄峠と称した。戦闘はいつも未明から始まり薄暮におよんで、弾丸数十万発を費した。塹壕の延長は数百メートルにすぎないが、その間は小銃の薬莢をもって埋没されたといわれている。死屍はいたるところに横たわり、血は草木を染め、まさに地獄峠の名にふさわしかった。

田原坂の攻防戦も一進一退、薩が進めば官が退き、官が逆撃すれば薩が屈して、また攻勢に出るという有様で、これが毎日のように繰返された。官軍は何とか薩軍の背後に出ようとして間道を伝わろうとするが、察知した薩軍が白刃を閃かして横から攻撃してくるので、いつも失敗した。

薩軍で最も有力な戦闘隊は抜刀隊だった。彼らは銃砲戦の間地上に匍匐し、あるいは樹木の間に隠れて、ひそかに官軍に接近し、ころあいを見計らって白刃をふるって敵陣に突撃した。これには官軍も周章狼狽、離散した。田原坂の塁は、官軍によって六、七間ぐらいにまで迫られたことがあるが、常に薩軍の抜刀隊によって退けられた。

ここで官軍も対抗上抜刀隊を組織することになった。これには巡査隊が当った。

西南役には警察隊が活躍している。すでに綿貫警視の警察隊は熊本に入城していたが、川路大警視の率いる警視庁警察隊は別働旅団とともに、八代に上陸、薩軍の背後に迫りつつあった。艦船をもつ官軍は、思うところに兵を上陸させることが出来るのである。この抜刀隊が当時の人口に膾炙したのは、彼らが田原坂の正面戦に活躍したからである。

「抜刀隊」は山県参軍が命名したといわれる。山県は福岡県庁に命じて刀剣を購入させ、これを巡査三百名の中から最も精悍な百名を選抜して一隊となした。ここにおいて、巡査隊の抜刀隊と

薩軍の抜刀隊とが、昔の合戦そのままに凄絶な白兵戦を演じることになる。

この巡査隊の抜刀隊のほとんどは士族で、その士族の中でも鹿児島の士族に属する者が最も多かった。いわば薩の同胞相搏つの状態となったが、ここにも、前に述べたように、旧鹿児島城外士と城内士との伝統的な反目が作用したのである。差別待遇がいかに人間どうしの憎悪となるかが、ここでも証明される。また、その巡査の中には、募集に応じてわざわざ会津方面から出かけた士族もいた。彼らは戊辰役で西郷軍に痛めつけられた意趣をここで晴らそうとした。

当時官軍についていた従軍記者の福地源一郎は、田原坂の戦闘を次のように通信している。

「田原坂の戦は今十四日の早朝より側面の攻撃を初め、八時前には既に烈戦と相成る。賊の抜刀隊の為に我が新兵は度々切り退けられたるに付き我方も同じく之を行はんと決議し、既に昨日よりその用意を成し、東京巡査百名を抜択して抜刀隊と名づけ、之に刀を授け、我が攻進の兵隊の後に続かしめたり。扨本日は大坂鎮台の兵は是まで数度の不評判を今日の一戦に雪がんものと志ざし、近衛兵と共に勇み勇みて賊塁に迫り、土俵に足を踏み掛けて攀ぢ登らんとするを、賊は壁内より之を防ぐに、其間相近きこと土俵一重を隔るのみなれば、銃槍と銃槍とが敵味方の間に扣き合ふに至る。戦機の熟する頃に巡査の抜刀隊は三四十名づゝにて砲煙の間より切て掛る。賊も此の手段に不意を食ひ、遂に其塁を乗取られたり。此勢にてソレ進め、ソレ乗取れと勇み立ち、一時に数塁を抜き、田原坂の上なる植木街道の側なる電信柱の下までに近づきたり。去れども敵は必死を極めたる暴徒なれば、再び盛り返され、我兵も凡そ二三反ばかりも追退られたるが、又もや足を踏止めて進み、遂に敵を追て初めの柱下へぞ近づきける。

中腹の賊塁よりわが攻撃進兵の側面を射るに付き、二俣の砲台より野戦砲にて着発弾を打掛たるに、砲兵は最も射的に巧なれば三四発とも皆その度に当り賊を追ひ散せり。又林中に百姓家数

軒あり、其家は賊の焚出所の用を達したるに、数日砲射すれども当らざりしが、今日の午時に着発を試みて之を焼払ひたり。其の火勢を見て味方は益々勢に乗じて敵に迫る。その働きは味方の死骸を飛越〳〵て進み、死を顧みざるは実に目覚しき振舞と云ふべし。なみなみの敵なれば此勢にては忽に破竹の如くに進まるべけれども、敵が敵ゆゑ左様に思ふ様には行届かぬなり。斯く力攻の勇戦なれば随分とも味方の手負死傷も夥し（巡査百名之内にて廿四人の死傷なりき。）併し敵は今日の敗北にて、其の死傷は尚我よりも多かるべしと思はる。」

福地源一郎の観察によれば、十五日の官軍の攻撃によって田原坂は陥落し、官軍は植木に突入するとの予測だったが、この予想は当らず、なお六日間の激闘がつづけられたのである。

十五日の官軍の総攻撃も成功しなかった。戦闘は熾烈をきわめ、山鳴り谷響き、その声百雷のごとくであった。両軍の死屍は諸所に塁を築いた。この日午後になるも勝敗決せず、村田新八は軍を指揮していたが、「ここは両軍の要地である。失うべからず。各隊努力してこれを守れ」と厳命した。

官軍はラッパを吹いて三面から吶喊してくる。薩軍はすでに弾薬が尽きて石や木を投じて防いだというから、弾丸の欠乏した苦闘ぶりが分る。薩軍では第四番大隊五番小隊長河野喜八郎以下七十四名が戦死し、百七十余名が傷ついた。また、官軍の警視抜刀隊でも五十名中四十八名が死傷し、ほとんど全滅するにいたった。

山県参軍は、この日前線を視察し、横平山の山麓に来てみずから剣をふるい督戦したというから、官軍も苦戦したのである。

翌十六日は官軍も諸隊の整理、補充などで休息し、十七日をもって正面軍の攻撃を開始した。官軍は砲兵をもって薩軍の各塁を攻撃し、上田警視の率いる抜刀隊四十名が、その間を吶喊し

て敵塁に迫った。これは第一旅団だが、第二旅団も午前十時から坂の中腹まできて攻撃した。しかし、薩軍の抵抗は猛烈をきわめ、結局、五十人ばかりの死傷者を出して後退した。十七日の総攻撃も不成功に終った。

そこで官軍は、翌十八日、いよいよ最後の決心を固めて攻撃にあたった。午前七時に各隊集合し、まず、第二旅団の攻撃をもって火蓋が切られた。だが、手もなく薩軍によって追返された。これには、薩軍の中にあたらしく投入された貴島隊、日向隊、高鍋隊などが戦闘力を増加させたことも原因している。薩軍がどのように官軍の攻撃を防いだかが想像されるし、その精悍ぶりが知られる。

そこで官軍は、十九日を休憩し、二十日にいよいよ最後の大進撃を開始することになった。すなわち、十八日夜、野津、大山の両少将は、野津（弟）、岡本、今井らの各隊の将校を本営に集めて軍議を開いた。

官軍としても田原坂を攻撃することすでに十六日、激戦昼夜を徹してほとんど休むところがなかった。しかし、まだ、この堅塁を抜けず、薩軍を駆逐して熊本城の囲みを解くこともできない。熊本城は重囲に陥ってすでに二十日以上を超え、糧尽き、援を絶っている。

「我が輩大軍を擁し曠日久しうして一旦熊本城を敵に任せば又何の面目ありて天下に立たんや。誓つてまさにこの険を旦夕に破り、進んで熊本城を救はんとす。しかれども激戦の連日なる将士共に疲労す。且つ明日を休へ。二十日を以て大挙進撃せん。諸君、それ、努力せよ」

と、大山巌少将は麾下を激励している。十九日の夜から豪雨となった。二十日の朝になるもやまない。官軍の諸隊は、この雨中を二俣口から谿谷の間道を渡って、ひそかにそれぞれの部署についた。これは十八日夜の作戦会議に従ったものである。

午前六時、一隊が田原坂の上にちかづくのを見て、号砲三発があげられた。配置についた各隊は、一斉に声をあげ、賊塁に迫った。まず、その右翼隊が敵の第一線の塁を抜いた。砲兵は薩軍の背後の塁を攻撃してしきりと掩護射撃する。銃砲の響きは雨中の山岳を震動させ、硝煙は山霞にまじって咫尺を弁じない。

薩軍も前夜来の豪雨に油断していたとみえ、この攻撃に狼狽して銃撃したが、その的はことごとく官兵のいないところに向かっていた。

あたりが明るくなると霧が霽れ、雨も多少小降りとなった。官兵は田原坂に匍い登って坂上の塁の背後に出ようとした。薩軍の哨兵はこれを塁に報じたが、不意を喰ったためか、塁兵のほとんどは弾薬・輜重を遺棄して、山を攀じ、谷を越えて走った。これが薩軍の重要な塁の一つを官軍が陥れた最初であった。

雨はまだ降っている。俗謡に、

「雨は降る降る人馬は濡れる、越すに越されぬ田原坂」

というが、すでに田原坂の険の一角は、こうして官軍に占められたのである。各塁の薩軍は動揺した。近衛隊の山口少佐は諸隊に令して、次々と敵塁に入った。これで、二旬以上を費して落ちなかった田原坂の敵塁もようやく占領できた。官軍、進んで植木街道に出ると、味方の死骸が路傍に堆積している。その中には、十一日の戦闘で生死の知れなかった近衛第一連隊第二大隊の日原曹長以下十五名の屍もあった。たまたま野津少将が来て、この惨状に涙を流し、

「勇士骨を戦場に曝すはもとよりその本志である。今日の快勝は諸将校の努力と、これらの勇士のあるによる」

と述べた。

午前六時に開始された官軍の攻撃は、十一時にはついに目的の植木の線に進出することが出来た。案外呆気なく田原坂の堅塁が陥ったのは、昨夜の豪雨に薩軍が油断して不意討を喰ったからである。まさか、その豪雨の中を官軍が攻めてくるとは思っていなかったのだ。

この方面の薩軍の指揮者村田新八も木留の本営にあったが、田原の敗報が齎されたときは、まだ大いびきで寝ていて、使者はやむなくその醒めるのを待って報告したという。村田も油断していたわけだ。

田原坂の陥落は、薩軍にとって致命的であった。ここが破れたことが結局大勢を決したのである。だが、彼らもよく戦った。不十分な装備と、少い人数とで、三月四日から二十日まで、官軍をしてこの坂を越えさせなかったのは、彼らの不屈な闘志と峻険な地勢に拠ったためである。

この戦いで官軍は死傷三千人を出した。官軍の弾丸は一日約二十一万発、一人にして一千発以上を発射した者もいた。彼我の抜刀隊の白兵戦といい、田原坂の攻防は、日本合戦史上、稀有な激戦である。

10

一方、薩軍の背面を衝く官軍は、黒田清隆参軍がこれを指揮し、四月十四日には川尻を奪い、別働第四旅団別働隊の山川中佐は、その日の午後四時、熊本城下に入った。これをきっかけに諸軍もまた、あいついで十五日には熊本に入り、ここに完全に籠城軍と連絡が成った。薩の防禦軍永山弥一郎が敗戦の責を負い、民家に入って火を放ち自殺したのもこの戦闘中である。

薩軍の主力も、田原坂の敗戦とともに南北から挟撃をうけて、転進せざるをえない。薩軍が諸方面の軍を収めて日向路に向かったのは、側面に血路を求めたからであった。

薩軍では、桐野などが阿蘇外輪山の西入口に当る大津の線で決戦をしようと主張したが、全隊の方針は軍を収めて再起することに決し、九州中央部の山岳地帯を通過して、人吉方面に向け行軍を開始した。西郷隆盛は、四月二十二日、村田新八、池上四郎などと二千の兵を率いて椎葉越えから人吉に向かった。桐野は諸隊を連れて別なコースで馬見原町をすぎ、那須越えを経て人吉に向かった。いずれも山岳重畳たる山路で、椎葉村（稗つき節で有名になった）などは近年まで、平家の落人の隠れ場所として交通を閉ざされていたくらいだ。

この山越えは、断崖の間を羊腸たる細路が一本通っているだけで、全隊は岩を伝い木を攀じて進むという難儀な行軍となった。そのため、荷駄、弾薬を運ぶ牛馬が千仞の谷底に落ちた。道は、二、三里の間にようやく一、二軒の樵夫の小屋があるという有様だった。

薩摩勢が人吉に入ったと聞いた官軍は、これを追及するため陣容をあらためた。四月二十四日には山県参軍が八代に入って軍議を決めている。

しかし、いったん敗勢になった薩摩勢は、ところどころで反撃に転じたものの、大勢はすでに決している。三十日、官軍は人吉を攻めて、これを収めている。西郷は宮崎に入り、さらに日向延岡に退却した。この戦闘のあたりから、初めて薩軍の兵士が官軍へ投降しはじめた。さすがに勇猛な薩摩隼人も意気消耗してきたのである。ことに川路利良少将（警察官としては大警視だが、征討軍に加わって少将の資格）の率いる別働第三旅団は、六月の末には鹿児島に入ったが、このときも薩兵の投降者が続出している。

薩軍は鹿児島を官軍に占領されて兵站線を切られた。そこで、宮崎方面では新兵を徴募し、弾薬を貯蔵し、物資を取るのに紙幣を発行した。これがわが国ではじめて造られた軍票で、「西郷札」といった。もともと勝利の見込みのない不換紙幣で、略奪という非難を逃れるためである。

だから、戦争後、土地の住民がこの軍票の買上げを政府に請願したところ、そのこと成らずして宮崎地方には倒産者が相次いだ。旧拙作「西郷札」はこれをヒントにした。

西郷軍が日向に移ってからは、官軍の攻撃も、もっぱら正面戦争ばかりとなった。薩軍は兵力を失って人数が少くなるばかりなのに、官軍はあとからあとから増強してくる。西郷は延岡もさえることが出来ず、近くの長井村に退いた。背面に山を負う要害の地ではあったが、一方からみれば、袋小路みたいな狭隘な一角に追詰められたわけである。長井村の後方は可愛嶽（七二八メートル）で、急峻だが、この山上にも別働第一旅団が布陣し、前方には第四、第二、第一各旅団、熊本鎮台兵、警視隊などが包囲した。

薩軍本営では、西郷、桐野、村田、別府、池上などが協議したが、もはや、全軍の運命はだれの眼にも明らかである。ここでの取るべき道は、豊後方面に突出するか、鹿児島方面に向かうかであるが、西郷の決断によって、ひとまず可愛嶽を攀じ登り、この方面の敵をしりぞけて血路を開くことにした。背面の山は断崖絶壁であるから、山上の敵も油断しているに違いないと判断したのである。

このとき西郷は、それまで持ってきた陸軍大将の服をはじめ、重要書類をことごとく集めて焼いた。また、長井村には傷病兵が充満しているので、これを置いてゆくことにした。西郷は中山盛高という者を招いて、

「われらは今夜万難を排して可愛嶽の囲みを突破するつもりだが、路険にして壮士も容易に越えることが出来ないので、残念ながら傷病兵はここに置いておく。傷病兵を殺すことは万国公法の禁ずるところであるから、官軍がここに攻めて来ても、おそらくは危害を加えることはなかろう」

といい、後事を託した。桐野もまた、この病院（民家を病院に当てた）には旗をかかげ、医師を置いて看護させよと中山にいった。ここでわが国初めての赤十字旗が掲揚されたという。

八月十七日の深夜十二時、西郷は土地の者を案内とし、ひそかに敵塁の篝火の明滅する間を進んだ。可愛嶽は絶壁が垂直をなし、未だ樵夫も中には入らないという難路である。前隊は白紙を路傍の樹木に結び、あとにつづく隊の目印となし、断崖の間についた路を攀じ登って、未明によううやく可愛嶽の頂上に達した。

はたせるかな、頂上の官軍は油断して防備も出来ていない。逸見十郎太は部下に抜刀させ、喊声をあげて斬りこんだので、官軍たちまち四方に遁げた。ここで進路が開けたので包囲線を突破し、ようやくのことで三田井に出た。可愛嶽の守兵は、第一旅団、第二旅団であったが、司令官の野津少将も三好少将もみな遁げ去った。当時西郷軍に従軍していた中津隊の一人の話によれば、官軍の遁げた塁跡には遺棄品が山のごとく、その中には三味線と婦人の駒下駄があったという。

こうして西郷一行は三田井から、神門、銀鏡、米良、小林、栗野、加治木などの線で所在の官軍と小戦闘をまじえながら、九月一日鹿児島に入った。去る二月出軍以来実に七カ月ぶりで、西郷に従って出た一万三千の薩摩健児も、帰る者わずかに五百人であった。

いよいよ城山における西郷の最期を語る段となった。

城山方面における西郷の守備線は、岩崎谷本道、私学校から角櫓、県庁二の丸から照国神社方面、大手から本田屋敷方面、新照院越えより夏陰下方面、後回より城山にいたる方面と、きわめて防備の戦線は狭くなっている。これは人数が足りないからで、推定三百五十人内外だといわれている。城山は鹿児島市内北側の渺たる小丘にすぎない。

征討軍は、各地の軍隊ことごとくを集合させて城山を取巻いた。すなわち、第一旅団、第二旅

団、第三旅団、第四旅団、別働第一旅団、新選旅団、警視隊などで、その包囲線には竹柵などの塁を構築し、哨兵を置いて西郷軍に対し、城山から蟻一匹出る隙もないくらいに固めた。

官軍の総攻撃は九月二十四日に開始された。西郷は城山の岩崎谷にある洞窟内に起居していたが、官軍の重囲するにおよんで、その幕下から西郷だけは何とか命を助けたいという議がおこった。人情として当然である。事実、西郷のために降伏の議もあったが、結局、桐野が、降伏は義挙の本領を没却するとし、今日のことただ一死あるのみ、と反対した。何といっても手おくれだったのである。

しかし、それでも薩軍の河野主一郎は西郷に会って、今度のことについて徒らに賊名を受けたまま滅亡するのは、のちのちまでも残念である、自分はこれから官軍の陣に行き、われらの趣旨を告げてくると、その許しを乞うたところ、西郷はただ笑って、

「よか」

と云っただけだった。

けだし、西郷も河野が自分の命乞いに行く真意を見破り、かつ、そのことが不可能なことを覚っていたであろう。河野は他の者といっしょに別働第一旅団の守線に行き、川村純義参軍に面会することができた。

川村は、西郷にして自分に云おうとするところがあれば、速かにわが陣にこられよ、しかし、戦機すでに迫っている、必ず明朝四時をすぎるべからず、もし、この時刻をすぎるときは、いかなる請願あるともこれを容るることはあたわず、と云って、河野を留め、いっしょに従いてきた山野田一輔を城山に帰した。

西郷のすでに覚った通り、この期におよんでは、もはや、万事休したのである。要するに、薩

軍は西郷一人を生かすために降伏を申し出たが、官軍はもとより西郷助命に応ずべき気持はなかった。山県参軍は、山野田一輔が城山に帰るとき一書を託した。少し長いが、その内容をみよう。

辱知生山県有朋頓首再拝、謹んで書を西郷隆盛君の幕下に啓す。有朋が君と相識るや茲に年あり。君の心事を知るや、又けだし深し。さきに君の故山に帰養せしより、すでに数年、その間謦咳に接するを得ざりしといへども、旧朋の情はあに一日も有朋が懐ろに往来せざらんや。図らざりき、一旦滄桑の変に遭際し、かへつて君と旗鼓の間に相まみえるに至らんとは。（中略）有朋が君の平生を知るに深きを以て、又君の心事を悲しむや切なり。しかりといへども、事すでに茲に至る、これを云ふもまた益なし。君何ぞみづから図らざりや。交戦以来、すでに数旬を過ぐ、両軍の死傷する日に数百。朋友相殺し、骨肉相食む、人情の忍ぶべからざるところを忍ぶや、未だこの戦ひより甚しきは少なし。しかして戦士の心を問へば、あへて寸毫の恨みあるに非ず。王師は兵隊の部職により、薩軍は西郷のためにすると云ふに出でず。それ一国の壮士を率いて天下の大軍に抗し、激戦数旬、挫折して倦まず、又以て君が威名の実あるを示すに足る。しかして君が麾下の将校にして、よく戦ふ者はおほむねみな死傷し、薩軍の又なすべからざるや明らかなり。又何の望むところありて、徒らに守戦健闘を事とするか。説く者は必ず云はん。西郷は事の成らざるを知るといへども、その余生を長うせんがために千百の死傷の両軍の間に致すをあはれまざるなりと。有朋もとよりそのしからざるを知るを以て君のためにこれを痛憤せざるを得ず。願はくば君早くみづから図り、一はこの挙の君が素志に非ざるを証し、一は彼我の死傷を明日に救ふ計をなせよ。君にしてその図るところを得ば、兵もまたついて已まんのみ。これあに君の志にあらずや。嗚呼天下の君を今日に毀誉するや極まれり。国憲の存するところはみづからしからざるを免れずといへども、思ふに君の心事を知る者もまたひとり

有朋のみならず、何ぞ公論の他年に定まるところを慮らざるか。故旧の情において有朋切にこれを君に冀望せざるを得ず。君幸ひに少しく有朋が情階の苦を明察せよ。涙を振るってこれを草す。意を尽すに得ず。

明治十年四月二十三日　於熊本よりす

頓首再拝

山県有朋

西郷隆盛君　幕下

（原文の用字は適当に改めた）

これは山県が以前に書いて西郷に送ろうとした自決の勧告書だが、それが西郷のもとに届かずにいたのを、再び草して山野田に持たせ城山に帰らせたのだという。おそらく山県自身の文章であろう。陸軍の創設者であり、かつ大先輩に向かって言々情を尽して、また名文たるを失わない。元来、山県は文章家で、さきに越後戦争のときのことを書いた彼の「越の山風」はよく世間に知られている。

翌二十四日午前四時は、城山の西郷から全軍降伏か否かの応答のある期限だ。もとより西郷は応答をしなかった。時刻が午前四時を指すや号砲三発、その響きは殷々として城山を震わせた。待機していた旧本丸の前面にある新選旅団がまず攻撃の火ぶたを切った。雲霞のごとき官軍は、こうして四方より城山に総攻撃をかけたのである。

西郷、桐野、村田、池上、別府など四十余名の薩軍将士は、洞窟を出て整列し、官軍の攻めてくる岩崎谷に向かった。進めば弾丸いよいよ急である。薩の将兵はバタバタと斃れた。別府晋助と逸見十郎太は西郷の左右に従っていたが、逸見は形勢急なるを見て西郷に向かい、

「もう、ゆはごはんすめえか？（もう、この辺で自決なされてもよくありませんか）」
と問うた。西郷は、
「まだまだ。ほんどうにでてじんじょうにたおれんとほんとでなか」
と答えた。
また行くこと一町余り、四方から集中した弾丸は驟雨のごとくである。逸見はまた問うたが、
「まだまだ」
と西郷は云った。
島津広吉の屋敷の門前に来たとき、流れ弾丸が西郷の股と腹とを貫通した。西郷は別府をかえりみて、
「晋どん、晋どん。もう、ここでよか」
と云い、地に坐った。
別府晋助は西郷に向かい、
「ごめんなったもんし（ご免下さい）」
と、刀を持って西郷の首に打ち下ろした。隆盛、五十一歳であった。
いま、この現場はバスガールが悲痛な調子で説明する。西郷の従僕吉左衛門は、西郷の首を折田正助の門前に埋め、岩崎口の塁までくると、
「先生はすでに最期を遂げられた。先生とともに死ぬ者はみな来って死せよ」
と叫んだ。言葉終らぬうちに敵弾に仆れた。
岩崎谷の桐野利秋は自若として毫も屈する色なく、塁の上で銃を手にし、前面の敵を狙撃していた。一発ごとに、「命中した」「いまのは命中せなんだ」と、みずからの射撃を批評した。

官兵が左側の塁上にきて、銃剣を持って桐野を刺そうとすると、桐野は、これを大刀で払い、さらに前面の敵を鉄砲で狙撃してやまなかった。そのうち、銃丸が桐野の右額に当り、鮮血はたちまち顔を染めた。桐野、これでも屈せず、なおも刀を持って塁上を突こうとしたが、力が尽きて遂に斃れた。桐野四十歳。
村田、池上、逸見、みな銃創を蒙って塁の中に落ちて死んだ。逸見がいちばん若く、二十九歳だった。
この日、戦闘は午前四時をもって始まり、同九時に終った。戦闘終るや、豪雨沛然として来り、城山の血を洗い流したという。西郷の首は一兵卒が発見し、これを清水で洗って浄めた。
山県の回想に曰く。
「このとき余は西郷の首級を実検し、一面には征討の任務を全うしたことを喜んだが、他の一面には、一代に傑出したる英雄がかくのごとき運命に遭遇したかと思い、覚えず泫然として涙下り、衷情が耐えられなかった」（「公爵山県有朋伝」）
西郷としては、せめて故郷の鹿児島に還って死んだのが本望だったろう。
西南戦争は、どう考えても西郷の暴挙である。彼は私学校の生徒にやむなく戴せられたというのが通説になっているが、そこまで私学校党を過熱させる途中、いくらでも制止できる方法はあったろう。西郷は、むしろ彼らの激昂を俟っているような態度でもあった。西郷が私学校党の犠牲になったのか、私学校党が西郷の犠牲になったのか、判定に苦しむところだ。
しかし、いえるのは西郷の自信過剰に両者が犠牲になったことである。何といっても、西郷の挙兵は無茶である。
西南戦争をもって、日本の内戦は終りとする。この戦争はその後の日本に何を与えたか。

①政府が徴兵制度に自信を得た。
②兵制の改革、特に海軍の増強を行った。
③これ以後、反政府運動は実力によらず、政党が結成され、自由民権運動などの言論と、その後の議会闘争に移った。
④政府は警察力を強大にし、治安維持に努め、密偵政策をとった。
⑤政府軍の輸送を受持った海運業が儲け、三菱などの独占資本の擡頭となった。
⑥福地源一郎、犬養毅などの現地特派員の報道が人気をよび、新聞の発達を促した。
以上のようなことが主だったものだろう。これによって日本は、よい意味にも、悪い意味にも、「近代」に入るのである。

初出　オール讀物（一九六五年一月号から十二月号まで）

菊池・池島「日本合戦譚」其他と「私説・日本合戦譚」との間

池島信平氏と私とは生れが一日違いである。彼は明治四十二年十二月二十二日、私は同年同月二十一日。私のほうが一日兄貴ぶんである。実は去年の暮には氏の誕生祝いをして食事を共にした。今年（一九七三年）の暮には私のぶんを祝ってもらう約束だったが、思いがけなく二月十三日の氏の急逝となった。聞けば、本巻（松本清張全集第二十六巻）の氏の解説がまとまった文章としては絶筆となったという。まことに感慨に耽らざるを得ない。

というのは、私に歴史小説の眼を開かせたのは芥川龍之介や菊池寛のそれであり、とくに菊池の「日本合戦譚」は『オール讀物』に連載されたころから愛読していた。つづいては「戦国武将譚」。これでどのくらい歴史への興味がひきつけられたかしれない。私の二十三の年である。「日本合戦譚」で書かれたいくつかの文章の断片は、かなり長い間おぼえていたくらいである。それほどその文章は菊池的であり、解釈が菊池流であった。池島氏ももちろん二十三歳のときである。

こう書くのは、「日本合戦譚」も「戦国武将譚」も、二十三歳時の池島氏の下書きであることをそれより二十年経ってはじめて知ったからである。「解説」には、上野図書館にある数百部の関係書の大体を氏は頭の中に入れて、今月は賤ヶ嶽合戦、今月は関ヶ原と菊池にいわれると、その関係書を昼から夜までかかって読み散らし、その夜は朝までかかって「材料をすっかり書き並べて、朝の十時頃、菊池さんの自宅まで届けた」となっている。しかし、これは池島氏の控え目な表

現であって、実際は、菊池寛が手を入れれば完成するだけの「草稿」の域であったらしいのである。

もちろん史観というか、ものの見方や人物観などは菊池の意図を受けて書かれたと思うし、文章も菊池の手入れで原形がないくらいに改められたところもあったにちがいないが、それも途中までであって、しまいには池島氏もすっかり菊池の癖をのみこみ、それほどの朱筆は受けなかったのではないかと思われる。氏は西洋史を専攻してきたのだが、こと日本の戦国時代史と明治史とに関しては菊池寛の史筆をすっかり自家薬籠中のものにした、と考えてよろしかろう。

掲載順通り「姉川合戦」が第一に書かれた。

《信長は、朝倉退治のため、元亀元年四月、北陸の雪溶くるを待つて、徳川家康と共に敦賀表に進発した。しかも、前年長政に与へたる誓書あるに拘はらず、長政に対して一言の挨拶もしなかつた。……長政、朝倉の来援を得て、横山城を救はんとし、廿五日小谷城を出で、その東大寄山に陣を張つた。翌廿八日には、三十町も進み来り、浅井軍は野村に、朝倉勢は三田村に展開した》

こういう緊密な文体で全編がつらぬかれている。だが、戦史的な叙述だけではない。この合戦で働いた朝倉方の真柄十郎左衛門の太刀について、

《「三州志」によると、加賀の白山神社に真柄の太刀と伝称し来るものあり、柄が三尺、刀身が六尺、合せて九尺、厚さ六分、幅一寸六分あり、鎌倉の行光の作である。行光は正宗の父である。ところが越前の気比神社に真柄の太刀の鞘だけがある。其の鞘には、小豆が三升入る。此の鞘の寸法と白山神社の寸法とは、少し違つてゐるといふ事である》

といった面白い考証（？）もちゃんとはさまれている。また日ごろから仲の悪かった浅井雅楽助兄弟のことでは、《姉川合戦の前夜、二十七日の夜亥刻（今の十二時）ばかりに、兄の雅楽助弟斎宮助の陣所に行き、（明日討死をとげる身として何とて不和を残さん。今は遺恨を捨てて、名

残の盃せん、父尊霊を見度くば互ひの顔を見るこそよけれ）と、眼と眼を見かはしてゐたが、やがて酒を乞ひて汲み交し、譜代の郎党共も呼び、ともに死別生別の杯を汲み交はした。浅井方の将士の悲壮の決心推して知るべきである。これに比ぶれば、朝倉方は大将自身出でず、しかも大将義景の因循姑息の気が、おのづと将士の気持にしみ渡つてゐただらうから、浅井の将士ほど真剣ではなかつたであらう》

という挿話と感想があり、これが各合戦記の随所に入っているから私などは我を忘れて読んだ。前者についていえば、今の作家がこれを書くと三倍以上の長い文章になるだろう。後者は、直属の忠誠関係によって成立する中・近世の主従組織が浮び上っている。

「川中島合戦」では、

《大戦ではあつたけれども、政治的には何の効果もなかつた。このため、上杉・武田両家とも別にどうなつたわけでなく、川中島は元のままであつた》

と、しめくくって、伝えられる華々しい合戦の虚しさを言っている。

池島氏は「解説」で、私の川中島合戦について《「しかし、以上述べた川中島の合戦経緯は、史実的にはまことに疑わしく、前記のように甲陽軍鑑、越後軍記、川中島五度合戦などの俗書にだけ書かれていることである。ここに書いた戦況も、一種の講談として読んでいただきたい」と、実にハッキリと書いていることである。この時は清張さんは、歴史物語を離れて、歴史家の峻厳なる立場に立っていることを忘れてはならない》と過褒を寄せているが、実はこうした史料判断も池島氏下書きの菊池「日本合戦譚」に眼を開かせてもらったのである。

「日本合戦譚」はあくまでも一般読者を対象に書かれているのであって、史論ではない。したがって読者に興味をもたせるために、いわゆる一等史料でないものも使われている。たとえば「小

田原陣」。

《秀吉は家康と石垣山から小田原城を俯瞰した。「家康公の御手を執て、あれ見給へ、北条家の滅亡程有るべからず。気味のよき事にてこそあれ。左あれば、関八州は貴客に進らすべし」（関八州古戦録）と言って、敵城の方に向ひ一緒に立小便をした。これは有名な「関東の連小便」の由来だと言ふが、どうだか》

もちろん「関八州古戦録」というのは俗書で、価値ないものとして史家は相手にしない。「野史」の類いである。だが、執筆者はそこをちゃんと心得た書き方である。

池島氏と話し合ったとき、このくだりが出た。

「ああいう本は面白いからどんどん使いましたよ。だって、雰囲気がいきいきと出ているもの」

と氏はのけぞって笑っていた。

いわゆる一等史料なるものは信用度が高いかもしれない。が、その記録にはおよそ当時の雰囲気も感情性も伝わっていない。それは「大日本史料」などをのぞいても分る。「生活的な雰囲気」といったものは市井に伝わった話を集録した俗書に多い。菊池が愛読したという「武将言行録」も史料価値はないとされている。しかし、人間の面白さが出ている。歴史性をこわさずに、その中でこうしたものを挿入する手法は心憎いばかりである。

記述体ばかりで終始しているのでもない。同じ「小田原陣」のなか。

《秀吉は本営を箱根から、湯本早雲寺に移した。山の中とはことかはり、潑剌たる陽春の気は野に丘に満ち、快い微風は戦士等の窶れた頬を撫でて居る。ともすれば懶い駘蕩たる春霞の中にあつて、十万七千の包囲軍はひしひしと犇き合つて小田原城に迫つて居る》

簡潔な描写は菊池独特のものだが、記述体の中にこれが挿入されているから光っている。これ

が池島氏の下書きなのか、菊池の手入れがあった部分なのかは知らない。「小田原陣」は合戦譚の最後である。それにしても、これだけの引用でも分る通り、今からみるとずいぶんむつかしい漢字を使ったものである。が、硬筆の文体にはやはりこれが生きている。

史料のナマのかたい引用ばかりでもない。「山崎合戦」。——

《戦争が済んだ時、三七信孝は中川瀬兵衛に近寄つて、その戦功をねぎらつたが、秀吉は興に乗つてゐながら「瀬兵衛骨折々々」と言つたので中川は「あいつ、はや天下を取つた気でゐやがる」とつぶやいたと言ふ》

「川角太閤記」あたりにある話である。「賤ヶ嶽合戦」の出典をみると、この本のほかに「賤嶽合戦記」「佐久間軍記」など怪しいものもあるが、もちろん、太田牛一の「太閤記」大村由巳の「柴田退治記」のような素姓の正しいものもあり、「余呉庄合戦覚書」といった珍しいものも使われている。池島氏は上野図書館に通って「史籍集覧」（収録史料は玉石混淆である）などを熱心に読んで写しとっていたのであろう。

やはり「山崎合戦」だが、光秀の辞世と伝えられるものを出している。

《順逆無二門　大道徹心源　覚来帰一心　五十五年夢》

多分後世の仮作であろうが、光秀も死ぬまで順逆を気にしてゐたゞらう》

話は違うが、二・二六事件当時の北一輝が好んで「順逆不二」を口にしていたといわれる。《死ぬまで順逆を気にしてゐたゞらう》という光秀心境への想像は、北にもあてはまるような気がする。

池島氏は拙著「昭和史発掘」の二・二六事件の読後感をいって、

「資料の上から見てその通りだろうが、事件当時東京にいた自分としては、あのときの熱気のよ

うな雰囲気がどうも伝わっていない気がする」

という意味のことを口にしたことがある。

たしかに史料というのは事実関係を冷たい肌ざわりでならべていて、当時の現場的な熱気は伝えていない。歴史上でも当時現場に立会っていた人たちは、後世の叙述を見たら、そうかもしれないがどうもあのときの感情が出ていないと不満げに呟くにちがいない。

この現場的な感情を伝えるために、史料的価値は低くても、菊池・池島の「日本合戦譚」があえて俗書から部分部分を引用したのであろう。

人物観の短評が面白い。菊池流の好みがよく出ているのは黒田如水（官兵衛）のところでは、

《如水の意気、画策、行動は宛然太閤の小模型の観がある。境遇が、あべこべであったら、どちらが偉くなったか分らぬ》

と書いている。

北条早雲のところでは、

《もし北条早雲が出なかったら、関東公方家などは武田信玄あたりが亡ぼしてゐるかも知れない。さうなると甲越は段違ひとなり、信玄は川中島あたりで二十年も、小競合の相手などしてゐない。今川義元も徳川家康も力の相違で圧し潰され、信玄のために上洛の途を開き、後生秀吉など、（信玄は、はかの行かぬ戦争をした）などと嘯いてゐられなかつたぢらう》

と述べる。

石田三成の人物評。

《三成は清正あたりが喧嘩を売つても自信たつぷりで鷹揚に構へてゐて相手にしないが、家康となると何か圧迫や恐怖に似たものを感じ、それが我ながら癪に障るので、何を！　と思ふと、つい対抗意識に出たりするのだつた。大仏建立の時に、三成は家康と一しよに普請場に行つたが、三成が杖を落したのを家康が拾つて渡すと、礼も言はずに受取つた。家康登場の通路で、ことさら頭巾も取らずに手を焙つたりするのも不覚の対抗意識だ。これなども、家康に比し、知行も少く年も若いせゐで、必ずしも人物が、小であるとは言へないだらう。三成に、前田利家の位置があつたら、徳川の天下は実現しなかつたかも知れない》

これなどは政界や企業内の派閥争いの姿にそっくりあてはまるだろう。

三成は、内閣でいえば官房長官、企業でいえば社長付秘書兼総務部長の位置程度である。閣議に出ても役員会に出ても末席のほうだが、その実力はならび大名を数段抜いて、まさに閣内では反主流派の頭目を抑え、企業内にあっても反対派閥の有力役員を抑制しているのに似ている。

三成は家康がポスト秀吉の天下とりの意図を早くから見抜いていた。秀吉にもそのことを度々ひそかに告げたにちがいないが、すでに老齢で往年の覇気も勇気も失った秀吉は、いまさら治下の体制が乱されるのを好まず、気にかけながらもそのまま放置していたにちがいない。若い三成はそういう秀吉が歯痒く、しぜんと家康に露骨な敵対意識がいろいろな態度で現われたと思う。これも政界や企業内でよく見かける図である。

秀吉が垂死の枕頭で、いくら涙を流して後継秀頼のことを五大老に頼んでも、また五大老から誓紙血判を取っても、五大老組織そのものが脆弱だから何にもならなかった。政界派閥の頭目が死ぬと、その派閥内の実力者どうしが袂を分って四分五裂するのと同じである。ワンマン社長のあとを重役たちが狙ったり、叛旗を翻したりするのとも似ている。家康の幕藩体制は、このへんを「反面教師」としたのである。

さて、三成秘書課長はワンマン社長死後、乗取りの有力重役と対抗し、社長派側近重役を糾合

したが、如何せん彼の地位が低いためにかれらに頭から命令することができぬ。関ヶ原役の三成が自分から馬を駆って味方の大名陣の間をかけまわり出動を頼んでまわっているありさまは悲惨であり、彼の悲哀である。

だが、その三成にしてもかならずしも秀頼を安泰にする目的ではなく、家康勢力を倒したあとは自分があとを握る野心は持っていたろう。三成に、前田利家の位置があったら、徳川の天下は実現しなかったかもしれない、という菊池・池島の筆は、この間の消息を衝いている。

とにかく、私が「日本合戦譚」を読んだのは二十三からで、『オール讀物』を立読みするのが何よりの愉しみであった。挿絵は鈴木朱雀で、武将の肖像や紋所、武鑑からの写しが載っていて、これまた考証的な雰囲気を伝えていた。

「私説・日本合戦譚」は、私がオール讀物編集部にむしろ売りこんだものだった。その原稿を毎月毎月書きながら、三十年も隔てた往時の愛読を回想し、いま自分がそれと同じ材料、同じ体裁のものを書いていると思うと涙が出るくらいうれしかった。

もとより「私説・日本合戦譚」は元祖「日本合戦譚」には及びもつかない作である。いま、両方をくらべて読み返したのだが、拙作は『オール讀物』という雑誌の性格を意識して、ひどく「読もの」的になっている。だが、元祖のほうはそんな読者への意識はほとんど眼中に置かれずに実に簡潔にして緊密に書かれている。後者が正当であることは言うまでもない。「日本合戦譚」は、たとえ池島氏の下書きによるとしても、菊池の作品としてはその初期の短編とともに残る。

――そのような次第で、「私説・日本合戦譚」は菊池寛に対する私の敬愛、池島信平に対する友愛がこめられて、私には忘れがたい作品なのである。

初出　松本清張全集第二十六巻月報（一九七三年三月）

文春文庫

私説・日本合戦譚

定価はカバーに表示してあります

1977年11月25日　第1刷
1992年11月15日　第21刷

著者　松本清張
発行者　新井信
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3―23　〒102
TEL　03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-710623-X

文春文庫　最新刊

詩城の旅びと
松本清張

一通の投書から国際駅伝が実現しようとしている。詩情あふれる南フランスを舞台に描く

黄金の海へ
津本陽

豪商紀伊国屋文左衛門の波瀾万丈の生涯を元禄経済にからめて活写する歴史長篇（解説・多岐祐介）

裸足の皇女（はだしのひめみこ）
永井路子

天智帝の皇女山辺は皇后の座に今一歩で……。古代に渦まく恋と策謀を描く九短篇（解説・磯貝勝太郎）

死のある風景
吉村昭

通りすぎていった様々な人たち……。人の営みの奇妙な断面を描く十の短篇小説（解説・植登美昭）

一九四五年の少女 ―私の「昭和」
澤地久枝

「非国民」――戦争中、思わず母をそう呼んだ私。痛切な想いを込め〝時代の残酷〟をつづる

海軍参謀
吉田俊雄

企業は環境の変化に応じて変革する。日本海軍も亦然り。歴代参謀の〝失敗の教訓〟を探る

ストロベリー・ロード 上・下
石川好

カリフォルニアのイチゴ畑で働いた著者の汗まみれの青春。話題の大宅賞受賞作（解説・本田靖春）

名手名言
山川静夫

人に一家言あり。著名人、知られざる職人の名言集。エッセイスト・クラブ賞受賞（解説・矢野誠一）

森に降る雨
関川夏央

叙情、饒舌、寡黙。さまざまな語り口の中に爽快な寂寥がただよう好エッセイ集（解説・奥本大三郎）

第二次世界大戦 ヒトラーの戦い（全10巻）
児島襄

人類史上最大の戦争をヒトラーを中心にすえて見つめ直した白熱の現代史超大作［刊行中］

ファーザーランド
ロバート・ハリス　後藤安彦訳

ヒトラー75歳の祝賀行事をひかえた冬の朝に事件は起きる。ナチ勝利20年後を描く話題作

洋・邦 名画ベスト150 中・上級篇
文藝春秋編

大アンケート実施。マニアがマニアにすすめる必見の153本とは？ワースト部門も面白い

愛の迷宮 人間の情景3
アンソロジー　文藝春秋編

男と女の〝縁〟の不思議をテーマに古今東西の傑作短篇を集めた豪華アンソロジー（解説・多岐祐介）